

石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡総合調査報告書
平成5年度～平成13年度

●
第5冊

[(改訂版)石見銀山関係歴史年表-1334年～1710年]

島根県教育委員会

石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

[(改訂版)石見銀山關係歴史年表—1334年~1710年]

序 言

1996年から始まった「石見銀山」の総合的な調査研究のうち、歴史文献に関係するものについては、1997年に島根県から委託を受け、「石見銀山歴史文献調査団」を結成し調査研究に着手した。その5年間の調査報告の一部分として、ここに「石見銀山関係歴史年表」をお届けする。すでに1999年に2年間の中間報告として年表を発表したが、その後3年間の調査成果を盛り込んで全面的な改定を行ったものが、本年表である。

歴史文献調査団の調査方針としては、①石見銀山そのものの史料、②日本国内の石見銀山と密接な関係を有する各鉱山の史料、③銀の大量生産にともなってたちまちに活発化した貿易をはじめとする対外関係史料、以上の3分野にわかって、調査研究を進めた。ただし年表編纂に当たっては、紙幅の都合上、①と②は一緒にして、③の対外関係と対置したことをお断りしておきたい。

まずは先学の研究成果を吸収して、そこから出発することとして、歴大な研究成果のカード化から作業を開始し、一方で、先学の諸先生から、直接に御教示を受けるために、先学の方々に研究報告をお願いして、研究会を催した。その研究会の報告内容は、別に『石見銀山遺跡総合調査報告書 平成5年度～平成10年度第4冊 歴史文献研究会編』として、報告書を作っているのので、併せて参照していただきたい。

次の課題は新史料の調査である。本国石見はもちろんとして、日本国内の石見銀山や当時の鉱山に関する史料の調査である。さらに、石見銀山を最初とする銀山開発による銀の大量生産によって、中国、ポルトガルを始めとする対外貿易が活発化する。それが引き金となって、鉄砲の伝来やフランシスコ・ザビエルを始めとするイエズス会宣教師の渡来などを誘引した。我が国はそれらによって、大航海時代の世界のなかに投げ込まれたわけである。国内ではその刺激もあって、統一政権成立の重大な契機となった。このような画期的な変動の原因となった石見銀山の開発の意義を、世界的な文書のなかで確かめてゆきたい。その輪郭は大体掴めているとはいえ、さらにその意義を確定しなければならぬという情熱をもって、調査を開始した。まずは各国の当該研究に近い研究者を共同研究の仲間に入れてもらい、当該関係文書を調査発掘してもらい、それを翻訳するという作業を行った。また、すでに先学たちによって明らかにされ、使用されている史料も出来るだけ、原典、それに近いものに当たるという方針を立てた。史料を渉猟した国々は、ポルトガル、スペイン、イタリア、オランダ、中国、韓国の6カ国にわたり、フランス文献なども参照した。共同研究のメンバーは後にお名前を上げさせて戴く。

この調査は大体5年計画で、計画最終年度である現在、この年表を作った。何分広範囲にわたる課題であるので、全員懸命に作業したとはいえ、疎漏になっている部分もあろうかと危惧する次第である。しかし、その不安を省みず公刊するのは、今後のたたき台として、必ず当課題の研究の進展に役立つものと考えているからである。同時に『石見銀山関係編年史料綱目』を公刊する。より詳しい史実を伝えるものは同書に掲載し、年表には簡明に記載した。簡単なものは年表のみに記載した。併せて参照していただきたい。

また、年表、史料綱目担当の「歴史文献調査団」と、発掘担当の有志によって、別個に、『石見銀山関係論集』を上梓した。文献・発掘双方の調査の現在時点における成果を世に問い、批判の対象として、提供したいという気持ちからである。前掲の報告書とともに、あわせて参照していただくと幸いである。

なお、史料調査に当たって、史料所蔵者ならびに所蔵諸機関の方々のお世話になること甚大であった。感謝申しあげる。

全体を通して脇田晴子が監修した。全体の事務局としての仕事は岩屋さおりが当たった。

2002年3月31日

石見銀山歴史文献調査団長

脇 田 晴 子

例 言

- 1 本書は、石見銀山とそれに関係の深い日本国内の鉱山、対外関係における石見銀をはじめとする日本銀に関する史料集である。
- 2 この史料集は、平成9～13年度に島根県教育委員会が石見銀山歴史文献調査団に調査を委託し、編纂を依頼したものである。
- 3 石見銀山歴史文献調査団における調査体制及び調査分担は次のとおりである。

(1) 全体の監修・統括

脇田 晴子（滋賀県立大学教授・石見銀山遺跡発掘調査委員・石見銀山歴史文献調査団長）

(2) 島根県内・日本国内

田中 圭一（元筑波大学教授・石見銀山遺跡発掘調査委員・石見銀山歴史文献調査団副団長）

藤岡 大拙（島根県立島根女子短期大学学長・石見銀山遺跡発掘調査委員）

原田洋一郎*（東京都立航空工業高等専門学校助教授）

小林 准士（島根大学助教授）

佐伯 徳哉*（島根県古代文化センター主任研究員）

岡 宏三*（島根県古代文化センター主任研究員）

仲野 義文*（石見銀山資料館学芸員）

松岡 美幸*（島根県教育庁文化財課嘱託）

協力者

岩城 卓二（大阪教育大学助教授） 船杉 力修（島根大学講師） 田中 達也（大東文化大学講師）

山澤 学（筑波大学文部技官） 六本木 健志（日本学術振興会特別研究員） 平野 哲也（日本学術振興会特別研究員）

山崎 美和（石見銀山資料館職員） 東谷 智（京都大学大学院生） 山下 和秀（島根大学大学院生）

小杉紗友美（島根大学大学院生） 今岡 広樹（島根大学研究生） 板垣 貴志（愛媛大学卒業生）

青山 智香（島根大学学生） 石浪 直子（島根大学学生） 磯部 泰智（島根大学学生）

江角 知紀（島根大学学生） 大津 和史（島根大学学生） 尾郷 友香（島根大学学生）

金折 瞳（島根大学学生） 熊崎 里子（島根大学学生） 近藤 純一（島根大学学生）

角 ちひろ（島根大学学生） 瀧本 裕氏（島根大学学生） 沼本 龍（島根大学学生）

別宮 博明（島根大学学生） 細田 綾乃（島根大学学生） 松原 祥子（島根大学学生）

山本 泉（島根大学学生） 吉岡 悠（島根大学学生） 吉田 和生（島根大学学生）

村上 将博（島根大学学生） 新庄 正典（島根大学学生） 松尾 寿（島根大学学生）

小原 美紀（島根県教育庁文化財課臨時職員） 三島 典子（島根県教育庁文化財課臨時職員）

(3) 海外関係

1) ポルトガル関係史料

ヨリッセン・エンゲルベルト*（京都大学大学院助教授）

ジョアン・パウロ・オリヴェイラ・イ・コスタ（リスボン新大学助教授）

林田 雅至（大阪外国語大学助教授）

岡 美穂子*（京都大学大学院生）

協力者

石川 博樹（東京大学大学院生） 小島 明子（大阪外国語大学学生） 辻 郁子（大阪外国語大学卒業生）

松平 和子（大阪外国語大学学生） 坂口 和美（大阪外国語大学学生） 吉羽香奈子（大阪外国語大学学生）

マリア・アナ・サンダ・タボルダ・ヌネス・デ・オリヴェイラ（リスボン新大学大学院生）

フィリパ・カンセラ・デ・アブレウ・リベイロ・フェレイラ（リスボン新大学大学院生）

クリスティーナ・ラッフィン（コロンビア大学大学院生）

カルラ・ソフィア・コスタ・ロドリゲス・ダ・シルバ（リスボン新大学卒業生）

2) スペイン関係史料

ヨリッセン・エンゲルベルト*（京都大学大学院助教授）

岡 美穂子*（京都大学大学院生）

3) オランダ関係史料

藤田加代子* (日本学術振興会特別研究員)

4) イタリア関係史料

ヨリッセン・エンゲルベルト* (京都大学大学院助教授)

協力者

ドナテッラ・ディマッセ (大阪外国語大学大学院留学生)

5) 朝鮮半島関係史料

金東哲 (釜山大学副教授)

尹裕淑 (早稲田大学大学院生)

大西 信行* (中央大学杉並高等学校教諭)

岩屋さおり* (大阪大学大学院生・城西国際大学非常勤講師)

折笠 明彦* (早稲田大学大学院生)

協力者

田中 俊明 (滋賀県立大学教授) 安田 純也 (滋賀県立大学大学院生) 西村 幸信 (広域教育委員会事務局社会教育課史編纂室)

三村 光弘 (大阪大学大学院生) 卞光錫 (釜山大学非常勤講師) 喆旭 (釜山大学非常勤講師)

梁興淑 (釜山大学大学院生) 孫知暎 (釜山大学大学院生) 李薫 (韓国国史編纂委員会研究委員)

許芝銀 (韓国国史編纂委員会研究委員) 吉田 信也 (京都大学大学院生) 真木 玲奈 (滋賀県立大学学生)

井伊 裕子 (京都女子大学大学院生) 宇佐美尚穂 (京都女子大学大学院生) 高井多佳子 (京都女子大学大学院生)

6) 中国関係史料

松浦 章 (関西大学文学部教授)

経君健 (中国社会科学院経済研究所教授)

陳暉 (城西国際大学客員教授・中国社会科学院経済研究所亜洲研究所副教授)

鄒愛蓮 (中国第一檔案館副館長)

龐新平* (神戸大学非常勤講師)

協力者

許檀 (中国社会科学院経済研究所研究員) 鄧亦兵 (中国社会科学院経済研究所研究員) 朱淑媛 (中国第一檔案館副研究員)

揚永戦 (中国第一檔案館副研究員) 張晶 (中国第一檔案館副研究員) 内野花 (関西大学学生)

木下 真里 (関西大学学生) 平尾 紀子 (関西大学学生)

7) 日本語による海外関係史料

岩屋さおり* (大阪大学大学院生・城西国際大学非常勤講師)

協力者

広岡 浄進 (大阪大学大学院生) 浅水江理子 (横浜国立大学大学院生) 阿部 環 (滋賀県立大学卒業生)

流石 幸訓 (滋賀県立大学大学院生) 岩淵加奈子 (滋賀県立大学大学院生) 仲村 友一 (滋賀県立大学大学院生)

西田 彰 (滋賀県立大学学生) 藤田 尚寛 (滋賀県立大学学生) 加藤 優子 (滋賀県立大学学生)

寺田 燈 (滋賀県立大学学生) 植村 真也 (滋賀県立大学学生) 河合 聡史 (滋賀県立大学学生)

増田 理紗 (大阪教育大学学生)

8) 英語文献

岩屋さおり* (大阪大学大学院生・城西国際大学非常勤講師)

協力者

岩瀬 由佳 (大阪外国語大学大学院生) 木戸 敦子 (関西外国語大学大学院生) 伊藤佳利子 (大阪大学大学院生)

9) フランス語文献

東 ひふみ (フランス社会科学高等研究院院生)

岩屋さおり* (大阪大学大学院生・城西国際大学非常勤講師)

(注) * 印は年表の執筆者をあらわす。

() 内に所属を記した。継続して調査に関わっている人の場合は現在の所属を、過去において関わった人の場合には当時のものとなっている。

この年表の校正は岡村美智代が担当した。

凡 例

1. 構成と内容

(1) 収録の時代

1500年代1600年代を中心として、1334年頃から1710年頃までを収録した。

(2) 領域の区分

「国内」、「海外」の2つの領域に区分した。

- 1) 「国内」の項目には、中世においては佐摩銀山とそれと関係の深い周辺地域及び石見国内に散在する鉱山、近世においては石見銀山附御料についての記事を収録した。石見銀山と関連の深いと思われる日本国内における鉱山の記事は、文頭に<〇〇鉱山>として、収録した。また、幕府の鉱山・交易に関する政策、三貨及び米の相場などについての一般的な記事の文頭には†を付して収録した。
- 2) 「海外」の項目には、石見銀をはじめとする日本銀の貿易・流通状況を示す記事、日本銀の影響が及んだと思われる国・地域の金銀比価を示す記事を主に収録した。
- 3) 「国内」、「海外」の別は史料の所在地によった。ただし、韓国国史編纂委員会所蔵の「宗家記録」をもとにした記事は「国内」に収録した。

2. 記述形式および留意事項

(1) 年代の記述

西暦と和暦を併用している。海外では、中国・朝鮮関係の記事があるときには、中国年号・朝鮮年号を入れた。必ずしも記事と対応する位置には入れていない。

(2) 月日の記述

複数国の史料をもとに作成した年表であるため、煩雑になるのをさけ、陰暦等から陽暦への換算をしなかった。暦の種類を問わず、史料にあらわれる記述を採用した。

時代的に年月日を確定できない記事が多く、それらは以下の要領で配置した。

- 1) 年・月が明確で、日付の不確かな場合、月のみを記載し、その月のおわりにまとめて収めた。
- 2) 年が明確で、月・日ともに不確かな場合、年のみを記載し、その年のおわりにまとめて収めた。
- 3) 正確な年はわからないが、おおよその年代がわかっている場合、年表記事の冒頭に「この頃」をつけて表した。
- 4) 史料には年・月・日があらわれないが、推定される場合、年表記事の冒頭に「この年か」をつけて表した。

(3) 人名の表記

史料中に現れる記述に忠実に記した。慣用度の高いものについては、ヴァリニャーノのように簡略にしたものもある。また、人名で数種類の表記方法があるものについて、同一人物と思われるものはママをつけて史料文中の表記どおりに記した。

(4) 国名地名の表記

史料中に現れる記述に忠実に記した。記事の内容により、朝鮮、中国などの慣用的な表現に改めているものもある。

(5) 典拠の記載

記事の末尾に史料・文献を（ ）で示し、参考文献については巻末にあげた。

(6) 史料の所在地で略称を用いたものがあるが、その正式名称については次にあげる。

ARSI Archivum Romanum Societatis Iesu

(7) 史料名の右に*が付いているものは、『石見銀山関係編年史料綱目』にも採録した。あわせて参照された

い。

以上

石見銀山関係歴史年表
1334年～1710年

西 曆 (年号：日本)	国 内
1334-1336年 (建武年間)	足利直冬石見入国、銀山の露頭銀を掘りつくすという。(石見銀山旧記)*
1376年(永和2年)	
1388年(元中5年) (嘉慶2年)	
1391年(元中8年) (明德2年)	
1368-1398年 (応安元-応永5年)	
1430年(永享2年)	
1432年(永享4年)	†日本、將軍商売物として原銅を明に輸出。(戊子入明記)
1436年(永享8年)	
1437年(永享9年)	
1438年(永享10年)	
1444年(文安元年)	
1450年(宝徳2年)	
1429,1450年 (永享元、宝徳2年)	†楠葉西忍が永享・宝徳度の遣明船で渡明の経験を語る。唐船の貿易の利益は生糸にまさるものはない。唐糸1斤は250匁であるが日本での代価は5貫文である。西国備前・備中の銅一駄(大体35.6貫目)の代は10貫文、唐土で明州・雲州糸で替えて持って帰ると、40貫・50貫になる。金1両、日本では銭30貫であるが、これを糸に替えて持って帰ると120貫、150貫になる。(大乘院寺社雑事記)
15世紀中頃	
1451年(宝徳3年)	†遣明船の時で銅銭の輸入6万貫。(大乘院寺社雑事記)
1449-1452年 (宝徳元-享徳元年)	†宝徳度(1449~52)、楠葉西忍、遣明船貿易の話によれば、北京では銀10文目が銭1貫文(千文)、南京で銭2貫文、寧波では銭3貫文であるという。(大乘院寺社雑事記)
1458年(長禄2年)	
1460年(寛正元年)	
1457-1464年 (長禄元-寛正5年)	
1465年(寛正6年)	

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1334-1336年	
1376年㊤(洪武9年)	4月 明の洪武帝、今年の租税を銀・鈔・錢・絹で納めろと戸部に命じる。(明太祖実録)
1388年㊤(辛昌元年)	朝鮮使節が、中国や日本に赴いて銀を売れば、絞首刑となる。(経国大典) 朝鮮において、官・吏ともに、酒器以外の銀器の使用を禁ずる。(経国大典)
1391年㊤(洪武13年)	銀で納税するのは銀採掘場だけ。この年、銀の課税は24,740両。(日知録)
1368-1398年 ㊤(洪武年間)	この頃明国では、鈔2貫500文を折米1石、金1両を折20石、銀1両を折4石にする。(日知録)
1430年㊤(宣徳3年)	11月 この時、毎年銀87,800両を上納してきた浙江温州、処州二府の平陽、麗水7県の銀山の鉱脈の状況を再調査。(続文献通考) この年、銀の課税は320,297両。その後、この額を基準とする。(日知録)
1432年	
1436年㊤(正統元年)	この年、銀2錢5分を米1石に折納させる。(日知録) 米麦1石を銀2錢5分に折納とし、江南・浙江・江西・湖広・福建・広東・広西の米・麦400余万石は、銀100万余両とされた。これを金花銀という。(明史)
1437年㊤(正統2年)	明国において、銀・布・絹を米に折納させる。その後、折納は一般化する。(日知録)
1438年㊤(正統3年)	明国において、銀山が閉鎖され、銀の課税は廃止。(日知録)
1444年㊤(正統8年)	7月 明国では、浙江・福建の銀山は再開。毎年、福建の銀課は21,120両あまり、浙江の銀課は41,700両あまりで、宣徳期の半分、洪武期の10倍にあたる。(続文献通考・明書・明史) 明国において銀採掘が再開され、この年、銀の課税は67,180両。その後、対外貿易が増えたため、銀の流通は盛んになる。(日知録)
1450年㊤(景泰元年)	2月 明国、浙江・福建の銀山は閉鎖。(続文献通考)
1429、1450年	
15世紀中頃	景泰年間(1450~1456年)、明朝、日本の朝貢品に対して銀34,700両あまりの給価を与える。(明史) 明国において銅貨にかわり、銀の流通は一般化し、その後外国銀の大量輸入により、銀は通常の貨幣になる。(日知録)
1451年	
1449-1452年	
1458年㊤(天順2年)	この年、浙江・福建の銀山は再開。(続文献通考)
1460年㊤(天順4年)	銀産地に課せられた銀の上納額、福建・浙江は従来どおり、雲南は100,000両あまり、四川は13,000両あまり、合せて183,000両余り。(明史・続文献通考)
1457-1464年 ㊤(天順年間)	明国、雲南の銀産地の銀産量は毎年2万~10万両で、いつも全国の50%以上を占める。(広志釋)
1465年㊤(成化元年)	明国、米1石につき銀3~4錢。以降、米の価格は上昇する傾向が見られる。(典故紀聞・客座贅語・閩世篇)

西 曆 (年号 : 日本)	国	内
1467年(応仁元年)	† 日本、將軍商売物として銅35駄を明に輸出。(戊子入明記)	
1468年(応仁 2 年)	† 幕府船に客人衆 (禅僧、京都・兵庫・芦屋・博多の商人、山名・畠山の一族家臣等) を乗せて入明、それぞれ10分の1を税として徴収される。(戊子入明記)	
1471年(文明 3 年)		
1474年(文明 6 年)		
1476年(文明 8 年)		
1477年(文明 9 年)	10月 3 日 足利義尚、大内左京大夫政弘へ石見国仁摩郡他を安堵する。(黒岡帯刀氏旧蔵文書)*	
1480年(文明12年)		
1481年(文明13年)		
1482年(文明14年)		
1483年(文明15年)	† 楠葉西忍、明への輸出は10種類にして持参せよという。(ラッコの皮・胡椒・蘇芳=中継貿易品、赤金・金・銚子=金属、太刀・長大刀・鑓=刀剣類、吉扇=工芸品) (大乘院寺社雑事記)	
1485年(文明17年)		
1487年(長享元年)		
1489年(延徳元年)		
1490年(延徳 2 年)		
1492年(明応元年)		

西暦(年号：中国・朝鮮)	海	外
1467年㊤(成化3年)	<p>明国、湖広で金鋳場は21個所開けられたが、成功せず閉鎖する。浙江銀鋳は減産、雲南銀鋳は閉鎖、再開を繰り返す。(続文献通考)</p> <p>明国、茶100斤をして折銀5錢にする。(明史)</p>	
1468年		
1471年㊤(成宗2年)		<p>8月3日 朝鮮において司憲府が北京に行ったときや諸浦の取引において金銀の使用を禁じ、それを犯す者を検挙することを啓する。(成宗実録)*</p>
1474年㊤(成宗5年)		<p>12月15日 日本国王使正球ら22人らの帰国に際し、朝鮮王朝は正式な使節であることの証明である牙符を作り、使節に携帯を義務付ける。また、正布500匹・綿布500匹などを渡した。(成宗実録)*</p> <p>朝鮮王府内において、金銀の器皿をなくしたものは、同品位・同量の金銀で弁償することとする。(大典統録)*</p>
1476年㊤(成宗7年)		<p>10月4日 倭人が朝鮮に黄金を持って来て、その取引が許される。(成宗実録)*</p>
1477年		
1480年㊤(成化16年)	<p>明国、布1匹を銀3錢とする。(明史)</p>	
1481年㊤(成化17年)	<p>明国、錢の対銀比価は旧錢80文対銀1錢。(続文献通考)</p> <p>明国各地の金銀比価は金1両=銀7両。(明憲宗実録)</p>	
1482年㊤(成宗13年)		<p>2月14日 宗貞国が派遣した閩書記に対し、朝鮮国内で金や朱紅が余っている現状を告げる。(成宗実録)*</p>
1483年㊤(成宗14年)		<p>4月23日 朝鮮、宗貞国の派遣した平国幸のもたらした銅の買取りを拒む。(成宗実録)</p> <p>10月29日 大内政弘の使者清鑑が帰国に際し、胡椒・銅の対価に不満を訴える。(成宗実録)*</p>
1485年㊤(成宗16年)		<p>1月 朝鮮、倭人との銅の私貿易を禁ず。(成宗実録)</p> <p>2月15日 朝鮮において、倭人が私貿易で禁制品である金銀を売ることについて論ずる。(成宗実録)*</p>
1487年㊤(成宗18年)		<p>4月28日 朝鮮において三浦の銅・鉄を星州花園に納めるに際し、駅丞察訪らが銅・鉄を星州花園に領納することに決定する。(成宗実録)*</p>
1489年㊤(弘治2年) ㊤(成宗20年)		<p>1月 朝鮮王朝、金1挺は42匁で、1挺につき布112匹を別賜する。(成宗実録)</p> <p>7月 朝鮮、小式氏の使者の持ち来たる銅2万斤の対価を全て綿布で支払うように命ず。(成宗実録)</p> <p>9月25日 朝鮮では、黄金2斤8匁は綿布1千匹にあたる。(成宗実録)*</p> <p>12月12日 朝鮮では、綿布1匹に対し上質の銅は2斤半、質の劣るものは4～5斤である。(成宗実録)*</p> <p>明国、浙江の銀鋳の銀上納額は10,841両。(棗林雜俎・菽園雜記)</p> <p>この頃、明国各地の金銀比価は金1両=銀5、6両。(何文肅公文集)</p>
1490年㊤(成宗21年)		<p>3月13日 朝鮮、公貿易での金と綿布の比価を1両=30匹から、25匹に改める。(成宗実録)</p> <p>閏9月28日 朝鮮、大内氏の使者が持ち込んだ銅の対価を綿布のみで支払う。(成宗実録)*</p> <p>10月14日 大内政弘が慶彭首座らを朝鮮国に派遣する。(成宗実録)</p>
1492年㊤(弘治5年) ㊤(成宗22年)		<p>6月 宗貞国の使者職宣が、朝鮮政府に持ち込んだ銀の対価を綿で受けとることを請うが許されず。(成宗実録)</p> <p>この時、雲南の銀課は2万両、浙江は1万両減免される。他の銀山は相次いで閉鎖。(続文献通考)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1494年(明応 3 年)	
1500年(明応 9 年)	
15世紀後半	
1503年(元龜 3 年)	
1504年(永正元年)	
1507年(永正 4 年)	
1508年(永正 5 年)	
1509年(永正 6 年)	
1510年(永正 7 年)	<p><越中松倉金山>この頃、松倉城近くの金山谷に、椎名勝胤の金山城があった。このことから、この頃以前にすでにここで金が採取されていたことがわかる。伝承ではその開坑は応永年間と伝えられる。(越登賀三州志)</p>
1511年(永正 8 年)	
1512年(永正 9 年)	
1514-1515年 (永正11-12年)	
1515年(永正12年)	
1516年(永正13年)	

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1494年㊦(成宗25年)	<p>4月10日 足利義材の使者元弼が、進上品の対価を綿布で受けとることを請うが許されず。(成宗実録)</p> <p>7月3日 朝鮮において、丁香はもと8両で正布1匹であったが、今は5斤で1匹であり、白檀は7両で1匹であったが、8斤で1匹である。(成宗実録)</p>
1500年㊦(弘治13年) ㊦(燕山君6年)	<p>11月 雲南の判山等四つの銀山、鉱脈が絶えたため閉鎖。(続文献通考)</p> <p>明国、米価1石が銀2、3銭になり、民の窮乏が議せられる。(青溪漫稿)*</p> <p>1500～1504年、毎年銀の課税は31,920両。(明孝宗実録)</p> <p>1500年以降の100年間、毎年全国銀の生産量は約10万両。(梁端肅公奏議)</p>
15世紀後半	<p>明初に定めた銀1両＝銭千文という比価はこの時銭300～500文になることあり。(明憲宗実録・明孝宗実録・明武宗実録・続文献通考)</p>
1503年 ㊦(燕山君9年)	<p>5月18日 朝鮮において、国王が、端川銀山の銀鉱石を用いて、灰吹法の試行を命ず。(燕山君日記)*</p> <p>11月14日 朝鮮、端川の含銀鉛2斤から純銀4銭、永興の含銀鉛2斤からは純銀2銭が出てくる。(燕山君日記)*</p>
1504年 ㊦(燕山君10年)	<p>7月 端川で銀の採掘人に課せられる税銀は1人2日あたり2両である。(燕山君日記)</p>
1507年㊦(正徳2年) ㊦(中宗2年)	<p>1月7日 朝鮮、対馬島主が濟浦に送った銅について、貿易を許すかどうかの議論を命ず。(中宗実録)</p> <p>この時、明国米の価格は1石＝銀2銭から、8銭まで変動する。(顯志堂稿)*</p>
1508年㊦(正徳3年) ㊦(中宗3年)	<p>4月15日 燕山君年間の宮人である金貞幹は罪人より銀を取って保釈していた。(中宗実録)</p> <p>11月6日 朝鮮、赴京使の一行が、明へ金銀を齎らしているので、端川での銀の吹錬を行うか否かについて、さらに議論を命ずる。(中宗実録)*</p> <p>11月8日 朝鮮において、赴京使による銀の持出しを防ぐため、彩段着用の禁止について論ず。(中宗実録)</p> <p>明国、浙江の銀税額はこの年から1万から2万両に変わる。(続文献通考)</p>
1509年㊦(中宗4年)	<p>8月28日 朝鮮において、執義権敏手が赴京使が銀を明に持ちこむため銀が不足する現状を指摘する。(中宗実録)*</p>
1510年	
1511年㊦(正徳6年)	<p>この年、明国雲南の銀山、9箇所閉鎖。その後、各銀山、再開・閉鎖を繰り返す。(続文献通考・明史)</p>
1512年㊦(正徳7年) ㊦(中宗7年)	<p>1月 明国、銭銀比価は銭1文対銀7分。(続文献通考)*</p> <p>8月20日 日本国王使僧弼中に対して、壬申約条を示す。(中宗実録)</p> <p>1505年からこの年まで、明国の金銀の課税は毎年32,920両。(明武宗実録)</p>
1514～1515年 (正徳9～10年)	<p>日本人は琉球人と金・銅等貴金属、剣・麝香・絹織物等の交換を行っている。(東方諸国記)</p>
1515年㊦(中宗10年)	<p>2月 朝鮮において、端川での銀産を禁止し、採掘のために納粟した民に対し魚箭を支給す。(中宗実録)</p>
1516年㊦(中宗11年)	<p>5月29日 朝鮮において、沙羅綾段の着用を禁ずることを建議するが許されず。(中宗実録)*</p> <p>6月24日 朝鮮において、倭人の使者は、朝鮮が提示した弓角と綿布の交換比率について、値が安いと主張した。(中宗実録)*</p> <p>8月27日 朝鮮端川の銀山での新規の採掘許可を停止する。(中宗実録)*</p> <p>12月3日 明の宦官たちは、朝鮮の産物の対価として銀や銅を支払う。(中宗実録)*</p>

西 暦 (年号 : 日本)	国	内
1517年(永正14年)		
1518年 (永正15年)	8月	<安倍金山>今川氏親が浜松荘の引間城に拠った大河内貞綱らを攻めた際、安倍金山の金掘に城中の井戸を掘り尽くさせた。(宗長手記)*
1520年(永正17年)		
1501-1520年 (文亀元-永正17年)		<多田銀銅山>文亀・永正の頃、多田荘山下村で銅屋新左衛門が山下吹という精錬法をはじめたと伝えられる。(日本鉱業誌)
1506-1521年 (永正3-大永元年)		
1521年(大永元年)		
1522年(大永2年)		
1523年(大永3年)		
1524年(大永4年)		
1525年(大永5年)		
1526年(大永6年)	3月23日	大永年中博多商人神谷寿禎が出雲大社への参詣途中、南山に光を発見。石見銀山に登り三嶋清右衛門とともに開発を行うという。(清水寺文書)* 3月25日 雲州田儀三嶋清右衛門が鷺銅山より吉田与左衛門、同藤左衛門、於紅孫右衛門の3名を連れて銀山で鍾を掘り、鉛に吹くという。(山中家文書) 博多商人神谷寿禎、鷺銅山の鉍石を買うために鷺浦に向かう途中石見銀山を発見するという。(於紅孫右衛門縁起)

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1517年㊦(中宗12年)	8月18日 朝鮮において、銀を中国へ持ちこまぬための監察制度について議論する。(中宗実録)*
1518年	
1520年㊦(中宗15年)	2月28日 朝鮮王朝、端川の採銀について、敬差官を派遣することに加えて、咸鏡道の觀察使が人員を選定することを認める。(中宗実録)* 9月17日 朝鮮において、議政府が端川の銀を商人に採掘させることを建議するが許されず。(中宗実録)*
1501-1520年	明朝の中頃、銀の使用が広がる。(清朝文献通考)
1506-1521年 ㊦(正徳年間)	明国福建・浙江の銀山が再開。浙江の鉍脈が絶えた後も年に銀2万両の上納が課される。(明史) この時、広東の順徳では無許可の銀採掘が行われる。(天下郡国利病書) 嘉靖年間以前、明国の銅銭の対銀比価は銭500~600文対銀1両。(春明夢余録)
1521年㊦(中宗16年)	8月27日 朝鮮国王中宗は、明へ赴く使節の荷物の量が行きは甚だ少なく、持ち帰る荷物の量が多いから、金や銀を国外に持ち出していることを怪しむ。(中宗実録)*
1522年㊦(嘉靖元年) ㊦(中宗17年)	1月20日 朝鮮において、承旨兪汝霖らが金銀を潜売したことの処罰について、律のとおり処罰することを命ず。(中宗実録) 7月5日 朝鮮において、日本の使臣が貿易の対価を全て綿布で受取ることを願い出る。(中宗実録)* この年、明国において雲南、初めて金千両上納する。(張心齋奏議) 明国沿海で市舶を停止したため、日本人との密貿易が盛んになる。(嘉靖東南平倭通録) 明国、この時以降、銀は流通において主要な貨幣となる。(明史) 明国において臨州・徳州の二倉、輕齋銀をもって運官の道支とすることの許可を求める。(明史)
1523年㊦(嘉靖2年) ㊦(中宗18年)	6月28日 朝鮮、倭人が金・銀・龍腦を持ち込むため、公貿易を廃止することが建議するが許されず。(中宗実録)* 8月11日 朝鮮、明に赴く使節が金・銀などの禁制品を持ち出すことを厳しく取締まることを建議する。(中宗実録) 明国、日本朝貢使の争いがきっかけとなり、市舶を中止。その後日本人との密貿易は繁盛。(明史) 日本各道が争って明国に朝貢するのは、利益のためである。(日本考・松窓夢語)
1524年㊦(嘉靖3年)	この年、明国銀の対銭比価は銀1銭対銭70文、対悪銭はその倍量。(春明夢余録)*
1525年㊦(嘉靖4年) ㊦(中宗20年)	6月 朝鮮において、日本との貿易の全面禁止が論議される。(中宗実録) 明、京衛軍の俸給を銭で給し、税収では、鈔1貫を銀3厘、銭7(8)文を銀1分に換算するよう命じる。(春明夢余録・明史)*
1526年㊦(嘉靖5年)	この頃から、福建・浙江の海商は外国商人を浙江の双嶼に誘う。(日本一鑑)

西 暦 (年号：日本)	国	内
1526年(大永6年)	筑前国博多神谷寿禎並びに出雲国鷺浦三嶋清右衛門の兩人、掘子吉田与三右衛門・同藤右衛門・於紅孫右衛門を引き連れて、初めて間歩を開き、鏈を掘り、博多へ持ち帰るという。(石州銀山治府要集)	大永年間、出雲大社近くの鷺の銅山が採掘されており、博多の貿易商神谷寿禎が年々往来して雲州銅を購入して貿易するという。(石見銀山旧記)*
1527年(大永7年)	8月11日	口論によって於紅孫右衛門打ち果たされ、吉田与左衛門、同藤左衛門に祟りをなしたため山神に祓社を立てるといふ。(山中家文書)
1528年(享禄元年)	大内義隆の代に、石見に銀山が出現して異朝よりこれを聞き、多数の船が渡来するという。(大内義隆記)*	
1529年(享禄2年)		
1531年(享禄4年)	小笠原氏、矢滝城を攻め落し銀山を領有する。吉田与左衛門、同藤左衛門は周防へ行き、与左衛門は大蔵丞、藤左衛門は采女丞の官途を授けられるという。(山中家文書)	
1533年(天文2年)	3月	<越中河原波金山> 3月上旬、向山谷で金鉱が発見された。同年9月下旬には豊鉱に切り当たり、さらに翌3年銀谷、木落し山にも金銀鉱が発見された。(越中鉱山雑誌)
	8月	博多より宗丹・桂寿が来てはじめて銀山において銀を吹分け、100枚を大内氏に運上するという。(石見銀山旧記)*
1534年(天文3年)		
1535年(天文4年)		
1536年(天文5年)		
1537年(天文6年)	8月16日	尼子経久、石見銀山を攻略。吉田采女丞は尼子方へ、吉田大蔵丞は周防に逃れ、以後、小笠原・福屋・三隅・益田など尼子氏に従うという。(石見銀山旧記・於紅孫右衛門縁起)*
1538年(天文7年)	7月3日	神谷寿禎、博多滞在の遣明船に副使策彦周良を問う。* (策彦入明記初渡集)
		高野山過去帳に2月29日、9月4日「銀山 ハカタ与三左衛門」とあり。
1539年(天文8年)	5月	大内義隆、銀山を奪回。吉田大蔵丞、坂次郎、采女丞等が昆布山谷にて銀を吹き、毎年の運上が銀500枚になるという。(石見銀山旧記)*
	8月4日	大水が出て昆布山谷で1,300人余りが流されるという。(石見銀山旧記) (一説に天文11年という)
		高野山過去帳に3月23日「昆布山 松や三郎次郎」、6月6日「銀山 山下太郎左衛門」、10月20日「銀山 吉田隼人佐」とあり。

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1526年㊥(嘉靖5年)	
1527年㊥(嘉靖6年)	<p>9月 日本の朝貢に関して、10年に1回、人員100人、船3隻と規定する。(国権)</p> <p>12月 明国、旧銭を使用させる。(続文献通考)</p>
1528年㊦(中宗23年)	<p>閏10月20日 朝鮮の咸鏡道で採掘された銀63錠のうち、30錠は入内し、33錠は尚衣院に送ることを命ずる。(中宗実録)</p>
1529年㊥(嘉靖8年)	<p>9月 明国、官価銀1銭=銭70文であるが、時価銀1銭=銭30文である。(続文献通考)*</p> <p>10月 明国、広東省では外国船との貿易を許可、漳州の密貿易を禁止。(国権)</p>
1531年	
1533年㊥(嘉靖12年) ㊦(中宗28年)	<p>7月5日 朝鮮の咸鏡道での銀の採掘をこのときまでに禁止している。(中宗実録)*</p> <p>9月 明国、浙江・福建の大型船の海上貿易を禁止。(国権)</p>
1534年㊥(嘉靖13年)	<p>8月 明国浙江・福建の民、海上密貿易を行い、官兵と対抗。(国権)</p> <p>この年以降嘉靖末期まで、雲南、毎年金2千両上納する。(張心齋奏議)</p> <p>この年、琉球に着いた明の使節団のものは日本貿易でもうけたので、以降、日本へ密貿易に行く福建人が多くなる。(日本一鑑)</p>
1535年㊥(嘉靖14年)	<p>この年から1570年代まで、明国ではマカオの外国商人が毎年2万両の商品税を納める請負い制が行われていた。(明史・香山県志)</p>
1536年㊥(嘉靖15年)	<p>7月 倭寇を警戒し、日本貿易を禁止。(国権)</p> <p>沂州72個所鉅山で得られた「白金」(銀)は11,000両あまり。(明書)</p>
1537年㊥(嘉靖16年)	<p>この年明国、山東で銀山を多数開く。その後各地でも盛んに銀鉅を調査。(続文献通考)</p> <p>明国両浙地方の僻地において塩100斤につき銀8分。(明史)</p> <p>明国、嘉靖16年を境にして、その前の銀鉅の上納額は毎年3万両前後、以降は毎年48,271両。(明世宗実録)</p>
1538年㊥(嘉靖17年)	<p>5月 日本僧、朝貢に来て2年前残された貨物を求める。明国、10年に1回という朝貢期限の規定を表明。(国権)</p> <p>7月 明国、房水洞・雲南大理・河南宜陽諸銀山を開く。さらに全国の銀鉅を調査させる。(明書・国権)</p>
1539年	

西 暦 (年号：日本)	国 内
1540年(天文9年)	<p>小笠原長隆、銀山攻略するという。(石見銀山旧記・銀山通用字録)*</p> <p>高野山過去帳に2月2日「銀山 神笠親」、4月24日「銀山 新左衛門」、(月未詳)15日「銀山 備中道阿弥三郎」とあり。</p>
1541年(天文10年)	<p>2月22日 大内義隆、久利淡路守の去月16日の安濃郡大田での軍忠を賞す。(久利家文書)*</p> <p>5月15日 問田隆盛、去年8月の久利淡路守父子の軍忠を賞す。(久利家文書)*</p> <p>高野山過去帳に正月18日「銀山 スワノ又左衛門」、4月1日「銀山 吉田大蔵丞」、(月未詳)21日「銀山 マサシケナリ」とあり。</p>
1542年(天文11年)	<p>2月 <生野銀山>里人が古城山の西南に銀鉱を掘り出し、生野銀山始まる。最初に開かれた鉱坑は「蛇間歩」と呼ばれた。里人は製錬法を知らず、石見の者が生野の鉱石を求めて帰国して吹いてみたところ銀を得たので、さらに下財・吹工を連れてきて、古城山西南の東堂ヶ谷五右衛門間歩その他を開いた。(生野銀山旧記)</p> <p>8月4日 大洪水が銀山を襲い昆布山が崩壊。溺死1,300余人、その他他国から来ている者数を知らずという。(銀山濫觴記ほか)</p> <p><佐渡相川金銀山>越後国より外山茂右衛門が来て鶴子銀山を開いたと伝えられる。(佐渡相川志)*</p> <p><生野銀山>生野の蛇間歩の銀鉱を石州の人が吹き、生野で鉱山の操業開始するという。(生野銀山旧記)*</p> <p>この頃か、13代小笠原長徳、大内義隆の尼子攻めの時の功により佐摩、白坏を与えられるという。(三原郷丸山城主系図)*</p> <p>高野山過去帳に2月9日「銀山 加藤有右衛門」とあり。</p>
1543年(天文12年)	<p>5月1日 <甲斐保金山>穴山信友が、村田善九郎、望月善左衛門など6名の者に芳(保)山の金鉱脈の切り出しを指示した。(望月家文書)</p> <p>7月 尼子晴久、石見に進攻し銀山を攻略。小笠原長徳と共同管理するという。(石見銀山旧記)*</p> <p>10月11日 久利太郎法師丸、10月1日の尼子との合戦の軍忠を弘中下野守に申し出る。(久利家文書)*</p> <p>†この年、ポルトガル人、王直の案内で初めて日本の種子島につく。以降、中日間の生糸と銀の貿易に参入する。(鉄砲記)</p> <p>高野山過去帳に5月19日「銀山 スワノ又右衛門」、6月22日「銀山 佐藤藤左衛門」、10月16日「銀山 カナヤイ三郎五郎」とあり。</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1540年㊤(嘉靖19年) ㊦(中宗35年)	<p>6月 朝鮮において、禁令にもかかわらず倭人と密貿易をする者が絶えない。(中宗実録)</p> <p>7月25日 朝鮮において、倭銀が流布して、赴京使が明へ持ち込む銀は、1人3千両を下らない。貿易の弊害が大きいので、「防禁之節目」を定める。(中宗実録)*</p> <p>8月3日 朝鮮において、明への貢銀の復活を恐れて、銀の採掘を引き続き禁止する。(中宗実録)*</p> <p>8月24日 朝鮮において、銀の貿易による弊害を防ぐために、唐物の着用を永久に禁ずることが建議された。(朝鮮中宗実録)*</p> <p>双嶼港、日明両国の貿易商が密貿易をする主要な拠点となる。(海紀輯要・璧余雜集)</p> <p>明国、王直集団、膨大な船団を指揮下にして禁制品を積んで日本等の国と貿易し、数年で巨大な富を得た。(籌海図編・三朝平壤録・明書・虔台倭纂・殊域周諮録・海寇議後)</p>
1541年㊧(中宗36年)	<p>6月10日 朝鮮において、明との密貿易に銀を用いることを防ぐため、民間の銀を悉く買い上げることが論議される。(中宗実録)*</p> <p>6月10日 朝鮮において、銀の密貿易に関する罰則を定め、また、任に在らずして密貿易者を捕らえた者には、密貿易者の所持した銀両を賞として与える。(中宗実録)*</p> <p>7月27日 朝鮮において、銀90斤は官木90同に相当する。(中宗実録)*</p> <p>7月29日 朝鮮において、赴京使による密貿易を禁止するため、御史を国境に派遣して監察させる。さらに、70歳以上の老人を赴京使に任命しないことが論議される。(中宗実録)*</p> <p>11月24日 朝鮮において、倭人・野人が、朝鮮より銀を持ち出して、中国南方へ販売しており、その対策として、倭人に銀を売ることを禁止する。「河有孫」という人物と誤認し、何伊孫なる者を捉えて尋問する。(中宗実録)</p>
1542年㊨(中宗37年)	<p>4月 朝鮮において、日本国王使安心東堂が、銀8万両を持ち込み、買取ることを請う。銀をはじめとする貿易物の総計は木綿9千同余りに匹敵する。(中宗実録)*</p> <p>7月17日 安心を持ち込んだ8万両の銀について、3分の2は貿易を許し、うち2万5千両を朝鮮政府の公買とする。(中宗実録)</p>
1543年㊩(中宗38年)	<p>3月22日 朝鮮において、日本国王使が連年に互って、銀を持ち込んでいる。(中宗実録)*</p> <p>明・朝鮮国境において、明への銀持出しの監視については大同察訪が担当し、鴨緑江対岸の唐人の監視については、義州の牧使・判官が監視する。(大典後統録)</p> <p>朝鮮において、倭銀の取引は死罪より一等を減ずる。(大典後統録)</p>

西 暦 (年号 : 日本)	国 内
1544年(天文13年)	<p>11月20日 陶・弘中、久利太郎法師丸の串山城での働(堀作事)を賞す。(久利家文書)*</p> <p>高野山過去帳に3月4日「銀山 山神ヲベニノ子孫 吉田孫右衛門シウトメ」、5月13日「銀山 吉田平左衛門」、6月10日「昆布山 弥三兵衛」、6月12日「銀山 四郎次郎」とあり。</p>
1545年(天文14年)	<p>12月15日 小槻伊治が相良義滋領内のくさを石見銀山において鑑定させる。(相良家文書)*</p> <p>高野山過去帳に(月未詳)21日「銀山 吉田孫左衛門」とあり。</p>
1546年(天文15年)	<p>7月12日 石見吹大工洞雲が、肥後宮原の銀石を鑑定す。(相良家文書)</p> <p>高野山過去帳に3月10日「昆布山 出シ土 兵衛五郎」とあり。</p>
1547年(天文16年)	<p>† 2月20日 大内氏、遣明船の出発にあたり、「渡唐船法度条々」で、銅銭の持参を禁止する。(南海通紀)</p> <p>高野山過去帳に7月1日「銀山 大河九郎兵衛」、8月21日「出シ土 徳岩庵 □□」とあり。</p>
1548年(天文17年)	<p>高野山過去帳に2月27日「石金 番匠藤五郎」、11月2日「昆布山出シ土 宗左衛門」とあり。</p>
1549年(天文18年)	<p>8月5日 銀山山神神宮寺が建立される。山神の創始は大旦那吹大工房宗、信養房建立に始まるという。(尾氏春秋)</p> <p>高野山過去帳に11月24日「銀山 石橋内大黒屋」、「銀山 石橋内新三郎」とあり。</p>
1550年(天文19年)	<p>天文19年頃、長門国太田郷祥瑞庵住持善瑣首座、大内氏の使者として石州銀山へ赴く。(萩藩閩閩録)*</p> <p>高野山過去帳に2月11日「銀山 佐藤又七」、3月21日「銀山 石橋内源四良」とあり。</p>
16世紀前半	<p>† 1532~1554年まで日本の金銀比価金1対銀10。(金銀貿易史の研究)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1544年⓪(嘉靖23年) ⑨(中宗39年)	<p>2月11日 朝鮮から明国へ銀が無制限に流れている。(中宗実録)</p> <p>4月24日 朝鮮での禁銀について言及した提督主事の書状について議論を命ず。(中宗実録)</p> <p>4月 日本国王使弼中が朝鮮より持ち出した綿布が50余同、安心東堂が1,400同、受笠東堂が400同である。綿布(1疋)が米3升到当たる。(中宗実録)</p> <p>6月25日 この頃から、明国の海商、銀貿易で多く日本へ行く。(中宗実録)*</p> <p>12月 この時、日本貿易で朝鮮に漂着し、送還された漳州人は39人。(明世宗実録)</p> <p>この年、王直、貿易で日本朝貢使と一緒に日本へ行き、翌年日本人を浙江の双嶼に誘って、密貿易を行う。(籌海図編・閩書・洪芳洲先生摘稿・今言)</p> <p>メンデス・ピントの旅行記によれば彼がリャンポーで日本が銀に富むことを伝えたと、1ピコル40テールの生糸が8日間で160テールに上がった。(東洋遍歴記)</p> <p>明国、京師で絹1匹の代価が銀7銭 生糸1斤=絹1匹。(明代物价考略)</p>
1545年⓪(嘉靖24年)	<p>福建人洪迪珍、この年日本商人を誘って南澳で密貿易を行い、その後毎年日本と貿易を行い、数年で巨大な富を得た。(海澄県誌)</p> <p>この年、王直ら海商は日本へ行き、貿易拠点を設立し、日本商船を明国に誘う。(籌海図編)</p>
1546年	
1547年⓪(嘉靖26年)	<p>2月 この時、日本貿易で朝鮮に漂着し、送還された福建人は341人。(憲章外史統編)</p> <p>11月 日本朝貢使周良、朝貢期の前に来て海港で貢期を待つ。(国権)</p> <p>海禁があっても、密貿易が盛んに行われ、1544年から1547年までに、朝鮮に漂着した千人あまりの日本行き密貿易者は明国に送還される。(明史・明実録・明紀・道光福建県志)</p>
1548年⓪(嘉靖27年)	<p>4月 密貿易者、沿海各港に集まり日本人を誘引し密貿易をする。朱紬、武力で密貿易を取締まる。(国権・海寇議書)</p> <p>6月 日本朝貢使周良、朝貢を求め、前例のとおり許可される。(国権)</p> <p>この時、双嶼海上の密貿易船は1,290隻あまり。(朱中丞覽余集)</p> <p>明国湖州の絲、1担につき銀60両。(漫遊紀略)</p>
1549年⓪(嘉靖28年)	<p>7月 朱紬、日本人と交通する浙江・福建の密貿易者を拏捕。(国権)</p> <p>11月5日 フランシスコ・ザビエル、堺の港には金・銀が集中していると記す。(Cartas)*</p>
1550年	<p>この頃か、フロイスの記録によれば、長崎は毎年50万クルザドの銀を輸出する。(Cartas)</p>
16世紀前半	<p>15世紀後半と16世紀初め、小額のものは銭を使い、高額なものは銀を使うように銀は広く流通する。(嶺南叢述)</p> <p>日本からの朝貢貿易が制限されると、密貿易が行われ、広州の海上では外国船との密貿易は盛ん。(徐文定公集・霍勉齋集)</p> <p>福建の商人、海上でポルトガル人と密貿易をする。巡撫使朱紬、海禁を厳しくする。(天下郡国利病書)</p> <p>ポルトガル人と明国人、共同で日本貿易を行う。(覽余雜集)</p>

西 暦 (年号 : 日本)	国 内	
16世紀前半		
1551年(天文20年)	<p><富士金山>甲州と駿州との境を封鎖した際にも、金山衆には大宮（浅間神社）方面から富士金山への荷物を一度に5駄、毎月6度輸送することが、今川氏によって免許されている。（竹川家文書）</p> <p>高野山過去帳に3月21日「銀山 石橋氏」、「銀山 石橋殿ノカモン」、8月2日「栃畑 アダチ又三郎」、12月15日「昆布山 助五郎」とあり。</p>	
1552年(天文21年)	<p>10月10日 坪内宗五郎、尼子晴久より石州銀山の内屋敷5ヶ所を与えられる。（坪内家文書）*</p> <p>高野山過去帳に2月28日「銀山 番匠与三左衛門」とあり。</p>	
1553年(天文22年)	<p>4月5日 銀山山吹城炎上し、刺賀長信の知行地石見国安濃郡刺賀郷500貫の地、邇摩郡重富村40貫の地にかかる文書が焼失。大内義長、これを安堵する。（大内氏実録・萩藩閩閩録）*</p>	
1554年(天文23年)	<p>高野山過去帳に7月23日「昆布山 子コヤ新左衛門」とあり。</p>	
1532-1555年 (天文年間)	<p><吉岡銅山>天文・永禄期まで、吉岡銅山は、尼子氏の家臣で黄金山城主であった吉田六郎兼久の支配であり、大塚孫一、松浦五右衛門を請負人として銅山を経営させたという。（大塚家文書）</p> <p><甲斐中山金山>甲斐の中山金山は、信玄時代にすでに稼行されていた。（甲斐国誌）</p> <p><梅ヶ島金山>天文期、あるいはそれ以前に安倍郡梅ヶ島金山、井川金山が開かれ、永禄～天正にかけて武田信玄の領有するところとなった。（甲斐国誌）</p> <p><佐渡相川金銀山>鶴子銀山を発見、開発した外山茂右衛門が上杉謙信に訴えて、越後国魚沼郡上田銀山から金穿人足数百人を渡らしめ、天文・弘治の頃までに銀・銅を得た。（佐渡志）</p>	
1555年		

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
16世紀前半	<p>密かに日本へ行く明国人が多く、唐人町が形成された。日本にいる明国商人は2、3万人。(王司馬奏疏・涌幢小品)</p> <p>日本人の日常用品には明国産が多く、特に磁器、本絹、綿布などを好む。(見只編)</p> <p>16世紀に入ってから20年間、明国年間金銀課の収入は3万両あまり。(明実録)</p> <p>嘉靖年間の歳入は銀2百万両、銀不足の状況が現れた。(明史)</p> <p>嘉靖年間、銀銭の公定比価は銀1両=銭700文であるが、市場比価は銀1両=銭300文になることもある。(明史)</p> <p>弘治年間、平均米価は米1石につき銀0.518両。以降各朝の米価は上がる傾向が続く。(明実録)</p> <p>この時、明国では銅銭の使用量は極めて少なくなる。(西園聞見録・春明夢余録)</p> <p>この頃、明国各地の金銀比価は金1両=銀5両。(金瓶梅)</p>
1551年㊤(嘉靖30年) ㊤(明宗6年)	<p>5月6日 明国、海禁令が厳しく施行されても、漳・泉地方の密貿易は盛んである。(馮養虚集)</p> <p>9月5日 明国、朝鮮国王が、銀を義州に運び唐人と売買している漢城の商人に禁断を加える。(明宗実録)</p> <p>この年、日本船数十隻、日明両国のものを載せて、泉州に来て各地の密貿易商と交易する。(安海志)</p>
1552年㊤(嘉靖31年)	<p>4月8日 スペイン人は、日本のことを「銀の島」と呼ぶというフランシスコ・ザビエルの報告あり。(聖フランシスコ・ザビエルの書簡)</p> <p>4月 王直等、日本と密貿易をする。(国権)</p>
1553年㊤(嘉靖32年) ㊤(明宗8年)	<p>7月27日 日本の銀産が多いため、明国の海商、よく日本へ行って貿易をする。(明宗実録)*</p> <p>10月 この年、銭の対銀比価は嘉靖銭7文対銀1分、その他の銭はこの比価の倍になる。(続文献通考)*</p> <p>嘉靖32年頃、これより以前において民間で私鑄銭が横行、おおむね30~40銭で銀1分に相当。(明史)</p>
1554年㊤(嘉靖33年)	<p>日本貿易は莫大な利益があるため、密かに日本人と交通し、福建の大型船は多数。(天下郡国利病書・国権)</p> <p>嘉靖33年頃、明国、御史の何廷钰が上奏し、民間で小銭を使用し、60文を銀1分とすることを求めるが、戸部が許可せず。(明史)</p> <p>この年、銭の対銀比価は嘉靖銭7文対銀1分、その他の銭は質により10文、14文、21文対1分に命じる。(続文献通考)*</p> <p>明国、張維等の海商、日本との密貿易を行う。(東西洋考)</p>
1532-1555年	
1555年㊤(嘉靖34年)	<p>4月14日 明、銭6,500万文は銀93万余両に値する。(明世宗実録)*</p> <p>11月23日 イエズ会士ベルショール・ヌネス、明国の港に日本からの銀が大量に運び込まれていると記す。(Cartas)*</p> <p>明国四川・山東諸銀山は再開。さらに全国の銀鉱を調査、再開させる。(明書)</p>

西 暦 (年号：日本)	国	内
1555年		
1556年(弘治2年)		<p>4月5日 弘治2年か、毛利氏、銀山方面における林孫右衛門の戦功を賞し5貫目を遣わす。(萩藩閩閩録)*</p> <p>8月9日 石見佐波に駐屯の毛利勢、銀山方面に進出し、山吹衆を討取る。(萩藩閩閩録)*</p> <p>8月13日 この頃毛利氏、銀山山吹城将刺賀長信を懐柔するため使者を遣わす。(萩藩閩閩録)*</p> <p>この頃、銀山経路上の諸領主が銀山出入の商人より駒足(通行税)を徴収する。(毛利家文書)*</p> <p><生野銀山>山名氏の家臣太田垣能登守、山名祐豊に叛して生野を奪取し、京正阿弥を置くという。(生野銀山旧記)</p> <p>高野山過去帳に8月8日「枳畑 ウリ畠コエナシ新吾」、(月未詳)15日「銀山 ヨコミチ助三郎」とあり。</p>
1557年(弘治3年)		毛利氏、温泉津をおさえる。(萩藩閩閩録)
1555-1558年 (弘治年間)		<諏訪郡金沢金山>弘治・永禄・元亀の頃、武田信玄支配の時代に、金沢金山より金を掘り出すと伝えられる。金山権現、堤千軒宿、遊女町などがあったという。(諏訪郡諸村並旧蹟年代記)
1558年(弘治4年) (永禄元年)		<p>2月17日 毛利元就・同隆元、吉川和泉守経安に、温泉津勘過の内50貫文を与える。(石見吉川家文書)*</p> <p>8月 毛利隆元、石見銀山の守備につき、糸賀平左衛門を石見へ派遣。(萩藩閩閩録)*</p> <p>9月3日 この年か、尼子晴久、銀山山吹城以下を攻略する。(萩藩閩閩録)*</p> <p>石見銀山山吹の城へ芸州より刺賀山城守、高島源四郎兩人を城番におく。(老翁物語)*</p> <p>この頃尼子方、大田へ出陣して銀山方面をうかがう。(石見吉川家文書)*</p> <p>弘治～永禄初年の頃、刺賀長信、山吹城にて尼子勢の攻撃を受け城兵の助命の代りに切腹するという。(萩藩閩閩録)</p>
1559年(永禄2年)		<p>6月4日 毛利元就・隆元、山吹城の奪回を石見国邇摩郡荒神に祈願する。(物部神社文書)*</p> <p>6月20日 毛利元就・隆元、山吹城奪回を河井大明神に祈願する。(物部神社文書)*</p> <p>6月30日 小笠原長雄、家臣の湯浅右京丞に近年の戦功に対して褒美として銀山屋敷一所を遣わし、銀山の神(山神)祈念を康光に申しつける。(清水寺文書)*</p> <p>永禄2、3年頃、尼子方、大田へ出陣して銀山方面をうかがう。(石見吉川家文書)</p> <p>高野山過去帳に(月未詳)15日「銀山 佐藤九郎右衛門」とあり。</p>
1560年(永禄3年)		<p>2月13日 この年か、小笠原氏被官横道氏、毛利方として銀山近隣三久須城を攻め、尼子方を退ける。(林愛吉所蔵文書)*</p> <p>8月 毛利輝元、伊藤重左に温泉役、地銭を命じるという。(伊藤為太郎所蔵文書)*</p> <p>高野山過去帳に10月8日「昆布山 坂次郎左衛門」とあり。</p>
1561年(永禄4年)		<p>3月 温泉津西念寺、毛利元就の頃開かれ、開山は浩蓮社源誉上人という。(西念寺開基略記)*</p> <p>4月15日 この年か、毛利勢が銀山町中および城郭を陥れ、温泉津へ進出しようとする。(大願寺文書)*</p> <p>5月20日 去月12日、小笠原氏、毛利勢に従い銀山山吹城攻めを行う。(清水寺文書)*</p> <p>高野山過去帳に11月11日「銀山 タチンヤ片山河内」とあり。</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1555年㊥(嘉靖34年)	<p>明国、価格の騰貴を防ぐため、銅・錫の無許可販売を禁じる。(春明夢余録)</p> <p>明国、銅の産出する各地に銭を鑄造させる。(国権)</p> <p>明国の洪迪珍、日本商人を南澳につれて貿易を行う。(乾隆海澄県志)</p>
1556年㊥(嘉靖35年)	<p>明国、倭賊の討伐の功績は、嘉靖35年の定めにより倭首賊を斬る者昇進一級、実授三秩に陞せ、願わざるは賞金として銀150両を与える。(明史)</p>
1557年	
1555－1558年	
1558年㊥(嘉靖37年)	<p>12月 この年、全国金銀鉱の金上納額は2千両弱、銀上納額は5万両弱で、以降、採掘はさらに拡大。(明世宗実録)</p> <p>この時、ポルトガル人はマカオに定住し、以降、毎年銀2万両の税を明国に納める。(明史)</p> <p>この年以降、ポルトガル人はマカオを拠点にし大量の銀を運んできて中国のシルク・磁器等の商品を購入する。大勢の明国商人はその貿易でマカオへ行く。(粵剣篇・明史)</p> <p>広東海寇許棟、日本貿易を行う。(虔台倭纂)</p>
1559年	
1560年	<p>1560年代、インドにいたイタリア人チェザレ・フレデリチは、毎年、ポルトガル船1艘が中国から日本へ生糸を運び板銀にかえ、中国に戻って売却するとしている。(The Principal Navigations, Voyages, Traffiques and Discoveries of the English Nation)</p>
1561年	<p>10月8日 イエズス会士コスメ・デ・トルレス、日本には銀鉱が多数存在すると記す。(Cartas)*</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国	内
1562年(永禄 5 年)	2 月 毛利元就、三原 (邑智郡) に着陣。銀山周辺の警護を祖式式部少輔に命じる。(萩藩閩閩録)* 12月10日 毛利元就、石見銀山を朝廷に献上し、代官となることを希望し繪旨下付の取次を勸修寺に依頼する。(古文書纂)* 銀山の城 (山吹城) において服部治部が城番をする。(老翁物語) 高野山過去帳に 5 月25日「昆布山 佐藤丹波守子息」とあり。	
1563年(永禄 6 年)	1 月27日 毛利氏、勸修寺殿を使者として、白銀の山を御料所として寄進すると申し出る。(御湯殿の上の日記)* 12月 3 日 この年か、毛利元就ら、石見銀山を朝廷御料所として翌年 1 月から献上する旨、聖護院道増の被官矢嶋治部少輔へ申し入れる。(萩藩閩閩録)* 12月22日 毛利氏、某へ温泉津において居屋敷を与える。(萩藩閩閩録)* 高野山過去帳に12月21日「柝畑 治郎左衛門」とあり。	
1564年(永禄 7 年)	5 月15日 毛利氏、朝廷へかね (金) 5 枚、しろかね (銀) 50枚を献上する。(御湯殿の上の日記)* 8 月13日 湯科吉左衛門尉の持船 3 艘のうち 1 艘についての諸役を免除する旨、山口奉行より温泉津以下の関奉行に指示あり。(竹井文書)* 8 月18日 毛利氏、朝廷へ銀を献上する。(御湯殿の上の日記)* 高野山過去帳に 6 月21日「銀山 佐藤彦右衛門」、6 月22日「出シ土 佐藤彦左衛門取次」とあり。	
1565年(永禄 8 年)	3 月12日 毛利家奉行人、兵糧米輸送のため 1 ヶ月中に200石の船を 2 艘勘過させるよう指示する。(益田家文書)* 5 月28日 温泉英永、出雲杵築大社に常燈を寄進し、温泉津串山、銀山款冬山その他石見邇摩郡知行を祈願する。(坪内家文書)* 高野山過去帳に (月未詳) 15日「柝畑 藤左衛門」とあり。	
1566年(永禄 9 年)		
1567年(永禄10年)	<生野銀山>堀切山にて銀を大量に掘り出すが、当地では製錬が禁じられているので、丹波門野など諸所で製錬する。(生野銀山日記)*	
1568年(永禄11年)	9 月 石州銀山住田辺村 (対) 馬守治綱が敵島廻廊に一間分寄進する。(大願寺文書) 高野山過去帳に 3 月 4 日「昆布山 坂根谷藤左衛門取次徳岩庵」とあり。	
1569年(永禄12年)	高野山過去帳に 5 月20日「銀山 根七郎左衛門」、(月未詳) 15日「昆布山 古岩寺」とあり。	
1560年代		
1570年(永禄13年) (元亀元年)	3 月24日 この年か、毛利輝元、鶴丸城普請を武安就安・神田三郎兵衛兩人に指示する。(萩藩閩閩録)* 4 月 9 日 毛利輝元、兵糧米輸送について船を温泉津より出させるよう奉行人に指示する。(萩藩閩閩録)	

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1562年㊤(嘉靖41年)	この年、鄭若曾『籌海図編』に以下のように記される。 石見、銀と銅を産出する。明国・日本の商人はすべて銀と明国商品との交換に従事する。明国の古銭1,000文は日本銀4両。日本人、明国のシルク・漢方薬・書籍を好み、とりわけ生糸の価格は国の10倍、100斤が銀500～600両になることがある。日本に密貿易で行く明国海商は約1,000人。日本の商人も多く、明国・南澳に赴く。
1563年㊤(嘉靖42年)	雲南の銀税額は全国1位で、15世紀に年10万両であったが、以降2万両、この年から1596年まで、1万両に下がった。(天下郡国利病書・滇考・明世宗実録・滇雲暦年伝)
1564年㊤(嘉靖43年)	10月9日 イエズス会士ジョアン・バティスタ、豊後の王は日本で金銀にもっとも富める者であると記す。(Cartas)* 明国淳安地方で銀鉱が採掘される。(賢博編)
1565年㊤(嘉靖44年)	2月20日 イエズス会士ルイス・フロイス、日本の銀鉱は豊かであると記す。(Cartas)* 9月15日 イエズス会士ガスパル・ヴィレラ、日本には多くの銀山があるが、金・銀は商業上の道具にすぎないと記す。(Cartas)* 10月25日 上銭1,000,000は、約5,000クルザドにあたるのと記述あり。(Cartas)
1566年㊤(嘉靖45年)	この頃、明国では米価は1石につき銀4～6銭になる。(万分恭公集)*
1567年㊤(隆慶元年)	2月 この年、明国、銭の対銀比価は銭8文対銀1分に統一する。その後、銭の種類により比価は変動。(統文献通考・明史・万分恭公集) 12月 内庫太倉の銀貯蓄は1,354,652両。(国権) 明国、海禁緩和の上奏により、東西洋貿易は解禁。しかし日本貿易は禁じられる。密かに日本行きの海商は多い。(天下郡国利病書・東西洋考・敬和堂集) 隆慶以降、密貿易で日本に行く明国貿易船は毎年4、50隻。(崇相集) この頃、明国各地の金銀比価は金1両＝銀6両。(典故紀聞) 隆慶の初め、兵部侍郎の譚綸の上奏によるに、富民は必ず布帛菽粟を重んじて賤銀の風あり。(明史)
1568年㊤(隆慶2年)	明国各地の金銀比価は金1両＝銀6両。(明穆宗実録) 明国、馬1匹は銀30両に換算。(明史)
1569年㊤(隆慶3年)	7月 銅銭を鑄造し、銭の対銀比価は銭10文対銀1分とするよう上奏した。(統文献通考)
1560年代	この頃以降、マカオは銀輸入の重要な貿易港となる。(涇林続記)
1570年	

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1570年(永禄13年) (元亀元年)	<p>4月25日 この年か、毛利輝元、兵糧1,500俵を温泉津より銀山へ運搬するため、温泉津奉行人に町中へ伝馬を申しつける。(萩藩閩閩録)*</p> <p><薩摩神殿金山>永禄13年、神殿村に金銀銅の鉱山が発見された。この鉱山では、後の元禄年間には1日に金を5鉢ずつ掘り出したという。(川辺村郷土史)</p>
1558-1570年 (永禄年間)	<p><吉岡銅山>「御山鑑」によれば、永禄年間、吉岡銅山は大いに繁栄し、大深谷には数百の家が連なり、社寺や遊女町などが軒を並べ、「上京、下京と称し、商家七座の棚を飾りて市をなす」といった様子であったという。(成羽町史)</p> <p>神村元親、本城常光を生害し、銀山山吹城に在番するという。(萩藩閩閩録)</p>
16世紀中頃	
1571年(元亀2年)	<p>2月20日 この年か、毛利元就・輝元、鶴之丸城普請にあたり、近隣諸村にこれを割当てる。(萩藩閩閩録)*</p> <p>3月11日 毛利輝元、鶴之丸城普請を温泉津奉行人に指示する。(中島家文書)*</p> <p>6月 吉川元春・小早川隆景、銀山の収益を戦費に充てるよう、元就旧側近栗屋就方へ具申する。(毛利家文書)*</p> <p>12月29日 毛利氏から朝廷への上納銀を勧修寺尹豊が取次ぐ。(御湯殿の上の日記)*</p> <p><富士金山>中山金山衆が深沢城攻めで功績を挙げたのに対し、甲州初150俵が褒美として、勝頼より与えられた。(静岡県史料)</p>
1572年(元亀3年)	<p>1月 本城常光を滅ぼした後、元就より平佐藤左衛門・上山兵庫、元春より吉川和泉守経安・山県左京を派遣して山吹城在番の常光の家人服部治部から城を受領。平佐・山上両人は山吹城に城番として留まったが、経安も銀山に在城する。(吉川家文書)</p> <p>閏1月25日 毛利輝元、小問木工助(木津屋)に温泉津の居屋敷を安堵する。(中島家文書)*</p> <p>閏1月25日 毛利輝元、西楽寺に寺家一カ所については無縁所ゆえ諸役を免許し、鶴之丸城普請については役を負担するよう命じる。(西楽寺文書)*</p> <p>3月 石州佐波之内信貴村福田備前守女が巖島廻廊に一問分寄進する。(大願寺文書)</p> <p>高野山過去帳に6月22日「銀山 渡 助左衛門」、7月晦日「枳畑 フロヤノ段 渡辺孫一」とあり。</p> <p>7月21日 龍昌寺に「為孝林宗順禪定門」の銘のある組合せ宝篋印塔あり。</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1570年	
1558－1570年	
16世紀中頃	<p>この頃明国の日本の地図には、石見州の所在が記され、石見は山陰道に属すとある。(鄭開陽雜著)</p> <p>明国において石見には銀、銅が産出するという。(鄭開陽雜著・日本考・日本一鑑)*</p> <p>朱紘の死後、海禁は緩和。日本人との密貿易はさらに盛んになる。(嘉靖東南平倭通録)</p> <p>明国、福建人と広東人、南澳で明国商品と日本銀との交易を行う。(武備志・明神宗実録)*</p> <p>日本人が銀で中国の商品、銅銭と交換するので、明国に輸入された日本銀の量は少ない。(日本考・日本一鑑・橋全集)</p> <p>坊津・博多・安濃津は対外貿易商品の集散地である。明国の海商で博多に住むものが多い。唐人町もある。(日本考・王司馬奏疏)</p> <p>日本の求めた明国商品の量は、生糸、磁器の順であった。(徐文定公集・見只編)</p> <p>日本人、糸などの明国商品を好み、湖糸100斤の値は500～600両。真綿その他も高値。(度台倭纂・鄭開陽雜著・日本考)*</p> <p>明国の貿易船はルソン貿易で銀だけ持ち帰るため、スペイン人がマニラに運んできた巨額の銀はほとんど明国に流入した。(東西洋考・李文節公文集)</p> <p>この頃、明国では、低銭(悪銭)が流通し、60～70文をもって銀1分にまでなる。(明史)*</p> <p>明国、江南地方の米価、1石で銀5～9銭という記事あり。(唐荊川家蔵集)</p>
1571年Ⓞ(隆慶5年)	<p>2月4日 日本では、銀鉱山が多く採掘能力もあるが、開坑には2,000クルザドの資本が必要との記述あり。(Cartas)</p> <p>明国、取引を遼東では米・布・絹で行い、宣大・山西では銀で行う。(明史)</p> <p>この頃か、粳米1ムーラが5パルダオに相当。21フェデアが1パルダオに相当。(海外領土史研究所蔵文書)</p>
1572年Ⓞ(隆慶6年)	<p>1月 明国、雲南の金増徴に対して、雲南巡按、金1両につき銀8両で代えるように訴える。(明穆宗実録)</p> <p>フィリピンでは、日本人の船による主な取引は銀であり、銀2～2.5マルコを以て金1マルコに易える。(Historia General de Filipinas)</p>

西 曆 (年号：日本)	国 内	
1567-1572年 (永禄10-元亀3年)		
1573年(元亀4年) (天正元年)	<p>2月13日 毛利氏、朝廷へ銀100枚を献上する。(御湯殿の上の日記)*</p> <p>5月18日 毛利輝元、家臣山根善左衛門尉(恒道)に、温泉津居屋敷一ヶ所を与える。(萩藩閩閩録)*</p> <p>9月20日 この年か、毛利輝元、久利左馬助に、温泉津鶴丸城普請の費用を久利氏分領中に割当てよう指示する。(藩中諸家古文書纂)*</p> <p>10月3日 元亀年間 足利義昭、吉川元春・小早川隆景らに対し、防長雲伯の御料所ならびに銀山運上を催促する。(吉川家文書)*</p> <p><越中吉野銀山>吉野銀山が開かれ、多額の運上銀があがったという。(越中鉱山雑誌)</p> <p>7月 龍昌寺に「為幻□童子」の銘のある組合せ宝篋印塔あり。</p>	
1574年(天正2年)	<p>4月5日 吉川経安が吉川経家に宛てた讓状の中に、邇摩郡諸村、福光湊、銀山休役所がある。(萩藩閩閩録)*</p> <p>9月 石州銀山大谷住栗栖内蔵助が巖島廻廊に一間分寄進する。(大願寺文書)</p> <p>高野山過去帳に4月27日「枳畑 藤十郎」とあり。</p>	
1575年(天正3年)	<p>2月7日 島津家久が上京する途中温泉津に立ち寄る。(中書家久公御上京日記)</p> <p>4月28日 毛利氏、朝廷へ銀100枚を上納する。(御湯殿の上の日記)*</p> <p>6月25日 島津家久一行が銀山から温泉津へ向かう途中に街道沿いの西田町を通る。(中書家久公御上京日記)</p> <p><阿仁銅山>湯口内で銀山が発見される。(阿仁発達史)</p> <p>高野山過去帳に7月15日「枳畑 宗内加賀守殿」、12月25日「銀山 イセズル父ノ為」とあり。</p>	
1576年(天正4年)	<p>9月 石州中郡河上市本田讚岐守正吉が巖島廻廊に一間分寄進する。(大願寺文書)</p> <p>高野山過去帳に10月21日「枳畑 彦三郎」とあり。</p> <p>妙本寺上に一石五輪塔あり。</p>	
1577年(天正5年)	<p>2月 <黒川金山>黒川金山衆に宛てて、近年金の産出が無いので、1月に馬1疋の分の往還諸役を免じる旨の武田勝頼の朱印状が渡された。(風間家文書)</p> <p><伊豆土肥金山>同金山の柿木間歩の開発が始まったという。(豆州志稿)</p> <p>5月21日 龍昌寺に「奉為道恣禪定門」の銘のある一石五輪塔あり。</p>	
1578年(天正6年)	<p>12月 石州銀山休柱湯原余左衛門尉が巖島廻廊に一間分寄進する。(大願寺文書)</p> <p><越中龜谷銀山>山師の作右衛門によって龜谷銀山が発見されたという。これ以後、前田氏入部までに本江・岩屋・山門・金山谷・かな谷などの間歩が次々に開かれた。(越中鉱山雑誌)</p> <p>龍昌寺に「為□□仙休禪門」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>	
1579年(天正7年)	<p>高野山過去帳に2月18日「石金本谷 土や甚助」、12月7日 高野山過去帳に「枳畑 服部孫十郎」とあり。</p>	

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1567-1572年 Ⓜ(隆慶年間)	この頃、海澄の貿易税歳入は数千両。(天下郡国利病書) 毎年、明国月港に進出する海外貿易船は200隻あまり。(乾隆龍溪県志)
1573年Ⓜ(万暦元年)	この時、明国、新銭1文=銀2厘、旧銭1文=銀1厘。(続文献通考)
1574年Ⓜ(万暦2年)	この年の前後、雲南、毎年金2千両上納する。(張心齋奏議) 日本から戻る密貿易船、貨物がなく、金銀を積み、9、10月に帰港。(天下郡国利病書)* 600バルダオ=約500ドゥカド、2,000クルザド=2,000ドゥカドと記述あり。(ARSI)
1575年	10月2日 カブラルは1テール=1.5ドゥカドと考える。(ARSI) 10月 1テール=1.111…バルダオと記述あり。(Documenta Indica) 11月2日 イエズス会の年間経費は、2,000テールに上った。これは、3,000ドゥカドに相当する。(ARSI) 12月2日 1テール=1.5ドゥカドの記述あり。(ARSI)
1576年Ⓜ(万暦4年)	この年、明国海澄の貿易税は1万両に増える。(天下郡国利病書)
1577年	9月19日 小銭20,000は、銅貨1,000枚、3クルザドに相当するとの記述あり。(Cartas) フィリピン金について、アレヘラスという金は16ないし18カラットのもので、明国人はこれをパニカと呼んで交易。この金1両につき4ペソ以上の割では取引せず、これは本国の価格なので結局1リュアラ損するからと記述あり。金1銀1.75ないし2前後。(マニラ発フランシスコ・デ・サンデの書簡)
1578年Ⓜ(万暦6年)	明国、福建地方の私貿易の禁令違反が多発。当局、管理方法を検討。(天下郡国利病書)
1579年	12月5日 ヴァリニャーノの記録によれば、換算率は20,000テール=30,000スクード。(ARSI) 12月5日 当時日本イエズス会は、30,000スクードを資産として所有。15,000を生糸貿易の資金とし4,000以上の利益をあげる。(ARSI) 1570年代頃、明国の金銀比価金1：銀8である。(明穆宗実録)

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1580年(天正8年)	<p>9月 石州銀山住奥源左衛門尉が巖島廻廊に一間分寄進する。(大願寺文書)</p> <p>高野山過去帳に9月29日「栃畑 宗内彦右衛門」、11月2日「栃畑 フロヤノ段 田中三郎右衛門」とあり。</p> <p>7月17日 龍昌寺に「為月光妙円禪定尼也」の銘のある組合せ宝篋印塔、4月 龍源寺間歩上(妙像寺墓地)に「為家翁宗仙定門□」の銘のある宝篋印塔あり。</p>
1581年(天正9年)	<p>6月3日 毛利輝元、銀山支配に関して吉川経言と小笠原氏との養子縁組について異義を表明する。(吉川家文書)*</p> <p>7月5日 銀山の納所で1年間に銭3万貫相当の銀高の収納名目とその配分先などが記される。(毛利家文書)*</p>
1582年(天正10年)	<p>2月 石州銀山住人三宅三郎左衛門が巖島廻廊に一間分寄進する。(大願寺文書)</p> <p>3月6日 <富士金山>富士金山衆・麓衆の帰参を容れるよう、北条氏政が氏親に指示した。(竹川家文書)</p> <p>高野山過去帳に6月24日「栃畑 賀戸二郎兵衛」とあり。</p> <p>5月17日 龍昌寺に「為□□□金禪定門也」の銘のある宝篋印塔あり。</p>
1583年(天正11年)	<p>8月 安国寺恵瓊、吉川元春の子経言、小早川隆景の養子元総を人質として大坂(豊臣家)へ送ることを隆景に督促し、輝元が豊臣へ銀山を引き渡したので、問題はないと伝える。(毛利家文書)*</p> <p>高野山過去帳に3月22日「昆布山 善左衛門」、9月19日「石金 石橋又三郎」とあり。</p> <p>10月16日 龍昌寺に「為玉滝浄信禪定門」の銘のある組合せ宝篋印塔あり。</p>
1584年(天正12年)	<p>高野山過去帳に7月2日「栃畑 賀戸次郎兵衛」8月10日「栃畑 スワ三良エモン兵衛取次大泉坊」、(月未詳)15日「栃畑 小野助四良」とあり。</p> <p>11月27日 龍昌寺に「為長□道性禪定門也」の銘のある一石五輪塔あり。</p>
1585年(天正13年)	<p><生野銀山>永禄10年以後元龜元年までに開掘された間歩として、堀切、金木、松木、藤木、サヤゴが元龜年間以後天正13年までに開掘された間歩として、上月、小鉾、出賀、灰色、入道、淵、荒木、左近山、小日向があげられる。(生野銀山旧記)</p> <p>高野山過去帳に3月21日「昆布山出シ土 津ノ国五郎左衛門」、8月13日「栃畑 服部小七郎」とあり。</p> <p>7月13日 妙本寺上に「為□□□□尼位」の銘のある一石宝篋印塔、10月26日 龍昌寺に「帰真道慶禪門」の銘のある組合せ五輪塔あり。</p>
1586年(天正14年)	<p>3月20日 勸修寺紹可、吉川元春に、正親町天皇讓位につき公用銀の上納を督促。(毛利家文書)*</p> <p>6月15日 毛利氏、朝廷へ銀100枚を上納する。(御湯殿の上の日記)*</p> <p>9月 石州銀山之住人諏訪三郎左衛門尉秋吉が巖島廻廊に一間分寄進する。(大願寺文書)</p> <p><能登宝達金山>天正14年より宝達金山の開発が始まり、寛永4年まで約40ヶ年の間盛山であったと伝えられる。(日本鉾山史の研究・岡部家文書)</p> <p>この頃か、1月18日、4月25日、豊臣秀吉、毛利輝元に石見国先銀山(石見銀山)のほか石見国内諸所の銀山の運上を、毛利家家臣林・柳沢に収集運上させるよう命じる。(毛利家文書)*</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1580年㊤(万暦8年)	<p>6月 ヴァリニャーノの記録によれば、換算率は1テール=1.5ドゥカド。(ARSI)</p> <p>1580~1630年、長崎からマカオに輸入された銀は多く合計50~300万両。日本から帰港する明国商船は銀しか持ち帰らないからである。(天下郡国利病書)</p> <p>明国江南地方の米価、1石で銀3銭という記事あり。(趙文毅文集)</p> <p>ポルトガル人は(1580年代)日本より毎年60万クルザド以上の銀を運び出す。(ラルフ・フィッチの旅行記)</p>
1581年㊤(万暦9年)	<p>4月14日 フロイスの書簡によれば、1テール=1.5クルザドとも、1テール=1.666クルザドともいう。(Cartas)</p> <p>9月3日 カブラル自身が用いた換算率は、1テール=1.5ドゥカド=2パルダオ。(ARSI)</p> <p>10月13日 1テール=1.111…パルダオと記述あり。(ARSI)</p> <p>明国の万暦帝、雲南の上納金を、年に4千両(銀4、5万両に相当)に定める。(張心齋奏議)</p>
1582年㊤(万暦10年)	<p>11月5日 金1両は7,000クルザドに相当するとの記述あり。(Cartas)</p> <p>明国では銭の値は低く、浙江では銭の対銀比価は銭20文対銀1分。(見只編)</p>
1583年㊤(万暦11年)	<p>4月7日 朝鮮において、忠州判官崔徳岫を咸鏡道に派遣し銀を採掘させる。(宣祖実録)</p> <p>10月5日 バンカド価格とイエズス会士が独自の販売ルートとの価格差は、1ピコルあたり12~13クルザドであった。(ARSI)</p> <p>明国、海澄の貿易税は2万両あまり。(天下郡国利病書)</p> <p>この頃、イエズス会は、10,000~12,000ドゥカドを生糸に投資して、日本で売り、5,000~6,000ドゥカドの利益を上げていた。(日本諸事要録)</p>
1584年	<p>12月14日 ヴァリニャーノの記録によれば、1テール=1.4パルダオ。(Documenta Indica)</p>
1585年㊤(万暦13年)	<p>8月27日 イエズス会士ルイス・フロイス、日本では銀を目方ではかると記す。(Cartas)*</p> <p>10月1日 ポルトガル船は毎年50万クルザドの銀を積み出すとの記述あり。(Cartas)</p> <p>12月26日 ヴァリニャーノの書簡によれば、1ドゥカド=1.333…パルダオ。(ARSI)</p> <p>この年以降明国、海澄の貿易税収入は2万両に増加。(天下郡国利病書)</p> <p>明国、銀銭比価は銭4、5文=銀1分になる。(明史)</p>
1586年㊤(万暦14年)	<p>10月17日 イエズス会士ルイス・フロイス、豊臣秀吉は石見銀山を含む中国地方の主要地域を掌握したと記す。(Cartas・ルイス・フロイス日本史)*</p> <p>12月20日 ヴァリニャーノの書簡によれば、1テール=1.333…クルザド。(ARSI)</p> <p>この年、マニラから明国に輸入された銀は30万ペソに達し、この年は、50万ペソ以上になる。(マニラ発ロハスのフェリペ二世に送った書簡)</p> <p>ポルトガル人が長崎からマカオに輸入した貨物は主に銀で、よく銀万両を積んでくる、数万両を積んでくる船もある。(涇林続記)</p>

西 暦 (年号 : 日本)	国 内
1586年(天正14年)	高野山過去帳に7月9日「銀山 又次郎」とあり。
1587年(天正15年)	<p>4月29日 細川幽斎の一行が、仁万から銀山へ入り温泉津へ出る。(九州道の記)*</p> <p>5月 細川幽斎が温泉津に逗留中、温泉津の多数の商家が恵光寺に集まるという。(恵光寺旧記)*</p> <p>9月 石州銀山之住連嶋大江三宅与左衛門尉、石州銀山之住連嶋西浦之内有本孫兵衛尉、石州銀山小符山之住青木大蔵丞宗久、巖島廻廊に各々一間分寄進する。(大願寺文書)</p> <p><生野銀山>銀山にて山神祭礼が始まる。山神鏈として出鉾の50分の1が上納される。(生野銀山旧記)*</p> <p>高野山過去帳に3月7日「昆布山 服部和泉屋父ノ為」とあり。</p> <p>7月4日 龍昌寺に「為常□禪定門」の銘のある組合せ宝篋印塔、10月5日 「為明岩源□禪定門」の銘のある組合せ宝篋印塔、11月7日 龍源寺間歩上に「経 悲母妙福靈」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1588年(天正16年)	<p>4月13日 毛利輝元、宥忍坊に、銀山の内清水寺領分の知行を安堵する。(清水寺文書)*</p> <p>8月2日 毛利氏、朝廷へ銀100枚を上納する。(御湯殿の上の日記)*</p> <p>9月 石州邇摩郡銀山昆布山住三宅弥三郎(藤原朝臣久吉)、石州銀山昆布山青木大蔵丞宗久、石州邇摩郡左間銀山内服部小七郎、巖島廻廊に各々一間分寄進する。(大願寺文書)</p> <p>高野山過去帳に正月17日「枳畑 田辺源左衛門」とあり。</p> <p>3月27日 龍昌寺に「月証妙光禪定尼」の銘のある一石五輪塔、(月日未詳)一石五輪塔あり。</p>
1589年(天正17年)	<p>† 3月 この頃、銀子64匁3分=銭1貫。(石見吉川家文書)</p> <p>9月 <多田銀銅山>山科言経が多田銀山の見物に訪れている。(言経卿記)</p> <p>9月 石州住佐藤丹波守、石州銀山之住三宅与右衛門巳歳、石州銀山住栗栖与左衛門尉、石州銀山之住青木大蔵丞庚子歳欽言、石州銀山住諏方兵蔵辰歳、巖島廻廊に各々一間分寄進する。(大願寺文書)</p> <p>12月2日 毛利氏、朝廷へ銀100枚を上納する。(御湯殿の上の日記)</p> <p>高野山過去帳に3月13日「昆布山 青木三郎次」、「昆布山 青木浦三郎」、7月16日「昆布山 藤田勘右衛門」、8月29日「枳畑 宗内久次」とあり。</p> <p>6月14日 妙正寺に「宋 [] 霊位」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1590年(天正18年)	<p>5月7日 毛利氏、朝廷へ見舞として銀10枚を献上。(御湯殿の上の日記)</p> <p>9月 石州銀山之住諏方左近尉、石州銀山之住青木河内守宗久、巖島廻廊に各々一間分寄進する。(大願寺文書)</p> <p><生野銀山>この年以降、生野銀山盛山。(生野銀山旧記)</p> <p>天正年中、豊臣秀吉と毛利氏の間で和議が進められ、銀山引渡しを承諾。秀吉から上使近実若狭守、毛利から三井善兵衛の2名が銀山を奉行するという。(石見銀山旧記)</p> <p>高野山過去帳に正月29日「昆布山 三郎左衛門」、4月28日「枳畑 新左衛門」、6月9日「枳畑 三郎右衛門」とあり。</p> <p>9月15日 石銀地区に「地 道西禪門」の銘のある宝篋印塔、10月15日 妙本寺上に「□□妙善信女位」の銘のある一石五輪塔、11月8日 龍昌寺に「奉為道清禪定門者也」の銘のある一石五輪塔、11月26日 「奉為忠山浄雪禪定尼也」の銘のある一石五輪塔あり。</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1586年㊦(万暦14年)	<p>ヴァリニャーノの書簡によれば、15,300パルダオは、約12,172クルザドに当たり、1クルザド=1,257パルダオ。(ARSI)</p> <p>ヴァリニャーノの記録によれば、毎年シナー日本間のナウ船で資金を送って50又は70ピコルの生糸を仕入れ、ここから毎年3,000クルザドの利益が得られる。1クルザド=400レイス。(Documenta Indica)</p>
1587年	<p>11月20日 ヴァリニャーノの書簡によれば、50ピコルの生糸を扱う公認の貿易以外は廃止されている。(ARSI)</p> <p>11月27日 ヴァリニャーノによれば、50ピコルの生糸からあがる利益は毎年3,000クルザドになる。1シェラフィン=300レイスとして計算、パルダオとシェラフィンは同価値。(ARSI)</p>
1588年	<p>2月24日 教会領の浦上からは、秀吉に没収されるまで、毎年50クルザド(ドゥカド)以上の収入があったと記述あり。(Cartas)</p> <p>10月18日 ヴァリニャーノの書簡によれば、イエズス会のマカオ～日本の貿易は、生糸50キンタル(=ピコル)で非常に制限されている。毎年大凡4,000クルザドの利益をあげた。(ARSI)</p> <p>秀吉は小西隆佐に銀2,000貫を託し、長崎に着津のポルトガル船の900ピコルの生糸を買い占めさせた。(Cartas)</p> <p>ヴァリニャーノによれば、日本航海の権利は15,000クルザド、これからあがる収益は4,000クルザドを上回る。(ARSI)</p>
1589年㊦(万暦17年)	<p>7月15日 ヌエバ・エスパーニャからフィリピンの国庫へ毎年4万ないし5万ペソの銀を送り、帰航にそれだけの価格の金を積むことを許される場合には、貢物として先住民の納めた価格にして25,000ペソの金は、ヌエバ・エスパーニャでは5万ペソになると記述あり。(ガスバル・デ・アヤラのフェリペ2世に奉った書簡)</p> <p>7月23日 マカオ発のヴァリニャーノの書簡によれば、50ピコルの生糸は、一括して送られるが、そこからの利益は大凡2,000ドゥカドである。(ARSI)</p> <p>7月24日 マカオ発のヴァリニャーノの書簡によれば、6,000クルザド=6,000ドゥカド、1クルザド=1.325パルダオ。(ARSI)</p> <p>明国の海上貿易は、引税を納め限定された船引を入手しないと許可されない。(天下郡国利病書)</p>
1590年㊦(万暦18年)	<p>11月5日 イエズス会の記録によれば、1テール=1クルザド。(ARSI)</p> <p>ルソンから戻る明国の商船は銀だけ積み帰るため、1隻につき120両貿易税が徴収される。(東西洋考)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1591年(天正19年)	<p>1月11日 毛利輝元、高麗へ渡海につき、銀山の10人の者及び温泉津2人の者の子供を人質として広嶋へ置くよう命じる。(または天正20年)(広島・金田家文書)*</p> <p>6月 石州銀山之住三宅老岐守(藤原朝臣久重)が巖島廻廊に一間分寄進する。(大願寺文書)</p> <p>8月7日 <仙台領金山>金掘りを生業とする者によって金が掘られており、掘子の運上はわずかな額であり、伊達正宗が米で金を買っていた。(伊達家文書)</p> <p>9月 石州銀山住小林源左衛門尉之久、石州銀山住諏方左近丞秋吉、石州銀山住小林丹後守吉久、巖島廻廊に各々一間分寄進する。(大願寺文書)</p> <p><周防一の坂銀山>石見銀山より引寺された宝塔山吉祥院神宮寺があり、元和年中に萩へ移った。(毛利家文庫)</p> <p>高野山過去帳に3月15日「栃畑 森ヤワカサノ守」、3月23日「昆布山 藤田左馬介」、5月23日「京見世 森田次郎左衛門」、6月1日「出シ土 岡本甚左衛門」、9月11日「昆布山 青木大藏子息」、「昆布山 杉谷甚左衛門内儀」、10月12日「京店 山根彦兵衛」、10月15日「栃畑 フロヤノ段善助」、10月16日「昆布山 三宅与右衛門」、10月29日「栃畑 京店住吉や弥三右衛門」、11月5日「昆布山谷 松浦源左衛門」とあり。</p> <p>1月19日 妙本寺上に「(キリーク) 妙□不信女位」の銘のある宝篋印塔、4月8日 「経道助霊位」の銘のある一石五輪塔、(月日未詳)「[] □童子 位」の銘のある一石五輪塔、閏正月22日 龍昌寺に一石五輪塔、9月10日 龍昌寺に「奉為梅広妙春禪定尼」の銘のある一石五輪塔、10月27日 龍源寺間歩上に「価□道閑禪定門」の銘のある宝篋印塔あり。</p>
1592年(天正20年) (文禄元年)	<p>9月 石州銀山住青木河内守子歳宗久が巖島廻廊に一間分寄進する。(大願寺文書)</p> <p><仙台領金山>元葛西氏家臣白石十郎左衛門は、この頃伊達氏より金山大肝煎に任ぜられて、東山の他、登米郡・江刺中まで金山を差配したという。(白石家文書)</p> <p>高野山過去帳に2月28日「栃畑 アダチ又三郎」、3月21日「栃畑 藤島ナベヤ三良兵衛」、4月8日「栃畑 山根又左衛門」、6月7日「石金 本谷土屋神助」、6月8日「栃畑 山根又右衛門」、6月12日「石金 与三左衛門」、10月20日「昆布山 月坂二郎左衛門」、(月未詳)15日「石金 土屋神助道清命日」とあり。</p> <p>2月14日 妙本寺上に「(キリーク) 法誉妙西信女」の銘のある一石五輪塔、4月27日 龍昌寺に「為□秀□知蔵 禪師者也」の銘のある一石五輪塔、10月9日 「奉為妙救禪定尼者也」の銘のある一石五輪塔あり。11月7日 龍昌寺に「奉為喜翁楨悦記室禪師」の銘のある組合せ宝篋印塔あり。</p>
1573-1592年 (天正年間)	<p><吉岡銅山>この頃、毛利家が備中を治めていた頃には、その家臣の天野五郎左衛門が松山城代として、吹屋銅山も支配していたという。(大塚家文書)</p> <p>毛利氏、佐比売山神社を再建し、祈祷料として判銀100目、米10俵を毎月奉納、時鐘として太鼓堂(後に神宮寺に移転)を設置するという。(石見古城記)*</p> <p>この頃、備中早島の安原氏、草野氏、銀山に來住するという。(銀山通用字録)</p> <p>2月 妙本寺上に一石五輪塔あり。</p>
1593年(文禄2年)	<p>† 9月7日 御所瓦算用出入、瓦3,800枚 代6貫460文(瓦1,000枚=1貫700文)代銀にして58匁1分4厘(貫別9匁)。(広島・渋谷文書)</p> <p>12月9日 <信濃青柳金山>浅野長継が父長政の代理として日根野高吉に書状を送り、諏訪郡青柳金山に米を送ることを頼む。(南真志野共有文書)</p> <p><仙台領金山>元葛西氏譜代家臣、及川十郎兵衛は、伊達政宗によって砂金山の掘子に与えられた砂金掘りの免許札である本判役その他の御用を命ぜられた。(伊達家文書)</p> <p><信濃真志野金山>この年、諏訪郡真志野の金子であった清林・小七および年寄中より金山を試掘したい旨の届出があった。これに対し、石本三右衛門の名で、運上を1ヶ年金3分とし、産金が増せば運上金を改めて申しつけるという旨命じた。(南真志野共有文書)</p> <p>高野山過去帳に2月15日「栃畑 キリハリヤノ宗左衛門」、12月8日「出シ土 服部左兵衛丞」とあり。</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1591年	<p>3月19日 長崎発のゴメスの書簡によれば、当時イエズス会は、通常貿易によって4,000テールほどの利益を上げていた。(ARSI)</p> <p>10月28日 ゴメスの書簡によれば、2,000テール即ち2,000クルザド（1テール＝1クルザド）。(ARSI)</p> <p>この年にマニラに入港した日本発の船舶は1隻、乗組員はポルトガル人と日本人。(Les Philippines et le Pacifique des Ibriques)</p>
1592年㊦(万暦20年) ㊧(宣祖25年)	<p>3月8日 朝鮮において、軍糧のために銀を採掘させることを建議する。(宣祖実録)*</p> <p>9月 朝鮮国王が国内で銀が貨幣として用いられていないことを述べる。(宣祖実録)</p> <p>10月12日 朝鮮の備辺司が銀400～500両を宗義智に贈って秀吉と離間させる計画を啓するが許されず。(宣祖実録)*</p> <p>12月 朝鮮において、壬辰倭乱の終息後、銀貨の使用を許す。(宣祖実録)</p> <p>この年、明国月港の海外貿易税は29,000両あまりに増加する。(乾隆龍溪県志)</p>
1573－1592年	
1593年㊦(万暦21年) ㊧(宣祖26年)	<p>1月1日 マカオ発のヴァリニャーノの書簡によれば、1ドゥカド＝2パルダオ弱。(ARSI)</p> <p>1月12日 朝鮮王朝、秀吉・景轍玄蘇・秀次の首級を挙げた者には、賞銀1万両と伯に封じ、秀嘉・秀忠・行長・義智・鎮信・宗逸の首級を挙げた者には、賞銀5千両と指揮の地位を与える。(宣祖実録)*</p> <p>1月13日 マカオ発のヴァリニャーノの書簡によれば、1クルザド＝400レイスの換算率。(ARSI)</p> <p>3月 朝鮮の全羅道監察使権慄に倭人を多数殺した功により銀50両他を給する。(宣祖実録)</p> <p>3月 明が銀3千両を発給し、賞に充てる。(宣祖実録)</p> <p>5月 明から朝鮮の軍人にあわせて銀3,000両を給するが、咸鏡道では他のものにかえてから受取ることを啓する。国王は備辺司に議論を命ずる。(宣祖実録)</p> <p>7月9日 小西行長・沈惟敬が金銀など数櫃を持ち、朝鮮を経由して、中国に入ることを求める。(宣祖実録)</p>

西 暦 (年号：日本)	国 内
1593年(文禄2年)	<p>6月5日 妙本寺上に「奉孝友月童男也」の銘のある一石五輪塔、8月29日 「(キリク) 春峯妙□女靈位」の銘のある一石五輪塔、仲春3日 龍昌寺に「奉為□崑妙松禪定尼」の銘のある組合せ宝篋印塔、2月5日 「奉為緑水正原記室禪師也」の銘のある組み合わせ宝篋印塔、(月未詳) 1日 組合せ宝篋印塔、(月日未詳) 一石五輪塔あり。</p>
1594年(文禄3年)	<p>1月17日 <佐渡西三川砂金山>天正17年に佐渡を統一した上杉景勝に対し、豊臣秀吉は西三川の砂金を伏見・大坂へ公納することを命じていたが、この年、石田三成をして金の採掘と公納を督促させた。(舟崎文庫)</p> <p>3月24日 豊臣秀吉、蔵米を石見に送り、鉛・煙硝を調達させる。(駒井日記)*</p> <p>4月 <飛騨白川郷谷金山>白川郷谷で砂金採取始まり、全国から人が集まった。翌年には岩瀬に1,000軒あまりの町が出現したと伝う。この金山の位置は、後の落部金山、上滝金山のいずれかと言われている。(長滝寺文書)</p> <p>11月9日 銀山清水寺に10石の地が充行われる。(清水寺文書)*</p> <p>11月9日 銀山長安寺に15石の地が充行われる。(豊栄神社文書)*</p> <p>12月1日 長安寺末寺鬼村桂久寺に4石3斗4升、刺賀村円光寺に10石6斗6升が充行われる。(豊栄神社文書)*</p> <p>12月23日 <佐渡相川金銀山>浅野長吉の指示により、新しい技術を持った者たちが上洛中の直江兼続に引き渡された。彼らによって越後・佐渡の鉱山の見立てが行われたという。(越佐史料)</p> <p><仙台領金山>豊臣秀吉の上使として大橋八蔵・西村左馬之助・鯉江権右衛門の3人が伊達領に下向し、この年3度にわたっての役金の上納を命じたため、本判持ち(金掘)3,000余人(2,000余人とも)が千歳村白山堂に集結し、上納を年一回に減じるよう求めて強訴した。(白石家文書)</p> <p><加賀倉谷銀山>文禄初年、倉谷村の新右衛門と八右衛門によって金山が発見された。享保元年鶴来村・吉野村の十村の書上によれば、開坑の年次は文禄3年と記されている。(加州郡方旧記)</p> <p>11月18日 石銀地区に「周永禪定門」の銘のある宝篋印塔、(月日未詳) 龍源寺間歩上に「経 浄慶靈」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1595年(文禄4年)	<p>1月 <佐渡相川金銀山>上杉家の重臣直江兼続は立岩喜兵衛・志駄修理亮を御分国中山代官に任じ、米以下銀山に売られる物資を具体的に掌握して十分の一役を取ること、金山の請負を停止し、役銀は1ヶ月ごとに集計される出鉱高によって算用すべきこと、金穿りの内、才覚のある者を選んで銀山に配置し、彼らを通じて銀山を掌握するよう指示した。(立岩家文書)</p> <p>5月13日 温泉津木津屋、能登国一宮での購入米を加賀国商人の船で運び、温泉津にて受取ることを約す。(中嶋家文書)*</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1593年㊤(万暦21年) ㊤(宣祖26年)	<p>8月3日 朝鮮において、端川での銀産出に課税する。(宣祖実録)*</p> <p>8月26日 明国が、朝鮮における明留兵16,000人の給銀の負担増を求める。(宣祖実録)*</p> <p>9月25日 ゴメスの書簡によれば、イエズス会の生糸は、ポルトガル人達がナウ船でもたらす1,500~1,800ピコルの生糸と共に公然ともたらされる。そして、この生糸から2,000~3,000テールの利益があがる。(ARSI)</p> <p>閏11月 明の総兵官宛の小西行長の書状内容を知るため、朝鮮訳官李希仁が密かに銀を「椽房次知」の人に贈る。(宣祖実録)</p> <p>12月15日 コチン発カブラルの総会長宛ての書簡によれば、1テール=1.5ドゥカド=2バルダオの換算率を使用。日本イエズス会の交易では毎年6,000~7,000バルダオ(3,000~3,500テール)の利益があがる。(ARSI)</p> <p>12月 明が銀を支給して、朝鮮に軍器を買わせた。(宣祖実録)</p> <p>この年、倭寇を警戒し、漳州を中心に海外貿易を禁止したため、密貿易が横行する。許孚遠、海禁緩和を施行。(天下郡国利病書)</p> <p>この年前後、日本との交易では銀・金・銅銭を使う。銀の対銅銭比価は銀1両対銅銭333文。米1石=銀1両、無地の絹1疋=銀2両、絲1斤=銀2両5銭。(日本考)*</p> <p>この年前後、日本各地の商人、唐船を使って海外貿易に出る。出港する前に本銀の1割を納税。(日本考)*</p> <p>この年前後、日本では明国生糸の価格は普通1斤につき2両5銭。5両に上ることもある。(三朝平壤録)*</p>
1594年㊤(万暦22年) ㊤(宣祖27年)	<p>2月8日 ゴメスの書簡によれば、3,000テール余りの利益の見込みあり。1テール=約1.167クルザド。(ARSI)</p> <p>2月 朝鮮の咸鏡道では当時銀が枯渇しており、鉛しかとれなかったが、鉛も銃筒に利用できるので、採掘が論議される。(宣祖実録)*</p> <p>3月30日 朝鮮において、戸曹が今後銀を貨幣として用い、収税も銀で行うことを啓する。(宣祖実録)*</p> <p>5月25日 朝鮮において、端川で採掘された銀を納入すれば、その量に応じて、免役・免賤とする。(王朝実録)*</p> <p>9月20日 朝鮮において、端川の銀鉱が枯渇しつつある。(宣祖実録)</p> <p>9月 明国各地の鉱脈を実地調査させる。(続文献通考)</p> <p>10月17日 長崎発パシオの総会長宛て書簡によれば、日本イエズス会の貿易からは通常4,000スクードの利益があがる。(ARSI)</p> <p>10月 朝鮮において、銀500余両と鉛600斤と鉛玉20,100個を採掘した端川の採銀官、金継先が叙職される。(宣祖実録)</p> <p>11月9日 マカオ発のヴァリニャーノの書簡によれば、1テール=1.5バルダオ。(ARSI)</p> <p>明国福建各地の民、密かに日本へ貿易に赴き、ほとんど日本の銀だけを持ち帰る。(敬和堂集)</p> <p>ポルトガル人、毎年マカオから長崎に生糸、禁制品の烏鉛等の品を輸入して販売する。盛んに烏鉛で弾丸を造る。(敬和堂集)</p> <p>この年、福建の海澄で徴収された貿易税は1576年の1万両から2万9千両あまりに増える。(東西洋考・天下郡国利病書)</p>
1595年㊤(万暦23年) ㊤(宣祖28年)	<p>9月 朝鮮において明の軍人胡大受が平昌郡付近の地で銀を採掘する。(宣祖実録)</p> <p>11月23日 ヴァリニャーノの書簡によれば、イエズス会のシナ貿易の利益は3,000ドゥカドが最高である。1テール=1.5ドゥカド。(ARSI)</p> <p>11月 朝鮮において、市上での取引に銀が広く使われている。(宣祖実録)*</p>

西 曆 (年号 : 日本)	内 容
1595年(文禄4年)	<p>5月24日 <佐渡金相川銀山>鶴子銀山本口は、石州忠左衛門・同弟忠四郎・石田忠兵衛(越前出身)の3人によって稼ぎ始められたと伝えられる。この時、坑道掘りが導入されたという。(佐渡故実略記)*</p> <p>高野山過去帳に3月14日「柝畑 中野善右衛門」、3月28日「柝畑 新次郎」、9月8日「柝畑 宗太郎」、9月18日「石金本谷 花や助左衛門為取次馬場市左衛門」、(月未詳)14日「柝畑 フキ屋ノまへ五郎左衛門」とあり。</p> <p>7月18日 妙本寺上に「□ □□雲忍禅定門也」の銘のある宝篋印塔あり。</p>
1596年(文禄5年) (慶長元年)	<p>7月21日 毛利輝元、給人から検地役人に贈られた礼銀676枚9匁5分を受取る。(山口・山田家文書)*</p> <p>7月27日 天文18年から5年分の上納残銀147枚31匁が林就長より毛利輝元へ上納される。(萩藩閥閥録)*</p> <p>7月28日 毛利領国検地による243,472石6斗8升7合6勺の御判発給の礼銀として、27貫45匁2輪が、検地役人から毛利氏へ贈られる。(山口・山田家文書)*</p> <p><越中亀谷銀山>亀谷銀山「かね山」に仰せ付けられる。この年以降、義兵衛・加兵衛の手で火箱山・涌上り平・笹平・千貫運上平の銀坑が開かれ盛山となった。(越中鉱山雑誌)</p> <p>高野山過去帳に5月16日「石金 吉右衛門」、9月6日「石金 三谷相吉右衛門ヨリ小左衛門為」とあり。</p> <p>9月20日 龍昌寺に「奉為飯真却詞□□□□菩提者也」の銘のある一石五輪塔あり。</p>
1592-1596年 (文禄年間)	<p><仙台領金山>文禄頃、玉山金山は盛山であったと伝える。(気仙郡竹駒村玉山金山来歴)</p> <p><佐渡相川金銀山>越前出身の忠兵衛という者が文禄年中佐渡へ渡り、西三川で採金を行った。後、鶴子に移り、慶長年中には相川銀山を見立てたという。(町人由緒書)</p>
1597年(慶長2年)	<p>7月1日 豊臣秀吉、備中・備後・出雲・石見・安芸・長門・周防7ヶ国の新銀山公用として、柳沢より当年分銀子1,000枚を受取る。(萩藩閥閥録)*</p> <p>7月6日 慶長初め、毛利輝元の家臣南湘軒、今井・宗岡・吉岡3人に対し銀山温泉津の事はこの3人に任せ支配するよう命じる。(吉岡家文書)</p> <p>7月 <佐渡相川金銀山>相川銀山を鶴子銀山の山師が稼ぎ始めたという。(佐渡年代記)*</p> <p>† 9月1日 毛利氏領国のうち、検地による御判発給の礼銀は1石当たり銀1分の換算で検地役人から毛利氏に納められる。(山田家文書)*</p> <p>† 9月1日 毛利輝元、検地の礼銀272枚17匁6分7輪6毛の受取りを検地役人に発給する。(山田家文書)*</p> <p>12月28日 豊臣秀吉、備中・備後・出雲・石見・安芸・長門・周防、7カ国の中国新かな山の当年分銀子2,000枚を受取る。(萩藩閥閥録)*</p> <p><生野銀山>この年の但馬銀山伊藤石見の扱分は、62,267枚であった。(伏見蔵納目録)</p> <p><伊豆瓜生野金山>瓜生野村金山の開発は、慶長2年に始められた。町家が3,500軒建ち並び、大久保長安によって駿府へ金銀100駄も運ばれたと伝えられる。その後、水没のために金の出方が衰えたため、土肥・縄地・毛倉野の金山へ移った金掘が多くあり、空き家がめだつようになった。(大城家文書)</p> <p>2月27日 妙本寺上に「(キリーク) 河誉伝円信士」の銘のある一石五輪塔、8月29日 「(キリーク) 秀誉妙藏信女」の銘のある一石五輪塔、10月22日 「□□誉道誓」の銘のある一石宝篋印塔、6月11日 龍昌寺に「空水信女 霊位」の銘のある一石五輪塔、8月 一石五輪塔、7月15日 「奉為飯真道繁禅定門」の銘のある一石五輪塔、9月 「奉為飯真潤叟長泉禅定門菩提者也」の銘のある組合せ宝篋印塔、11月6日 「奉為円寂嚴霜守闍知藏」の銘のある組合せ宝篋印塔、5月10日 石銀地区に「ア妙西信女」の銘のある一石宝篋印塔、6月21日 妙正寺に「妙円覚尼」の銘のある一石宝篋印塔、11月2日 龍源寺間歩上に「経 [] 禅定尼」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1595年㊦(万曆23年) ㊦(宣祖28年)	<p>11月 朝鮮の人が、明・朝国境に銀や人参をもたらして貿易を行っているので、明の地方官僚は、3か月で1,000両の銀を得る。12,000余匹の綿布は銀400～500両に相当する。壬辰倭乱以来、明は朝鮮に数万両の銀を贈っている。(宣祖実録)</p> <p>日本に金銀以下琥珀・水晶・硫黄・白珠・青玉・蘇木・胡椒・細絹・花布・螺鈿・刀等の産出物がある。(虔台倭纂)*</p> <p>日本には金銀などが産出するという。(皇明象胥録)*</p>
1596年㊦(万曆24年) ㊦(宣祖29年)	<p>1月4日 マカオ発日本司教マルティンスの国王宛て書簡によれば、1テール=2クルザド。(ARSI)</p> <p>5月11日 この年から1597年6月10日にマニラ港に入港した日本発の船舶は1隻。(Les Philippines et le Pacifique des Ibriques)</p> <p>10月 朝鮮の平安道ですでに銀が使用され、明の銀価は朝鮮に比べて高い。また、朝鮮国王が、端川の銀の対価として女真の馬を購入し、嶺南の軍士に支給することを命じる。(宣祖実録)</p> <p>11月26日 ヴァリニャーノの書簡によれば、1テール=2パルダオ弱。(ARSI)</p> <p>12月10日 ゴア発カブラルの総会長宛て書簡によれば、1テール=1クルザド。(ARSI)</p> <p>12月17日 ゴア発カブラルの総会長宛て書簡によれば、日本イエズス会貿易では毎年2,000テールの利益がでる。8,000テール=16,000パルダオ。リアル貨6,000クルザドが中国で6,000テールかそれ以上。(ARSI)</p> <p>明国、銀山が再開し、採掘は各地へ広がるが、翌年～万曆33年の間、300万両しか得られなかった。(明史・統文献通考)</p>
1592-1596年	
1597年㊦(万曆25年) ㊦(宣祖30年)	<p>2月 明国、山西の銀山、その他各地の調査報告に従って、金銀銅山を開かせるといふ。(統文献通考)</p> <p>7月4日 この年から1598年6月15日までにマニラ港に入港した日本発の船舶は2隻。(Les Philippines et le Pacifique des Ibriques)</p> <p>8月 朝鮮国王、奮戦した降倭に対して、堂上にすすめて、賞銀を与えることを命ずる。(宣祖実録)</p> <p>12月 朝鮮王朝、銀1万両を布にかえ、さらに穀物にかえられる地を議論する。(宣祖実録)</p> <p>明国、雲南の銀税額はこの頃から3万両あまりに増える。(滇繫)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1598年(慶長 3 年)	<p>5月13日 毛利輝元、温泉津銀山の運上銀上納を銀山役人に命じる。(吉岡家文書)*</p> <p>7月1日 銀山役人が、銀山大谷・下河原の屋掛錢徴収について指示する。(高橋家文書)*</p> <p>8月12日 毛利氏、朝廷に白銀100枚を上納。(御湯殿の上の日記)*</p> <p>8月 豊臣秀吉、毛利氏に対し宰相(毛利秀元)へは石見銀子山を除く毛利領を安堵する。(萩藩閥閥録)*</p> <p><安倍金山>中村式部少輔領駿河黄金山から豊臣氏へ納められた金は9枚、この中には富士郡麓金山の分も含まれていたと思われる。(伏見蔵納目録)</p> <p>高野山過去帳に6月11日「栃畑 服部利右衛門 施主安井与右衛門・重枝小右衛門」とあり。</p>
1599年(慶長 4 年)	<p>2月7日 毛利輝元、銀山温泉津の運上銀3万枚の上納を命じる。(吉岡家文書)*</p> <p>2月14日 <佐渡相川金銀山>近年、佐渡国に金山が創鑿されたのに応じ、加賀藩領内の百姓が渡海することを前田利家が禁じた。(加賀藩史料)</p> <p>4月2日 この年か、石見国内においては銀山とその周辺要衝につき、山吹の城の整備が肝要である旨、益田元祥より毛利家重臣榎本元吉へ書き送る。(毛利家文書)*</p> <p>高野山過去帳に3月6日「石金 宮崎市右衛門」、5月10日「出シ土 渡雅楽丞息女ノ為」、9月30日「栃畑 田中善右衛門」とあり。</p> <p>3月8日 妙正寺に「□妙珍靈位」の銘のある一石宝篋印塔、7月25日 妙本寺上に「□ 保元童子位」の銘のある一石五輪塔、12月5日 「□□浄円信士」の銘のある一石宝篋印塔、7月19日 龍昌寺に「奉為月桂妙照禪定尼」の銘のある組合せ宝篋印塔、12月20日 石銀地区に「ア妙寿信女靈位」の銘のある一石五輪塔あり。</p>
1597-1600年 (慶長元-5年)	
16世紀後半	<p><安芸三玉銀山>三吉氏改易の頃、吉舎近辺に銀山出来、三次両町(十日市町・五日市町)の者が請山として稼いだ。十日町印判屋念西、井戸屋惣兵衛がその奉行となった。銀山はほどなく退転となった。(吉舎町史)</p> <p><萩藩領鉾山>美禰郡赤郷銀山領221石3斗2升1合・河原銀山領198石5斗5升5合・青景銀山領117石9升4合・阿武郡蔵目喜鉛山領367石6斗5升8合とある。(八箇国時代分限帳)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1598年㊤(万暦26年) ㊤(宣祖31年)	<p>1月18日 朝鮮において、明が銀を出して朝鮮の窮乏を救おうとしているが、明の食糧を運ぶべき船が、銀を朝鮮へ運んで、必要な物資を朝鮮で調達していることが問題になっている。(宣祖実録)</p> <p>1月 ヴァリニャーノによれば、生糸50ピコルから通常1,600ドゥカドの利益がでる。生糸は、中国でピコル当たり、約90ドゥカドで仕入れ、日本で140ドゥカドで売られるが、このうち10%は運賃に3%は税金に支払い、ピコル当たり約121ドゥカドの売上げになる。(ARSI・<i>Apologia de A.Valignano</i>)</p> <p>2月4日 朝鮮において、白糸1斤が銀1両にあたる。(宣祖実録)</p> <p>2月10日 朝鮮の端川銀山では年産約5千両で、他所もあわせると数万両の生産が可能であろう。(宣祖実録)</p> <p>2月 明の布政使梁祖齡が馬を購入するための銀を朝鮮国王に手渡す。(宣祖実録)</p> <p>2月 朝鮮において、1万数千両の銀は、青監布5万余匹にあたる。(宣祖実録)</p> <p>4月27日 明の太監の1人が、朝鮮の金銀を欲するが、明の武人がその不可をいう。(宣祖実録)</p> <p>4月 朝鮮において、近年、少額決済に銀を使用する。(宣祖実録)</p> <p>4月 朝鮮において、米一碗は銀四銀にのぼる。(宣祖実録)</p> <p>7月1日 1テールはマカオと日本で660レイス。スペインで1ドゥカドは434レイス。1クルザド=434レイスの換算率。1テール=約1.52ドゥカド。(ARSI)</p> <p>7月 朝鮮国王に対して、端川の銀を採掘して、軍資に当てることが建議される。(宣祖実録)</p> <p>8月 朝鮮において、兵曹のもっている銀70両を穀に換えることを請うが許されず。(宣祖実録)</p> <p>8月 朝鮮において、丁主事が、銀5両で豹皮・人参を買ったことで弾劾される。(宣祖実録)</p> <p>10月 A. ヴァリニャーノ、イエズス会の商業活動に対する弁明をおこなう。(ARSI・<i>Apologia de A.Valignano</i>)</p> <p>12月 朝鮮において、銀子数十両で、数十着分の3升布が買える。(宣祖実録)</p> <p>毎年ルソンに運んできた百万元スペイン銀貨、全部明国に流入する。(菲島史料彙編)</p> <p>この時、マニラから明国に輸入されたスペイン銀貨は毎年100万ペソ。(The Philippine Island)</p> <p>ヴァリニャーノによれば、1テール=1ドゥカド。(ARSI)</p>
1599年㊤(万暦27年) ㊤(宣祖32年)	<p>2月24日 朝鮮、邢軍門に銀5千両で、豊臣軍への懐柔を依頼するが、邢軍門は難色を示す。明皇帝は、7年間も朝鮮に屯拠している日本軍を、5千両の銀では退去させられないと返答した。(宣祖実録)*</p> <p>5月 朝鮮において、毎年銀3万2千両の税収が可能である。(宣祖実録)</p> <p>貿易でルソンに居住する泉州と漳州の民、数万人になる。スペイン人、華僑2万人を殺害。(天下郡国利病書)</p> <p>明国浙江省市舶司は主に日本朝貢使を接待するためのもので、1523年に閉鎖されたが、この年再開された。(明神宗実録)</p> <p>明国では、銀1錢=錢50文という比価で銅銭を銀に組合せて流通させている。(明神宗実録)</p> <p>この年にマニラ港に入港した日本発の船舶は10隻、ポルトガル人数名が、日本からの舟に乗船。(Les Philippines et le Pacifique des Ibriques)</p>
1597-1600年	マヌエル・ゴディーニョ・デ・エレディア、本州の中央部が銀の産出地域であると記す。(インド法典)*
16世紀後半	<p>この時、ポルトガル人、毎年生糸、禁制品の鉛等の明国商品を長崎に輸入する。(鄭成功収復台湾史料選編)</p> <p>各30万両銀を積む3隻のポルトガル船は日本-明国間の貿易で広州に入る。税司に納税し町で中国人と交易する。ポルトガル人は数十倍の利益が得られるので、マカオに金銭を多く持ってくる。取締ることができない。(粵剣編)</p>

西 暦 (年号 : 日本)	国 内	
16世紀後半	<p><萩藩領鉾山>慶長期の検地帳に、玖珂郡根笠錫山の鉾山代銀分3,566石5斗4升・美禰郡長登銅山同10,608石9斗9升・阿武郡蔵目喜鉛山同3,241石8斗9升。(周防長門三井但馬蔵田与三兵衛検見帳)</p> <p><甲斐御座石金山>中巨摩郡御座石金山は、西八代郡古関村川尻、東山梨郡黄金沢(現塩山市)などには信玄時代に稼行したという伝承あり。(日本鉾山史の研究)</p> <p><豊後国金山>尾平鉾山(緒方町)と木浦鉾山(宇日町)はともに戦国期末から近世初期にかけて開発され、主に錫、鉛を産出した。この他、岡藩に轟鉾山(清川村・錫山)、日出藩に鶴成金山と馬上金山があった。(大分県史)</p> <p>高野山過去帳の記事は便宜ここに入れる。 永禄17年(永禄は12年まで)7月1日「銀山 加藤四郎右衛門」、享禄7年(享禄は4年まで)8月15日「石金新左衛門女子孫佐渡ニ有之」、天正21年(天正は19年まで)(月未詳)15日「昆布山 善左衛門」とあり。</p> <p>年未詳 高野山過去帳に「栃畑 新左衛門」、(癸卯年)3月10日「栃畑 野平宗兵衛」、「栃畑 スワ左近殿」、(月未詳)15日「栃畑 京見世六郎左衛門」、(月未詳)15日「栃畑 泉屋太郎右衛門」、7月19日「栃畑 心蔵庵 取次 吉浦太郎左衛門」、6月29日(月未詳)15日「栃畑 田辺対馬守」、(月未詳)15日「フキや与三左衛門 生国備中」、(月未詳)21日「栃畑京町 右手や玄意」、(月未詳)15日「栃畑京町(ミ世) 泉屋甚三郎」、「栃畑 竹井与吉 登山之時建之」、「栃畑 為母 三宅惣左衛門 登山建之」、2月14日「栃畑 宝蔵寺タメニ宝珠寺寄算立之」、3月19日「昆布山 長楽寺住僧玄清房」、「栃畑谷 浅原権左衛門登山之時建之」、8月「銀山 赤木佐渡守」、(月未詳)15日「銀山 大炊右京進」、4月11日「銀山 吉田宗太郎」、(月未詳)15日「銀山 荻原小三郎」、(月未詳)15日「銀山 山下源左衛門」、9月22日「銀山 三戸若狭守」、2月27日「銀山 ハンシャウ藤五郎」、(月未詳)15日「銀山 吉田彦六」、6月19日「銀山 森田帯刀」、(月未詳)15日「銀山 嶋根七郎左衛門」、(月未詳)15日「出シ土 藤(?)寿」、9月26日「出シ土 弥五右衛門」、4月29日「坂根谷 山神 智清」、(月未詳)21日「昆布山 三宅壱岐守」、(月未詳)15日「銀山 赤木佐渡守」とあり。</p> <p>年未詳 3月8日 妙本寺上に一石五輪塔あり。</p>	
16世紀末		
1600年(慶長5年)	<p>7月5日 毛利輝元、当年分23,000枚を銀山役人3名が上納するよう指示する。(吉岡家文書)*</p> <p>7月6日 毛利家奉行入佐世石見守元嘉、銀山役人に銀山温泉津支配についての定を指示する。(吉岡家文書)*</p> <p>9月25日 徳川家康、石見国を掌中に収め、石見銀山周辺の7ヶ村に禁制を発する。(吉岡家文書)*</p> <p>10月 大久保長安、畑迫付近巡見、笹ヶ谷ほか数ヶ所の鉾業を堀与三右衛門に許すという。(堀藤十郎事歴)*</p> <p>†11月3日 厳島社家内屋敷の地銭が銀で納められる(銀子1匁=なんきん銭850文)。(厳島野坂文書)</p> <p>11月18日 銀山役人、大久保長安らに当年分諸役の上納分及び未進分を報告する。(吉岡家文書)*</p> <p>11月 石見へ下向する大久保長安と彦坂小刑部を、温泉津銀山の者が尾道に出迎える。(萩藩閩閩録)</p> <p>大久保長安、三枝源蔵、彦坂小刑部が石見へ下向する。(石見銀山旧記)</p> <p>大久保長安、山神社社領として高50石を寄進する。(山中家文書)</p> <p><佐渡相川金銀山>羽田村より金山町を独立させた。(佐渡相川志)</p>	

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
16世紀後半	<p>ポルトガル人が明国商品を購入するため本国からもマカオに銀を運んできて、船1隻につき1万～数万両を積む。(涇林統記)</p> <p>ルソン等へ行く明国商人は、商品をそこへ輸入し、銀を持ち帰って金持ちになる。(李文節公文集・広東新語・東西洋考・徐中丞奏疏・馮養虛集・小方壺輿地叢鈔)</p> <p>明国の海商らがシルク、磁器のほか、砂糖・果物のような生活品までルソンへ輸出し、銀を満載して帰航するため、大量のメキシコ銀は明国に流入し続ける。(李文節公文集)</p> <p>明国の海外貿易の課税規定には、ルソンから戻る明国の商船が積み帰ったのは銀以外ほとんど他の貨物がないため、1船につき銀150両という「加征」が徴収される。(天下郡国利病書・東西洋考)</p> <p>福建の人はルソン貿易で積み帰ったメキシコ銀貨をよく使う。(天下郡国利病書)</p> <p>ルソンは、明国生糸貿易の中継地となり、生糸の一部はここから日本へ転売される。(徐文定公集)</p> <p>明国生糸100斤につき銀100両、ルソンではその倍の価格で売る。(春明夢余録)</p> <p>スペイン人、銀をルソンに運んできてシルク等の明国商品と交易する。(海国間見録・徐中丞奏疏・天下郡国利病書)</p> <p>貿易でルソンへ行く明国人が多かったのは、スペイン銀銭があるからである。(徐中丞奏疏・閩書・閩小記)</p> <p>1担につき銀100両の明国の湖絲はルソンへ運ばれると、その値は倍になり、日本人、スペイン人の競争と市場の供給により、1担につき銀500両に暴騰することがある。(徐光啓集)</p> <p>外国貿易で明国シルク等の商品と外国の金銀と交易される。(馮養虛集)</p> <p>明国、外国銀の大量の輸入により、銀は主要な交換手段となる。(五雜俎)</p> <p>この時、明国の金銀比価は1：6前後。(明穆宗実録・日知録・張心齊奏議)</p> <p>西洋諸国が銀をマニラに運んで通商するため、明国福建人は多くマニラへ貿易に赴く。(閩書)</p> <p>スペイン国王の名の下に、イエズス会のプロクラドール(財務担当パードレ)の職務として、貿易に携わるイエズス会士を取締まることが命じられる。(ARSI)*</p>
16世紀末	<p>この頃、明国の金銀の比価は、1570年代の金1：銀6から1：7～8になる。(日知録・履園叢話・万曆大明会典)</p> <p>イエズス会士(不明)、日本は金銀の豊富な国であり、金と銀の交換比率は金1：銀3であると報告する。(ARSI)*</p>
1600年(宣祖33年)	<p>3月 朝鮮において、9万両の銀は、兵士3千人の10ヶ月分に当たり、兵士1人1ヶ月当たりの給与・食費は3両9錢である。朝鮮国内に留まる3千人の明国兵士たちへの1ヶ月の支出は、紬3千疋である。(宣祖実録)</p> <p>4月 朝鮮において、端川の銀採掘は禁止されている。(宣祖実録)</p> <p>7月 朝鮮において、端川の銀採掘はただ私採のみを禁止すればよいと建議される。(宣祖実録)</p> <p>10月 朝鮮において、中江開市の停止を論議する。(宣祖実録)</p> <p>スペイン人が150万の銀貨・銀塊を毎年フィリピンに搬出し、銀は金1に対して4の割合で交換するが、金はペルーやチリにも充分あり、彼らの帰航の際には明国商品の利益が1,000%に達するので、明国人との交易を好むと記述あり。(オリバー・フェン・ノールドの航海記)</p> <p>この年にマニラ港に入港した日本発の船舶は5隻、ポルトガル人数名が日本から乗船。(Les Philippines et le Pacifique des Ibriques)</p> <p>この年から1627年の日本における金銀の純分比価はおおよそ金1対銀12～13。(金銀貿易史の研究)</p>

西 曆 (年号：日本)	内 容
1600年(慶長 5 年)	<p><佐渡相川金銀山>この年の初冬、近江国高島郡の出身で北国の海運に携わった商人、田中清六が徳川家康の代官として佐渡に渡った。(宗親書上)</p> <p><佐渡相川金銀山>石州出身の三嶋惣左衛門、大久保長安に召し抱えられる。当初、伊豆国銀山の総支配役を務めていたが、金銀山見立てのため、佐渡へ派遣される。(諸役人先祖書)</p> <p>3月16日 石銀地区に「為 □誉道□」の銘のある一石宝篋印塔、6月20日 龍源寺間歩上に「経 宗慶靈位」の銘のある一石宝篋印塔、(月未詳) 1日 一石五輪塔、5月8日 妙本寺上に「□妙心禪定尼靈位」の銘のある一石五輪塔、5月20日 「(キリーク) 住誉妙珍女靈位」の銘のある一石五輪塔、8月5日 「□ 道念信士位」の銘のある一石五輪塔、3月11日 龍昌寺に「心寿久童女」の銘のある一石五輪塔、7月11日 「□為□真妙悟禪定尼」の銘のある一石五輪塔、(月未詳) 10日 妙正寺に「賢達」の銘のある一石五輪塔あり。</p>
1601年(慶長 6 年)	<p>6月23日 吉岡隼人に、伏見から近江君ヶ畑まで伝馬2疋の朱印状が与えられた。(吉岡家文書)*</p> <p>8月28日 大久保十兵衛は彦坂小刑部の後を継いで二代目奉行となるという。(石見国名跡考)</p> <p>† 8月 大坂相場、銀32匁につき米3石4斗。(三貨図彙)</p> <p>12月3日 <伊豆金山>江戸滞在中の吉岡隼人に対して、江戸から伊豆湯ヶ島までの6疋の伝馬の手形が与えられた。吉岡は伊豆の金銀山の調査のために赴いた。(吉岡家文書)*</p> <p>大久保長安、諸国金銀山奉行並びに中国御目付を仰せ付けられ、石見国にて2万石を拝領する、という。(山中家文書)</p> <p><甲斐国金山>慶長6年、大久保長安によって行われた検地で、甲斐4郡の金山押掘役小判3両2分2朱とある。(日本鉱山史の研究)</p> <p><佐渡相川金銀山>この年、大久保長安、伊豆・石見・佐渡支配を命じられたとされる。(佐渡年代記)*</p> <p>† 新井白石の推計によれば、1601~1708年の間、日本から輸出された銀は総額1,122,687貫余り。(折たく柴の記)</p> <p>高野山過去帳に2月15日「昆布山 コガヤ与左衛門」、5月2日「枳畑 二宮佐左衛門」、「石金 三谷相 賀戸治兵衛」とあり。</p> <p>9月5日 龍昌寺に「為月桂裕心禪定尼菩提也」の銘のある宝篋印塔、11月9日 一石五輪塔、11月22日 「為明岩源□禪定門」の銘のある宝篋印塔、(月日未詳) 龍源寺間歩上に「靈元慶□□ (欠損)」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1602年(慶長 7 年)	<p>2月23日 吉岡隼人・宗岡弥右衛門の両名に対して、伏見から桑名まで伝馬2疋の手印状が与えられる。(石見銀山文書)*</p> <p>4月19日 <甲斐中山金山>中山金山衆が稼行していた駿河側の掘間16口について訴訟あり。16口の掘間の稼行は中山衆へ取り戻されたが、それ以外に掘間については、中山衆は一切干渉しないこととなった。(竹川家文書)</p> <p>6月3日 吉岡隼人、堺・大坂・銀山商人よりの上灰吹・ちぢみ銀の借用状を「天満めうくん」に預ける旨を書き置く。(吉岡家文書)*</p> <p>9月24日 <津茂銀山>「津茂銀山金掘屋鋪帳」が作成される。(大石家文書)*</p> <p>10月13日 大久保長安、吉岡隼人に運上銀の増長、試し吹のことなどを指示する。(吉岡家文書)*</p> <p>10月26日 大久保長安、地役人3名に山稼、大森町普請など17ヶ条及び吹屋に必要な道具の名称・数量を指示する。(吉岡家文書)*</p> <p>石見銀山の産出、白銀25,000斤=4,000貫とも5,000貫ともいう。(当代記)</p> <p><佐渡相川金銀山>公領となってから次第に金銀山が繁盛するようになり、この年の納銀は10,000貫に及んだ。石州銀山も公領となって後繁盛し、この年の上納銀4,000貫であった。(佐渡年代記)</p> <p>高野山過去帳に3月晦日「昆布山 ホリ善兵衛」、4月1日「石金 カスガ甚左衛門平兵衛」、4月15日「石金 曾根賀藤右衛門」とあり。</p> <p>8月20日 妙正寺に「妙珍尼」の銘のある一石五輪塔、(月日未詳) 龍昌寺に一石五輪塔、(月日未詳) 石銀地区に「□清誉妙休善女」の銘のある宝篋印塔基礎あり。</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1600年 [㊦] (宣祖33年)	
1601年 [㊦] (万曆29年) [㊦] (宣祖34年)	<p>2月7日 明の兵部尚書が朝鮮人と倭人が釜山で貿易していると指摘。(宣祖実録)</p> <p>2月 朝鮮は明に対して、銀を収める代わりに兵士3,000人の駐留を請うが認められず。(宣祖実録)</p> <p>7月30日 朝鮮において、尚方内局貿易の額を減らすことを啓し、芙蓉香のみ減らすことを許される。(宣祖実録)</p> <p>10月 執義李成祿が、搜銀御史として義州に赴任するも、任を果せず、明の役人が率先して義州で密貿易に従事していることを報告している。(宣祖実録)</p> <p>11月27日 朝鮮において、禁銀がきびしいにもかかわらず、明の援軍を受入れて以来、市上で銀を使っているとしている。(宣祖実録)</p> <p>この年にマニラ港に入港した日本発の船舶は4隻、ポルトガル人数名が、日本からの船に乗る。(Les Philippines et le Pacifique des Ibriques)</p>
1602年 [㊦] (万曆30年) [㊦] (宣祖35年)	<p>2月14日 朝鮮において、銀の産出の方法がないので、朝鮮王府内での宴席の銀器は鍍銀器を用いることが建議される。(宣祖実録)</p> <p>2月 朝鮮において、頭目庁が銀器を作るために確保した銀は234両である。(宣祖実録)</p> <p>この年にマニラ港に入港した日本発の船舶は3隻、ポルトガル人数名が日本からの船に乗る。(Les Philippines et le Pacifique des Ibriques)</p> <p>この時、明国広東市舶司が得た貿易輸入税は毎年銀4万両。(広東通志)</p> <p>広東の人はルソン貿易で銀を広東に持ち帰る。それは広東市舶司の貿易税収のかなりの部分を占めている。(広東新語)</p> <p>フィリピンへはメキシコ・ペルーから毎年200万ペソの銀が送られ、それらはみな明国人の所有に帰す。(ARSI)</p>

西 暦 (年号：日本)	国 内
1603年(慶長8年)	<p>1月 山師安原伝兵衛、1ヶ年運上銀3,600貫を差上げた功績により、將軍家康に御目見得を許され、同3日「備中」の称号と同5日御羽織、御扇子を拝領する。(安原伝兵衛言上状)*</p> <p>安原伝兵衛、清水寺の託宣により釜屋間歩を開くという。(清水寺文書)*</p> <p>春に大火があり、大横相から石銀米かみ岩まで三千軒が焼失。山神が類焼し大久保長安が再建するという。(本城家本石見銀山旧記)*</p> <p><佐渡相川金銀山>大久保長安、目代として大久保山城・宗岡佐渡・小宮山式部を佐渡に遣わす。(佐渡年代記)*</p> <p><佐渡相川金銀山>吉岡出雲が石州から佐渡にわたり、銀鏈を売り切った。(吉岡家文書)*</p> <p><佐渡相川金銀山>佐渡国留守居として石見出身の家老吉岡出雲、宗岡佐渡が御仕置を任せられるという。(佐渡年代記抜書)</p> <p>高野山過去帳に6月1日「栃畑 賀戸浄円取次施主喜嶋弥三右衛門」、(月未詳)21日「栃畑 賀戸浄円ヨリ」とあり。</p> <p>3月3日 石銀地区に「□□信士靈位」の銘のある一石五輪塔、6月27日 龍昌寺に「宗覚上座」の銘のある一石五輪塔、7月 「幻林童 []」の銘のある一石五輪塔、8月9日 「(奉) (為) 華室妙栄禪定尼也」の銘のある一石五輪塔あり。</p>
1604年(慶長9年)	<p>2月24日 吉岡隼人等地役人、銀山吹城の普請につき、1,000石につき3人の人足を割当て、鍬・鎌などの道具の持参を命じる。(高橋家文書)*</p> <p>4月10日 <佐渡相川金銀山>大久保長安、佐渡国松ヶ崎に着岸後、相川へ移り、銀山地方のことを沙汰する。この時、吉岡出雲・横地所左衛門らが同行する。(佐渡年代記)*</p> <p>4月13日 この年か、佐渡に逗留中の大久保長安は石見の吉岡右近に対し、手子頭の佐渡への招請など5ヶ条を命じる。(吉岡家文書)*</p> <p>5月14日 <佐渡相川金銀山>相川の山師京新五郎が、大気絶間歩を5日間34貫目の運上で落札したが、このときの請書には「右の日限の内にも御運上増し申す人御座候わば御渡しなさるべく候」とある。(相川郷土博物館乙種文書)</p> <p>5月 <佐渡相川金銀山>大工町に陣屋お抱えの金掘大工を住ませ、陣屋の経費で水貫を掘らせて水没した間歩の復活をはかる、生産のための資材の公給を実施するなど、金銀山における生産を直接統制する策が、大久保長安によって施された。(佐渡年代記)</p> <p>† 7月5日 米・銀の換算率あり。吉川氏、雲州・隠州新国主の堀尾氏へ年貢米10,058石8斗6升を銀子71貫849匁で返納。(吉川家文書)</p> <p>8月10日 <佐渡相川金銀山>伊豆・石見より佐渡銀山へ銀山巧者の者が呼び寄せられ、山師として銀山を預けられる者36名。(佐渡風土記)*</p> <p>9月25日 大久保長安、石見の吉岡右近ら地役人に、「分鍵」を五ヶ所の吹屋に渡す事など銀山支配に関する22ヶ条を伝える。(吉岡家文書)*</p> <p>9月25日 大久保長安、地役人に、浜田の炉粕を銀精錬に用いることなど5ヶ条を指示する。(吉岡家文書)*</p> <p><佐渡相川金銀山>佐渡の諸間歩が繁盛したので、味方但馬、原淡路、西山丹波などの有力な山師が家康、秀忠に引見を許されたと伝えられる。(佐渡年代記)</p> <p><佐渡相川金銀山>この頃、相川山に御直山が36ヶ所あり。その山師の多くは伊豆・石見から来たとされる。(佐渡年代記)</p> <p><佐渡相川金銀山>佐々木彦兵衛、大久保長安に伴って石州より佐渡へ来て銀山の役人となる。(諸役人先祖書・舟崎文庫)</p> <p>高野山過去帳に4月5日「栃畑 中野彦右衛門」とあり。</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1603年㊦(宣祖36年)	<p>1月 朝鮮の銀が中国にもたらされていることが、明で問題化していると報告する。(宣祖実録)</p> <p>2月8日 朝鮮において、この時点で戸曹が貯蔵している端川から採掘された銀の量は300余両である。(宣祖実録)</p> <p>3月 朝鮮国王が、中江が開市されたので、銀で収税するように、平安道觀察使や収税官に命ずる。(宣祖実録)</p> <p>5月 朝鮮において銀鋳の採掘は再開すべきではないとし、鉄銭の使用が論議される。(宣祖実録)</p> <p>10月8日 ヴァリニャーノによれば、通常9,000ドゥカドが年間の貿易資金。テールは1ドゥカドに相当。1テール=1.25ドゥカド。1ドゥカド=1.333…パルダオ。(ARSI)</p> <p>11月15日 ヴァリニャーノによれば、日本航海によって、イエズス会のために、25,000~26,000シェラフィンの利益があがる。それは、18,000パルダオにあたる。1テールは1ドゥカド強の比率。(ARSI)</p> <p>スペイン人ソテロは家康に採掘精錬した銀の2分の1を鋳山師に与え、残り2分の1を将軍とスペイン王で折半することを提案。(ドン・ロドリゴ日本見聞録)</p> <p>徳川家康はイエズス会に銀3,500貫を寄付。教会に5万貫を提供。(Relação Anual de Fernão Guerreiro)</p> <p>徳川家康が石見銀山を掌中に収める。(フェルナン・ゲレイロの年次報告)*</p> <p>この年にマニラ港に入港した日本発の船舶は1隻。(Les Philippines et le Pacifique des Ibzriques)</p>
1604年㊦(万曆32年)	<p>明国漳州の人、ルソンで、オランダ人との貿易により外国銀を入手する。(徐中丞奏疏)</p> <p>貿易でルソンにいる明国福建の商人は多数。(天下郡国利病書)</p> <p>宣教師フェルナン・ゲレイロは、徳川家康の強大さは毛利家領地の7つの銀山を取り上げたからだと評価している。(フェルナン・ゲレイロの年次報告)</p> <p>この年にマニラ港に入港した日本発の船舶は6隻。(Les Philippines et le Pacifique des Ibzriques)</p>

西 暦 (年号 : 日本)	国 内
1604年(慶長9年)	<p>3月16日 妙本寺上に「幻芳童子位」の銘のある一石五輪塔、6月2日 龍昌寺に「[] 虎童子」の銘のある一石五輪塔、8月4日 「秋珍童子」の銘のある一石五輪塔、(月日未詳)「道秋禪門」の銘のある一石五輪塔あり。</p>
1605年(慶長10年)	<p>3月17日 安原伝兵衛、自伝書で銀山の繁栄ぶりを記す。(石見国銀山文書)</p> <p>10月26日 大久保長安、銀山・温泉津に地銭の永代赦免の制札を発する。(多田家文書)*</p> <p><佐渡相川金銀山>大久保長安、相川に大山祇神社を造営し、安岡長門を石見より呼び寄せ、その社人とする。(佐渡年代記)*</p> <p><佐渡相川金銀山>宗岡佐渡が佐渡銀山山方役を勤めるといふ。(撮要佐渡年代記)</p> <p><白根金山>白根金山山先青山家の由緒によれば、初代庄左衛門は天正9年越中の生まれ、慶長9年前後に奥州へ渡っていることから、庄左衛門によって白根金山が開坑されたのは慶長10年前後と考えられる。(鹿角郡郷土史料)</p> <p>高野山過去帳に2月15日「栃畑京町 宗純」、8月14日「栃畑 出土後ロ ウタノ丞」、(月未詳)「昆布山 今井宗玄」とあり。</p> <p>1月16日 龍源寺間歩上に「経法忍霊」の銘のある一石五輪塔、4月23日 妙本寺上に「地□春禪尼靈位」の銘のある一石五輪塔、11月10日 「花幻童女」の銘のある一石五輪塔、5月28日 龍昌寺に「[] 幻然童子」の銘のある一石五輪塔、8月19日 「為婦真秋月禪定尼」の銘のある宝篋印塔、11月25日 妙正寺に「茲父□宗 []」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1606年(慶長11年)	<p>4月25日 <佐渡相川金銀山>相川の地役人三嶋惣左衛門(慶長5年頃伊豆銀山において50俵取り)が、佐渡より伊豆銀山へ遣わされる。(佐州役人分限由緒書)</p> <p>7月23日 幕府、下総国佐倉より東において「しかみ銭」を使うよう命ず。但し、われ銭・かけ銭・新鏝銭については選ぶことを認める。(徳川禁令考)</p> <p>† 8月 大坂相場、銀30匁につき米1石5斗。(三貨図彙)</p> <p>11月 地役人、銀掘彦兵衛の運上銀増長を賞す。(吉岡家文書)*</p> <p><院内銀山>院内銀山が発見され、村山宗兵衛ら4人の者に山先証文が与えられる。(院内銀山記)*</p> <p><伊豆金山>伊豆国金山より銀を多く産出したと伝える。この頃、京中に高札を立て伊豆国金山の金掘を募集する。(当代記)</p> <p><佐渡相川金銀山>石見の成瀬六左衛門、佐渡で地役人となる。(舟崎文庫)</p> <p>高野山過去帳に5月23日「栃畑京町 森田次郎左衛門」とあり。</p> <p>4月 龍昌寺に「奉為婦真幻玉童女」の銘のある一石五輪塔、8月7日 「[] 禪定門」の銘のある一石五輪塔、(月日未詳)「為婦真 []」の銘のある組合せ宝篋印塔、5月22日 石銀地区に「□□□禪定尼」の銘のある一石五輪塔あり。</p>
1607年(慶長12年)	<p>3月6日 大久保長安、地役人に「水かねなかし」(水銀製鍊)の見回りを指示する。(長野家文書)*</p> <p>6月9日 この年か、大久保長安、吉岡右近に銀山支配についての6ヶ条を指示。また銀山・宅野の繁盛を喜ぶ。(吉岡家文書)*</p> <p>7月17日 大久保長安、地役人に諸口屋の見回りなど7ヶ条を指示する。(長野家文書)*</p> <p>9月 石州銀山下河原之内村上次右衛門尉が巖島廻廊に一間分寄進する。(大願寺文書)</p> <p>岩下惣大夫から大久保長安家臣戸田藤左衛門に、銀山活況及び尾道への運上銀到着の報告あり。(戸田藤左衛門文書)*</p> <p><安倍金山>慶長12~13年頃、幕府は安倍金山の水抜普請を海野弥兵衛に命じ、水抜間歩1ヶ所に米100俵、8ヶ所800俵を資金としてひとまず交付した。(海野家文書)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1604年㊦(万曆32年)	
1605年㊦(万曆33年)	<p>3月10日 長崎発メスキータの総会長宛て書簡によれば、イエズス会には25,000ドゥカド以上の利益がある。1テール=1ドゥカド強。(ARSI)</p> <p>7月 明国貴州、戸部の上奏を受け、銅銭を鑄造し、銭の対銀比価は銭100文対銀1銭にする。(続文献通考)</p> <p>12月 万曆25年以降、明国各地の鉱山が上納した税銀は延べ3百万両に上ったが、鉱脈の状況は採算割れに陥るので、各鉱山閉鎖。(続文献通考)</p> <p>この年にマニラ港に入港した日本発の船舶は3隻。(Les Philippines et le Pacifique des Ibzriques)</p>
1606年㊦(万曆34年)	<p>11月4日 マカオ発カルヴァーリョの総会長宛て書簡によれば、1テール=1クルザド強。(ARSI)</p> <p>この年にマニラ港に入港した日本発の船舶は3隻。(Les Philippines et le Pacifique des Ibzriques)</p> <p>この年、明国の銀鉱山は閉鎖される。(天下郡国利病書)</p> <p>この年(1606年)から1849年まで、ポルトガル人、毎年明朝に2万両あまりの貿易税を納める。(天下郡国利病書)</p> <p>毎年、明国商船がルソンへ輸出した明国商品の貿易総額は80万両。商船のほとんどは銀を積み帰る。(天下郡国利病書)</p>
1607年	<p>この年にマニラ港に入港した日本発の船舶は3隻。(Les Philippines et le Pacifique des Ibzriques)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1607年(慶長12年)	<p><佐渡相川金銀山>この年、佐渡金銀山の産出量減少する。(当代記)</p> <p>† 徳川家康、貿易の糸代を丁銀で支払うことを命ず。それにより外国船の渡航が少なかった。唐船との糸貿易に支払う銀を唐人が吹直し銀を得て利益をあげていたからである。(当代記)</p> <p>† 錢138貫512文=銀子にして595匁6分1毛。(薩藩旧記)</p> <p>† 唐船と糸貿易に支払う銀を、唐人が銅と銀に吹分け、銀のみを取る。(当代記)*</p> <p>高野山過去帳に3月15日「銀山 年寄五郎太夫」とあり。</p> <p>2月 石銀地区に宝篋印塔、2月7日 妙本寺上に「地 妙春信女靈位」の銘のある一石宝篋印塔、2月18日 「□訶妙教靈位」の銘のある一石宝篋印塔、2月28日 龍昌寺に「為□□□(界)禪門」の銘のある宝篋印塔、9月 「奉為皈真丞妙慶久頓証□□□」の銘のある一石宝篋印塔、10月15日 「逆脩 光明遍照十方世界 [念仏衆生] 撰取不捨」の銘のある一石五輪塔あり。</p>
1608年(慶長13年)	<p>2月14日 <佐渡相川金銀山>相川陣屋から駿府へ宛てた書状の中に、床屋水銀ながし(アマルガム法)が製錬に採用され、水銀流しによる吹立の利得が大きい故に、かいふ口木立の上には水銀床屋が立ち並んだと伝える。(川上家文書)*</p> <p>2月 <白根金山>初めて黄金を鹿角郡に得たとある。(南部家譜)</p> <p>4月 <白根金山>南部に金が出るため、佐渡より金掘りが下る。(当代記)</p> <p>4月 <佐渡相川金銀山>この頃、佐渡金銀山では、間歩の水没が問題となり、採掘に支障が生じている。その対策を講じるべく、大久保長安が佐渡へ下った。(当代記)</p> <p>† 8月 大坂相場、銀300目につき米13石2斗。(三貨図彙)</p> <p>10月5日 <石見銀山・伊豆銀山>駿府から佐渡相川への書状によって、石見銀山、伊豆銀山の盛況が伝えられる。同年末頃の書状では、石見では石かねの惣太横相・勘右衛門横相が、伊豆では柿木間歩でとくに出鍵が多いと記されている。(川上家文書)*</p> <p>11月28日 温泉津屋敷安堵銀が徴収される。(多田家文書)*</p> <p>† 12月8日 幕府、錢取引の相場について定める。永楽1貫文に鏝錢4貫文とし、永楽錢の取扱いを禁じる。また、金子1両に鏝錢4貫文とす。(徳川禁令考)</p> <p>† 幕府、呂宋船に対する狼藉停止を下知す。(徳川禁令考)</p> <p>高野山過去帳に正月12日「栃畑 江口市右衛門」、9月10日「栃畑 エ田市右衛門」、11月23日「栃畑 賀戸浄円ヤシキノヲサイ立之」とあり。</p> <p>3月2日 龍源寺間歩上に「経 妙讚靈」の銘のある一石五輪塔あり。</p>
1609年(慶長14年)	<p>† 2月 伊勢内宮作業料、大判1枚銀516匁、1貫文18匁6分、19匁の比率で支払われる。(正遷宮請屋手形)</p> <p>† 5月3日 幕府、諸国において偽銀防止の為、灰吹・筋金の吹分けを厳禁する旨通達する。(上杉編年文書)</p> <p>† 7月19日 幕府、金銀錢相場を定める。金子1両に永楽錢1貫文、京錢4貫文。また、金子1両につき銀50目とす。(徳川禁令考)</p> <p>† 7月25日 幕府、阿蘭陀船の日本への入港を許可す。(徳川禁令考)</p> <p>永田大隅守、石州奉行として赴任するという。(石見国由来記)</p> <p>地役人吉岡隼人、佐渡在島6ヶ年で石見に帰国するという。(佐渡年代記)*</p> <p>徳川家康、長谷川藤弘に命じて書を占城国に遣わし、灰吹銀20貫目を送って伽羅を買わんとする。(異国日記)</p> <p>† 小判の公定価格、金1両銀50匁に制定。(近藤守重筆記)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1607年	
1608年 ㊦(光海君即位年)	<p>6月 朝鮮の司諫院が国内において銀の価値が騰貴し、1両が布10匹に近いと啓する。(光海君日記)</p> <p>ジャムには豊富な金があり、良質で価格は金1：銀3の割合である。(ウィリアム・キーリングの記録)</p>
1609年㊦(万曆37年)	<p>7月25日 国王よりマニラ総督宛ての書簡に、スペイン人による日本とマニラの交易品は、鑄造銀のほか、生絹・香辛料・鉄・銅などと記される。(インド文書館文書)*</p> <p>10月29日 スペイン人ビベロスは徳川家康から日本の銀山採鉱のために鉱山技師の斡旋を依頼される。(ドン・ロドリゴ日本見聞録)</p> <p>11月12日 イエズス会の記録によれば、1テール=1.081クルザド。1クルザド=約1.25バルダオ。1テール=約1.36バルダオ。(ARSI)</p> <p>ツツ・ロドリゲス、石見の国には、カナヤマと呼ばれる非常に有名な銀山があると記す。(日本教会史)*</p> <p>明国福建人林清、シルク等の商品を日本へ運んでいき、販売で得た銀を持って帰る。福建の密貿易者、日本貿易の船を造り、乗船する船商から「商銀」を徴収する。(越鐫)*</p> <p>オランダが平戸に商館を設立。</p>

西 暦 (年号: 日本)	国 内
1609年(慶長14年)	<p>†ポルトガル船のもたらす白糸に対する支払いを、灰吹銀から丁銀で決済する。(当代記)</p> <p>3月12日 妙本寺上に「地蓮營幸繁信士」の銘のある宝篋印塔、3月 妙正寺に「為浄運信士之也」の銘のある組合せ宝篋印塔、12月19日 「為 妙経霊尼」の銘のある一石五輪塔、4月2日 龍昌寺に「為常安禅定門」の銘のある宝篋印塔、5月 「妙清」の銘のある一石五輪塔、7月9日 「奉為妙□禅定尼」の銘のある宝篋印塔あり。</p>
1610年(慶長15年)	<p>†10月 大坂相場、銀168匁2分につき米9石5斗8升7合。(三貨図彙)</p> <p>三枝源蔵、石州奉行として赴任すという。(石見国由来記)</p> <p><足尾銅山>足尾の百姓、治部・内蔵が銅山を発見し、日光坐禅院へ報告。翌年、幕府の御用銅山に仰せ付けられた。(足尾銅山見分書記)</p> <p>†徳川家康の貿易推進政策により、長崎来航する明国商船は年々増える。(羅山文集)</p> <p>高野山過去帳に(年未詳)21日「栃畑 桜内」とあり。</p> <p>2月27日 石銀地区に「[] 貞禅尼」の銘のある宝篋印塔、3月1日 妙本寺上に「学譽方妙□明 (欠損)」の銘のある宝篋印塔、10月13日 妙正寺に「[] 浄 [] 信士」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1611年(慶長16年)	<p>3月 <安芸三玉銀山>銀山のために大峰山入りする常和寺の円光房へ初穂料を抛出することを、福島正則の奉行、大崎豊後と上月助右衛門が銀山の下代、年寄、労働者らに求めた。(吉舎町史・常和寺文書)</p> <p>6月 石州中請売買取引銀、均質の銀(の意味?)に吹き直し、極印を押すため灰吹屋改めが実施される。(多田家文書)</p> <p>増島左内、石州奉行として赴任すという。(石見国由来記)</p> <p><仙台領金山>雪沢金山の山師小野寺源太郎が、玉山で富鉱に切り当て、繁栄した。玉山の稼行は延宝8~9年頃まで続いたという。(気仙郡竹駒村玉山金山来歴)</p> <p>高野山過去帳に2月21日「石金三谷相 中村弥三右衛門」、3月29日「栃畑仏谷 蔵本宗右衛門」とあり。</p> <p>4月 妙本寺上に「帰道浄修禅定□」の銘のある一石五輪塔あり。</p>
1612年(慶長17年)	<p>2月28日・12月17日 <院内銀山>梅津政景の秋田院内銀山奉行在任中の慶長17年から19年の間に、院内銀山への隠し鉛売買者の中に石見国出身者多し。(梅津政景日記)*</p> <p>3月9日 <院内銀山>灰吹長右衛門、灰吹のための炭の搬入を許可される。(梅津政景日記)*</p> <p>†4月 大坂相場、銀92匁3分2厘につき米6石9升5合1勺。(三貨図彙)</p> <p>10月22日 大久保長安、竹村丹後守より石州銅の慶長15年分3万500斤、同16年分3万316斤の勘定報告を受ける。(戸田藤左衛門所蔵文書)*</p> <p>12月20日 南部利直白根山吹の金50枚を幕府に献上す。(徳川実記)</p> <p>高野山過去帳に2月25日「出シ土 波多野市兵衛」、5月15日「栃畑 宗久内」とあり。</p> <p>5月17日 龍昌寺に「為帰真浄円道本也」の銘のある一石宝篋印塔、10月22日 妙正寺に「日円覚尼」の銘のある一石宝篋印塔、(月日未詳)妙本寺上に「地麗月□□信士」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1613年(慶長18年)	<p>2月6日 大久保長安、地役人に銀山料内の久喜・大林銀山の稼業奨励など9ヶ条を指示する。(吉岡家文書)*</p> <p>2月29日 地役人の竹村丹後守道清、知行1,000石を下し置かれ、石州銀山奉行となる。(石見国由来記)</p> <p>3月16日 宗岡佐渡は慶長18年3月16日に死亡し、佐渡の沢根町一向宗専得寺に葬られる。(佐渡年代記)*</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1609年㊤(万暦37年)	この年マニラ港に入港した日本発の船舶は3隻と記述あり。 <i>(Les Philippines et le Pacifique des Ibriques)</i>
1610年㊤(万暦38年)	<p>4月27日 ポルトガルのインド副王、ポルトガル人に日本から不法に銀を持ち出すことを禁じる。(アジュエダ図書館文書)*</p> <p>2月20日 ポルトガル国王はイエズス会士やほかの宗教家が日本とはいかなる取引も行うことを禁じる。(モンソン文書)</p> <p>3月14日 イエズス会は、12,000～13,000ドゥカドで仕入れた100ピコルの生糸を日本にもたらし、相場が急騰したので、42,000～43,000ドゥカド以上の売り上げで、3万ドゥカド以上の利益を見込んだが、失った。(ARSI)</p> <p>日本には銀鉱脈・鉱山が多く、銀の製錬技術は未熟だが産出額が多い。良質の金も産出し貨幣を造っているとの記述あり。(ドン・ロドリゴ日本見聞録)</p> <p>明国商品の日本貿易の利益はルソン貿易の倍。(明神宗実録)</p> <p>スマトラ島のテエコーで金1マースは6レアル、6レアルは丁銀で6匁に換算されると記述あり。(イギリス人のモルッカ諸島における貿易事項の雑録)</p>
1611年㊤(万暦39年)	<p>6月10日 日本人はスペイン人に高利で銀を貸付ける。日本の鉱山採掘税は産出量の10分の7であると記す。(ヴィスカイノ金銀島探検記)*</p> <p>10月 明国銀の銭に対する市価は、銀1銭＝銭66文。(明神宗実録)</p>
1612年㊤(万暦40年)	<p>3月 明国の船がもたらす品は日本では高価であり、硝石・鉄・金等の値は皆明国の20倍。(明神宗実録)</p> <p>6月 明国趙子明、シルク等の商品の日本販売で利益を得る。(越鑑・明神宗実録)</p> <p>この年の統計によると、密貿易で日本へ行く福建人は数万人。(明神宗実録)</p> <p>この年から1615年まで、イエズス会は全部で93ピコル62カティの生糸を搭載、その半分以上は中国商人たちから掛けで買ったものであり、仕入れ価格は10,666テールで利益は、3,674テール。<i>(Apologia de Carvalho)</i></p> <p>生糸1ピコルに対し、180ドゥカド＝150テール。スペイン人・明国人・オランダ人は200ないし210テールで売ったと記録あり。(平戸オランダ商館の日記)</p> <p>ポルトガル船の生糸のパンカド価が1ピコル丁銀180テール、ソマ＝銀錠で150テール(100斤、1,500目)パンカド価格によらない生糸は1ピコル200～210テール。(2,000～2,100目)(平戸オランダ商館の日記)</p>
1613年㊤(万暦41年)	<p>2月11日 平戸オランダ商館長ブルーワーの報告書によれば、生糸のパンカドは、1ピコルにつき150テール即ちドゥカド。これは銀貨で180ドゥカドにあたる。カスチリア人、シナ人、オランダ人には200～210テールと記述あり。(大日本史料)</p> <p>2月13日 オランダ商館長ヘンドリック・ブルーワーの書簡ではドゥカドをテール(10匁)と同じとする。<i>(Cartas)</i></p>

西 暦 (年号：日本)	内 容
1613年(慶長18年)	<p>4月21日 大久保長安、藤堂高虎に、石見銀山が慶長17年より江戸の徳川秀忠領となり、運上は江戸へ納められ、鍔(鉾石)のまま残っている分は、大久保長安死亡後であれば竹村丹後守が勘定仕上げを行うことを伝える。(戸田藤左衛門所蔵文書)*</p> <p>4月25日 大久保長安死去。生前における金銀横領により、子息ら断罪され横領の金銀が召上げられる。(当代記)*</p> <p>4月25日 大久保長安死後、徳川家康が長安の私曲糾明を厳命し、長安の下代らを悉く諸大名に預け、次いで子息7人に切腹を命じる。(駿府記)*</p> <p><白根金山>白根金山の発見伝説のひとつである「姥が懐金山」の伝説によれば、左衛門が鹿角郡金山奉行であったのは慶長18年頃のこととされている。慶長年中には、北左衛門が鹿角郡の西道・楨山・白根の3金山の奉行であったと伝えられる。(祐清私記)</p> <p>高野山過去帳に8月16日「石金三谷相 片岡理右衛門」、10月3日「昆布山 椿がし栗田久左衛門」とあり。</p> <p>1月18日 妙本寺上に「地 西月師□信士靈」の銘のある一石宝篋印塔、8月2日 「経為妙儀靈」の銘のある一石五輪塔、8月9日 「経 為法三靈」の銘のある一石五輪塔、10月9日 「地□菅道主信士」の銘のある一石宝篋印塔、8月20日 龍昌寺に「為元月童女」の銘のある一石五輪塔、8月29日 「為飯真猷諒禪定(尼)」の銘のある宝篋印塔あり。</p>
1614年(慶長19年)	<p>† 2月19日 博多の中野三十郎が後興善町のしいかうに元銀500目を利率5割で投銀。持渡船は、15官船で交趾行き。(末次家文書)</p> <p>3月17日 竹村丹後守、地役に、たきのおく(滝の奥)岡部横相、昆布山谷の横相の加増を賞し、鍔売買について指示する。(長野家文書)*</p> <p>8月25日 竹村丹後守(慶長18~寛永12年)、万取引遣銀を9月1日より12月までに300目、温泉津の五郎右衛門に灰吹するよう申し付ける。(多田家文書)*</p> <p>12月28日 大坂の陣に際し、銀山の掘子450人が動員される。(石見国銀山文書)*</p> <p><阿仁銅山>水無の山先五郎左衛門・七兵衛・太郎兵衛によって七十枚間歩の開発が始められる。(梅津政景日記)</p> <p><白根金山>秋田藩で慶長19年春、入封以来の領内の金山運上を一括して112枚を駿府へ上納した。このうち1枚は杉沢金山の吹金(1枚=40匁)、1枚は桧内金山の砂金であったが、100枚は秋田湊で秤量し封包した白根産の金(南部金と称された)であった。(鹿角郡郷土史料)</p> <p>高野山過去帳に4月20日「石金本谷 九郎兵衛」、7月27日「銀山 桑村左小右衛門」、「昆布山 杉谷小左衛門父桑村左小左衛門」とあり。</p> <p>1月 妙本寺上に「地妙春童女靈位」の銘のある一石五輪塔、11月10日 「[] 円大徳覚位 (欠損)」の銘のある無縫塔あり。</p>
1596-1615年 (慶長年間)	<p>1月27日 竹村丹後守・永田大隅、宮田長左衛門に温泉津水上り銀が調い次第、早々に上納するよう命じる。(多田家文書)*</p> <p>10月16日 宮田長左衛門、温泉津老中及び蔵方衆に御役銀の未進分について徴収方を命じる。(多田家文書)*</p> <p>10月25日 宮田長左衛門、温泉津老中及び蔵方衆に御役銀の未進の理由について返答を命じる。(多田家文書)*</p> <p>12月27日 宮田長左衛門、温泉津老中に水上銀帳簿照合を指示する。(多田家文書)*</p> <p>沢小右衛門、温泉津老中に生越屋敷は中嶋惣右衛門、木下屋敷は高津屋五郎右衛門へそれぞれ安堵銀加増の上、それら屋敷を渡すよう指示する。(多田家文書)</p> <p>佐渡の留守居役岩下惣大夫・草間内記、駿府在住の長安家臣戸田藤左衛門に、石州銀山の運上銀300貫目の尾道到着を喜ぶ旨伝える。(川上家文書)</p> <p><越中松倉金山>箕浦浅右衛門の「運上書上帳」によれば、松倉金山における慶長年中の運上金の合計は800枚であった。(越中鉾山雑誌)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1613年㊦(万暦41年)	<p>6月 島津氏は琉球国の明国に対する進貢・接貢貿易時の入用銀である渡唐銀としては銀子10貫目、銅1万斤を給付する。(旧琉球藩評定所書類)</p> <p>7月2日 平戸において、1カティは英貨5シリング。1リアル・オブ・エイトは7マス、英貨3シリング6ペンスにあたるとの記述あり。(セーリス日本渡航記)</p> <p>7月13日 日本貨幣50両が62リアル半にあたるとの記述あり。(セーリス日本渡航記)</p> <p>10月5日 9,000スクード=9,000クルザド=9,000ドゥカドと記述あり。(ARSI)</p> <p>この年、明国漳州府が得た貿易輸入税は銀27,087両。(東西洋考)</p> <p>当時欧州では金1銀12.5の割合、日本では金1銀13.2であった。(セーリス日本渡航記)</p>
1614年㊦(万暦42年)	<p>3月9日 スンダ列島から明国へ行く薬種を積んだ船に乗り、チャンチョウで船長たちがその貿易を独占して売した後、ゴアのナウ船でそれを続け、薬種の代りに銀、珊瑚、エゴノキ液や布を積んで運んだという記述あり。(モンsoon文書)</p> <p>6月1日 日本市場の相場として、水銀100カティ=300~400マス、銅板125ポンド=90~100マス、小棒鉛100カティ=60~88マス、薄板鉛100ポンド=10~80マス、細棒の錫120ポンド=100~350マス、銅鉄100カティ=100~200マスとの記述あり。(セーリス日本渡航記)</p> <p>6月24日 最良の丁銀を暹羅貨に改鋳すると2割8分の損失、ファイブクエ(灰吹銀)と称する良質銀貨では3分かつ3分半の損失との記述あり。(慶元イギリス書翰)*</p> <p>6月24日 太泥(パタン)では、灰吹銀かスペインのリアル貨を貿易に用いるとの記述あり。(慶元イギリス書翰)</p> <p>6月24日 レアル貨は、江戸あるいは都で丁銀と両替すると8分の損失があるとの記述あり。(慶元イギリス書翰)*</p> <p>12月6日 シーアドベンチャー号、銀51貫余。(平戸イギリス商館日記)</p> <p>夷人(ポルトガル人)、明国の香山嶼(マカオ)に泊り、城を修築し、日本人を受け入れる。(万暦野獲編)</p> <p>ウィッカムが鉛600棹を家康に売る。家康は英人とオランダ人から鉛は全部引き取った。(平戸イギリス商館日記)</p> <p>日本ではリアル貨は20%損失するので、8リアル貨は4シリング6ペンスだが、3シリング6ペンスしか与えられず、丁銀の7匁で25%を損し、良質のリアル貨に対して5%だけ余計に許している。慶長の丁銀の純分比率は銀8銅2。(セーリス日本渡航記)</p>
1596-1615年	

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1596-1615年 (慶長年間)	<p><出羽延沢銀山> 泉州堺から来た十兵衛によって延沢銀山が開坑されたと伝う。(野辺沢銀山大盛記)</p> <p><半田銀山> 慶長年中、北半田村太左衛門・南半田村主計の2人によって、半田銀山が開坑されたと伝う。(奥州伊達郡半田銀山一件秘伝文書)</p> <p>2月8日 妙本寺上に「地 [] 信土」の銘のある宝篋印塔、(月日未詳)「地□營妙心靈位 (欠損)」の銘のある一石宝篋印塔、(月日未詳) 妙正寺に一石五輪塔、12月21日 龍源寺間歩上に「鏡營円」の銘のある一石五輪塔、(月日未詳) 石銀地区に「地道□□ (以下欠損)」の銘のある一石五輪塔あり。7月10日 妙本寺上に「 [] 香信土」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1615年(慶長20年) (元和元年)	<p>3月 <越中虎谷金山> この年3月頃、虎谷で金鉱脈が発見された。松倉金山の山師で仁兵衛というものが松倉の隣村鉢村領の中で三枚六両とよぶ場所で金鉱脈を発見した。その後、河原波・下田・亀谷などより大勢の山師が来住し、三枚六両の近くの三郎谷でも富鉱が発見された。(越中鉱山雑誌)</p> <p>安原備中、銀掘300人大阪の陣において天王寺堀水抜を行うという。(安原十郎兵衛言上書)*</p> <p><萩藩領鉱山> 萩藩より幕府目付に報告された、領内主要鉱山におけるこの年の収入高は以下の通り。長登銅山14貫405匁、青景銀山860匁、河原鉱山1貫720匁、赤小野村鉱山450匁、赤絵堂村鉱山540匁、蔵目喜鉛山8貫600匁、根笠村錫山6貫678匁4分。(毛利家文庫)</p> <p><佐渡相川金銀山> 慶長末～元和期初め、田辺十郎左衛門の定によれば、出高の半分が公納とされるのが通例であったが、水没した間歩では出高の3分の1を公納分とし、逆に盛りの間歩では3分の2を公納分とした例もあるなど、時々出高によって公納分の割合は進退させられてきたので、今後においても公納の割合については臨機応変の対応をすべき旨江戸在勤の竹村九郎右衛門へ伝えられた。(佐渡年代記)</p> <p>高野山過去帳に4月14日「石金三谷相 宮崎十兵衛」、5月14日「石金本谷 土屋右兵衛」、6月4日「本谷 横山彦一」、9月12日「栃畑京町 森田甚三郎」とあり。</p> <p>18日 石銀地区に「□營妙蓮□□」の銘のある宝篋印塔あり。12月12日 妙正寺に円頂方柱型墓標あり。</p>
1616年(元和2年)	<p>† 4月 大坂相場、銀7匁につき米3斗5升。(三貨図彙)</p> <p>† 5月11日 幕府、諸大名に対し、大かけ・われ銭・かたなし・ころ銭・新鑲銭・なまり銭等六銭以外の撰銭を禁ずよう布達す。(徳川禁令考)</p> <p><吉岡銅山> 小堀遠州が備中支配の時代、吹屋銅山が「村禄」に仰せつけられ、大塚家先祖伊兵衛がその頭取となった。銅山役所(88間×55間; 惣囲あり)は大塚家の所有地に建てられた。(成羽町史)</p> <p><越中虎谷金山> 元和2年から同9年までの虎谷金山から加賀藩への運上金は9枚1両。おそらくは「加州灰吹金」と呼ばれた秤量貨幣で納められた。1枚=10両は判金44匁。(越中鉱山雑誌)</p> <p>高野山過去帳に閏3月21日「同 京町 エナミヤ久兵衛」、5月5日「栃畑京町 泉屋宗兵衛」、5月21日「出シ土波多野善左衛門母ノ為」、6月14日「出シ土 山根三左衛門」、6月19日「栃畑京町 飯島弥三兵衛」、12月4日「栃畑京町 油や善三郎」とあり。</p> <p>7月 妙本寺上に「昔 元和二西辰曆」の銘のある一石宝篋印塔、10月18日 「覚 □營妙円信女」の銘のある一石五輪塔、10月 「寿覚為妙貞 也」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1617年(元和3年)	<p>5月 <大葛金山> この年5月末～6月、秋田藩山奉行梅津政景が巡視した。運上間歩総数は17、間歩運上高は銀463匁3分であった。政景は運上間歩の鉱質の劣化を指摘している。当時の大葛金山の家数は154軒、同年4月29日34日間の鉱山内の売米高は5斗入571俵(約285石)であった。鉱山町には傾城屋もあり鉱山隆盛の様子が知られる。(梅津政景日記)</p> <p>† 9月 大坂相場、銀3匁4分3厘につき米1斗8升8合6匁。(三貨図彙)</p> <p><萩藩領鉱山> 萩藩より幕府目付への報告によれば、領内主要鉱山のこの年の収入高は以下の通り。長登銅山8貫600匁、青景銀山1貫75匁、河原鉱山3貫655匁、赤小野村鉱山744匁、赤絵堂村鉱山720匁、蔵目喜鉛山22貫769匁、根笠村錫山10貫766匁1分。(毛利家文庫)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1596-1615年	
1615年	<p>4月30日 オランダ東インド会社十七人会、事務総長クーンの東インドでの銀資金不足の苦情に対し、日本から日本銀を供給することを期待すると回答。(Jan Pietersz.Coen)</p> <p>10月26日 オランダ東インド会社総督レインスト、日本発アンボイナ着の船荷に対し、期待された日本銀がないと報告。(Generale Missive)</p> <p>12月6日 シーアドベンチャー号 銀24貫 魏官船は翌年シャムからの銀と蘇木で22貫490匁で帰国。庄兵衛船1617年チャンバから鹿皮と銀で8貫196匁。(イギリス商館長日記)</p> <p>50ピコルの生糸の仕入れに5,000ドゥカドを投資しその利益は、2,500ドゥカド、税と運賃を差し引いた純益は、1,583ドゥカドであった。(ARSI)</p> <p>1万8,371テール=2万5,060パタカ。即ち1テール=約1.36パタカの換算率。(ARSI)</p>
1616年Ⓜ(万曆44年) Ⓜ(天命元年)	<p>1月4日 慶長遣欧使節は教皇から金貨6,000スクードを賜る。(日欧通交史)</p> <p>11月3日 京都で生糸を1ピコル当たり銀3貫120匁で売却。(イギリス商館長日記)</p> <p>11月5日 鉛は上方での相場100斤75匁を70匁とイギリスが提示。100斤60匁に決定。(イギリス商館長日記)</p> <p>12月21日 シーアドベンチャー号、銀22貫積載、帰り荷には鉛3,600斤。(イギリス商館長日記)</p> <p>12月25日 マカオ発コンファロニエリの総会長補佐宛て書簡によれば、1テール=1クルザド。(ARSI)</p> <p>ジャワ島のバンタンでは、イギリス人と明国人との間で日本銀の相場がたっていた。(オランダ史料から見た銀輸出)</p> <p>オランダ貿易ではインド綿布がシャム皮革へ、次に日本銀となる。(平戸オランダ商館日記)</p> <p>バタヴィアの決議。マカオから長崎へ向かうポルトガル船を必ず撃捕し、銀を奪う。(平戸オランダ商館日記)</p> <p>レアルの単位については、当時(1616年)は、1クルザド=400レアルの換算率に原則として定められていた。(ARSI)</p>
1617年	<p>1月5日 通常12,000~15,000クルザドがイエズス会の年間の貿易資金であり、10,000クルザドの利益があると記述あり。(ARSI)</p> <p>8月2日 アドバイス号の鉛はすべて将軍用に。13日100斤60匁の決定。鉛は全部で2,065棹。(平戸イギリス商館日記)</p> <p>9月20日 シャム首府アユチャ駐在オランダ商館員、日本に送る金若干を購入したが、同地で約35または45%の利益があるとの報告あり。(シャム国アユチャ市からコルネリス・ファン・ナイエンローデがアムステルダム東インド会社に送った書簡)</p> <p>イギリス商館からシーアドベンチャー号に積んでシャム駐在のジョンソン宛送付した銀は、純良なソマ銀12貫180匁、カティン銀のごとき純良の銀11貫61.5匁、ナギト銀10貫目、合計33貫241.5匁。(イギリス商館長日記)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内	
1617年(元和 3 年)	<p><佐渡相川金銀山>前年、佐渡の山師たちが金銀山の衰微を江戸に訴え出たことを受けて、鎮目市左衛門、井上新左衛門、竹村九郎右衛門が佐渡に渡り実状調査を行った。その結果、山師が経営を放棄した銀山12ヶ所が幕府の直山として取立てられた。(佐渡年代記)*</p> <p><杉沢銀山>梅津政景、金山の町割を行う。(梅津政景日記)*</p> <p>高野山過去帳に 4月15日「栃畑 竹井清右衛門」、10月15日「昆布山 山根了雲」、12月 9日「昆布山 荻谷原弥五右衛門子息朝七」、(月未詳) 15日「銀山 ウキタモ善兵衛」とあり。</p> <p>3月20日 妙本寺上に「□妙林靈」の銘のある一石宝篋印塔、(月未詳) 7日 一石宝篋印塔、4月29日 龍昌寺に「(為)(婦)真道周禪定門也」の銘のある宝篋印塔、5月 4日 「為道節禪定門也」の銘のある組合せ宝篋印塔、8月19日 「奉逆修為果山道善寿正利益也」の銘のある組合せ宝篋印塔、6月13日 龍源寺間歩上に「経 真」の銘のある一石五輪塔あり。</p>	
1618年(元和 4 年)	<p>3月18日 <出羽荒川銀山>この年には直山に改められた。(梅津政景日記)</p> <p>4月 <佐渡相川金銀山>相川金銀山の主要坑のひとつであった割間歩では、このころすでに排水が大きな問題となっていたが、この年 4月よりその稼行を引き継いだ味方但馬が、手代に製作させた「寸方樋」を用いて排水したところ大きな効果をあげ、10日間の出鏈が数万荷の単位となった。(佐渡年代記)</p> <p>9月 7日 <越中亀谷銀山>この年の運上は、銀2,000枚・鉛9,000貫(京目)に、去年分未進銀子が400枚であった。この前年より親方制による請山法が採用されたいらしい。(越中鉱山雑誌)</p> <p>10月21日 <白根金山>白根の本平式枚五両間歩の稼行を日前30日、運上金 1両で与左衛門が請けた。前稼行主の日前の跡を請けたものである。(青山家白根史蹟)</p> <p><佐渡相川金銀山>鎮目市左衛門、竹村九郎右衛門が佐渡奉行に任せられ、「安米」として年貢米を鉱山にやすく払い下げる、相川に入る国内産物の十分一税を廃止する、出判の制度をつかって他国への鉱山大工の流出を抑える。佐渡産物の島外移出を禁止する、などの経費削減の為の政策を施した。さらに自分山(直営山以外の銀山)の鉱石の荷分けを多くの場合奉行所 3分の 1、山師 3分の 2とした。(佐渡年代記)</p> <p><佐渡相川金銀山>佐渡奉行所役人野田氏・静間静右衛門、石州より佐渡へ移住し、役人となる。(諸役人先祖書・舟崎文庫)</p> <p>高野山過去帳に 3月 2日「石金本谷 稲井清左衛門父ノ為登山之時立之」、3月 4日「栃畑 山根彦右衛門為ニ宗岡内儀立之」、4月 4日「石金本谷 手銭源右衛門」とあり。</p> <p>5月 3日 龍昌寺に「為婦真慈善禪定門菩提也」の銘のある宝篋印塔、8月 1日 「(為)(婦)真種□禪定門」の銘のある宝篋印塔、9月 3日 妙正寺に「○○靈位」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>	
1619年(元和 5 年)	<p><仙台領金山>元和年間、世田米村小股の紺野内膳が同地の入金川原で金山を見立て、同 5年に金を掘りだして大判45枚の運上を納めた。その後は衰微し再建され、寛永 6年に砂金 3貫73匁が納められた。(気仙郡竹駒村玉山金山来歴)</p> <p><佐渡相川金銀山>石見銀山役人山田半右衛門、佐渡へ渡り役人となる。(諸役人先祖書)</p> <p><佐渡相川金銀山>金銀山が盛んになり、出鏈が増すに随い、金穿大工の賃金をはじめ、金銀吹立の入用等払方の便宜のため、入用分を切り取って使う「笹吹銀」を廃し、一国限り通用の「極印銀」を800貫目吹立通用させた。(佐渡年代記)</p> <p>高野山過去帳に 4月 9日「石金 岡山林新十郎」、7月16日「岡山末岡新十郎為末岡賀兵衛・同才次郎立之」、7月19日「石金三谷相 本間又左衛門彦蔵」、9月19日「石金 スタヅル甚吉」とあり。</p> <p>3月27日 龍源寺間歩上に「経 □□意宣」の銘のある一石宝篋印塔、7月 「三□菴妙初禪定尼」の銘のある一石宝篋印塔、4月23日 龍昌寺に「為婦真妙順禪尼」の銘のある一石五輪塔、6月 7日 「空弥童女」の銘のある一石宝篋印塔、12月18日 「幻雪童子」の銘のある一石五輪塔、(月未詳) 10日 一石五輪塔、5月 石銀地区に無縫塔基礎(?)あり。</p>	

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1617年	<p>シーアドベンチャー号、現銀33貫741匁5分。(平戸イギリス商館日記)</p> <p>生糸100斤3貫120匁。吹分けた上等の銀が1箱バンタムへ。80貫のはずが64貫しかなかった。(イギリス商館長日記)</p> <p>蘇木は100斤につき日本銀7匁3分、鹿皮は100枚95匁の原価に対し蘇木は24~27匁、鹿皮は222匁5分~260匁と記述あり。(平戸イギリス商館日記)</p> <p>商取引は、すべて良質のナギト銀でなされた。1貫につきわずか3、4匁の両替料を支払った。(コックス日記)</p> <p>ヴァレンカティン・カルヴァーリョの「弁駁書」によれば、1テール=1クルザド強。(Apologia de Carvalho)</p>
1618年㊦(万暦46年) ㊦(天命3年) ㊦(光海君10年)	<p>1月2日 シーアドベンチャー号、現銀33貫741匁5分。(イギリス商館長日記)</p> <p>2月 平戸からアドヴィス号で丁銀にて109貫207匁8分半に相当する精錬された4種の良質の銀90貫630匁を送る。セダ銀、丁銀100両に付88両。長形の銀、丁銀100両に付87両。灰吹銀、丁銀100両に付84両。ソマ銀、丁銀100両に付81両。(コックス日記)</p> <p>3月1日 平戸オランダ商館長スペックス、日本銀を中国商品買付け用にバンタンに輸出と事務総長クーンに報告。(Pietersz.Coen,)</p> <p>5月 明国、銭銀比価は、北京では銭6文=銀1分、南京では銭12文=銀1分である。(続文献通考・明神宗実録)</p> <p>6月25日 朝鮮国王が釜山倭館裏に置かれている銀の回収を命ずる。(光海君日記)</p> <p>8月31日 ソマ銀は、セダ銀よりも5%増し、灰吹銀はセダ銀と同じ値。灰吹はリアル貨と同価。テールは、リアル貨より1%増しと記述あり。(アジュエラ図書館文書)</p> <p>9月13日 日本発フランシスコ・ヴィエイラの総会長宛て書簡によれば、54,700レイス=136クルザドあまり。1テール=1クルザド。(ARSI)</p> <p>11月 ポルトガル人、マカオで通商し、税を銀2万両納めたが、今、当地への移住者は1万人余りにのぼり、日本人も加わっている。(明神宗実録)</p> <p>この年、密貿易で日本に住む明国人は2、3万人。(涌幢小品・王司馬奏疏)</p>
1619年㊦(万暦47年) ㊦(天命4年)	<p>1月10日 生糸1ピコル当たり90~110テールで仕入れ、日本では最低280テール、最高で315テールで売れたと記述あり。(ARSI)</p> <p>今、明国では銀のことを朱提という。銀銭比価は銀1両=1,000銭。(五雑組)</p> <p>明国銀山をすべて閉鎖。(明書)</p>

西 暦 (年号 : 日本)	国 内
1620年(元和 6 年)	<p><阿仁銅山>阿仁萱草村にて石銀が発見される。梅津政景が金山の支障にならない限りでの採掘を指示する。(梅津政景日記)*</p> <p>3月13日 龍源寺間歩上に「月当新月禪定門尼」の銘のある一石宝篋印塔、(月未詳) 22日 一石宝篋印塔、11月19日 妙正寺に「妙無靈位」の銘のある一石宝篋印塔、12月17日 「為妙松靈」の銘のある組合せ宝篋印塔、3月1日 龍昌寺に「為早世幻心童女靈位」の銘のある一石五輪塔、3月14日 「為婦真元用童子」の銘のある一石宝篋印塔、4月12日 「[] 童子」の銘のある一石五輪塔、9月 無縫塔台座、11月6日 「為幻香童子也」の銘のある一石宝篋印塔、「為永精禪定 []」の銘のある組合せ宝篋印塔あり。</p>
1573年-1620年 (天正元-元和 6 年)	
1621年(元和 7 年)	<p>1月24日 <萩藩領鉾山>毛利秀就より国許の三井但馬守に宛てて、蔵目喜・賀野山は直山であるが請手があれば請山にすべきこと、根笠山は大阪商人大塚屋に立銀100枚で請負わせること、青景・河原山は一年切の請山とするべきこと、山口灰吹座は立銀12枚で与五郎に請負わせるが、さらに、増銀をもって望む者があればその者に請負わせるべきことなどを指示している。(毛利家文庫)</p> <p>8月20日 <朴金山>佐渡金銀山の有力山師、味方但馬は、相川に在った手代の樋治右衛門に書状を送り、南部金山を金3,000枚で但馬が請ける見込みを持ったが、5,500枚の金運上で西山丹波(丹波弥十郎)が請負った。(味方家文書)</p> <p><生野銀山>佐渡奉行竹村九郎右衛門は、新任の生野奉行藤川庄次郎の補佐として生野に来て2年間いた。銀山方の一切の仕法を定めた。「荷分法」による運上など、佐渡の仕法をとりいれたという。(生野銀山旧記)</p> <p>4月3日 妙正寺に「[] 尼大蓮修 性閑」の銘のある一石宝篋印塔、7月 龍昌寺に「為寂照空円禪定門 覺悦善朗者也」の銘のある宝篋印塔、9月26日 「[] 菩提也」の銘のある一石宝篋印塔、(月不詳) 30日 妙本寺上に「□□秋妙林女」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1622年(元和 8 年)	<p><生野銀山>升形・登尾・城山・三原・一之谷・梓木・青草などの諸間歩が開かれる。升形では馬伴、城山では大切、日出平で弥兵衛山が栄えた。毎月6回荷分があり、いずれも1,000貫余りを掘り、1山で1ヶ月5,000~6,000荷に及んだ。(生野銀山旧記)</p> <p><信濃国佐久郡金山>元和8年の高書上に、「金山場所」として梓山(家数29軒)・川端下山(家数10軒)が上げられている。これらの場所では砂金が採取されていた。ただし、慶長18年以後に砂金採取は止んだ。(佐久郡高書上帳面)</p> <p><佐渡相川金銀山>この年1年間に越後御料所より佐渡に移入された米は5,400石あまり。(佐渡志)</p> <p><豊前呼野金山>この年春頃より呼野金山が開かれた。盛時には5,000~6,000人が集まり、寛永3、4年頃にもなお1,000人を数えた。この金山は間歩ではなく、掘場とよばれる、地下を穿って砂金を採取したもの。(筑前・筑後・肥前・肥後探索書)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1620年㊥(万曆48年) ㊥(天命5年)	<p>2月10日 生糸1ピコルの価格は、マカオでは約100クルザド。日本では、180～190、200クルザドに達すると記述あり。(ARSI)</p> <p>2月10日 マカオで金塊と呼ぶものは、12.5オンス。1個60～90クルザド。日本で売ると、50～60%の利益があると記述あり。(ARSI)</p> <p>3月10日 オランダ東インド会社総督宛の手紙では、シャムから鉛3万斤、将軍の一括買上げとなる。(平戸イギリス商館日記)</p> <p>12月14日 コックスの会社宛の書簡では、この年オランダ人は鉛を50万斤持ち込み、イギリス人は30万斤余。(平戸イギリス商館日記)</p> <p>12月 明国、銀銭比価を北では銭63文=銀1銭、南では銭100文=銀1銭と定める。(明熹宗実録)</p> <p>この年マニラ港に入港した日本発の船舶は3隻。(Les Philippines et le Pacifique des Ibzriques)</p>
1573年－1620年 (万曆年間)	<p>万曆中頃、銀山を百個所あまりを開く。その弊害は広がる。(明書)</p> <p>明初から各地で銀山が開かれ、この頃、年に300万両余りの銀税が納められる。(浪跡叢談)</p> <p>明国広東の香山、貿易船の出入り口であり、外国船はよく1隻で万金を持ってくる。納税するものは10の2、3だけ。(涇林統記)*</p> <p>この頃、明国の歳入は約銀400万両。(明神宗実録・明史)</p> <p>明国浙江・福建の沿海では密貿易が盛んに行われ、日本人も雇われる。(倭志)</p> <p>海禁の期間にも明国とマカオとの貿易が盛んに行われる。(嶺南雜記)</p> <p>明国、万曆銭を鑄造し、対銀比価は銭6文対銀1分。(春明夢余録)*</p>
1621年㊥(天啓元年) ㊥(天命6年)	<p>8月 明国銅銭が鑄造され、銭の対銀比価は銭600文対銀1両。(続文献通考・明熹宗実録)</p> <p>この年にマニラ港に入港した日本発の船舶は3隻と記述あり。(Les Philippines et le Pacifique des Ibzriques)</p> <p>イギリス船ペパーコーン号 バタヴィアからイギリス商館宛に2万リアル、邦貨で160貫を送銀。(平戸イギリス商館日記)</p> <p>1621年度の日本銅の輸出量は50,000カティ、輸出額は16,170：12グルデン、銅持渡船数は2。(平戸貿易と銅)</p>
1622年㊥(天啓2年) ㊥(天命7年)	<p>3月 コックスは小判28枚 銀にして1貫750匁を贈る。(イギリス商館長日記)</p> <p>9月6日 1テール=1クルザドと記述あり。(キリシタン時代の研究)</p> <p>コックスはバタヴィアへ銀子を156,007リアル=1,248貫あまり。(平戸イギリス商館日記)</p> <p>1622年度の日本銅の輸出量は97,455カティ、輸出額は30,831：17：11グルデン、銅持渡船数は2。(平戸貿易と銅)</p>

西 暦 (年号 : 日本)	内 容
1622年(元和 8 年)	<p>高野山過去帳に 3 月 14 日「石金小池ノ段 柳セウシ為父長丁新十郎 登山之時立之」とあり。</p> <p>1 月 22 日 妙正寺に「為妙清逆修」の銘のある組合せ宝篋印塔、(月未詳) 9 日 龍昌寺に「□信童女」の銘のある一石五輪塔、(月日未詳)「為清秋童子也」の銘のある宝篋印塔、(月日未詳) 龍源寺間歩上に「[] 霊」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1623年(元和 9 年)	<p>3 月 <白根金山> 青山庄左衛門が白根大沢せりこみしきを、4 月 1 日より同 27 日までの日前、運上金 10 匁で請けた。(青山家白根史蹟)</p> <p>1 ヶ年分公納鏈御払代 (大谷荒神間歩・柑子谷大横相分) 銀 4,700 枚。(山中家文書)</p> <p>高野山過去帳に 4 月 10 日「昆布山 松原仁兵衛」、「昆布山 中嶋孫左衛門」とあり。</p> <p>1 月 24 日 石銀地区に「教養妙円」の銘のある一石宝篋印塔、7 月 20 日 龍昌寺に「福道請□禪定門」の銘のある一石宝篋印塔、12 月 14 日 妙本寺上に「天誉□記禪土」の銘のある無縫塔あり。</p>
1615-1623年 (元和年間)	<p>元和年間か、竹村丹後守、長野源左衛門等地役人に、留守中銀山の諸間歩の普請、手前入目の山普請については鏈さえだせば損をさせないよう相談して申し付けることを指示する。(長野家文書)</p> <p><筑前国砂金山> 元和年間、福岡領の筑前糟屋郡篠栗村より鞍手郡八木山にかけ、また遠賀郡香月の地方に砂金採取が興った。掘場は田畑を多く掘ったらしいが、盛時には 5~6,000 人の人が集まり、1 人 1 ヶ月に金 6 分の運上であった。運上はその後、4 分、3 分と減り、寛永 3 年頃には衰退したという。(筑前・筑後・肥前探索書)</p> <p><伊豆瓜生野金山> 竹村九郎右衛門が金山奉行であったときに、間歩への浸水が甚だしくなったので、5 人の山師が「畑洞」という所に 100 間の水抜間歩を掘り、金山の再興が成ったという。(大城家文書)</p> <p><佐渡相川金銀山> 元和年中、石見国の者が来て姫津村に居住するようになる。(佐渡故実略記)</p> <p><安芸寺尾銀山> 寺尾銀山が、元和末年から寛永年間にかけて、隅屋によって稼行された。(加計町史)</p> <p>1 月 20 日 石銀地区に「心誉□□□」の銘のある宝篋印塔、2 月 「蓮誉妙」の銘のある宝篋印塔あり。</p>
1624年(元和 10 年) (寛永元年)	<p><生野銀山> 山元の友松道半が堀切の内、蜂子掘場で上銀鉞を掘り当て、その収入は 500 貫に達した。(生野銀山旧記)</p> <p>この年より年々の山役の記事あり。石見銀山山役銀 320 貫 789 匁 8 分。(山中家文書)*</p> <p>銀山稼入用として米、銀が下される (承応元年まで 29 年間で米 3 万 2,811 俵 2 斗、銀 390 貫 602 匁 9 分)。(石州銀山治府要集)</p> <p>銀山領内、御役銀取立の口屋始まるという。(光永寺文書)</p> <p>† 大坂相場、米 1 石につき銀 27 匁 6、7 分。(三貨図彙)</p> <p>高野山過去帳に 4 月 14 日「栃畑京町 住吉屋久右衛門」とあり。高野山過去帳に 7 月 14 日「石金ノヒラ 安井与吉」、9 月 25 日「栃畑京町 飯島彦八郎」とあり。</p> <p>2 月 龍源寺間歩上に「経 浄 [] (欠損) 」の銘のある一石宝篋印塔、6 月 「妙守霊」の銘のある一石五輪塔、12 月 18 日 「経 心清妙月尼 (ベンガラ)」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1625年(寛永 2 年)	<p>11 月 2 日 銀山領波積本郷年貢米 186 石余りの内、169 石余りが銀山払米に充てられる。* (石田家文書)</p> <p>石見銀山山役銀 182 貫 584 匁 5 分。(山中家文書)*</p> <p><伊豆瓜生野金山> この年、公儀より伊豆の金山の休山が申し渡された。瓜生野の金掘たちは 3 ヶ年、町屋敷の跡の土を川流して採金したが、その後国々へ立ち戻った。(大城家文書)</p> <p>† 大坂相場、米 1 石につき銀 16 匁~28 匁 8 分。(三貨図彙)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1622年㊤(天啓2年) ㊤(天命7年)	
1623年㊤(天啓3年) ㊤(天命8年) ㊤(仁祖元年)	<p>7月4日 朝鮮において、東萊府の商人林素が、倭人と通商して銀7万両あまりを得る。(仁祖実録)</p> <p>9月 明国南京では銭の対銀比価は銭12文対銀1分であるので、南京で銅銭の鑄造をさせたが、銅の含有量を低くされた等の不正行為が生じた。(続文献通考)</p> <p>イエズス会は10,228テールを年間の貿易投資資金とし、6,000テール以上の利益の見込みがあると記述あり。(ARSI)</p> <p>8リアル貨1枚を目方8匁4シリングに換算。1クルザドは目方5匁3分の1,300クルザドで銀1貫600匁。(コックス日記)</p> <p>1623年度の日本銅の輸出量は1,970カティ、輸出額は305：3：5グルデン、銅持渡船数は1。(平戸貿易と銅)</p>
1615-1623年	
1624年㊤(仁祖2年)	<p>1月 12,566テール=13,000クルザド以上。1テール=1.034クルザドと記述あり。(ARSI)</p> <p>2月16日 フレガット船モハ、日本銀12箱各2,000リアル入りを積載。(バタヴィア城日誌)</p> <p>4月2日 日本からのスヒップ船デ・ホープ、リアル貨幣3箱、純良銀3箱、日本銀15箱積載。(バタヴィア城日誌)</p> <p>5月 朝鮮の登州では、3銭の銀が米8斗にあたる。(仁祖実録)</p> <p>12月28日 マカオ総司令官フランシスコ・マスカレーニャス、日本における銀のレスポンデンシア貸借を禁じる。禁を犯したものは、流刑など厳罰に処することが明記される。(エヴォラ史料館文書)*</p> <p>朝鮮において銀40両が木綿50匹にあたる。(増正交隣志)</p>
1625年㊤(天啓5年) ㊤(天命10年) ㊤(仁祖3年)	<p>2月29日 レアルはスペインの貨幣。当時この1リアルは我が8匁に相当すると記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>4月11日 マカオ総司令官マスカレーニャス、ポルトガル人に対し、手形で中国産生糸を購入して日本へ送ることを禁じる。(エヴォラ史料館文書)*</p> <p>6月 朝鮮において、銀5千両は人参50斤にあたる。真珠200個は銀3,000両にあたる。(仁祖実録)</p> <p>11月10日 マカオ発モレホンの総会長宛て書簡によれば、1テール=1スクード。(ARSI)</p>

西 曆 (年号：日本)	国 内
1625年(寛永2年)	<p>高野山過去帳に4月7日「昆布山 布屋甚四郎」、4月12日「石金 片岡内方木村正三母為立之」、「石金 安田ヲミヤ母ノ為」、「石金 安田与兵衛」とあり。</p> <p>2月12日 龍昌寺に「〇〇童女」の銘のある一石五輪塔、6月15日 「奉為道□禪定門之也」の一石宝篋印塔、5月11日 龍源寺間歩上に「一掃真□□禪定□」の銘のある宝篋印塔あり。</p>
1626年(寛永3年)	<p>3月11日 温泉津老中、竹村丹後守に温泉津舟表役銀の取立について請状を提出する。(多田家文書)*</p> <p>3月23日 温泉津老中、温泉津諸役銀の過去7ヶ年の皆済札を受取る。(多田家文書)*</p> <p>石見銀山山役銀334貫2匁3分。(山中家文書)*</p> <p><生野銀山>友松道半、金木間歩を稼ぎ、金木より小鉦・出賀の内に切り抜き、それまで金木の水をその四留口より捨てたのを、それより51挺(1挺=7尺)下方に抜いて不動滝に落した。(生野銀山旧記)</p> <p><佐渡相川金銀山>寛永期に入って金銀山が次第に衰えてきたのを受けて、代官鎮目市左衛門は幕府の御入用金を投入して水金沢より山師味方但馬の経営する割間歩に向けて大水貫を掘り始めた。この水貫は宝永15年に貫通し、その結果、排水のための樋36本が不要となった。(佐渡年代記)</p> <p><佐渡相川金銀山>戸地村の川通りに水車を建て、この年より鏈を粉成す買石が現れた。当初は公儀買石と名付け、相川より鏈を廻し、粉成しのみでなく製鍊まで行った。(佐渡年代記)</p> <p>†この年4月から8月まで大旱。大坂相場、米1石につき銀20匁~23匁6分。(三貨図彙)</p> <p>高野山過去帳に2月22日「出土 梶介為ニ福間平兵衛立之」とあり。</p> <p>4月18日 龍昌寺に「通屋宗円禪定門」の銘のある宝篋印塔、(月日未詳)妙本寺上に「為西□妙□三□□」の銘のある宝篋印塔あり。</p>
1627年(寛永4年)	<p>1月 <肥前大串金山>大串金山の稼行が始まった。この頃中心となった間歩は本山・小谷・但馬加左衛門平・小瀬戸山・湧上平などであった。(大村家文書)</p> <p>†12月 諸国金銀奉行並びに金奉行を設置す。(徳川実記)</p> <p>石見銀山山役銀247貫50目7分。(山中家文書)*</p> <p>高野山過去帳に2月15日「昆布山 山神々宮寺一代仙台房為西蔵院立之」とあり。</p> <p>3月9日 龍源寺間歩上に「経 為□幻」の銘のある一石五輪塔、6月3日 妙正寺に「為妙幻尼」の銘のある一石宝篋印塔、9月16日 「為〇〇尼」の銘のある一石五輪塔あり。</p>
1621-1627 (元和7-寛永4年)	
1628年(寛永5年)	<p>2月 銀山役人、温泉津舟表水上り銀・酒座役・たばこ役を月々に受取る。(多田家文書)*</p> <p>石見銀山山役銀175貫349匁2分。(山中家文書)*</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀23、4匁~25匁。(三貨図彙)</p> <p>高野山過去帳に3月21日「昆布山 布屋宗徳」、7月14日「銀山 長楽寺□父為是禪道」、7月19日「栃畑 三嶋喜左衛門 寛永五年 元和九年七月十九日」、8月20日「栃畑 田中善右衛門」、12月21日「栃畑 住吉や次郎右衛門」とあり。</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1625年㊤(天啓5年) ㊤(天命10年) ㊤(仁祖3年)	<p>11月16日 45ピコルの生糸は、マカオで6,000クルザド、日本で9,000クルザドの利益になる。(ARSI)</p> <p>日本に住みついた明国人は数千人になり、日本人と家庭をつくり、唐人町ができた。明国本土との交通は盛んである。(明熹宗実録・明清史料)</p> <p>明国、銀銭比価が銭8文＝銀1分であるという記事あり。(玉堂薈記)</p> <p>タイオワンに7万ドゥカド(1ドゥカドはほぼ1テール銀10匁)を積載した朱印船が入港、関税の支払いに応じず、買い入れた生糸のうち15ピコルを没収される。(十七世紀日蘭交渉史)</p> <p>1625年度の日本銅の輸出量は288,418カティ、輸出額は91,077：3：12グルデン、銅持渡船数は2。(平戸貿易と銅)</p>
1626年㊤(仁祖4年)	<p>4月11日 明国生糸を手形で購入し日本へ送ることを禁じるマカオ総司令官の訓告。(エヴォラ史料館文書)</p> <p>4月 朝鮮において、布1匹が米1石にあたる。(朝鮮仁祖実録)</p> <p>1626年度の日本銅の輸出量は197,618カティ、輸出額は62,547：15：5グルデン、銅持渡船数は2。(平戸貿易と銅)</p>
1627年㊤(天啓7年) ㊤(天聰元年)	<p>12月 崇禎銭が鑄造され、その後1文の重さは1銭にし、銭1,000文：銀1両と定める。南京の銅銭の重さは8分にする。(続文献通考)</p> <p>1627年度の日本銅の輸出量は517,740カティ、輸出額は162,986：18：12グルデン、銅持渡船数は2。(平戸貿易と銅)</p>
1621-1627 ㊤(天啓年間)	<p>この頃、明国では税収などで主に銀を使い、銀は最重要貨幣となる。(春明夢余録)</p>
1628年㊤(崇禎元年) ㊤(天聰2年)	<p>2月 明国海寇の横行により、海外貿易を禁止。(明清史料)</p> <p>7月3日 オランダと台湾の間での取決め。生糸1ピコルに付き141テール。79ピコル47にたいし、現銀13,540テールが日本人に支払われた。(1628年6月29日より7月5日に至るピーター・ムーゼルの日記)</p> <p>7月 南京銭を6,510万文鑄造し、銭55文＝銀1銭にして銀39,113両余りの利益を出す。戸部は1億2,948万文余り鑄造したが、26,453両あまりの利益であった。(続文献通考)</p> <p>9月 明国、北京では銀銭比価が銭6文＝銀1分であり、銭価は南京の倍ぐらいである。(山書)</p> <p>この時、銭の対銀比価は首都では銭1,000文対銀1両2銭、地方では銭1,000文対銀9銭。(閱世編)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	内 容
1628年(寛永 5 年)	<p>6月11日 妙正寺に「素日靈」の銘のある一石宝篋印塔、12月3日 「慈父宗法靈」の銘のある一石宝篋印塔、12月14日 「為無久□」の銘のある一石宝篋印塔、6月5日 龍昌寺に「為大翁学秋禅定門也」の銘のある一石宝篋印塔、10月5日 「為玉林妙弥靈」の銘のある組合せ宝篋印塔、11月4日 「為妙林禅定尼」の銘のある一石宝篋印塔、7月23日 龍源寺間歩上に「経 妙□□靈 (ベンガラ)」の銘のある一石五輪塔、9月9日 妙本寺上に「欣嘗□春靈位」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1629年(寛永 6 年)	<p>10月 <豊後鶴成金山>鶴成村において、岩屋又右衛門という百姓が砂金を掘り出し、繁盛した。(日出町史・伊東家文書)</p> <p>† 10月 暹羅国の使者来る。正副使に銀数570枚並びにその他を贈る。(徳川実記)</p> <p>石見銀山山役銀172貫736匁3分。(山中家文書)*</p> <p><明延銅山>明延銅山が請山制となる。明延が銅山になったのはこの頃のことと思われる。発見の年代は明らかでないが、慶長期には生野より役人が派遣され、二拾枚間歩・谷床間歩などの銀坑が稼行されていた。(日本鉱山史の研究)</p> <p><佐渡相川金銀山>石州銀山役人渡三郎右衛門が佐渡へ呼び寄せられ、役人となる。(諸役人先祖書・舟崎文庫)</p> <p>高野山過去帳に3月3日「本谷落合 山内清蔵」、9月15日「栃畑 山神神宮寺 宗源」、12月「銀山 長野勘兵衛」とあり。</p> <p>1月22日 妙正寺に「為妙清靈位」の銘のある一石宝篋印塔、3月15日 「経法□靈位」の銘のある一石五輪塔、10月11日 妙正寺に「為妙林靈尼」の銘のある一石宝篋印塔、(月未詳)12日 妙本寺上に「為清□妙□信女」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1620年代	
1630年(寛永 7 年)	<p>5月6日 温泉津・串山・鶴丸・温泉津町の左右の山の松の立木を切り荒らすことが禁じられる。(多田家文書)*</p> <p>石見銀山山役銀183貫577匁4分5厘。(山中家文書)*</p> <p>† 大坂相場、米1石につき銀23匁7、8分。(三貨図彙)</p> <p><治田銀山>寛永7年より約30ヶ年、墨屋重右衛門、伊藤茂左衛門が治田銀銅山を稼行した。この年には伊豆銀山から代官川合助左衛門が御山奉行として赴任し、治田新町に陣屋を置いた。この銀銅山は往古より稼行されて繁盛した、とされているが、記録はない。佐渡の味方但馬が元和期に稼行した「勢州銀山所」と同一らしい。(治田御銀銅山就御尋口土覚書)</p> <p>高野山過去帳に4月8日「栃畑 蔵本惣右衛門」、5月3日「栃畑 河井治兵衛」、9月6日「栃畑 佐藤彦兵衛」、9月23日「栃畑 佐藤清左衛門」、(月未詳)25日「栃畑 ホリタ 彦三郎」とあり。</p> <p>11月15日 妙正寺に「○○尼」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1631年(寛永 8 年)	<p>2月 銀山役人、温泉津たばこ役を月々に受取る。(多田家文書)*</p> <p>† 3月 幕府、年貢の皆済及び先代官の未進分上納を当代官に厳命する。(大猷院殿御実記)</p> <p>12月4日 温泉津船持6人分積載高505石分、100石につき判銀15匁4分、合計77匁7分7厘の内、75匁を舟役銀として上納。(多田家文書)*</p> <p><越前堂島金山>寛永8年1~12月までの阪谷村金山の運上銀2貫362匁6分。この金山は慶長年中に開坑されたと伝えられる。(伊藤家文書)</p> <p><豊後鶴成金山>鶴成金山が留山となる。(日出町史・伊東家文書)</p> <p><佐渡相川金銀山>久保新右衛門、設楽長兵衛に伴い石州より佐渡に来て役人となる。(諸役人先祖書・舟崎文庫)</p> <p>† 大坂相場、米1石につき銀23匁~25匁。(三貨図彙)</p> <p>高野山過去帳に2月17日「栃畑 三嶋善右衛門 寛永八年二月十七日 岡村次郎衛門建之」とあり。</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1628年Ⓜ(崇禎元年) Ⓜ(天聡2年)	
1629年Ⓜ(崇禎2年) Ⓜ(天聡3年)	<p>4月17日 明国浙江・福建における海禁を厳しくする。(明清史料)</p> <p>イエズス会の規定に、日本銀を扱う人物は吟味されるべきであり、またレスポデンシア貸借をおこなうことは禁止される。(アジュラダ図書館文書)*</p>
1620年代	この頃、日本船がマカオに到来するが、マカオ政庁はその取引を禁じる。(エヴォラ史料館文書)*
1630年Ⓜ(崇禎3年) Ⓜ(天聡4年)	<p>10月 平戸オランダ商館にはソマ銀150,000レアルの貯蔵との記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月 毎年、明国で海上貿易に出るものは10万人余り。(崇禎長編)</p> <p>この年にマニラ港に入港した日本発の船舶は2隻。うち1隻はナヴィレnavire (大型船)、1隻はサンパンsampan (小型船)と記述あり。(Les Philippines et le Pacifique des Ibzriques)</p>
1631年Ⓜ(崇禎4年) Ⓜ(天聡5年)	<p>1月28日 オランダ東インド会社は会社員と自由市民による東インドからオランダへの銀資本送付を禁止。(Nederlandsche-Indisch Plakaatboek 1602-1811.)*</p> <p>11月20日 日本にはソマ銀15万レアル。必要時には19万ないし20万レアルに利殖。(バタヴィア城日誌)</p> <p>この時、鄭芝龍、1,000隻の船を所有し、海外貿易を独占し、海外貿易船から1隻につき銀2,000～3,000両を徴収する。(小腆紀年・崇相集・台湾通史)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1631年(寛永8年)	<p>2月8日 龍昌寺「為菩提之者也」の銘のある一石宝篋印塔、2月19日 「為(華)屋妙蓮禪定尼」の銘のある組み合わせ宝篋印塔、2月29日 石銀地区に一石五輪塔、7月12日 「[] 定尼菩提」の銘のある宝篋印塔、10月10日 龍源寺間歩上に「経 妙長霊」の銘のある一石五輪塔あり。12月10日 妙正寺に「為母妙□霊」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1632年(寛永9年)	<p>5月29日 温泉津船表5月分のたばこ役、300斤に判銀2匁を上納。(多田家文書)</p> <p>6月1日 <佐渡相川金銀山・院内銀山>佐渡奉行より梅津政景へ、金銀吹分けに必要な硫黄を購入したい旨の書状が送られる。(梅津政景日記)*</p> <p>11月16日 マカオの商人アウグスティーニョ・ロボ、丁銀30貫目借用。(末次家文書)</p> <p>石見銀山山役銀202貫665匁9分。(山中家文書)*</p> <p><生野銀山>中島次郎兵衛が金木付近の金石間歩に大鉦を掘り当て、以後10ヶ年の収入は3,000貫といわれた。(生野銀山旧記)</p> <p><生野銀山>撰津多田銀山から長兵衛・庄兵衛なるものがきて「かたけ吹(銅を主として銀をしぼり上げる方法)」をはじめた。(生野銀山旧記)*</p> <p>高野山過去帳に3月4日「栃畑 三宅藤右衛門」、9月6日「出シ土 中嶋喜兵衛タメニ長松立之」とあり。</p> <p>7月16日 妙正寺に「為□□霊位」の銘のある組み合わせ宝篋印塔、「□□霊尼」の銘のある一石宝篋印塔、9月20日 「宗清霊」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1633年(寛永10年)	<p>† 2月28日 幕府、長崎奉行に対し、奉書船以外の日本人の海外往來の禁止や外船貿易の取締など17ヶ状について布達す。(御当家令條)</p> <p>3月21日 仙台藩の金山の仕法は、「金山御問吹之事」によれば、金山を試掘した時2荷の鉦石を掘り、1荷を唐臼で砕き、板にとって淘汰して砂金を採取し、秤量して目方を調査し、1荷は山師へ封印して渡す。山師より金場・金引臼の施設を出願させてその許可を与え、鉦況に従って運上を申し付けるのだが、3分の1を運上とし、3分の2を山師入用分とするようにする。但し、稼行の期間は3ヶ月間とした。(菅原家文書)</p> <p>石見銀山山役銀207貫800目5分。(山中家文書)*</p> <p>† 大坂相場、米1石につき銀28匁7、8分~230目。(三貨図彙)</p> <p>高野山過去帳に2月15日「栃畑 浜原ノウシヲ 新左衛門 京ミせ泉や新吉建之」、3月14日「昆布山 中嶋孫左衛門」、5月5日「栃畑 山根弥三兵衛」とあり。</p> <p>8月 龍源寺間歩上に「為巖秋童女□」の銘のある一石五輪塔、12月12日 「為安室妙禪定尼也」の銘のある一石宝篋印塔、4月14日 妙本寺上に「欣冥春夢童子」の銘のある一石五輪塔、9月 「為月□童女菩提也」の銘のある一石宝篋印塔、3月 龍昌寺「奉為南早禪定尼也」の銘のある一石宝篋印塔、4月27日 「為頓証菩提」の銘のある宝篋印塔、10月7日 「奉為□□童子也」の銘のある一石五輪塔、(月日未詳)「[] 禪定尼」の銘のある一石宝篋印塔、(月日未詳) 石銀地区に一石五輪塔あり。</p>
1634年(寛永11年)	<p>† 5月28日 幕府、伴天連の日本への渡海、武具の輸出、奉書船以外の日本人の渡海などを禁ず。(徳川禁令考)</p> <p>石見銀山山役銀450貫768匁。(山中家文書)*</p> <p>† 大坂相場、米1石につき銀35匁3分。(三貨図彙)</p> <p>9月 龍昌寺に「來矣自富通禪定門」の銘のある組合せ宝篋印塔あり。</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1631年㊤(崇禎4年) ㊤(天聡5年)	
1632年㊤(崇禎5年) ㊤(天聡6年)	<p>12月 長崎からマカオに向けて出発し暴風にあつて薩摩に漂着した1隻のガレオタ船は、ソマ銀80万テールを積んでいた。(バタヴィア城日誌)</p> <p>この年の夏、明国では米1斗につき銭120文で、銀1銭にあたる。この年の秋、米1石につき銭60、65文で、その後米価はおおよそ銭1,000文前後。(閱世編)</p> <p>明国、米1石が銀8銭。(明史)</p> <p>平戸藩主は丁銀1万テールをタイオワンへ投資する。(平戸オランダ商館の日記)</p> <p>この年マニラ港に入港した日本発の船舶は5隻。(Les Philippines et le Pacifique des Ibriques)</p> <p>1632年度の日本銅の輸出量は362,184カティ、輸出額は112,171：17：8 グルデン、銅持渡船数は4。(平戸貿易と銅)</p>
1633年	<p>2月22日 スヒップ船デンアレントに現金10万リアル、銅。内スヒップ船ヒュースデンにソマ銀182,000グルデン、平戸の領主ソマ銀1万テール(100貫目)。(バタヴィア城日誌)</p> <p>2月22日 平戸商館の差押さえ解除との記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>3月22日 スヒップ船ヒュースデンはソマ銀182,000グルデン、銅□グルデンを積載。途中タイオワンでソマ銀(記入なし)グルデン交付。(バタヴィア城日誌)</p> <p>3月22日 ポルトガル船ガレオタ船はソマ銀80万テール(8,000貫目)を積載。(バタヴィア城日誌)</p> <p>4月22日 フロイト船ワルモントはソマ銀7万1,413リアル、スホイト貨8,000リアル、粗銅6万14カティを積載。(バタヴィア城日誌)</p> <p>9月12日 博多・長崎の商人、銀をポルトガル人に貸付けるとのマカオ総司令官の報告あり。(モンスーン文書；ゴア版)</p> <p>9月12日 ポルトガル白糸のパンカド価格は、最高のもので1ピコル当たり280テール(銀2貫800匁)。(オランダ商館長日記)</p> <p>日本商人は長崎でポルトガル人に一斉に返金を迫り、支払不能者中債務20万テール、35万テール、40万テールと記述あり。(モンスーン文書)</p> <p>1633年度の日本銅の輸出量は274,419カティ、輸出額は77,644：8：12グルデン、銅持渡船数は3。(平戸貿易と銅)</p>
1634年	<p>1月20日 オランダ白糸のパンカド価格は、品等付記で1ピコル当たり250テール(銀2貫500目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>2月1日 ジャンク船、13万2,986グルデン2ストイフェルをリアル貨及び日本のソマ銀で搭載。(バタヴィア城日誌)</p> <p>2月19日 ヤハト船フェンロー、タイオワンから銅、広南から金の見本200テールを搬入する。広南貿易用に銅銭172箱、ソマ銀1万3,396リアルの8分の1、スホイト貨100テール(1貫目)を用意する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>4月4日 ヤハト船ベルダム、日本の銅銭602束、棒鉄340把、中国板銀2枚。(バタヴィア城日誌)</p> <p>4月4日 大阪奉行より広南貿易のため銅、日本銭を輸出する自由は保留される。(バタヴィア城日誌)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内	
1634年(寛永11年)		
1635年(寛永12年)	<p>7月19日 竹村藤兵衛、温泉津老中に三原酒の贈答に対して礼状を遣わす。(多田家文書)*</p> <p>7月29日 <白根金山>青山庄左衛門・毛馬内庄助が、銅平の間歩を日前5ヶ月、運上金34匁で請けた。(青山家白根史蹟)</p> <p>8月23日 <仙台領金山>仙台領では、寛永頃には金山が衰微し、この年に、鉱山の知識に明るかった川村孫兵衛重吉に領内を巡回させて鉱山開発に努めた。この際、産金の多少にかかわらず、その10分の1を山主に渡すべきことを定めている。(菅原文書)</p> <p>9月25日 <雪沢金山>文禄頃開発され、長い間放置されていた横田十三枚山・三十一枚山の2山の普請が、雪沢の山師右馬助・半七より願い出られたのに対し、藩より男・童各ひとりゝを抵当として米15石を貸与した。(松坂家文書)</p> <p>竹村藤兵衛が銀山奉行となる。(山中家文書)</p> <p>石見銀山山役銀99貫617匁9分。(山中家文書)*</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀37匁～40目。(三貨図彙)</p> <p>高野山過去帳に3月21日「栃畑 山根妙繁ノ為大谷ノ内御崎谷宗岡喜兵衛」、3月29日「栃畑 岩屋堂手嶋弥次右衛門」、7月13日「栃畑 吉岡宗雅ノ為世次吉岡甚九良」とあり。</p> <p>9月 妙本寺上に「経□真蓮心霊」の銘のある一石五輪塔、12月23日 「純誓妙心禅尼位」の銘のある宝篋印塔、(月日未詳)「欣真露心童子」の銘のある一石五輪塔、(月未詳)2日 龍昌寺に「奉為□雲禅尼」の銘のある一石宝篋印塔、9月7日 「奉為妙雲禅定尼」の銘のある一石宝篋印塔、12月10日 妙正寺に「妙宗霊尼」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>	

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1634年	<p>8月2日 スペイン人、ポルトガル人宣教師を知らせた者にスホイト銀100枚、日本人の場合600テール、キリシタンはスホイト銀2枚あるいは8テールを支給すると伝えられる。(オランダ商館長日記)</p> <p>9月29日 ポルトガル白糸のパンカド価格は、第1ピチョウのもので、1ピコル260テール(銀2貫600目)、第2ピチョウで215テール(銀2貫150目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>10月1日 オランダ白糸のパンカド価格は、品等付記で、1ピコル215テール(銀2貫150目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>12月13日 434レイス=1ドゥカドの換算比率との記述あり。4ラリンを1パルダオと勘定するとの記述あり。(モンスーン文書；ゴア版)</p> <p>イエズス会文書によれば、この年と1635年の両年の利益は、3,500バタカである。(アジュエダ図書館文書)</p> <p>この年にマニラ港に入港した日本発の船舶は1隻(明国船)と記述あり。(Les Philippines et le Pacifique des Ibzriques)</p> <p>1634年度の日本銅の輸出量は615,835カティ、輸出額は182,979：7：14グルデン、銅持渡船数は7。(平戸貿易と銅)</p>
1635年	<p>4月25日 マカオ政庁、日本から銀を不法に持ち運ぶ者たちを厳罰に処すべきとの訓告を発する。(モンスーン文書)*</p> <p>9月8日 ポルトガル白糸のパンカド価格は、チーリングで、1ピコル305テール(銀3貫50目)。第1ピチョウで280テール(銀2貫800目)、第2ピチョウで240テール(銀2貫400目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>9月8日 唐船白糸のパンカド価格は、チーリングで、1ピコル325テール(銀3貫250目)。第1ピチョウで305テール(銀3貫50目)、第2ピチョウで285テール(銀2貫850目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>9月11日 オランダ白糸のパンカド価格は、品等付記(平均値)で、1ピコル290テール(銀2貫900目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>9月 唐船白糸のパンカド価格は、チーリングで、1ピコル360テール(銀3貫600目)。第1ピチョウで340テール(銀3貫400目)、第2ピチョウで320テール(銀3貫200目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>10月20日 マカオの王室国庫管理官マヌエル・ラモス、いまだ多くのポルトガル人がレスポンデンシア貸借で違法に日本から銀を運び込むと記す。(モンスーン文書)*</p> <p>10月23日 マヌエル・ラモスはインド副王あての書簡に、シナ人は銀に大変価値をおくと記す。(モンスーン文書)*</p> <p>10月25日 フェルナン・ダリアス・デ・モラレスは数年前に日本から銀を持出しシナ人に渡したが、そのシナ人が約束を破ったため、牢獄に入り、支払いのためにすべてのものを売ったとの記述あり。(モンスーン文書)</p> <p>10月27日 ポルトガル人商人ラファエル・サルメントは、レスポンデンシア貸借の罪により、拘束される。(モンスーン文書)*</p> <p>10月30日 マヌエル・ラモス、日本への負債額は10万6,000テールほどあり、これによって貿易崩壊の危険性があると指摘する。(モンスーン文書)*</p> <p>10月30日 インド副王、ポルトガル人の日本に対する債務は、マカオ政庁がその支払いを強制したために状況が改善されたと記す。(モンスーン文書)*</p> <p>11月13日 ポルトガル船、1,200箱の銀貨と日本人の投銀30万テールを受取るとの記述あり。(ハーグ国立文書館日本関係文書)</p> <p>11月13日 オランダ人への灰吹き銀の輸出は禁止されていないがとだえており、クーケバッケルの書簡にこれまで受取ったスホイト銀を調べ、古い丁銀を2等としたとの記述あり。(ハーグ国立文書館日本関係文書)</p> <p>11月 オランダ白糸のパンカド価格は、品等付記(平均値)で、1ピコル266テール(銀2貫660目)。(オランダ商館長日記)</p>

西 暦 (年号 : 日本)	国 内
1635年(寛永12年)	
1636年(寛永13年)	<p>† 6月 幕府、寛永の新銭並びに古銭は、金子1両につき鑢銭4貫文とす。(徳川禁令考)</p> <p>松江藩主京極若狭守が銀山領を預かる。(山中家文書)</p> <p>石見銀山山役銀95貫658匁2厘。(山中家文書)*</p> <p>† 大坂相場、米1石につき銀43匁~50目。(三貨図彙)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1635年	<p>12月6日 ジャック船、スホイト銀115個。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月11日 マヌエル・ラモス、日本からのレスボンデシア銀を禁止するも、違反するものは後を絶たないと報告する。(モンズーン文書)*</p> <p>12月11日 マヌエル・ラモス、日本から銀を借受ける場合は、利率は28%~35%であると記す。またそれらの銀はさらに高利(45%~50%)でマカオにおいて取引されると記す。(モンズーン文書)*</p> <p>12月13日 マヌエル・ラモス、オランダ人は長崎商人の銀を、銅などの購入のためにインドのコーチンへ持ち運んでいると記す。(モンズーン文書)*</p> <p>12月13日 マヌエル・ラモス、かつての生糸1ピコルあたりの日本での卸値は16テールであったと記す。(モンズーン文書)*</p> <p>12月18日 スヒップ船グロルの積荷は日本のスホイト銀・ソマ銀・銅・銭・米・板・梁材等と記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月18日 ポルトガル人の日本からの航海は成功し、明国の糧のほかに114,000テールの収益を上げたと記述あり。(モンズーン文書)</p> <p>ポルトガル船は、生糸51,000斤(内白糸16,000斤・そのほか黄生糸・片撚糸35,000斤)絹織物273,000反を輸出し、日本銀15,000貫を輸出。(バタヴィア城日誌)</p> <p>オランダ東インド会社は広南金については極些少の利益を挙げたのみで、シャムでは金は広南より若干高値であるため、シャム-日本間の金貿易は利得ありと報告あり。(シャムのオランダ商館長ヨースト・スハウテンがワルモント号及びハイスダイネン号で、日本商館長のクーケバッケルに宛てた書簡)</p> <p>通貨単位バカタは、パルダオと同値記述あり。(アジュダ図書館文書)</p> <p>1635年度の日本銅の輸出量は802,799カティ、輸出額は238,636:11:4グルデン、銅持渡船数は7。(平戸貿易と銅)</p>
1636年㊦(崇禎9年) ㊦(崇徳元年)	<p>1月8日 ジャック船金目方50テール。(バタヴィア城日誌)</p> <p>1月31日 スヒップ船ワッセナール、銅、ヤハト船フェンホイセンとスヒップ船グロル、日本のスホイト銀(丁銀)、ソマ銀・銅・銭を積載する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>2月11日 マヌエル・ラモスの記録によると、多くのものが日本へ違法に銀を運び去りに向かった。(モンズーン文書)</p> <p>3月8日 マヌエル・ラモスの日本とマニラからの最初の航海が大変な成功を収め、明国生糸によって114,000テール、さらに2,450ピコルの銅の収益を上げた。(モンズーン文書)</p> <p>3月26日 スヒップ船ヘット・ワーベン・ファン・デルフト、日本スホイト銀10,000テール(100貫目)、銅11万1,362カティを積載する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>4月17日 スヒップ船アウデワートル、日本の銀1万テール、銅を積載する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>4月21日 日本人はスホイト銀(丁銀)100テール(1貫目)を純良銀83テール(830匁)と交換する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>4月21日 フロイト船ワルモント、ホイスダイネン、ラロプの積載はスホイト銀31万2,000テール(3,120貫)。(バタヴィア城日誌)</p> <p>9月5日 オランダ白糸のパンカド価格は、チーリングで、1ピコル305テール(銀3貫50目)、第1ピチョウで280テール(銀2貫800目)、第2ピチョウで240テール(銀2貫400目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>9月21日 唐船白糸のパンカド価格は、チーリング、1ピコル336テール(銀3貫360目)、第1ピチョウで315テール(銀3貫150目)、第2ピチョウで305テール(銀3貫50目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>9月27日 オランダ白糸のパンカド価格は、品等付記で、1ピコル267テール(銀2貫270目)。(オランダ商館長日記)</p>

西 暦 (年号 : 日本)	国	内
1636年(寛永13年)		
1637年(寛永14年)	<p>† 11月 6日 ポルトガル人商人トリスταν・タヴァレス、博多商人中野彦兵衛、伊藤小左衛門にレスポデンシア貸借で銀を借受け、証文を記す。(末次家文書)*</p> <p>石見銀山山役銀125貫883匁 8分。(山中家文書)*</p> <p><長登銅山>長登滝の下大切銅山、慶長年中に開坑され、黒磯淡路守就正が取立てに尽力。数年繁盛の後、湧水のために中絶し、藩の仕入れによって水抜きを図ったが失敗、寛永14年黒磯および地下に下げ渡された。(美禰郡銅山付立)</p> <p><仙台領金山>旧葛西領では山丘、河川、野谷の他、水田や畑からも砂金が採取された。唐桑村の寛永14年分年貢高は、田21貫971文、畑34貫323文であったが、このうち田代から521文、畑代から1貫400文あまりが毎年「御金山倒」として引かれていた。(日本鉱山史の研究)</p> <p><佐渡相川金銀山>この年、大坂から木原佐助という学者が佐渡に招かれ、「水上輪」という道具が伝えられたという。(佐渡国略記)</p> <p>† 大坂相場、米1石につき銀50匁～60目。(三貨図彙)</p> <p>2月18日 石銀地区に「一搜浄円禪□□」の銘のある一石宝篋印塔、4月18日 妙正寺に「道受靈」の銘のある一石宝篋印塔、(月未詳) 19日 妙本寺上に「経 為妙故靈位」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>	

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1636年㊤(崇禎9年) ㊤(崇徳元年)	<p>11月2日 ポルトガル白糸のパンカド価格は、品等付記で、1ピコル272.24テール(銀2貫722匁4分)。(オランダ商館長日記)</p> <p>11月26日 クーケバッケル、日本で18万ないし20万グルデンの銅銭を造らす。また、銅塊若干。ドイケルがこれを使用。黄金約30噸(金1噸は10万グルデン)の利益を上げる。(バタヴィア城日誌)</p> <p>明国、銭55文を銀1錢とする。(明史)</p> <p>日本人は東京でスホイト銀100テールを純良銀83テールと交換するとの記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>オランダ東インド会社、丁銀とオランダ・グルデンの換算率を丁銀1テール=3グルデン2スタイフェル8ペニングから丁銀1テール=2グルデン17スタイフェルに改める。(十七世紀日蘭交渉史)</p> <p>1636年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 842,000. トンキン 0. シャム 30,000. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 0. 計 872,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1636年度の日本銅の輸出量は667,434カティ、輸出額は193,436：19：10グルデン、銅持渡船数は8。(平戸貿易と銅)</p>
1637年㊤(崇禎10年) ㊤(崇徳2年)	<p>1月2日 マヌエル・ラモス、1636年度の広東における中国人との取引に要した費用は12,000テールであったと記す。またポルトガル人の日本に対する負債はマカオ政府が肩代りする可能性を示す。(モンスーン文書)*</p> <p>1月13日 ポルトガル、黄金60~70トン(1トンは100,000グルデン)を日本からマカオへ。オランダ人は多量の金をチンチュウよりタイオワンに輸入し、1テールの金を銀10テールまたは10.25テールで買い入れる。(バタヴィア城日誌)</p> <p>1月15日 平戸からタイオワンに入港したフロイト船ベッテンの銀120,000テールの価格は、448,255グルデン17スタイフェル5ペニングと記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>2月10日 スヒップ船ノールトワイク、スホイト銀8万テールで266,261グルデン18スタイフェル0ペニング、フロイト船ベッテン銀12万テールで448,255グルデン17スタイフェル5ペニング、合せて714,417グルデン15スタイフェル5ペニングの利益。長官はノールトワイクにスホイト銀5,000テール、銅板603ピコル98カティ、暹羅(タイ)へスホイト銀15,000テール、ゴッチス銅100ピコル30カティを渡す。(バタヴィア城日誌)</p> <p>2月10日 フロイト船ベッテンがタイオワンより広南に持ち込んだ日本の銅銭とスホイト銀15,000テールを、ジャンク船ディーメンよってバタヴィアで受取るとの記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>2月26日 最初の日本の貿易は116,000テール以上の利益を上げたが、キリシタン迫害の結果としてポルトガル人との貿易に対する封鎖が既に始まっており、その収益はほとんど失われているとのポルトガル人の記述あり。(モンスーン文書)</p> <p>2月 オランダ人、日本のソマ銀およびスホイト銀10,000テールないし12,000テールを、日本向け明国絹織物購入のためにタイオワンに留め置くとの記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>3月3日 フロイト船ベッテン、黄金1,722テール1マース、銅、錫を運ぶ。日本銅銭と日本スホイト銀1万5,000テール受取る。(バタヴィア城日誌)</p> <p>4月19日 ジャンク船、中国スホイト銅貨5,000テール、日本銅100ピコルを積載する。スヒップ船ノールトワイクにスホイト銀1万テール(100貫目)。(バタヴィア城日誌)</p> <p>4月22日 ロマン・デ・レモスはマカオの王室国庫管理官職をマヌエル・ラモスから引き継ぐ。これに際しインド副王は、ロマン・デ・レモスに日本との貿易取扱いに関し諸注意を与える。(モンスーン文書)*</p> <p>4月28日 ヤハト船グロル、日本スホイト銀6万テール、ゴッチ銅300ピコル、上等棒鉄200ピコルを積載する。別に日本スホイト銀5万テール、ゴッチ銅500ピコル、上等棒鉄300ピコル、日本銅銭3,015,000枚あり。フロイト船ズクーン、日本スホイト銀25万テールを積載する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>4月28日 長崎では銀の吹き替えをしないので、スホイト銀10,000ないし12,000テールは注文に応ずることができない。(バタヴィア城日誌)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1637年(寛永14年)	
1638年(寛永15年)	<p>2月24日 杉田九郎兵衛 (寛永15~18年)、長野源左衛門等地役人に諸間歩の状況報告を請け、諸山の稼業を奨励する。(長野家文書)*</p> <p>4月 <南部繫金山>この年に赤沢村の内に繫金山が発見された。4月から5月にかけて次々と請負の入札が行われ、稼行人が交替した。朴山一帯の山を水源とする砥が瀬川・曾が沢・中沢・八木沢などでは近世以前より砂金が産出されていたが、砂金を追って水源地帯に遡り、富鉱地帯が発見されるに及んで朴や繫のような金山の興隆がみられた。(北村家文書)</p> <p>†10月6日 ポルトガル商人ペドロ・フェルナンデス・デ・カルヴァーリョ、博多商人末次宗徳にレスポнденシヤ貸借で銀を借受け、証文を記す。(末次家文書)*</p> <p>11月13日 杉田九郎兵衛 (寛永15~18年) が、長野源左衛門等地役人に産銀量の減少の状況について報告させる。(長野家文書)*</p> <p>杉田九郎兵衛 (知行900石) が石見銀山奉行となる。(山中家文書)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
<p>1637年㊦(崇禎10年) ㊦(崇徳2年)</p>	<p>4月28日 ヤハト船グロル、スホイト銀11万テール、フロイト船ラロブ、スホイト銀14,000テール、銅708ピコル40カティ、鉄1,250ピコル49カティを積載する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>4月28日 商館長クーケバッケル、日本ソマ銀及びスホイト銀1万テールないし1万2千テール。金の重量10テールに対し銀10テール以上を与えないと記す。(バタヴィア城日誌)</p> <p>4月28日 日本人は毎年スホイト銀25万ないし30万テールを携えてくる。(バタヴィア城日誌)</p> <p>4月29日 会社は東京で日本のスホイト銀100テール(1貫)を純良銀82.5テール(825匁)に精錬して生糸購入。(オランダ商館長日記)*</p> <p>9月19日 ポルトガル白糸のパンカド価格は、品等付記で、1ピコル200テール(銀2貫目)と思われる。(オランダ商館長日記)</p> <p>9月27日 ポルトガル白糸のパンカド価格は、チーリングで、1ピコル285テール(銀2貫850目)、第1ピチョウで260テール(銀2貫600目)、第2ピチョウで220テール(銀2貫200目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>10月3日 ポルトガル白糸のパンカド価格は、品等付記で、1ピコル209テール(銀2貫90目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>11月9日 オランダ白糸のパンカド価格は、品等付記で、1ピコル252テール(銀2貫520目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>11月14日 ポルトガル白糸のパンカド価格は、品等付記で、1ピコル287.39テール(銀2貫873匁9分)と思われる。(オランダ商館長日記)</p> <p>12月31日 沈没した船からイエズス会の神父は救出されたが、修道士1人、司祭1人は溺死。細工の施された銀のうち3,000パタカ以上の財産を失った者もありと記される。(モンズーン文書)</p> <p>この時、雲南の銀鉱の銀産量は全国の大半を占める。(天工開物)</p> <p>明国に輸入された日本銅に、銀が混じっている。(天工開物)*</p> <p>日本商人は東京で日本のスホイト銀100テール(1貫)を純良銀83テール(830匁)に精錬して生糸購入。(バタヴィア城日誌)*</p> <p>ポルトガル人、明国商品をマカオから日本へ輸出して得られる利潤はこの時も100%。(バタヴィア城日誌)</p> <p>この年までは日本とタイワンにおいて異なった金銀の比価が与えられていたため、タイワンで金を買うほうがより有益。(バタヴィア城日誌)</p> <p>1637年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 922,000. トンキン 160,000. シャム 36,000. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 15,000. 計 1,133,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p>
<p>1638年㊦(崇禎11年) ㊦(崇徳3年)</p>	<p>1月4日 マカオ王室国庫管理官ロマン・デ・レモス、聖パウロ学院内に王室国庫の金庫を設置したことをインド副王に報告する。(モンズーン文書)*</p> <p>1月4日 日本人は去年から非常に高い値段で商品を買っているという、マカオ政府の記述あり。(モンズーン文書)</p> <p>3月10日 日本人に対する負債に起因する資金不足で、マカオ政庁が広東市場取引のために王室国庫に援助金を求めるが、これに対しポルトガル領インドの各首脳は反対を表明する。(モンズーン文書)*</p> <p>8月31日 オランダ人が日本で獲得する銀についてのインド副王の報告あり。(モンズーン文書)</p> <p>9月6日 ポルトガル白糸のパンカドは、チーリングで、1ピコル315テール(銀3貫150目)、第1ピチョウで290テール(銀2貫900目)、第2ピチョウで250テール(銀2貫500目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>9月 明国、銀銭比価は錢800文=銀1両である。(山書)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1638年(寛永15年)	<p>石見銀山山役銀60貫779匁5分。(山中家文書)*</p> <p>杉田九郎兵衛、石見国銀山の代官を勤むという。(寛政重修諸家譜)</p> <p><生野銀山>金木山元の孫左衛門と金石間歩の中島次郎兵衛との間に入出りがあり、孫左衛門は金木を返上、金石も浸水のため作業を中止。(生野銀山旧記)</p> <p><生野銀山>奉行中野吉兵衛が幕府の許可を得て竹野原の大水抜を切り、5月に着工、9月に成就した。(生野銀山旧記)</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀50匁~60目。(三貨図彙)</p> <p>12月15日 妙正寺に「妙閻尼」の銘のある一石五輪塔、11月8日 龍昌寺に「為林徳□□禪定門」の銘のある一石五輪塔あり。</p>
1639年(寛永16年)	<p>†海上銀、言伝銀などのいわゆる投銀を停止。(長崎御役書留)</p> <p>石見銀山山役銀42貫725匁3分。(山中家文書)*</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀32匁~35目。(三貨図彙)</p> <p>高野山過去帳に2月17日「石金本谷 為父=原助七立之」とあり。</p> <p>12月11日 龍源寺間歩上に「寿光□□信士□ (ベンガラ)」の銘のある一石宝篋印塔、9月9日 龍昌寺に「[] 禪定門」の銘のある一石五輪塔あり。</p>
1640年(寛永17年)	<p>10月 <出羽延沢銀山>惣山師が、寛永14年以来、江戸表で留山解除を祈願してきたが、この年、ようやく幕府に聴許され、翌18年3月より稼行することを命じられた。(野辺沢銀山大盛記)</p> <p>11月 <秩父又の沢金山>甲斐黒川金山の金山衆が、出羽延沢銀山とともに幕府によって留山とされていた武蔵国奥秩父の又の沢金山の開発を願い出る。(広瀬家文書)</p> <p>石見銀山山役銀32貫12匁2分。(山中家文書)*</p> <p><薩摩山々野金山>薩摩の山々野金山が発見され、鹿児島藩主島津久通より、日出木下藩主に宛てて、熟練鉦夫30名位を譲って欲しいと親書を送った。その身分は一般とは区別され郷土とし、広い屋敷地と家が約束された。木下藩主はこれ対し、馬上金山の鉦夫頭佐藤伊兵衛に人選を命じたとされる。(日出町史)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1638年Ⓜ(崇禎11年) Ⓜ(崇徳3年)	<p>10月12日 オランダ白糸のパンカド価格は、品等付記で、1ピコル285テール（銀2貫850目）。（オランダ商館長日記）</p> <p>11月7日 ポルトガル白糸のパンカド価格は、品等付記（平均値）で、1ピコル360.6テール（銀3貫606目）。（オランダ商館長日記）</p> <p>11月30日 アマウロ・ロドリゲス、日本交易においてオランダ人はポルトガル人にとって代りつつあり、日本人の歛心を得るために、日本人から高利で貸付られる銀を受取っていると記す。（モンズーン文書）*</p> <p>11月30日 タイオワンでは、銀や胡椒などと交換で中国にある商品をもってくるといふ商業形態。（モンズーン文書）</p> <p>11月30日 オランダ人のチュンキン王国から日本への4回目の船旅では、利率34%で日本人からの投資銀を受取った。これは大量の銀が扱われる平戸港への入港の許可を得るためであった。（モンズーン文書）</p> <p>この年と次の年、米1斗につき銭3百文で、銀1銭8、9分にあたる。（閱世編）</p> <p>私鑄銭が流行し、銭質が悪化したため、この年の夏、銭の対銀比価は銭1,000文対銀6銭。（閱世編）</p> <p>オランダ人、銀3万8千文と多数の商品を載せて中国に来て密貿易を行う。その商品価格は赤絨24尺＝銀銭280文、黒絨16尺＝銀銭128文。（明清史料）</p> <p>ポルトガル船が金545匁8分を輸入、この売買は金1銀14.2。（オランダ商館長日記）</p> <p>1638年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 1,586,000. 92.4% トンキン 130,000. シャム 0. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 0. 計 1,716,000（テール評価）。（オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察）</p>
1639年Ⓜ(崇禎12年) Ⓜ(崇徳4年)	<p>9月11日 唐船白糸のパンカド価格は、チーリングで、1ピコル340テール（銀3貫400目）。第1ピチョウで325テール（銀3貫250目）、第2ピチョウで305テール（銀3貫50目）。（オランダ商館長日記）</p> <p>10月17日 オランダ白糸のパンカド価格は、品等付記（平均値）で、1ピコル294テール（銀2貫940目）。（オランダ商館長日記）</p> <p>10月 マカオでは必要なら銀10万テールを日本で借用することが許される。（モンズーン文書）</p> <p>12月4日 日本-マカオ間の貿易崩壊でポルトガル人は日本貿易から排除されたと記述あり。（モンズーン文書）</p> <p>ポルトガル人追放令で日本人がポルトガル人にした投銀70万テールは返済されない。（ハーグ国立図書館日本関係文書）</p> <p>オランダ東インド会社の年間銀輸出力が最大を記録する（輸出力26,000貫）。（<i>Negotie Journaal</i>）</p> <p>この頃（1630年代）、明国各地の金銀比価は金1両＝銀10両。（日知録集訳）</p> <p>1639年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 2,458,000. トンキン 25,000. シャム 0. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 25,000. 計 2,508,000（テール評価）。（オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察）</p>
1640年Ⓜ(崇禎13年) Ⓜ(崇徳5年)	<p>4月17日 マカオ総司令官、マニラ総督宛ての書簡で、日本交易の終焉による銀の不足でマカオが蒙っている窮状について記す。（モンズーン文書）*</p> <p>4月17日 日本との貿易はオランダ人に任せられ、その結果マカオは全面的に荒廃すると記述あり。（モンズーン文書）</p> <p>7月10日 幕府からカロンはスホイット銀200枚を受取る。（バタヴィア城日誌）</p> <p>8月2日 処刑されることになったポルトガル人所有のスホイット銀9,000テールがガレオタ船に積まれた。（バタヴィア城日誌）</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国	内
1640年(寛永17年)	†大坂相場、米1石につき銀30匁～36目。(三貨図彙) 龍源寺間歩上に「経 妙 []」の銘のある一石宝篋印塔あり。	

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1640年㊤(崇禎13年) ㊤(崇徳5年)	<p>9月11日 平戸商館評議会はコロマンデルとスラット向けに銀600箱(1,710,000グルデン相当)をできる限り最小の利率と期間で京・大坂ならびに堺で借入れることを決議。(オランダ商館長日記)*</p> <p>10月8日 唐船白糸のパンカド価格は、品等付記(平均値)で、1ピコル310テール(銀3貫100目)と思われる。(オランダ商館長日記)</p> <p>10月12日 平戸商館評議会はスラット向け輸出銀の半額は金を当てることを決議。(オランダ商館長日記)*</p> <p>11月4日 唐船白糸のパンカド価格は、チーリングで1ピコル315テール(銀3貫150目)。第1ピチョウで290テール(銀2貫900目)、第2ピチョウで246テール(銀2貫460目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>11月10日 上級商務員ハルツィンクと商務員ミュラー、上方より1,590貫のインド向け資金(内1,250貫余は判金。小判1枚丁銀62匁、大判1枚455匁)を平戸商館に持ち帰る。価格は妥当。月利2～2.5%。(オランダ商館長日記)*</p> <p>11月15日 オランダ白糸のパンカド価格は、品等付記(平均値)で、1ピコル268テール(銀2貫680目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>11月19日 唐船白糸のパンカド価格は、チーリングで1ピコル340テール(銀3貫400目)。第1ピチョウで310テール(銀3貫100目)、第2ピチョウで280テール(銀2貫800目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>11月 長崎には銀が少なく、明国人はこの地での貿易で損失を出すとの記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月4日 大目付井上筑後守政重、平戸藩主松浦鎮信に会社の金輸出を停止させる。解禁は江戸からの指示待ち。(オランダ商館長日記)*</p> <p>12月6日 フロイト船デ・ロホ、スホイット銀(丁銀)385箱を積載する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月6日 スヒップ船デ・パーウ 日本スホイット銀1万テール(1万匁)を積載する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月6日 明国船にスホイット銀300箱を渡す。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月6日 コロマンデル・スラットより黄金20トンの注文。大部分は黄金で、不足はスホイット銀で。ところが目方6,202テール1マース=21万6,481グルデン9ストイフェルの黄金しかない。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月6日 日本より注文の錫2,000ピコルに対し、中国より400ピコルないし600ピコルを得んとする。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月21日 明国よりジャンク船、スホイット金35個を搬入する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月27日 日本よりフロイト船、スホイット銀220箱を搬入する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月31日 銅は依然高値で1ピコル(百斤)20テールであるが禁輸である。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月31日 日本における為替。金は1日で小判1枚につき3、5、7、8ないし9コンドリンないし1、2～3マース(匁)騰貴する。金の両替は小判は6マース2コンドリンにて、大判は48テール及び47テールを45テール5マースで。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月31日 日本より黄金35ないし36トンを送るのは金銀98万894グルデンを得るにすぎない。スラットの注文は黄金10トンだが40箱分とフロイト船デ・ロホの100箱を合せても、スホイット銀14万テール=399,000グルデンにしかならない。(バタヴィア城日誌)</p> <p>この時、銭の対銀比価は銭1,000文対銀4、5銭。(閱世編)</p> <p>オランダ東インド会社の年間銀輸出货量が前年度に比べ半減する(輸出货量11,800貫)。(Negotie Journaal)</p> <p>1640年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 1,100,000. トンキン 80,000. シャム 0. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 0. 計 1,180,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p>

西 暦 (年号 : 日本)	国 内
1641年(寛永18年)	<p>5月 <白根金山>青山庄左衛門は四枚山惣水抜普請を願い出て、明暦年間まで二代に渡って施工した。これを根田四枚山上中下惣平十一口の水抜と称し、この疏水坑によって水坪となっていた11間歩の排水を企図した。(四枚山には四枚間歩・三十一枚間歩・金剛間歩(2口)・化敷(2口)・鉛間歩・菱沢間歩・五両敷などがあった。(青山字白根史蹟)</p> <p>11月26日 龍源寺間歩上に「経 □法院宗春」の銘のある宝篋印塔あり。</p> <p>杉田九郎兵衛奉行在任中、銀山境界の木柵を垣松に改めるといふ。(石見銀山旧記)*</p> <p>杉田九郎兵衛にかわり、杉田六之助が石見銀山奉行となる。(山中家文書)</p> <p>石見銀山山役銀29貫340目。(山中家文書)*</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀48匁5分。(三貨図彙)</p> <p>高野山過去帳に5月20日「栃畑 為母 佐藤源二郎建之」とあり。</p>
1642年(寛永19年)	<p>3月27日 代官杉田六之介(助)、銀山領内の吉永銅山・銅ヶ丸銅山の稼業を奨励する。(長野家文書)*</p> <p>10月25日 <白根金山>青山庄左衛門が銅平間歩一口を4~5年間普請の結果、金鉾脈に当たり、切取日前15ヶ日を与えられた。この普請は4、5ヶ年におよんだといふ。(青山家白根史蹟)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海	外
1641年㊤(崇禎14年) ㊤(崇徳6年)	<p>1月6日 フロイト船オーストカッペル、銀1万テール、輸送に失敗。(バタヴィア城日誌)</p> <p>1月29日 フロイト船、金目方348テール7マース(3貫487匁)を輸送する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>1月 明の崇禎帝、沿海民の日本交通を厳禁させる。(関世編・明清史料)</p> <p>2月14日 フロイト船ブラハト、タイオワン商館あて銀1,000テール1箱、2,000テール入り800箱。(バタヴィア城日誌)</p> <p>2月15日 中国商人は金19ないし20カラットのスホイト金65及び平板金の見本3枚持ち込む。重量100テールに対し純銀110テール。(バタヴィア城日誌)</p> <p>5月16日 オランダ東インド総督ファン・ディーメン、長崎商館長ル・メールに金輸出解禁交渉を指示。理由は、タイオワンでの金入手が困難なので、コロマンデル貿易用に不足分を日本金で補うため。(オランダ商館長日記)*</p> <p>6月26日 日本銀は東インドのあらゆる場所で需要があるため、日本市場の低況に拘らず、羊毛製品を日本に送る。(オランダ商館長日記)</p> <p>6月26日 タイオワンへは日本米よりも日本銀・金の供給を優先せよとオランダ東インド総督が命令する。(オランダ商館長日記)</p> <p>6月26日 日本に来た鄭芝龍の3隻の貿易船、搬入貿易品の中に生糸は4万斤以上、各種紡績品は14万匹以上。(長崎オランダ商館長日記)</p> <p>8月3日 長崎奉行が既にオランダ人、中国人向けの金製品製作を禁止したとの情報が長崎商館にもたらされる。(オランダ商館長日記)*</p> <p>8月11日 大目付井上筑後守政重、長崎商館長に金・金製品および人参の輸出禁止を言い渡す。(オランダ商館長日記)*</p> <p>8月12日 オランダ東インド会社の小判・1分金、個人持ちの金製品等を記帳、銀と交換して輸出のこと。(オランダ商館長日記)</p> <p>8月14日 長崎奉行、長崎商館長に外国人による輸出禁止項目を布達。金・金製品、銅・銅製品、硫黄、火薬、船用糧食以外の米穀類、人参、城郭などを描いた漆器・屏風、その他。(オランダ商館長日記)*</p> <p>8月19日 出島入り口に金製品・武器などの輸出禁止を記した高札が立つ。(オランダ商館長日記)*</p> <p>9月11日 オランダ白糸のパンカド価格は、チーリングで1ピコル245テール(銀2貫450目)。第1ビチョウで225テール(銀2貫250目)、第2ビチョウで195テール(銀1貫950目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>10月19日 フロイト船、日本スホイト銀12万テール(1,200貫目)を搬入する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>10月21日 唐船白糸のパンカド価格は、チーリングで1ピコル260テール(銀2貫600目)。第1ビチョウで235テール(銀2貫350目)、第2ビチョウで205テール(銀2貫50目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>オランダ船は黄金80トン売り、銀貨14,000櫃を日本から輸出するとの記述あり。(シーボルト交通貿易史)</p> <p>タイオワンでの中国商品に対する日本銀の投資額は約510万グルデン。(オランダ商館長日記)</p> <p>オランダ東インド会社の年間銀輸出货量が前年度に比べ3分の1に減じる(輸出货量3,990貫)。(Negotie Journaal)</p> <p>1641年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 1,112,000、トンキン 0、シャム 0、バタヴィア 0、マラッカ 0、その他 0、計 1,112,000(テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p>	
1642年㊤(崇禎15年) ㊤(崇徳7年)	<p>1月26日 タイオワンにおいて17または18カラットの黄金10テールの対価は、銀96テール、一部は94テールと記述あり。(バタヴィア城日誌2)</p> <p>1月26日 黄金の目方10テールに対し、大部分は銀96テール、一部は94テール。22万5,953グルデン13ストイフェルの黄金はコロマンデルへ。(バタヴィア城日誌)</p>	

西 曆 (年号: 日本)	内 容
1642年(寛永19年)	<p>杉田又兵衛が銀山奉行となる。(山中家文書)</p> <p>石見銀山山役銀27貫160目3分。(山中家文書)*</p> <p><越中虎谷金山> 寛永19年分運上は銀600目。翌20年～正保2年までは不明、正保3年分は200目、正保4～慶安4年は40目、承応元年～寛文3年までの間では、万治2年分の300目が記されるのみ。(越中鉱山雑誌)</p> <p>† 大坂相場、米1石につき銀54匁～60目前後。前年及び本年飢饉なり。(三貨図彙)</p> <p>高野山過去帳に7月21日「石金本谷 佐伯六右衛門」とあり。</p> <p>4月16日 妙本寺上に「帰現浄口信士」の銘のある一石宝篋印塔、9月3日 龍昌寺「幻事童子」の銘のある一石五輪塔あり。</p>
1643年(寛永20年)	<p>1月 <白根金山> 南部藩はクリンタン探索のため白根金山の留山を命じた。一切の稼行が停止されたため、6月までに金掘などの餓死人が1,200人にも達し、逃亡する者も多かったため、青山庄左衛門は山中一同とともに、金山の再開を請うて、クリンタン改めを徹底するために、他領より山師・大工・掘子はひとりも入れず、山中の者の組合(五人組)を結成し、帳面に載せたのみで稼行することを提言した。(青山字白根史蹟)</p> <p>石見銀山山役銀24貫165匁。(山中家文書)*</p> <p><備中小泉銅山> この年より5ヶ年切りで、大坂天野屋新右衛門が吉岡と小泉の銅山を請負う。運上は出来銅10貫につき銅500匁。運上の秤定は、吹屋・小泉のそれぞれの庄屋が、運上銅100貫につき銀3匁を受取っていた。(元禄八年覚留書)</p> <p><佐渡相川金銀山> 近年金銀山の衰えが激しく、餓死者が増すなどしたため、その救済のため割間歩を御直山として普請を始め、難儀の者を人夫に遣い、1日に5合宛ての扶持を渡すべき旨、江戸在勤の佐渡奉行伊丹播磨守より指示がある。(佐渡年代記)</p> <p>† 大坂相場、米1石につき銀30目～45匁。(三貨図彙)</p> <p>7月26日 妙本寺上に「経 宗清」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1644年(寛永21年) (正保元年)	<p><生野銀山> 奉行中野吉兵衛が、友松道半に命じ金木を再興し、大盛を得る。(生野銀山旧記)</p> <p>石見銀山山役銀21貫150目。(山中家文書)*</p> <p>1ヶ年分公納鍵御払代大谷紺屋後山分銀1,700枚、大谷甘南備山分銀1,200枚、大谷横相分銀1,100枚、大谷小山分銀1,000枚。(山中家文書)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1642年㊤(崇禎15年) ㊤(崇徳7年)	<p>1月28日 明国から明国鉄200ピコル搬入。1ピコルの価は2リアル半。(バタヴィア城日誌)</p> <p>6月28日 オランダ東インド総督ファン・ディーメン、長崎商館長エルセラックに、タイオワンで日本銀が欠乏しているため、カンボジア・シヤムへの銀輸出抑制を指示。(オランダ商館長日記)*</p> <p>6月28日 オランダ東インド総督ファン・ディーメン、長崎商館長エルセラックに、会社は銀産国日本との貿易継続を切望と書き送る。(オランダ商館長日記)</p> <p>6月28日 総督ファン・ディーメン、長崎商館長エルセラックに、コロマンデルより返送された贋造スホイット銀について長崎の官憲に知らせるよう指示。(オランダ商館長日記)*</p> <p>9月4日 オランダ白糸のパンカド価格は、第1ピチョウで1ピコル255テール(銀2貫550目)、第2ピチョウで225テール(銀2貫250目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>9月10日 オランダ白糸のパンカド価格は、第1ピチョウで1ピコル295テール(銀2貫950目)、第2ピチョウで265テール(銀2貫650目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>10月16日 唐船白糸のパンカド価格は、品等付記(平均値)で、1ピコル260テール(銀2貫680目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>11月21日 日本からタイオワンへ銀2,229,926グルデン9ストイフェル0ペニング。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月18日 フロイト船デ・ザイエル・カストリウム、日本銀2万テール(200貫目)を搬入。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月21日 マカオは日本との貿易を失い、シナ銀が日本銀にとって変わった。(モンスーン文書)</p> <p>明国において銭価は低く、銭の対銀比価は銭1,000文対銀4銭余り。米1石につき銀5両で、銭1万2千にあたる。その後、米価は常に2、3両となる。(閱世編)</p> <p>1642年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 321,000. トンキン 60,000. シヤム 18,000. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 0. 計 399,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p>
1643年㊤(崇禎16年) ㊤(崇徳8年)	<p>7月4日 ブラス島の者がジャンク船で、長崎の住民より日本スホイット銀307テール、黄金目方10テール(百匁)受取る。(バタヴィア城日誌)</p> <p>11月7日 唐船白糸のパンカド価格は、品等付記で、1ピコル300テール(銀3貫目)。(オランダ商館長日記)</p> <p>12月2日 大阪の藤左衛門殿の銅・銅銭の輸出は大変有望である。(バタヴィア城日誌)</p> <p>明代、都の銭価は銀1両=銭600文前後で変動するが、崇禎以降、銭価は暴落し続け、この年に銀1両=銭2千数百文に下がる。(続文献通考・花村談往補遺)</p> <p>この頃、明国銭質が更に悪化し、銭の対銀比価は銭1,000文対銀3銭。(閱世編)</p> <p>この頃、明国張守清が銀の採掘を無断で行う。(明史紀事本末)</p> <p>1643~1644年にインドのスラットへ輸入された銀(26,795kg)に占める日本銀の割合は19%(5,031kg)。(スラットに輸入された現金および商品の仕訳帳)</p> <p>1643年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 356,000. トンキン 100,000. シヤム 17,000. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 0. 計 473,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p>
1644年㊤(崇禎17年) ㊤(順治元年) ㊤(仁祖22年)	<p>4月4日 清国人は日本のスホイット銀を喜ぶので、スホイット銀100テールを常に112リアルと定めたと記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>7月26日 清国、銭銀の市価は銭1,080文=銀1両。(明清檔案)</p> <p>7月 清国の銅銭の対銀比価は銭7文対銀1分、銅銭の価格は日増しに高くなる。(清世祖実録)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1644年(寛永21年) (正保元年)	<p>1ヶ年分公納鍵御払代 (大谷岩屋堂山分) 銀1,000枚。(山中家文書)</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀30目~31、2匁。(三貨図彙)</p> <p>(月未詳)17日 妙本寺上に「為 [] 信士」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1624-1644年 (寛永年間)	<p>8月20日 龍源寺間歩上に「為月 []」の銘のある一石宝篋印塔、(月日未詳)石銀地区に「為 清富 念禪定門菩薩也」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p> <p>妙本寺上に「経為宗□ [] (欠損)」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1628-1644年 (寛永5-正保元年)	
1645年(正保2年)	<p>4月1日 杉田又兵衛、石見国銀山の代官となり、京師に住まうという。(寛政重修諸家譜)</p> <p>6月 <白根金山>青山庄左衛門が弥兵衛間歩を日前3ヶ月、運上金20匁で請けた。(青山家白根史蹟)</p> <p>7月 <白根金山>青山庄左衛門は地藏沢周平惣水抜普請の許可を得て、翌8月より稼行した。その目的は米代川の端縁から切り入って、古間歩の排水を行うことであった。正保4年10月には、そのうちの加賀七兵衛間歩の水抜きに成功した。(青山家白根史蹟)</p> <p>7月 <佐渡相川金銀山>御直山として樋25艘を仕掛けて稼行されてきた割間歩も収支償わず、休山の危機に瀕していた。休山となっては諸人が難儀するということで、奉行所から山主味方孫大夫(味方但馬の子孫)に働きかけて、自分山としての再興を試みさせた。味方の自分入用による樋5艘を加えて都合32艘とし、排水を行って稼行したところ、この年7月より10月当たり3,000~4,000荷の産出があり、山主はもちろん相川市中も救われたという。(佐渡年代記)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1644年㊤(崇禎17年) ㊤(順治元年) ㊤(仁祖22年)	<p>9月11、12日 長崎商館は丁銀50テール(500匁)の紙包一つにつき豆板銀5マース(5匁)以上入れないよう京都商人に要望。交渉の結果、丁銀50テール(500匁)の紙包一つにつき豆板銀5テール(50匁)で合意。(オランダ商館長日記)*</p> <p>10月27日 ヤハト船、スホイト銀7万5,000テール(750貫目)、2万5,000テール(250貫目)は別輸送にする。(バタヴィア城日誌)</p> <p>10月 ^{トンキン}東京へ向けて商館員はスホイト銀135,000テール(1,350貫目)積み出す。内122,400テール(1,224貫目)は来年用。(バタヴィア城日誌)</p> <p>11月3日 北京において米1斗が銀3銭に当たる。(仁祖実録)</p> <p>12月12日 フロイト船デン・ザイエル 日本スホイト銀25,000テール(250貫目)、赤銅板19枚搬入する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>明朝、銀鉞を採掘させたが、採算合わず。(明書)</p> <p>本来、黄錢(京錢)70文=銀1銭、皮錢(地方錢)百文=銀1銭であったが、この頃、京錢百文=銀5分、皮錢百文=銀4分になる。(続文献通考)</p> <p>綿百斤の値段は錢2千文=銀5、6銭。(閱世篇)</p> <p>清初、銀の対錢比価を銀1両：錢1,000文とした。(清史稿)</p> <p>清初、重さ1銭の銅錢を鑄造し、錢7文=銀1分としたが、以降頻繁に変更し、銀の対錢比価は固定せず。(清文献通考・皇朝政典類纂)</p> <p>豆板銀は普通の丁銀の品質より100分の2劣る。(バタヴィア城日誌)</p> <p>タイオワン人は砂金目方17リアル10分の7を買い入れ、鉄を交換に出す。鉄1ピコルに21および22カラットの砂金目方1リアルを与えた。(バタヴィア城日誌)</p> <p>1644年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 524,000. トンキン 160,000. シャム 0. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 0. 計 684,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p>
1624-1644年	
1628-1644年 ㊤(崇禎年間)	<p>鄭芝龍、日本との特殊関係で日本貿易を発展。(台湾通志)</p> <p>崇禎年間、本来銀1両=錢1,200文という比価は1両=2,500文に上がり、米1石の価格は1両から2、3両に上がる。(閱世篇)</p> <p>明国では銅錢を使う地域は銅不足のために全国の10分の2にも及ばない。(春明夢余録)</p>
1645年㊤(弘光元年) ㊤(順治2年)	<p>1月14日 フロイト船カペルレ、スホイト銀25,000テール(250貫目)搬入する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>1月16日 ヤハト船ハーリンク・ワーケンデ・ブーイ、日本スホイト銀6万テール(600貫目)搬入する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>1月16日 フロイト船カペルレ、スホイト銀一切(81箱)、不足分リアル貨1,000マルコ(1マルコは245グラム)と報告する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>3月11日 クエル船デン・ハーゼウィント 黄金目方1,801テール9マース(18貫19匁)。(バタヴィア城日誌)</p> <p>3月11日 日本スホイト銀(丁銀)100テール(1貫目)は115リアルすなわち精良銀84テール6マース8コンドリ、リクスダールデルまたはイスパニアのリアル貨100枚は各73テールにあたるとの記述あり。(バタヴィア城日誌)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1645年(正保 2 年)	<p>石見銀山山役銀24貫67匁。(山中家文書)*</p> <p>† 大坂相場、米 1 石につき銀30目。(三貨図彙)</p> <p><生野銀山> 友松道半、川戸で二挺並びの樋立による排水を実施し大鉞を切り出す。殊に川戸のうちの池田屋所で、一荷80~90匁、五郎兵衛所で50~60匁の銀鉞を採取した。(生野銀山旧記)</p> <p>高野山過去帳に 5 月 14 日「析畑 為長野忠兵衛 老母建之」とあり。</p>
1646年(正保 3 年)	<p>12月 7 日 <南部平栗金山> 佐比内の内、平栗金山の試掘を、横町の三右衛門(北村氏) が願い出て認められた。日前は 3 ヶ月で、鉞脈に着けば、金体に応じ切取の日前を遣わすという条件であった。(北村家文書)</p> <p>石見銀山山役銀21貫735匁。(山中家文書)*</p> <p>† 大坂相場、米 1 石につき銀26匁~28匁。(三貨図彙)</p> <p>† 1646-1662年、長崎に来航した中国船は延べ641隻。(長崎実録大成)</p> <p>† この年、銭の対銀比価を銭10文 : 銀 1 分とする。(長崎実録大成)</p> <p>† オランダ船 5 隻に銅4,160.03ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>5 月 妙本寺上に「為□□妙□□」の銘のある宝篋印塔あり。</p>
1647年(正保 4 年)	<p><佐渡相川金銀山> この年相川に大火災が起き、632戸が消失した。これは当時の相川の家数1,700の 3 分の 1 を越えた。(佐渡年代記)</p> <p>石見銀山山役銀20貫385匁。(山中家文書)*</p> <p>† 大坂相場、米 1 石につき銀24匁~36匁。(三貨図彙)</p> <p>† 1601年から1647年までの間、日本から輸出された銀は7,480万両あまり。(本朝宝貨路用史略)</p> <p>† オランダ船 4 隻に銅4,623.05ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1645年㊤(弘光元年) ㊤(順治2年)	<p>3月11日 銀は清国良貨1テールを71ストイフェルに換算、レアル及びリクスダールデルは50ストイフェル3ペニング替、精良銀1テールは68ストイフェル12ペニングと定め、1テールは1,100ペニング、1マースは110ペニング、また1コンドリンは11ペニングとなるとの記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>3月11日 精鍊してソマ銀73テールすなわち精良銀100レアルにするには、オランダのダールデル107個、リクスダールデル105個半、クロイスダールデル114個10分の1、イスパニアのレアル109個16分の15、スホイト銀93テール3分の1、クローネンすなわち軽ダールデル126個4分の3必要との記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>清国、錢7枚を銀1分に準じると規定され、その後錢価は高かったため、錢10枚：銀1分と改定される。(清史稿・清文献通考)</p> <p>この頃、明朝の錢が通用しなくなり、錢価は千文につき銀1錢2分で、銅価にも及ばない。(閱世編)</p> <p>清国、重さ1錢の銅錢を1錢2分に改定し、錢の対銀比価を錢7文：古錢14文：銀1分とする。(清文献通考・皇朝掌故彙編)</p> <p>清政府、商人の日本貿易を積極的に進める。(皇朝掌故匯編)</p> <p>1645年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 615,000. トンキン 150,000. シャム 0. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 0. 計 765,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p>
1646年㊤(隆武元年) ㊤(紹武元年) ㊤(順治3年)	<p>5月 清国では旧錢の価格は日増しに安くなるので、回収される。偽銀と含有量の低い銀の使用を禁止。(清世祖実録・清朝文献通考)</p> <p>11月15日 ほぼ銀のみに依拠していた清国との交易は、その原価の高騰、日本とマニラとの交易の断絶によって損害を受けたとの記述あり。(モンズーン文書)</p> <p>清国では、米1斗につき錢1,000文近くになる。(閱世編)</p> <p>カルディンによる日本イエズス会の報告において、日本とマカオの交易が失われたことに起因して、日本管区(マカオ)もまた窮状に直面していると報告される。この時点での日本管区の債務は40,000スクード。(ARSI)*</p> <p>1646年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 299,000. トンキン 130,000. シャム 30,000. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 0. 計 459,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1646年度の日本銅の輸出量は424,246カティ、輸出額は103,067グルデン、単価は1ピコルあたり8テール、9テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>
1647年㊤(永曆元年) ㊤(順治4年)	<p>7月 民間における銅錢の使用を禁止。(清世祖実録)</p> <p>7月 日本貿易をする清国商人、朝鮮に漂着する。(李朝実録)</p> <p>9月 清国銅錢の使用を許可、対銀比価は錢10文対銀1分に規定。(清世祖実録)</p> <p>清国では、崇禎錢100文＝銀1分、錢1斤で2分5厘に相当。(続文献通考)</p> <p>清国では、米1石につき銀4両とする。(閱世編)</p> <p>清国、銀1両：錢1,000文として、銅錢の裏に1厘という文字にする。(皇朝政典類纂)</p> <p>1601年から1647年までの間、日本から明・清国に輸出された銀は7,480万両あまり。(本朝宝貨通路用史略)</p> <p>1647年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 229,000. トンキン 130,000. シャム 30,000. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 0. 計 389,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1647年度の日本銅の輸出量は532,305カティ、輸出額は135,017グルデン、単価は1ピコルあたり9.2テール、9テール、8テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1648年(正保5年) (慶安元年)	<p>5月 <白根金山>指所左五兵衛・津軽縫助が五枚九両山を普請し、鉾脈に当たった。これは以前から廃坑となっていたものであった。(雑書)</p> <p>石見銀山山役銀25貫392匁9分。(山中家文書)*</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀26匁～30目。(三貨図彙)</p> <p>†この年から明暦元年の8年間に日本は中国へ銀41,046貫961匁を輸出。オランダへ銀39,986貫700匁を輸出。(通航一覽)</p> <p>高野山過去帳に8月28日「石金本谷 鍋田半左衛門登山之時立之」とあり。</p>
1644-1648年 (正保年間)	<p><白根金山>正保頃、青山庄左衛門が盛岡で借りた砂金9匁の代として白根金9匁1分をもって返済している。(青山家系事蹟)</p>
17世紀前半	
1649年(慶安2年)	<p>石見銀山山役銀37貫710匁。(山中家文書)*</p> <p><生野銀山>柏坪の再興をもくろみ、公銀300貫を投じて普請が行われた。(生野銀山旧記)</p> <p><佐渡相川金銀山>この年の上相川を除く相川の軒数は1,659軒、1ヶ月の地子銀890匁。(佐渡四民風俗)</p> <p><備中小泉銅山>この年より5ヶ年切り、運上銀1,500枚で、大坂天野屋八右衛門が吉岡・小泉両所を請負う。(住友家文書)</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀28匁5分～30目前後。(三貨図彙)</p> <p>†オランダ船2隻の取引高は、輸出商品代銀775貫634匁、輸入銀(丁銀・銀道具)5,340貫300匁、長崎における経費960貫235匁の計7,076貫169匁。(通航一覽)</p> <p>†唐船59隻の取引高は、輸出商品代銀4,422貫560匁、銀(丁銀・吹銀・銀道具)5,454貫305匁、長崎での経費2,185貫611匁の計12,062貫406匁。(通航一覽)</p> <p>†オランダ船7隻に銅3,055ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覽)</p> <p>高野山過去帳に4月8日「昆布山 水川六兵衛為父立之」とあり。</p> <p>1月24日 妙本寺上に「経 宗妙靈」の銘のある一石宝篋印塔、龍昌寺に「奉為□月妙□禪定尼□」の銘のある組み合わせ宝篋印塔あり。</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1648年㊤(永暦2年) ㊤(順治5年)	<p>3月18日 日本とマニラの交易は閉ざされ、銀を獲得するシナの国庫にも限りが見られると記述あり。(モンソン文書)</p> <p>3月30日 フロイト船ベルクハウト、中国スホイト金目方8,068テール2匁を積載する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>3月 京都での白糸価格は、100斤当たり銀200目。同年冬には100斤当たり10貫目以上。さらに1ヶ月後には15貫160匁。(長崎オランダ商館の日記)</p> <p>4月23日 フロイト船ベルクハウト、ヘクロンデ・リーフデは、日本スホイト銀15,000テールよりなり、暹羅において日本向け商品を積み、なるべく早く長崎に向かうことを命じたとの記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>4月29日 フロイト船パシエンシー、現金699,193グルデン6ストイフェル4ペニング、錫91,524ポンドを積載する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>6月19日 フロイト船サンダイク、日本スホイト銀を積載する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>7月15日 フロイト船クー、マースラント、現金12万グルデンを積載する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月8日 唐船17隻が水銀250斤、中国金重さ131匁、水銀250斤を輸入。(オランダ商館日記)</p> <p>江戸での白糸価格は100斤あたり銀16貫目。(長崎オランダ商館の日記)</p> <p>広東では銭の対銀比価は銭2,286文：銀1両。(乾隆南海県志・道光南海県志・乾隆普寧県志)</p> <p>1648年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 380,000. トンキン 130,000. シャム 0. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 0. 計 510,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1648年度の日本銅の輸出量は0カティ、輸出額は0グルデン。(近世銅貿易の数量的考察)</p>
1644-1648年	
17世紀前半	<p>オランダ人が中国シルクを日本に輸入して得た利潤はポルトガル人と同じく約100%。(荷蘭商館日記)</p> <p>明末、銀の対金比価は明初の1=4、5であったものが、1=10~13になる。(日知録)</p>
1649年㊤(永暦3年) ㊤(順治6年)	<p>11月5日 唐船50隻が水銀500斤、中国金重さ700匁を輸入。(長崎オランダ商館の日記)</p> <p>清国では、豊作で川珠米1石につき銀9銭、8月の大豆の価格は1石につき銀3両5銭となるが、冬には1両8銭で、およそ米価の倍に当たる。(関世編)</p> <p>清国各省では輸入外国銀貨が流行。(天下郡国利病書)</p> <p>1649年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 200,000. トンキン 100,000. シャム 70,000. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 0. 計 370,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1649年度の日本銅の輸出量は305,500カティ、輸出額は100,998グルデン、単価は1ピコルあたり11.6テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1650年(慶安3年)	<p>2月 <白根金山>白根の山師で鍛冶の久七方に止宿している長左衛門がキリシタンであるとして訴えられた。逃亡したが長左衛門は秋田領十二所で捕えられて南部の役人に引き渡された。その後、長左衛門は江戸へ送られたが、慶安5年7月には「転んだ」と見られて放免された上、希望によって白根金山に居住を許され、二人扶持を給与された。(雑書)</p> <p>3月17日 <南部赤沢金山>横町の三右衛門が佐比内や赤沢の金山試掘を出願した。(北村家文書)</p> <p>石見銀山山役銀30貫455匁3分。(山中家文書)*</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀38匁~40目。(三貨図彙)</p> <p>†オランダ船7隻に銅3,195ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>高野山過去帳に7月20日「栃畑 長野二郎兵衛タメ三嶋中右衛門建之」とあり。</p>
1651年(慶安4年)	<p>10月 <白根金山>青山庄左衛門は寛永14年5月に根田四枚山惣大水抜普請に着手したが、この年10月に疏水坑廊下の右側に横番を掘り金体に切りつけた。1荷につき金1分3厘で切取日前30日を与えられた。切取日前の後には掘分山となった。(青山家白根史蹟)</p> <p>石見銀山山役銀31貫950目。(山中家文書)*</p> <p><佐渡相川金銀山>佐渡奉行伊丹康勝により出方不振の間歩の稼行の中止が命じられた。(佐渡年代記)</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀30匁~36匁。(三貨図彙)</p> <p>†台湾への日本銀の輸出額は約55万グルデン(1641年の約10分の1)。</p> <p>†オランダ船8隻に銅4,400ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p>
1648-1651年 (慶安年間)	<p>3月15日 妙本寺上に「為心嘗月休□□ (欠損)」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
17世紀中頃	
1652年(慶安5年) (承応元年)	<p>石見銀山山役銀16貫802匁6分。(山中家文書)*</p> <p><佐渡相川金銀山>上相川の家数513軒、その1ヶ月分の地子銀は160匁。(佐渡四民風俗)</p> <p><佐渡相川金銀山>寛永13年、同18年、慶安2年、この年と立て続けに洪水が起き、相川の町と金銀山が甚大な被害を受けた。この一連の水害は、山を鉱山開発に伴って切り崩したり木を大量に伐採したことに一因が考えられている。(佐渡年代記)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1650年Ⓢ(永暦4年) Ⓢ(順治7年)	<p>3月8日 漳州船が金40匁を輸入。(東インド到着文書)</p> <p>11月8日 舟山船が中国金を130匁輸入。(東インド到着文書)</p> <p>清国では、2月には米1石につき銀1両、大豆1石につき銀2両とするが、9月には新米1石につき銀2両、大豆1石につき1両5銭。(閱世編)</p> <p>鄭成功、日本等の国との貿易で巨大な富を得る。(閱世編)</p> <p>唐船は長崎から丁銀、吹銀、銀道具12,121貫241匁を持ち帰る。(長崎オランダ商館の日記)</p> <p>1650年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、台湾 242,000. トンキン 70,000. シャム 40,000. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 0. 計 352,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1650年度の日本銅の輸出量は319,500カティ、輸出額は105,626グルデン、単価は1ピコルあたり11.6テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>
1651年Ⓢ(永暦5年) Ⓢ(順治8年)	<p>1月27日 清国、錢銀の比価は錢140文＝銀1錢となった。(清代檔案史料叢編)</p> <p>5月3日 舟山船が金を重さ213匁輸入。(長崎オランダ商館の日記)</p> <p>9月3日 舟山船が金を重さ70匁輸入。(東インド到着文書)</p> <p>12月 鄭成功、日本貿易を行い、軍用物資を購入する。(台湾外紀)</p> <p>清国では、順治錢が鑄造され、1,000文につき銀1両と規定されたが、流通し難く、この年、錢1,000文は銀4錢8分にあたる。その後錢価は増加するも、銀5、6銭にあたるのみ。(閱世編)</p> <p>清国、銅錢の重さを1錢2分5厘に改定し、錢の対銀比価をやはり錢100文：銀1錢とする。2年後、銅錢の裏に1厘という文字を入れる。(清朝文献通考)</p> <p>清国では、米と大豆1石の価格、3月に米は銀3両4銭、大豆は銀1両5銭、4月に米は銀4両、大豆は銀1両2銭、6月に米は約銀5両、大豆は銀1両6銭とするが、7月には大豆の価格は急騰し、1石につき銀3両2銭で、新米の価格に相当。(閱世編)</p> <p>1651年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、台湾 360,000. トンキン 100,000. シャム 0. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 0. 計 460,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1651年度の日本銅の輸出量は710,000カティ、輸出額は219,022グルデン、単価は1ピコルあたり11テール、10.5テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>
1648－1651年	
17世紀中頃	<p>この頃か、外国の商船、マカオに来て貿易品の10分の2を貿易税として収めた後貿易が許可される。上陸して居住するもの1万人になる。(天下郡国利病書)</p> <p>清の前期、銅錢の市場価格は安定しており、銀1両＝錢700～900文。(清実録・清朝文献通考・大清会典事例)</p> <p>明末清初、日本と明・清国間の生糸価格の差により、生糸貿易は日本では平均にして元値の3倍、ルソンの倍である。(小方壺輿地叢鈔・長崎荷蘭商館日記・春明夢余録)</p>
1652年Ⓢ(永暦6年) Ⓢ(順治9年)	<p>7月11日 清国、錢銀比価は錢1600文＝銀1両となった。(清代檔案史料叢編)</p> <p>7月27日 タシスワ知事から毎日錢200文を与えられる。2ヶ月後廈門で王は1リアルを与えた。そしてバタヴィアに銅100ピコルを積んだ。(バタヴィア城日誌)</p> <p>9月 日本貿易の清国商人、朝鮮に漂着し、送還される。(清世祖実録)</p>

西 曆 (年号：日本)	国 内
1652年(慶安5年) (承応元年)	<p>†大坂相場、米1石につき銀33匁前後。(三貨図彙)</p> <p>†オランダ船9隻に銅3,900ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覽)</p> <p>龍昌寺に「〇〇童子」の銘のある一石五輪塔あり。12月1日 妙正寺に「〇〇院 [] 居士・□〇院 [] 居士」の銘のある円頂方形型墓標あり。</p>
1653年(承応2年)	<p>石見銀山山役銀21貫556匁1分。(山中家文書)*</p> <p><佐渡相川金銀山>割間歩では排水のための樋引きの経費増大が深刻であった。山主味方次助は奉行に申し立て、大坂の水学宗甫なるものを再び呼び寄せ、水上輸の実験を行った。その結果、味方は間歩への設置を計画し、江戸へ出て資金調達をはかったという。(佐渡年代記)</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀33匁前後。(三貨図彙)</p> <p>†オランダ船5隻に銅3,023.98ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覽)</p>
1654年(承応3年)	<p>2月7日 間歩の境目等に関する御山作法定まる。(吉岡家文書)</p> <p>6月 <白根金山>六郎兵衛・左次兵衛の二名が、本平六枚間歩下の大疏水坑普請に従事し3,700日余りで排水に成功。この普請は六枚間歩の下方より掘って、本平にある多数の古間歩の排水を企図したものである。切りあてた金体は1荷(呎1つ分の鉾石=ふつう5~6貫目)につき金2分5厘で切取日は60日を許可された。(雑書)</p> <p>石見銀山山役銀20貫767匁2分。(山中家文書)*</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1652年㊤(永暦6年) ㊤(順治9年)	<p>長崎商館長ステルミウス、本国重役会に「日本は会社の陸地貿易と東インドにおける利潤の最後の支え」と報告。(新旧インド誌)</p> <p>清国では、米1石につき夏には銀4両としたが、秋には2両5、6銭とした。その後次第に米安価になる。(関世編)</p> <p>清国では、銅銭千文=銀4銭8分。(関世篇)</p> <p>バタヴィアで受取られた出島からの銀の輸出額134,943グルデン。(バタヴィア元帳)</p> <p>オランダは対日貿易で1,030,856グルデン分を輸入し、1,664,258グルデン分を輸出。純益は、657,197グルデン。雑費は76,309グルデン。(十七世紀日蘭交渉史)</p> <p>1652年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 250,000. トンキン 230,000. シャム 25,000. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 0. 計 505,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1652年度の日本銅の輸出量は450,000カティ、輸出額は135,375グルデン、単価は1ピコルあたり11テール、10テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>
1653年㊤(永暦7年) ㊤(順治10年) ㊤(孝宗4年)	<p>2月2日 小ジャンク船、日本銅25ピコル。(バタヴィア城日誌)</p> <p>2月24日 大ワンカン船、日本銅多量。(バタヴィア城日誌)</p> <p>5月9日 ポルトガル人がマカオに居住する際、古来明・清国人に租税を納め、今日までに毎年純銀3,000テール。(バタヴィア城日誌)</p> <p>6月 朝鮮において公貿易で戸曹が購入し、他司に送った銅・鐵は、銀5,000両にあたと記述あり。(孝宗実録)</p> <p>7月30日 大泥船が銀1,033匁2分、金530匁、錫65包を輸入。(中国ジャンク船により長崎に運ばれた商品の目録)</p> <p>7月 統一銅銭を鑄造し、銭1,000文=銀1両にする。(清世祖実録)</p> <p>9月17日 長崎から輸出のスホイット銀(箱詰め)不足を発見。(長崎オランダ商館の日記)</p> <p>10月3日 長崎商館はタイオワンとベンガルで発見の箱詰めスホイット銀の重量不足に対し賠償を要求。2年前に長崎商館で銀の代りに鉛500匁を詰めた詐欺事件あり。昨年、堺商人が鉛製の贋造スホイット銀を長崎商館に持ち込む詐欺未遂あり。(長崎オランダ商館の日記)*</p> <p>10月29日 唐船40+α隻が錫17,320斤、赤銅9,220斤、中国金重さ200匁を輸入。(東インド到着文書)</p> <p>清国福建の人倭国器、海外貿易の解禁を訴える。(明清史料)</p> <p>清国では、銭千文を銀1両に準じると規定される。(清史稿)</p> <p>1653年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 581,000. トンキン 0. シャム 0. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 0. 計 581,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1653年度の日本銅の輸出量は302,398カティ、輸出額は88,763グルデン、単価は1ピコルあたり10.3テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>
1654年	<p>8月18日 暹羅船が錫を27,500斤、泉州船が赤銅を170斤、東京船が中国金を100本輸入。(東インド到着文書)</p> <p>1654年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 344,000. トンキン 0. シャム 0. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 0. 計 344,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1654年度の日本銅の輸出量は330,000カティ、輸出額は98,581グルデン、単価は1ピコルあたり10.5テール、10.3テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1654年(承応 3 年)	<p><生野銀山>河瀬助左衛門なるものが内切所で大鉦に当たり、毎月2,000荷を掘った。(生野銀山旧記)</p> <p>† 大坂相場、米 1 石につき銀36匁~43匁。(三貨図彙)</p> <p>† オランダ船 4 隻に銅3,300ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>2月26日 妙正寺に「〇〇尼」の銘のある一石宝篋印塔、9月 石銀地区 一石五輪塔あり。</p>
1655年(承応 4 年) (明暦元年)	<p>2月16日 <朴金山>横町の三右衛門(北村氏)が、湛水のために廃棄されていた平右衛門掘捨間歩の水抜普請を願い出、許可された。切取の日前は金体に応じて取決められ、5厘、7厘程度の道草(予期せぬ鉦脈)は普請入用として与えられる。(北村家文書)</p> <p>石見銀山山役銀10貫395匁。(山中家文書)*</p> <p><備中小泉銅山>明暦元年より3年切り、運上銀360枚で、堺納屋治右衛門が吉岡・小泉両所を請負う。(住友家文書)</p> <p>† 大坂相場、米 1 石につき銀29匁~40目。(三貨図彙)</p> <p>† オランダ船 4 隻に銅3,213ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>高野山過去帳に9月9日「昆布山 為母松原三右衛門立之」とあり。</p> <p>3月8日 石銀地区に「□靈誉妙善尼」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1656年(明暦 2 年)	<p>8月 <白根金山>2代目青山庄左衛門は、水抜普請に着手し、3代昌久の代になって完成した。(雑書・青山家白根史蹟)</p> <p>石見銀山山役銀20貫127匁。(山中家文書)*</p> <p><佐渡相川金銀山>佐渡金銀山からの江戸上納銀が1,000貫を割った。(佐渡年代記)</p> <p>この年から1672年までに日本は清国へ銀1,379,838貫763匁を輸出。オランダへ銀64,093貫27匁を輸出。(通航一覧)</p> <p>† オランダ船 8 隻に銅8,893ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p>
1657年(明暦 3 年)	<p>8月 <飛驒平湯鉦山>平湯村の百姓久左衛門が露頭を発見し、平湯鉛山の開発が始まる。この時、大坂の角兵衛が稼行し、1日に鉦石5斗8升を製錬したが出銀は20匁ほどであったという。(飛驒国中案内)</p> <p>石見銀山山役銀10貫11匁2分。(山中家文書)*</p> <p>† オランダ船 9 隻に銅14,100ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>高野山過去帳に正月1日「昆布山 岩皆伊兵衛父ノ為」とあり。</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1654年	
1655年㊤(永暦9年) ㊤(順治12年) ㊤(孝宗6年)	<p>12月 朝鮮において行銭法を改定し、銀1両は600文、米1升は銭4文、銀1両は米1石と比価を定める。(孝宗実録)</p> <p>鄭成功と交通する密貿易者を多数拏捕。(明清史料)</p> <p>鄭成功五大商人の一人である曾定老、鄭氏から資本をもらい、日本貿易を行う。(明清史料)</p> <p>1655年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、台湾 405,000. トンキン 0. シヤム 0. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 0. 計 405,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1655年度の日本銅の輸出量は411,300カティ、輸出額は128,910グルデン、単価は1ピコルあたり11.1テール、10.9テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>
1656年㊤(永暦10年) ㊤(順治13年)	<p>6月16日 清国の順治帝、海禁令を發布し、沿海民と鄭成功との交通を厳禁する。(明清史料)</p> <p>10月16日 オランダ東インド会社、初めて長崎から直接バタヴィアへ日本銀を輸出(輸出量770貫)。(Factura)*</p> <p>1656年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、台湾 460,000. トンキン 50,000. シヤム 0. バタヴィア 77,000. マラッカ 0. その他 0. 計 587,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1656年度の日本銅の輸出量は889,300カティ、輸出額は291,645グルデン、単価は1ピコルあたり11.4テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>
1657年㊤(永暦11年) ㊤(順治14年)	<p>2月18日 ジャンク船、銅550ピコル、スホイト金10枚を搬入する。(バタヴィア城日誌)</p> <p>3月1日 唐船47隻が錫20,960斤、東京銀10斤を輸入。(東インド到着文書)</p> <p>7月8日 唐船が東京銀10斤、錫20,960斤を輸入。(東インド到着文書)</p> <p>7月 鄭成功、日本等の国との貿易により、軍事力を維持する。(台湾外紀)</p> <p>9月 清国の順治帝、私鑄銭の氾濫を止めるため鑄銭統一を計画。(清世祖実録)</p> <p>11月 清国、米1石につき銀8銭。6、7銭のところもある。この月、米と大豆の価格はほぼ同じで、1石につき銀8銭。(閩世編)</p> <p>11月23日 日本よりバタヴィアに来たフロイト船デン・ユリセスおよびヤハト船クーケルケの積荷は、日本スホイト銀100,000テール、精製棹銅510,000ポンドとの記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月14日 ヤハト船ヘルキュレス、ブルーメンダール、デ・ワハテルの積荷は日本の棹銅、中国の銀塊7万グルデン。(バタヴィア城日誌)</p> <p>清国、銅銭の重さを1銭4分に改定する。(清朝文献通考)</p> <p>1657年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、台湾 233,000. トンキン 0. シヤム 0. バタヴィア 100,000. マラッカ 0. その他 0. 計 333,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1657年度の日本銅の輸出量は1,410,100カティ、輸出額は462,726グルデン、単価は1ピコルあたり11.4テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1655-1657年 (明暦年間)	7月8日 龍源寺間歩上に「経 心清妙月尼 (ベンガラ)」の銘のある一石宝篋印塔あり。
1658年(万治元年)	<p>12月7日 <朴金山>朴金山六千枚丹波弥十郎台所間歩1口の稼行が、水抜間歩の他新見立諸役を含めて、日前5ヶ月、運上金5匁という条件で三平・弥十郎に許可された。(日本鉱山史の研究・北村家文書)</p> <p>石見銀山山役銀10貫84匁7分。(山中家文書)*</p> <p><備中小泉銅山>この年より8年切り、運上銀1,600枚で、大坂平野屋清右衛門・浜田屋庄兵衛が、吉岡・小泉両所を請負う。ところが、小泉は万治元年以後、事実上は中絶のままであった。(住友家文書)</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀48匁～53匁。(三貨図彙)</p> <p>†オランダ船10隻に銅12,100ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>6月7日 龍源寺間歩上「経 知清」の銘のある一石五輪塔あり。</p>
1659年(万治2年)	<p>2月 <南部釜ヶ沢金山>佐比内の助九郎が釜ヶ沢金山の与七郎掘捨間歩一口の水抜普請を請けた。(雑書)</p> <p>†7月14日 長崎において銭を鑄造することを許可する(外国互市の用に供すため)。(徳川実記)</p> <p>石見銀山山役銀6貫210匁。(山中家文書)*</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀54匁～55、6匁。(三貨図彙)</p> <p>†オランダ船8隻に銅8,244.25ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p>
1642-1660年 (寛永19-万治3年)	<p>3月11日 杉田又兵衛、尾道他諸役浦泊の町奉行に、石州運上銀輸送について警護方を依頼する。(石見国銀山文書)*</p> <p>3月17日 杉田又兵衛より、石州銀の京都銀座到着の報告あり。(石見国銀山文書)*</p> <p>5月29日 杉田又兵衛、長野源左衛門等役人に、灰吹銀が丁銀となりそうなので、目相時分大坂へ納め、手形を取るよう指示する。(長野家文書)*</p> <p>杉田又兵衛、銀吹炭古来より炭30貫目1駄につき判銀6匁宛役銀を取立てていたのを改め、汲鉛と一緒に請切に申し付ける。(山中家文書)</p> <p>杉田又兵衛(寛永19～万治3年)、従来汲鉛役を大床にて汲み上げた鉛10貫目につき700目宛鉛を取っていたのを改め、鉛吹、炭役共に1ヶ年を判銀29貫目の請切に申し付ける。(山中家文書)</p> <p>杉田又兵衛支配中、山衰微のため大林村の諸色通役を請役とし、平均をもって定役を極め庄屋の取立てにより上納に改める。また、口屋を引き上げる代りに庄屋から荷物通役を掛け、不足の年は地下より徴収するようになる。(山中家文書)</p>
1660年(万治3年)	<p>2月 <生野銀山>奥銀谷町の吹屋より出火、西は山の神より東は竹野原村まで罹災し、樋引・日雇2,000～3,000人を収容した多くの長屋も焼失。職人が退散した。(生野銀山旧日記)</p> <p>3月 <多田銀銅山>銀山町津慶吉兵衛が、前年出願していた多田の大口間歩の普請を始めた。この間歩は慶安、承応の頃大坂の米屋弥左衛門が稼行していた旧坑の取明け普請であった。翌寛文元年10月に銀山奉行中村李右衛門が赴任し、銀山役所が建てられ、川辺、能勢、豊島郡の内銀銅山のある72ヶ村が銀山附とされた。最盛期には1ヶ年銀1,500貫目、銅70斤を産し、諸運上銀660目に達し、銀山町の家数は3,000軒に及んだという。(多田銀銅山来歴申伝略記)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1655－1657年	
1658年	<p>3月24日 安海船が中国銀1箱輸入。(東インド到着文書)</p> <p>この年マニラ港に入港した日本発の船舶は1隻。(Les Philippines et le Pacifique des Ibriques)</p> <p>1658年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、台湾 470,000. トンキン 0. シヤム 0. バタヴィア 83,500. マラッカ 0. その他 0. 計 553,500 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1658年度の日本銅の輸出量は1,300,000カティ、輸出額は427,826グルデン、単価は1ピコルあたり11.4テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>
1659年Ⓧ(永暦13年) Ⓧ(順治16年)	<p>3月 清国、米価は高くなり、この月、米と大豆の価格は同じで、1石につき銀2両。(閔世編)</p> <p>5月14日 トンキンの銀は日本のテールの80%に相当。(総督ヨアン・マーツァイケルよりトンキン商館宛覚書)</p> <p>12月1日 フロイト船デ・フォーヘルザングは日本においてスホイト銀25,000テール、日本棹銅1,500ピコル、丸銅200ピコルを積み込み、バタヴィアに来航したとの記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月11日 フロイト船ヒルフェルスムは、日本スホイト銀18,000テールを積みバタヴィアへ来航、日本の商館長だったザハリヤス・ワーヘナールが乗船していたとの記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>オランダ商館が小判100両を持ち渡る。(十七世紀日蘭交渉史)</p> <p>1659年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、台湾 500,000. トンキン 0. シヤム 25,000. バタヴィア 43,700. マラッカ 0. その他 0. 計 568,700 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1659年度の日本銅の輸出量は824,425カティ、輸出額は284,710グルデン、単価は1ピコルあたり12テール、11.5テール、9.8テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>
1642－1660年	
1660年Ⓧ(永暦14年) Ⓧ(順治17年)	<p>10月24日 オランダ東インド会社、初めて長崎から直接マラッカへ日本銀を輸出(輸出量2,400貫)。(Factura)*</p> <p>11月9日 清国の王吉甫等32人、海禁を犯して生糸等を長崎へ持っていき、銀や海産品等を持ち帰る。(明清史料)*</p> <p>長崎貿易をする船主、船商の売上金から5分の1の銀を運賃として徴収する。(明清史料)</p> <p>ベンガルは生糸を輸出、日本の小判を輸入し利益大。日本とベンガル間がオランダ東インド会社の重要な貿易ルートとなる。(十七世紀日蘭交渉史)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内	
1660年(万治3年)	<p>8月8日 <朴金山>朴沢の与右衛門が、本朴沢川下・小豆沢落合より下館前までの砂金採取を許可された。南部藩では、農民が農閑期に営む砂金採取は、「定番」として年季は限らず、1ヶ年の運上高を決めて免許した。ここでは、杓子(砂金取りの道具、柄が4尺ほど)2丁分、当年中の川杭の運上金1匁2分という条件であった。(北村家文書)</p> <p>10月 <朴金山>一戸のあざみだけ金山が、日前5ヶ月、運上金3匁で田野村三十郎等に請負われたが、これはあざみだけの溪流で採金したので、定番に支障ありとして留山となった。(雑書)</p> <p>石見銀山山役銀11貫815匁。(山中家文書)*</p> <p><芹ヶ野金山>芹ヶ野金山の試掘が鹿兒島藩より命じられた。(芹ヶ野金山発起始終覚書)</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀69匁5厘~70目以上。(三貨図彙)</p> <p>†オランダ船5隻に銅11,399.35ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p>	
1661年(万治4年) (寛文元年)	<p>8月3日 山高孫兵衛、銀山支配のため大森へ下向す。(観聴随筆)</p> <p>9月29日 <飛驒蔵柱金山>蔵柱御台所間歩の普請が、金森氏の代官と思われる斎藤新左衛門他4名の名で許可された。(谷口家文書)</p> <p>山高孫兵衛が銀山奉行となる。(山中家文書)</p> <p>石見銀山山役銀14貫703匁1分。(山中家文書)*</p> <p>奉行山高孫兵衛支配中(寛文元~10年)、山衰微により津茂村の山役が請銀平均をもって1ヶ年52匁8分9厘の定請となり、庄屋の取立により上納するようになる。(山中家文書)</p> <p>奉行山高孫兵衛支配中、銅ヶ丸銅山衰微により従来山役、炭山役共に山請に組込んで上納していたものを改め、その請銀平均をもって定役を極め、山師から上納するようになる。(山中家文書)</p> <p>山高孫兵衛支配中、大谷・休谷の両口屋が廃止される。(山中家文書)</p> <p><生野銀山>前年の火災の影響もあり、寛文元年に金木・川戸の稼行中止。(生野銀山旧記)</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀51、2匁。(三貨図彙)</p> <p>†オランダ船11隻に銅15,195ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p>	

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1660年㊤(永暦14年) ㊤(順治17年)	<p>1660年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 50,000、トンキン 0、シャム 0、バタヴィア 132,000、マラッカ 240,000、その他 0、計 422,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1660年度の日本銅の輸出量は1,139,935カティ、輸出額は387,684グルデン、単価は1ピコルあたり11.8テール、11テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>
1661年㊤(永暦15年) ㊤(順治18年) ㊤(顕宗2年)	<p>1月9日 ヤハト船デル・フェールは 日本スホイト銀50,000テールを積み、タイワンより暹羅經由バタヴィアに到着。この銀はオーヤセカラットと称する国王の造幣長官の許にて交換し、暹羅貨幣1,208カティ1テール11マースを受取るとの記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>1月24日 フロイト船デ・スプレーウ、日本よりマラッカ經由ベンガラに到着。同時にヤハト船ホールンもマラッカより到着。両船には日本スホイト銀200箱、日本の棹銅650箱ならびに333本、錫369ポンド、および鉛20,096カティを積載との記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>1月30日 ジャンク船アルクマールがスホイト金40枚、金糸10函と書いた1660年12月10日付書翰を持っていた。(バタヴィア城日誌)</p> <p>1月 朝鮮において、米価騰貴し米1石が銀2両あまりに当たる。(顕宗改修実録)</p> <p>4月12日 ヤハト船デル・フェールの積荷日本スホイト銀5万テール。この銀は暹羅貨幣1,208カティ1テール11マースに交換。(1カティを20テール、1テールを16マース、1マースを17ストイフェル半と計算)144,970グルデン2ストイフェル8ペニングとなる。(バタヴィア城日誌)</p> <p>4月12日 フロイト船デ・スプレーウ、ヤハト船ホールンの積荷両船で日本スホイト銀200箱、日本の棹銅650箱ならびに銅333本、錫369ポンド、鉛20,096カティ。(バタヴィア城日誌)</p> <p>5月28日 銅の買入れは日本・バタヴィアよりもインド地方を主として行うよう指令が下る。フロイト船バイエンスケルケ、フーレー、ジューメルメールの積荷鉛板5,226ポンド、金銀モール2つ。貿易では青銅ピコル(百斤)に粗銅よりも2、3マース(匁)ないし4マース多く与えても良い。(バタヴィア城日誌)</p> <p>7月5日 フロイト船フォルレンホーフエは錫4,200カティを積み、暹羅を出帆、日本よりは銀60,000テールの注文ありとの記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>7月19日 オランダが日本に注文した品は、スラット向けに精製棹銅450,000ポンド、ウインギュラ向けに棹銅15,000ポンド、本国向けに精製棹銅800,000ポンド、バタヴィア向けに精製棹銅400,000ポンドないし500,000ポンド、日本のスホイト銀100,000テール、本国のため注文したものは、輸送ヤハト船ス・ホラーフェランデおよびジューメルメール、これを積んでバタヴィアへ帰航する計画あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>10月21日 会社によるタイワンへの最後の日本銀輸出(輸出量600貫)。(Factura)</p> <p>10月 清国、米1石につき10月には銀1両5銭、11月には銀2両。(閱世編)</p> <p>11月11日 フロイト船バイエンスケルケの積荷日本スホイト銀100,000テール、棹銅360,000カティ、フロイト船フーレー スホイト銀100,000テール、棹銅100,000カティ、フロイト船ヘットヘルト スホイト銀100,000テール、棹銅80,000カティ、フロイト船ニューポルト スホイト銀100,000テール、棹銅168,900カティ、合計スホイト銀400,000テール、棹銅708,900カティ。(バタヴィア城日誌)</p> <p>12月18日 清国では海禁が行われても、鄭成功との交通は絶えないため、この時、さらに厳しい海禁令を発布。(明清史料)</p> <p>12月19日 ヘンドリック・インダイク、フロイト船フォルレンホーフエでスホイト銀17,000テール、棹銅200,000カティを積み、日本より到着との記述あり。(バタヴィア城日誌)</p>

西 暦 (年号：日本)	国 内
1661年(万治4年) (寛文元年)	
1662年(寛文2年)	<p>石見銀山山役銀10貫597匁5分。(山中家文書)*</p> <p>† オランダ船8隻に銅18,600ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>9月21日 妙正寺に「為〇〇〇〇靈尼」の銘のある笠付方柱型墓標あり。</p>
1663年(寛文3年)	<p><佐渡相川金銀山>排水問題が深刻となっていた割間歩の稼行が前年差止められたため、多人数が渡世を失い、餓死する者は3,000~4,000人に及んだという。(佐渡年代記)</p> <p>石見銀山山役銀17貫842匁5分。(山中家文書)*</p> <p>† 大坂相場、米1石につき銀54匁~56匁。(三貨図彙)</p> <p>† 1663~1683年、長崎に来た中国船は延べ624隻、その大部分は台湾船。(長崎実録大成)</p> <p>† 唐船29艘に銅4,537ピコル、オランダ船6艘に銅15,362ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>(月未詳)1日 妙本寺上に一石宝篋印塔あり。</p>
1664年(寛文4年)	<p>石見銀山山役銀10貫210匁9分。(山中家文書)*</p> <p>† この年から9年間の日本から唐船への金輸出货量は597,102両4歩。(通航一覧)</p> <p>† 日本は、中国に対し金470両を1両につき68匁で輸出。オランダに金500両を1両につき銀68匁替で輸出。(通航一覧)</p> <p>† 唐船38艘に銅12,498.60ピコル、オランダ船8艘に銅24,195ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>4月27日 龍源寺間歩上に「経 月性院日成」の銘のある一石宝篋印塔、11月22日 妙本寺上に「法性□□□」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1661年㊦(永曆15年) ㊦(順治18年) ㊦(顯宗2年)	<p>12月19日 オランダ東インド会社インド参事会が、銅の買入れはインド地方を主として行うよう指示したとの記述あり。(バタヴィア城日誌)</p> <p>清国では、新米1石につき銀1両3銭で、大豆は1石につき8銭だけ。冬になると米価は銀2両、大豆は1石につき銀1両3.3銭。(閱世編)</p> <p>清国海禁の結果、鄭成功、海外貿易を独占し、それにより財政難がなく、利益を得る。(偽鄭逸事)</p> <p>清国商人30数人、それぞれ絹織物、生糸等の商品を購入し、合同で長崎貿易を行う。(明清史料)</p> <p>1661年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 60,000. トンキン 0. シャム 0. バタヴィア 76,448. マラッカ 400,000. その他 0. 計 536,448 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1661年度の日本銅の輸出量は1,599,500カティ、輸出額は546,668グルデン、単価は1ピコルあたり11.8テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>
1662年㊦(康熙元年)	<p>1月 この時中国では、米1石につき銀2両1銭。その後米価は次第に安くなる。(閱世編)</p> <p>王吉甫等、海禁を犯して長崎貿易を行ったので、処刑される。(明清史料)</p> <p>中国この年前後、銀と銭の比価は銀1両=銭千文以内で上下する。(石渠余記)</p> <p>清朝では銀と銭は全国流通の貨幣になる。(清朝文献通考)</p> <p>1662年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 0. トンキン 0. シャム 0. バタヴィア 120,000. マラッカ 450,000. その他 0. 計 570,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1662年度の日本銅の輸出量は1,230,000カティ、輸出額は431,176グルデン、単価は1ピコルあたり11.9テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>
1663年㊦(康熙2年)	<p>10月 この時清国、米1石につき銀9銭で、大豆は5銭。その後、大豆の価格はおよそ6銭～8銭。(閱世編)</p> <p>日本はオランダに約3,600個の小判を輸出している。(十七世紀日蘭交渉史)</p> <p>1663年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 0. トンキン 65,000. シャム 0. バタヴィア 0. マラッカ 258,855. その他 0. 計 323,855 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1663年度の日本銅の輸出量は1,610,780カティ、単価は1ピコルあたり11.8テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>
1664年㊦(顯宗5年)	<p>3月 朝鮮において、以前は硫黄100斤で銀80両だったが、今は70両あまりに過ぎない。(顯宗実録)</p> <p>11月5日 オランダ商館と長崎奉行・町年寄、小判輸出開始にともない輸出価格について協議。(Dagregister)</p> <p>オランダ商館は金輸出解禁前に小判5,599両(銀にして409貫732匁)を輸入。(十七世紀日蘭交渉史)</p> <p>唐船34隻が日本丁銀33,500匁、錫2,000斤を輸入。(東インド到着文書)</p> <p>この年マニラ港に入港した日本発の船舶は1隻。(Les Philippines et le Pacifique des Ibriques)</p> <p>1664年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、タイワン 0. トンキン 0. シャム 0. バタヴィア 0. マラッカ 0. その他 0. 計 430,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1664年度の日本銅の輸出量は2,440,200カティ、単価は1ピコルあたり12.3テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>

西 暦 (年号 : 日本)	国 内
1665年(寛文 5 年)	<p>3月 幕府、金銀掛の分銅について、偽分銅の使用を禁止す。(御触書寛保集成)</p> <p>3月 幕府、町中にて下金、金銀の外しを商売することを禁す。(御触書寛保集成)</p> <p>4月28日 銀座運上について、灰吹銀100目につき銅20匁の差し銅を規定した上で、但馬・石見・佐渡は灰吹銀が高品位のため但馬灰吹は銅22匁5分、石見・佐渡灰吹は22匁ずつ加えて同品位にし、大黒極印を打つことに定められる。(銀座條目)*</p> <p>11月 <南部矢柄金山>盛岡より佐比内の内、矢柄金山の脇米留のため役人を派遣した。南部藩は金山での販米に専売制を敷いていて、脇米の搬入を取締まった。(雑書)</p> <p>石見銀山山役銀 8貫235匁。(山中家文書)*</p> <p><生野銀山>竹原野奥野谷道雲山、金床の内久右衛門所に産銀があり、壊滅に瀕した生野に多少生気を与えたという。(生野銀山旧記)</p> <p>†唐船36艘に銅1,973ピコル、オランダ船12艘に銅9,084ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覽)</p>
1666年(寛文 6 年)	<p>1月 温泉津老中衆、温泉津町屋敷公方事について取決める。(多田家文書)*</p> <p>4月 <白根金山> 2代目青山庄左衛門が陰平・中山平大水抜普請につき請願する。よって蔵米50駄を貸与し、当時の白根の売米値段1駄につき白根金1匁4分の積りで同年暮れに返済させた。(青山家白根史蹟)</p> <p>6月2日 京都所司代牧野佐渡守、京都馬借等に石州運上銀749貫目余の大坂城上納につき、車10輛、宰領馬4疋の京都より伏見までの運搬を指示する。(石見国銀山文書)*</p> <p>石見銀山山役銀 6貫930目。(山中家文書)*</p> <p><佐渡相川金銀山> 鉱山労働者の勝手次第他国出が許可され、運上を納めた上での牛や干鰯の他国売りが許可された。(佐渡年代記)*</p> <p>†この年から1672年までの日本からの蘭船への金輸出力は743,713両4歩。(通航一覽)</p> <p>†唐船に対して金3,700両(銀に換算して251貫600匁)、オランダ商船に対して30,000両(銀に換算して2,040貫)、合計33,700両(銀に換算して2,291貫600匁)を輸出。(通航一覽)</p> <p>†唐船37艘に銅4,514.04ピコル、オランダ船7艘に銅12,587.50ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覽)</p>
1667年(寛文 7 年)	<p>9月4日 幕府、私に古銅を売買することを禁す。(徳川実記)</p> <p>石見銀山山役銀13貫275匁9分。(山中家文書)*</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀53匁~55匁。(三貨図彙)</p> <p>†唐船に対して金12,160両(銀に換算して826貫880匁)、オランダ商船に対して50,072両(銀に換算して3,900貫100匁)、合計62,232両(銀に換算して4,726貫980匁)を輸出。(通航一覽)</p> <p>†唐船33艘に銅7,848.40ピコル、オランダ船8艘に銅4,000ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覽)</p> <p>高野山過去帳に2月8日「石金本谷村 池上弥吉」とあり。</p> <p>龍昌寺に「為徹搜了無菩提也」の銘のある宝篋印塔あり。</p>
1668年(寛文 8 年)	<p>† 3月8日 幕府、長崎奉行に対し、銅の輸出禁止を命ず。(徳川実記)</p> <p>10月 銀座年寄狩野七郎右衛門が幕府へ提出した書面に、その頃まだ灰吹遣いであった国々として、陸奥国会津、出羽国米沢・福島・秋田・津軽、越後国新潟・村上・高田、佐渡・加賀・能登・越中・日向・対馬・但馬・石見の諸国、信濃半ヶ国、飛騨・豊後を挙げる。(加藩貨幣録)</p> <p>石見銀山山役銀12貫825匁。(山中家文書)*</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1665年	<p>1665年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、台湾 0. トンキン 80,000. シャム 20,000. バタヴィア 0. マラッカ 408,000. その他 120,000. 計 628,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1665年度の日本銅の輸出量は908,400カティ、輸出額は329,648グルデン、単価は1ピコルあたり12.4テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1665年度の小判の輸出量は2,500両、単価は6.6テール、6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1666年㊦(康熙5年)	<p>1月30日 日本からの小判輸出が開始されたことが総督からオランダ本国理事会に報告される。(Generale Missive)</p> <p>7月 台湾鄭氏、中国各地と、日本・シャム等の国と貿易を行い豊かになる。(台湾外紀)</p> <p>11月28日 オランダ東インド会社による最後の輸出日本銀がバタヴィアに到着 (輸出量：バタヴィア向け800貫、マラッカ・インド・ベルシャ向け2,000貫)。(Generale Missive)*</p> <p>オランダ東インド会社、丁銀とオランダ・グルデンの換算率を丁銀1テール=2グルデン17スタイフェル(57スタイフェル)から丁銀1テール=3グルデン10スタイフェル(70スタイフェル)に改める。(十七世紀日蘭交渉史)</p> <p>この年マニラ港に入港した日本発の船舶は1隻。(Les Philippines et le Pacifique des Ibriques)</p> <p>1666年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、台湾 0. トンキン 0. シャム 24,000. バタヴィア 40,000. マラッカ 214,000. その他 0. 計 278,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1666年度の日本銅の輸出量は1,007,000カティ、輸出額は451,593グルデン、単価は1ピコルあたり12.4テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1666年度の小判の輸出量は29,878両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1667年㊦(康熙6年)	<p>10月 清国では、海上貿易が禁じられている。(清聖祖実録)</p> <p>12月23日 バタヴィアの東インド政庁、日本および東インド各地で金が入手可能なので、本国に銀貨の送付を要望。(Generale Missive)*</p> <p>この年マニラ港に入港した日本発の船舶は1隻。(Les Philippines et le Pacifique des Ibriques)</p> <p>1667年度のオランダ東インド会社による日本銀輸出は、台湾 0. トンキン 0. シャム 0. バタヴィア 80,000. マラッカ 200,000. その他 0. 計 280,000 (テール評価)。(オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察)</p> <p>1667年度の日本銅の輸出量は1,034,800カティ、単価は1ピコルあたり12.5テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1667年度の小判の輸出量は44,814両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1668年㊦(康熙7年)	<p>3月 清国、非朝貢期の外国船との貿易を禁止。(清聖祖実録・清朝文献通考)</p> <p>7月2、3日 長崎奉行、長崎オランダ商館に銀、銅・銅製品等の輸出禁止を伝える。(Dagregister)*</p> <p>10月18日 バタヴィアの東インド政庁、日本および東インド各地で金が入手可能なので、本国からの金の送付は不要と報告。(Generale Missive)*</p>

西 暦 (年号 : 日本)	国 内
1668年(寛文 8 年)	<p><白根金山>寛文 8 年頃より、白根で銅鉞が産出。翌 9 年からは、もっぱら金よりも銅が稼がれるようになった。青山氏の「覚」によれば、この銅山の見立ては山の目小平次であったとされる。(青山家白根史蹟)</p> <p>†大坂相場、米 1 石につき銀53匁～55匁。(三貨図彙)</p> <p>†唐船に対して金128,818両 (銀に換算して7,894貫90匁)、オランダ商船に対して158,755.1両 (銀に換算して8,890貫285.6匁)、合計287,573.1両 (銀に換算して16,784貫375.6匁) を輸出。(通航一覽)</p> <p>†唐船43艘に銅8,302ピコル、オランダ船 9 艘に銅9,014ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覽)</p> <p>8 月12日 妙正寺に「〇〇靈」の銘のある組合せ五輪塔あり。</p>
1669年(寛文 9 年)	<p>11月22日 山高孫兵衛、地役人に鍵買についての 3 ヶ条を指示する。(長野家文書)*</p> <p>石見銀山山役銀7貫594匁 5 分。(山中家文書)*</p> <p>石見国は上灰吹が通用し、「百目に付此銅22匁丁銀合122匁」とある。(諸国灰吹銀位附帳)</p> <p><越前面谷銅山>福井大火の後材木を伐り出した際に面谷銅山が発見されたという。(さらに古く、康永年間《1342～45》、天正年間《1573～92》と伝えるものもある)。(越前国名蹟考)</p> <p>†大坂相場、米 1 石につき銀64匁～64、5匁。(三貨図彙)</p> <p>†唐船に対して金180,026.1両 (銀に換算して10,040貫1匁)、オランダ商船に対して144,464.1両 (銀に換算して8,089貫989.6匁)、合計324,490.2両 (銀に換算して18,129貫990.6匁) を輸出。(通航一覽)</p> <p>†唐船38艘に銅4,922ピコル、オランダ船 5 艘に銅9,650ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覽)</p> <p>石銀地区に一石宝篋印塔あり。</p>
1670年(寛文10年)	<p>5 月27日 奉行山高孫兵衛大森にて逝去す。位牌は栄泉寺に安置す。(観聴隨筆)</p> <p>6 月27日 対馬藩、老中より朝鮮へ渡した銀の量を調査し、長崎奉行へ報告するよう命じられる。(宗家記録)*</p> <p>7 月24日 対馬藩、朝鮮へ渡した銀の量、私貿易の様子を長崎奉行へ報告するとの記述あり。(宗家記録)*</p> <p>8 月19日 朝鮮金銀交易に関する対馬藩の公儀具申に対する返事あり。</p> <p>8 月25日 対馬守、朝鮮とは金子をもって交易をなすように命じられるとの記述あり。(宗家記録)*</p> <p>9 月16日 対馬藩、翌年より朝鮮交易の際には金子 3 分の 2、銀子 3 分の 1 渡すことにとりきめる。(宗家記録)*</p> <p>11月 6日 永田作大夫、大森へ下向す。(観聴隨筆)</p> <p>永田作大夫が銀山奉行となる。</p> <p>石見銀山山役銀 6 貫165匁。(山中家文書)*</p> <p>†大坂相場、米 1 石につき銀56匁～58、9匁。(三貨図彙)</p> <p>†唐船に対して金152,304.1両 (銀に換算して8,832貫616匁)、オランダ商船に対して132,684両 (銀に換算して7,695貫772匁)、合計284,988.1両 (銀に換算して16,528貫388匁) を輸出。(通航一覽)</p> <p>†唐船36艘に銅7,324.70ピコル、オランダ船 6 艘に銅22,631ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覽)</p>
1671年(寛文11年)	<p>石見銀山山役銀13貫65匁。(山中家文書)*</p> <p>†大坂相場、米 1 石につき銀44匁～50目。(三貨図彙)</p> <p>†唐船に対して金119,499.2両 (銀に換算して6,930貫971匁)、オランダ商船に対して138,348両 (銀に換算して8,024貫184匁)、合計257,847.2両 (銀に換算して14,955貫155匁) を輸出。(通航一覽)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1668年㊤(康熙7年)	<p>日本は、オランダに対して金1両に付き銀68匁で両替し、金で決済している。当時長崎では金1両が銀57.8匁であり、日本にとっては1両につき10匁の利益になる。(十七世紀日蘭交渉史)</p> <p>1668年度の日本銅の輸出量は901,400カティ、輸出額は433,798グルデン、単価は1ピコルあたり13.4テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1668年度の小判の輸出量は106,500両、単価は5.6テール。(近世の小判貿易について)</p>
1669年㊤(康熙8年)	<p>11月11日 清国、北京では銭銀比価は銭1,000文＝銀7銭に値する。(明清史料)</p> <p>清国、米1石につき銀5、6銭。(閱世編)</p> <p>この年マニラ港に入港した日本発の船舶はサンパン船が2隻、船長はともに中国人。(Les Philippines et le Pacifique des Ibriques)</p> <p>1660年代清国、銭1,000文を銀1両とするが、民間では銀7、8銭に換算される。銭価が低い原因は賦税徴収では銀のみ求められる傾向があるため。(皇朝経世文編・広銅斤通銭法疏)</p> <p>1669年度の日本銅の輸出量は965,000カティ、輸出額は446,416グルデン、単価は1ピコルあたり12.8テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1669年度の小判の輸出量は101,284両、単価は5.6テール。(近世の小判貿易について)</p>
1670年㊤(康熙9年)	<p>10月23日 この時、あるイギリス商人の手紙で述べる台湾、日本の商品価格によれば、鄭成功の日本貿易の利潤率は約150%。(十七世紀台湾英国貿易史料)</p> <p>清国、洪水のため米1石につき銀1両前後で変動する。(閱世編)</p> <p>この頃清国、夫役1日の賃金は銀4～6分＝銭32～48文。(清聖祖実録)</p> <p>清国北京では銭1,000文：銀8銭で流通する。(皇朝経世文編)</p> <p>1670年度の日本銅の輸出量は2,263,100カティ、輸出額は1,033,670グルデン、単価は1ピコルあたり12.7テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1670年度の小判の輸出量は77,333両、単価は5.6テール。(近世の小判貿易について)</p>
1671年㊤(顯宗12年)	<p>4月27日 朝鮮において米1石は銀5両にあたり、7月には朝鮮において米1石は銀6両に、豆は3両になる。(顯宗改修実録)</p> <p>9月21日 イギリス東インド会社、日本派遣のリターン号船団に、日本の金銀銅をインドの各商館へもたらすことを期待。(イギリス東インド会社書簡集)</p>

西 暦 (年号：日本)	内 容
1671年(寛文11年)	<p>† 唐船に丁銀の輸出。(通航一覧)</p> <p>† この年から1697年までのオランダ船への金輸出高は、932,883両余り。(通航一覧)</p> <p>† 唐船38艘に銅13,511.30ピコル、オランダ船7艘に銅15,995ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p>
1672年(寛文12年)	<p>† 5月15日 朝鮮は交易の対価を金のみでは受取らないとの記述あり。(宗家記録)*</p> <p>8月21日 <朴金山>金山奉行朴金山の切取の日前が20日で済み、21日に留山する旨、藩老へ注進する。(雑書)</p> <p>8月 <長登銅山>長登村山神社の梵鐘銘によると、水の湧出で採掘不能となっていた大切山で、今年の夏、水が涸れ銅を採取でき、鐘を新鑄して山神社に奉献した。(風土注進案 美禰宰判)</p> <p>石見銀山山役銀9貫707匁9分。(山中家文書)*</p> <p>† 大坂相場、米1石につき銀47匁~49匁。(三貨図彙)</p> <p>† この年から1684年までに日本は中国へ銀80,388貫776匁を輸出。(通航一覧)</p> <p>† 唐船に対して金125両、オランダ商船に対して88,891.1両、合計89,016.1両を輸出。(通航一覧)</p> <p>† この年から1684年までの日本からオランダへの総輸出高は年平均5,868貫363匁余(6,650貫811匁)。うち金輸出高は年平均46,702両余(銀高3,157貫784匁)。(通航一覧)</p> <p>† 銅屋泉屋はオランダに銅100斤あたり銀125匁の割合で224万斤余を販売。(銅異国売覚帳)</p> <p>† 唐船43艘に銅11,581ピコル、オランダ船7艘に銅22,466ピコル(22,578.31ピコル)を輸出。1ピコル=100斤。(年々帳・通航一覧)</p>
1661-1673年 (寛文年間)	<p><生野銀山>寛文年間出石領に矢根銀山が発見され、同じ頃摂津多田銀山が興隆して、下財ら生野を退散するにより、生野銀山はほとんど廃滅の状態という。(生野銀山旧記)</p> <p><吉岡銅山>彦坂平九郎が備中倉敷代官であった正保~寛文期、銅山は不調で銅山師が次々と入れ替わった。大坂の天野屋新左衛門が納めた御運上銀は、年平均にして銀300~360枚(出銅の5%)、大坂の平野屋清右衛門・浜田屋清兵衛が8年間の稼行期間中に納めた運上銀は、銀1,700枚に過ぎなかった。寛文6~9年の4年間は全く休山の状態であった。(成羽町史)</p> <p><白根金山>寛文期以降天和・貞享にかけて、白根の銅は年間20万~60万斤にも達している。同じ頃、西道・五十枚金山の地区に銅鉾が発見され尾去沢銅山となった。また、白根に隣接した駒木・立石の銅山、鹿角郡北部の鴉・不狼倉等の銅山も開かれた。(雑書)</p> <p>12月 妙本寺上に一石宝篋印塔、(月日未詳)妙本寺上に「為□□□門土」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1673年(寛文13年) (延宝元年)	<p>石見銀山山役銀7貫540目。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高357貫25匁。(野沢家文書)</p> <p>† 大坂相場、米1石につき銀55、6匁。(三貨図彙)</p> <p>† 日本はオランダ船に金86,480両を輸出。(通航一覧)</p> <p>† この年から1679年までの日本から蘭船への金輸出量は333,091両3歩。(通航一覧)</p> <p>† 幕府の足尾銅の買上げの値段は、金1両につき銅15貫。金1万両で足尾丁銀10万貫の払下げを受けて棹銅に吹き、長崎から輸出すると金3,000両の損金となる。(銅異国売覚帳)</p> <p>† 唐船20艘に銅10,966.50ピコル(10,966.50ピコル)、オランダ船6艘に銅15,044ピコル(15,043ピコル)を輸出。1ピコル=100斤。(年々帳・通航一覧)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1671年㊦(顯宗12年)	<p>清国、早稲米1石につき銭1,300文で、銀1両1銭にあたる。綿100斤の値段は銭3,300文＝銀3両。(閱世編)</p> <p>1671年度の日本銅の輸出量は1,599,500カティ、輸出額は727,772グルデン、単価は1ピコルあたり12.6テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1671年度の小判の輸出量は107,241両、単価は5.6テール。(近世の小判貿易について)</p>
1672年㊦(顯宗13年)	<p>5月14日 前年に長崎来航の中国船が、中国での金が安価なため、願い出て今年3月30日に日本銀を輸出。理由は清国における金の利益薄。(Dagregister)*</p> <p>台湾鄭氏、毎年5、6隻の船を派遣し、台湾－マニラ－日本間の貿易を行う。(十七世紀台湾英国貿易史料)</p> <p>1672年、日本小判が58マースから68マースへ価格騰貴。東インド会社の金貿易に大損害を与えたが、これは銅輸出には好都合。</p> <p>この年マニラ港に入港した日本発の船舶は1隻、台湾経由で嵐による漂着。(Les Philippines et le Pacifique des Ibzriques)</p> <p>1672年度の日本銅の輸出量は2,246,606カティ、輸出額は1,021,426グルデン、単価は1ピコルあたり12.5テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1672年度の小判の輸出量は69,207両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1661－1673年	
1673年㊦(康熙12年)	<p>清国、公定価格は銭1,000文＝銀1両、市場価格は銭1,000文＝銀8銭1、2分である。この年以降、反乱が起こるため、銭価は激減し、銭1,000文は銀3銭～6銭になる。(閱世編)</p> <p>清国秋、新米1石につき銭7百文で、銀6銭3分にあたる。その後、常にこの米価である。(閱世編)</p> <p>1673年度の日本銅の輸出量は1,504,400カティ、輸出額は676,603グルデン、単価は1ピコルあたり12.35テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>

西 曆 (年号：日本)	国 内
1674年(延宝2年)	<p>6月 銀山、大雨のため前代未聞の洪水になる、という。(石見国銀山古書類控)</p> <p>9月 <甲斐雨畑村金山>この年の9月より4ヶ年間、河内領雨畑村長畑の遠沢谷というところで多くの産金があったという。(甲斐国歴代譜)</p> <p><大葛金山>惣山支配役黒沢元重によって鉱山普請のための貸米制度が推進された。大坂商人北国屋からの借金によって3,000石の米を購入し、藩の貯米5,000石と合せて大部分を鉱山に預け、これを本米として農村へ3割の利子で貸付けさせ、利米のうち1割2歩は藩庫へ収納し、1割8歩は鉱山の鋪普請のために給付された。大葛金山にもこの御本米の貸与があり、鋪普請の成果をあげたが、天和3年には廃止された。(鉱山至宝要録)</p> <p>石見銀山山役銀6貫215匁。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高285貫300目。(野沢家文書)</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀74、5匁。今年諸国洪水あり、前代未聞の米価高騰。(三貨図彙)</p> <p>†日本はオランダ船に金66,312両を輸出。(通航一覧)</p> <p>†唐船22艘に銅11,270.9ピコル(10,326ピコル)、オランダ船6艘に銅17,920ピコル(17,131ピコル)を輸出。1ピコル=100斤。(年々帳・通航一覧)</p>
1675年(延宝3年)	<p>4月3日 <南部香番平金山>朴山の内の香番平金山を遠山の彦右衛門と佐比内の佐太郎が運上金50目で請けたが、赤沢村の与左衛門が運上を500目までせりあげたので、藩から20俵を褒美として与左衛門に与えた。(雑書)</p> <p><大葛金山>慶安年中より延宝年中まで秋田藩と南部藩の間で境目論争があり、この影響でかつては南部境付近の鍵懸沢にあった大葛の鉱山集落が、この年右市鳥沢・左り市鳥沢・金山沢の合流する場所に移転させられた。(荒谷家文書)</p> <p>柘植伝兵衛が代官となる。これ以降奉行から代官へ呼称が変る。(山中家文書)</p> <p>永田作大夫支配中(寛文10~延宝3年)、従来灰吹賃について灰吹師の請役であったものが、灰吹銀が次第に減少するようになったため、請銀3ヶ年の平均をもって年間の吹高、灰吹高1貫につき31匁6歩6厘ずつを納めさせるようになる。(山中家文書)</p> <p>類焼家拝借銀について関東では金子、1両2歩、石州では判銀75匁が慣例となっている。(観聴随筆)</p> <p>石見銀山灰吹銀高398貫400目。(野沢家文書)</p> <p>当年春中、米大小豆1石100目にて商売す。(観聴随筆)</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀62匁~65匁。(三貨図彙)</p> <p>†日本はオランダ船に金48,365両を輸出。(通航一覧)</p> <p>†唐船29艘に銅19,216.4ピコル(19,354ピコル)、オランダ船4艘に銅10,207ピコル(10,975ピコル)を輸出。1ピコル=100斤。(年々帳・通航一覧)</p> <p>高野山過去帳に3月29日「銀山 出シ土 浅原忠左衛門」とあり。</p> <p>4月28日 妙正寺に「経妙 尼」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1676年(延宝4年)	<p><越中松倉金山>松倉には知恩院末の光山寺があったが、かね山衰微のため、延宝4年退転したという。最盛期には2人であった給銀肝煎はこの頃の人口減に伴い1人とされた。また、元禄5年の松倉の十分一諸役銀は150目となった。(加藩貨幣録)</p> <p>石見銀山山役銀7貫210匁。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高297貫57匁6分。(野沢家文書)</p> <p>†大坂相場、米1石につき銀57匁~60匁。(三貨図彙)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1674年㊦(康熙13年)	<p>清国の密貿易者、薬材などを日本へ持っていき、銀を持ち帰る。(明清史料)*</p> <p>1674年度の日本銅の輸出量は1,792,700カティ、単価は1ピコルあたり12.2テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1674年度の小判の輸出量は50,567.5両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1675年㊦(康熙14年)	<p>1675年度の日本銅の輸出量は1,020,900カティ、単価は1ピコルあたり12.1テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1675年度の小判の輸出量は41,073両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1676年㊦(康熙15年)	<p>イギリス東インド会社、日本銀と日本銅を廈門へ持っていく。(十七世紀台湾英国貿易史料)</p> <p>1676年度の日本銅の輸出量は2,058,700カティ、単価は1ピコルあたり11.9テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1676年度の小判の輸出量は19,989両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1676年(延宝 4 年)	<p>† 日本はオランダ船に金23,341両を輸出。(通航一覧)</p> <p>† 唐船24艘に銅15,134.72ピコル、オランダ船4艘に銅20,561ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>石銀地区に「地月□□□禪」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1677年(延宝 5 年)	<p>石見銀山山役銀 7 貫210匁。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高279貫680目。(野沢家文書)</p> <p>延宝 5 年戸口、銀山 295軒・1,538人、大森 106軒・431人。(野沢家文書)</p> <p>† 大坂相場、米 1 石につき銀37匁～47匁。(三貨図彙)</p> <p>† 日本はオランダ船に金45,053両を輸出。(通航一覧)</p> <p>† 唐船29艘に銅15,582.34ピコル、オランダ船 3 艘に銅17,035ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p>
1678年(延宝 6 年)	<p>京都銀座、代官柘植伝兵衛へ運上灰吹銀高467貫108匁 3 分についての受取手形を提出する。(石州銀山治府要集)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高198貫857匁。(野沢家文書)</p> <p>石見銀山山役銀 3 貫330目。(山中家文書)*</p> <p>延宝 6 年戸口、銀山 317軒・1,564人、大森 120軒・452人、在郷 8,073軒・35,305人。(野沢家文書)</p> <p>† 大坂相場、米 1 石につき銀44匁～46匁。(三貨図彙)</p> <p>† 日本はオランダ船に金32,447両を輸出。(通航一覧)</p> <p>† 唐船26艘に銅16,415.05ピコル、オランダ船 3 艘に銅16,088ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p>
1679年(延宝 7 年)	<p>石見銀山山役銀 2 貫335目。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高179貫630目。(野沢家文書)</p> <p><安芸寺尾銀山>寺尾銀山が高宮郡可部町の商人らによって再開された。(加計町史)</p> <p><仙台領金山>気仙郡では、従来は砂金で納められていた本判役が、延宝 7 年より代銭納されることになった。(松坂家文書)</p> <p>米 1 万俵=銀200貫 (=小判2,000両+銀子80貫目)。(吉川家文書)</p> <p>† 大坂相場、米 1 石につき銀53匁～55、6匁。(三貨図彙)</p> <p>† 日本はオランダ船に金29,799両を輸出。(通航一覧)</p> <p>† 唐船33艘に銅19,931ピコル、オランダ船4艘に銅23,500ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>3月22日 石銀地区に「地□□□信士」の銘のある一石宝篋印塔、12月4日 「地雪岩□□信女」の銘のある一石宝篋印塔、12月21日 妙正寺に「学順坊日是」の銘のある一石五輪塔あり。</p>
1680年(延宝 8 年)	<p>銀山稼入用として幕府から米585石 7 斗 8 升が、この年代官柘植伝兵衛の時に、銀山師困窮のため御救拝借を仰せつけられ、天和 3 年から貞享元年の両年に返納するという。(石見銀山旧記)</p> <p>石見銀山山役銀 2 貫912匁 7 分。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高251貫725匁 6 分。(野沢家文書)</p> <p>† 大坂相場、米 1 石につき銀67匁～70目。(三貨図彙)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1676年㊦(康熙15年)	
1677年	<p>1677年度の日本銅の輸出量は1,703,800カティ、単価は1ピコルあたり11.9テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1677年度の小判の輸出量は29,760両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1678年㊦(康熙17年) ㊧(肅宗4年)	<p>清国では2年前、反乱が平定されたため、銭価は次第に増え、この年と翌年、銭千文は銀9銭前後に回復。この年、早稲新米1石につき銀7銭3分。(閩世編)</p> <p>朝鮮において米9,000余石は銀6,000余両にあたる。(増正交隣志)</p> <p>1678年度の日本銅の輸出量は1,608,820カティ、単価は1ピコルあたり11.9テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1678年度の小判の輸出量は25,070両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1679年㊦(康熙18年)	<p>7月 清国、浙江沿海の海上貿易を禁止。(清聖祖実録・清朝文献通考)</p> <p>清国、銭1,000文を銀1両とするが、民間では銀7、8銭に換算される。(皇朝経世文編)</p> <p>清国、銅銭不足のため、その価格は騰貴する。(清朝文献通考)</p> <p>清国、米1石につき春には銀1両4、5銭、秋には銀2両。大豆の価格は急騰し、1石につき銀1両2銭前後で浮動。(閩世編)</p> <p>1679年度の日本銅の輸出量は2,350,000カティ、輸出額は1,019,900グルデン、単価は1ピコルあたり11.9テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1679年度の小判の輸出量は21,127両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1680年㊦(康熙19年)	<p>清国では夏、米1石につき銀2両。この年以降数年間、大豆の価格は1石につき銀6銭ないし1両3銭5分前後で浮動。(閩世編)</p> <p>1680年度の日本銅の輸出量は2,685,200カティ。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1680年度の小判の輸出量は7,331両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1680年(延宝 8 年)	<p>1 匁当たり米値段 1 升 9 合 2 勺。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>† 日本はオランダ船に金11,385両を輸出。(通航一覧)</p> <p>† 唐船29艘に銅15,936ピコル、オランダ船4艘に銅25,000ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p>
1673-1681年 (延宝年間)	<p><吉岡銅山>寛文10~延宝 7 年 (彦坂九平治代官) までは吉岡銅山好調。江戸の大坂屋喜兵衛他 4 人の銅山師が稼行した寛文10~延宝元年までの 3 年間の運上は銀4,150枚、延宝元~同 4 年まで稼行した江戸の二見源兵衛の運上銀は4,300枚、延宝 5 ~同 7 年まで稼行した備前岡山の千田屋瀬兵衛の運上銀は 3 年間で4,500枚であった。(成羽町史)</p> <p>5 月 6 日 妙正寺に「経済是靈位」の銘のある組合せ宝篋印塔、10月12日 妙本寺上に「為 心營風法尼」の銘のある一石五輪塔あり。</p>
1681年(延宝 9 年) (天和元年)	<p>柘植伝兵衛 (延宝 3 ~天和元年) 支配中、従来の石代銀及び諸運上銀の判銀納を改め、丁銀による上納も認める。(山中家文書)</p> <p>石見銀山山役銀 2 貫786匁。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高170貫334匁 1 分。(野沢家文書)</p> <p>1 匁当たり米値段、2 升。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>† 大坂相場、米 1 石につき銀75匁~78、9匁。(三貨図彙)</p> <p>† 日本はオランダ船に金35,386両を輸出。(通航一覧)</p> <p>† 唐船 9 艘に銅5,367ピコル、オランダ船 4 艘に銅24,000ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p>
1682年(天和 2 年)	<p>12月 1 匁当たり米値段、2 升 6 合。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>石見国の内吉永藩 1 万石、出雲国の内広瀬藩飯石郡 1 万 5 千石が銀山領となる。(観聴随筆)</p> <p>由比長兵衛が代官となる。(山中家文書)</p> <p>加藤家が江州水口へ転封となり、安濃郡20ヶ村は銀山領となる。</p> <p>石見銀山山役銀 2 貫108匁。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高200貫139匁 7 分。(野沢家文書)</p> <p>† 日本はオランダ船に金51,094両を輸出。(通航一覧)</p> <p>† 唐船26艘に銅30,218.50ピコル、オランダ船 4 艘に銅25,000ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p>
1683年(天和 3 年)	<p>石州ゆずり葉銀 (掛目55匁「御公用」の極印あり) は延宝天和の頃まで通用したという。(石見国銀山文書)</p> <p>石見銀山山役銀 2 貫967匁 2 分。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高295貫671匁 3 分。(野沢家文書)</p> <p>1 匁当たり米値段 3 升。(山中家文書)</p> <p><生野銀山>生野領より資銀を集め、百姓の名代として山口弥衛門・加奉市右衛門に山元の捌きを命じて、稼山として 2 山 (因幡町の上の三郎兵衛山・四郎兵衛山) を選定した。(生野銀山旧記)</p> <p><吉岡銅山>天和 3 ~翌貞享元年まで、大坂の泉屋 (住友) 吉左衛門が吉岡銅山を稼行。運上銀5,300枚を上納した。(成羽町史)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1680年㊤(康熙19年)	
1673-1681年	
1681年㊤(康熙20年)	<p>12月8日 1番台湾船が棹銅2,500斤と古銅175斤と丁銀20,500匁、2番台湾船が棹銅5,000斤と丁銀101,500匁を輸出。(東インド到着文書)</p> <p>12月9日 3番台湾船が棹銅4,000斤と古銅350斤と丁銀90,500匁を輸出。(東インド到着文書)</p> <p>12月10日 4番台湾船が棹銅35,000斤と古銅400斤と丁銀157,500匁、5番台湾船が棹銅3,500斤と古鉄1,200斤を輸出。(東インド到着文書)</p> <p>12月29日 6番咬留巴(カラッパ)船が棹銅112,700斤と丁銀20,700匁、7番諫埔寨(カンボジア)船が棹銅1,400斤と古銅150斤と丁銀58,000匁、8番諫埔寨船が棹銅5,050斤、古銅150斤、丁銀37,000匁を輸出。(東インド到着文書)</p> <p>この年以降清国、私鑄銭が流行し、それでも銭銀比価は銭千文対銀8銭で、官鑄銭は対1両前後。(閱世編)</p> <p>1681年度の日本銅の輸出量は2,709,100カティ、単価は1ピコルあたり11.9テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1681年度の小判の輸出量は16,677.5両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1682年㊤(康熙21年)	<p>1月10日 9番暹羅船が棹銅157,300斤と鉄2,500斤と丁銀30,000匁を輸出。(東インド到着文書)</p> <p>5月 清国、米1石につき銀8銭5分。(閱世編)</p> <p>7月1日 10番南金船が棹銅1,800斤と丁銀13,400匁を輸出。(東インド到着文書)</p> <p>10月20日 唐船25隻で棹銅2,825,356斤、古銅5,290斤、古鉄29,230斤、銅銭11,987束、丁銀2,895,030匁を輸出。(東インド到着文書)</p> <p>1682年度の日本銅の輸出量は2,721,600カティ、単価は1ピコルあたり11.9テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>
1683年㊤(康熙22年)	<p>6月23日 鄭氏海商集団の商船、日本貿易で銀・銅などを買い入れる。(明清史料・花村談往)*</p> <p>この時以降、清国の金銀鋳の採掘政策は消極化。(清史稿)</p> <p>清国では冬、米1石につき銀9銭前後。(閱世編)</p> <p>日本-シャム貿易をする1隻の台湾船、台湾から輸出した砂糖を日本で売りさばいて銀13,520両を得た。(明清史料)</p> <p>この年マニラ港に入港した日本発の船舶は2隻、1672年の時と同様、日本・台湾航路のサンパン船2隻が、おもてむき、嵐のためマニラに漂泊。(Les Philippines et le Pacifique des Ibriques)</p> <p>1683年度の日本銅の輸出量は1,721,100カティ、単価は1ピコルあたり11.9テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	内 容
1683年(天和3年)	<p><芹ヶ野金山>芹ヶ野金山が衰微したので、これを休山とし、金掘を鹿籠金山へ移した。(金山由緒)</p> <p>†日本はオランダ船に金27,944両を輸出。(通航一覧)</p> <p>†唐船27艘に銅23,293.55ピコル、オランダ船3艘に銅16,000ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p>
1681-1684年 (天和年間)	<p>代官柘植伝兵衛の天和年中から、銀山が衰退したため、銀山領の年貢米を江戸大坂へ送るよう仰せつけられるという。(観聴随筆)</p>
1684年(貞享元年)	<p>4月10日 <飛騨蔵柱金山>船渡町(舟津町村)の吉蔵より出願されていた蔵柱そぶ谷の金山の普請が許可された。(谷口家文書)</p> <p>浜田藩領の内邑智郡八色石付近6ヶ村が銀山領となる。(観聴随筆)</p> <p>石見銀山山役銀2貫924匁5分。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高356貫239匁3分。(野沢家文書)</p> <p>1匁当たり米値段 2升9合、1俵当たり米値段 12匁2分~14匁2分。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p><吉岡銅山>泉屋が吉岡銅山の請負契約を更新した時、従来は1ヶ年に銀何枚と定めて請けたのに変えて、掘り出した銅1,000貫目につき運上銅100貫とし、代銀で毎月上納するという上納法とした。(住友家文書)</p> <p><梅ヶ島金山>府中の町人桑名屋六郎兵衛外27人が5ヶ年間梅ヶ島金山請負を勘定奉行より得たが、同年出金少なきため申請して荷分山となり、5ヶ年の期限が過ぎて御手山となった。元禄4年には村請けとなり、運上金15両を納めた。(日本鉱山史の研究)</p> <p>†日朝貿易における丁銀輸出高は、1,937貫927匁、純銀量1,550貫340匁。(慶長銀品位100分中80)(宗家記録)</p> <p>†日本はオランダ船に金60,635両を輸出。(通航一覧)</p> <p>†輸出銅高5,135,500斤。中国へ2,675,100斤。オランダへ2,460,400斤。(年々帳)</p> <p>†唐船24艘に銅26,148.88ピコル、オランダ船5艘に銅22,800ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>正月 龍昌寺に「雲(恭)高龍信士」の銘のある笠付方形墓標あり。</p>
1685年(貞享2年)	<p>2月3日 安原十郎兵衛、祖父安原備中拜領の羽織・扇子の返納を願い出、代官由比長兵衛より清水寺へ奉納すべき旨通達する。(安原十郎兵衛言上書)</p> <p>石見銀山山役銀3貫177匁。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高376貫470匁2分。(野沢家文書)</p> <p>石見銀山灰吹銀判銀打高371貫41匁。(判賃5貫565匁6分2厘)(山中家文書)</p> <p>1匁当たり米値段 3升1合~1升8合5匁、1俵当たり米値段 24匁。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>†日朝貿易における丁銀輸出高は、2,007貫250匁、純銀量1,605貫800匁。(慶長銀品位100分中80)(宗家記録)</p> <p>†日本はオランダ船に金4,739両を輸出。(通航一覧)</p> <p>†日本には主な銅山が約50ヶ所あり、大阪には年間約900万斤の銅が集まる。そのうち100万斤を国内向けに、残り800万斤を輸出向けの棹銅にすれば、金15万両(銀高9,000貫目)の輸出能力があることになる。(異国売之銅屋共乍恐謹而御訴訟)</p> <p>†輸出銅高5,634,100斤。中国へ3,288,200斤。オランダへ2,345,900斤。(年々帳)</p> <p>†唐船73艘に銅23,284.4ピコル、オランダ船4艘に銅21,000ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>5月13日 妙本寺上に、右側「十八才□□(塔身右側「俗名光四」)おさん」正面「妙円」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1683年㊤(康熙22年)	1683年度の小判の輸出量は13,392両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)
1681-1684年	
1684年㊤(康熙23年)	<p>7月 康熙帝、沿海地の海禁解除を命じる。(清聖祖実録・清朝文献通考)</p> <p>9月 康熙帝、海上貿易に対する課税増加に反対の意を示す。(清聖祖実録)</p> <p>9月 清国、銀の対銭比価は銀1両：銭1,000文と規定されるが、銭価は高くなり、8,900文は1両に当たる。この年銅銭の重さを1銭に改定する。(清聖祖実録・清朝文献通考)</p> <p>清国康熙帝、海上貿易を推進し、4貿易港を開く。(康熙起居注)</p> <p>清国の船主劉国軒の廈門船は積んだ砂糖を長崎で売り、売上の銀で銅などを購入し、帰国途中暹羅で胡椒などを仕入れる。(明清史料)</p> <p>この年清国、私鑄銭は禁止され、官鑄銭千文の値は銀1両2銭にあたる。(閱世編)</p> <p>この年の秋清国、玄米1石につき銀8、9銭とする。次の年の米価も同じ。(閱世編)</p> <p>この年マニラ港に入港した日本発の船舶は2隻。(Les Philippines et le Pacifique des Ibriques)</p> <p>1684年度の日本銅の輸出量は2,460,400カティ、単価は1ピコルあたり11.9テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1684年度の小判の輸出量は41,432両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1685年㊤(康熙24年)	<p>4月 康熙帝、海上貿易による不正を厳禁させ、外国朝貢船に対する免税を論ず。(清聖祖実録・清朝文献通考)</p> <p>清国、朝鮮国王の貿易停止要求を却下。(清朝文献通考)</p> <p>清国では、外国船と海外貿易船に対する課税が軽減される。(清朝文献通考)</p> <p>日本国内におけるオランダ人との交換レートは、小判1枚が68マースと定められるとの記述あり。(ツンベルグ日本紀行)</p> <p>1685年度の日本銅の輸出量は2,345,900カティ、単価は1ピコルあたり11.9テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1685年度の小判の輸出量は127両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>

西 暦 (年号 : 日本)	国 内
1686年(貞享3年)	<p>石見銀山山役銀 4 貫30匁 4 分*。(山中家文書)</p> <p>石見銀山灰吹銀高290貫300目 7 分。(野沢家文書)</p> <p>石見銀山灰吹銀判銀打高325貫398匁 8 分 (判賃 4 貫880目 9 分 8 厘)。(山中家文書)</p> <p>†幕府、朝鮮及び琉球国の貿易における年間金額を定む。朝鮮国は金 1 万 8 千両、琉球国は金 2 千両を制限とす。(徳川実記)</p> <p>†日朝貿易における丁銀輸出高は、2,887貫345匁、純銀量2,309貫876匁 (慶長銀品位100分中80)。(宗家記録)</p> <p>†日本は唐船に銀596貫755匁 1 分を輸出。(通航一覧)</p> <p>†日本はオランダ船に金4,020両を輸出。(通航一覧)</p> <p>†輸出銅高6,574,600斤。中国へ4,455,700斤。オランダへ2,118,900斤。(年々帳)</p> <p>†唐船83艘に銅32,444.935ピコル、オランダ船 4 艘に銅20,000ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p>
1687年(貞享4年)	<p>石見銀山山役銀 6 貫838匁。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高410貫258匁 1 分。(野沢家文書)</p> <p>石見銀山灰吹銀判銀打高400貫440匁 1 分 (判賃 6 貫 6 匁 6 分 1 厘)。(山中家文書)</p> <p>1 匁当たり米値段 3 升、1 俵当たり米値段 14匁 6 分 7 厘。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>†日朝貿易における丁銀輸出高は、2,044貫121匁、純銀量1,635貫296匁 (慶長銀品位100分中80)。(宗家記録)</p> <p>†輸出銅高5,330,200斤。中国へ3,830,200斤。オランダへ1,500,000斤。(年々帳)</p> <p>†日本はオランダ船に金16,534両を輸出。(通航一覧)</p> <p>†唐船115艘に銅42,945.62ピコル、オランダ船 3 艘に銅15,000ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p>
1684-1687年 (貞享年間)	<p>6 月 3 日 龍源寺間歩上に「経 玄中」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1688年(貞享5年) (元禄元年)	<p>†10月25日 倭館へ銀を積載した飛船 2 艘到着。(宗家文書)</p> <p>石見銀山山役銀 8 貫337匁*。(山中家文書)</p> <p>石見銀山灰吹銀高431貫310匁 6 分 6 厘。(野沢家文書)</p> <p>石見銀山灰吹銀判銀打高421貫575匁 (判賃 6 貫323匁 6 分 3 厘)。(山中家文書)</p> <p>1 匁当たり米値段 3 升、1 俵当たり米値段 14匁 6 分。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>隠岐国、銀山領へ附く。(観聴随筆)</p> <p>†安南王より鑄銭の料銅を乞う。(近藤守重筆記)</p> <p>†日朝貿易における丁銀輸出高は、2,487貫226匁、純銀量1,989貫780匁 (慶長銀品位100分中80)。(宗家記録)</p> <p>†輸出銅高4,620,600斤。中国へ3,370,600斤。オランダへ1,250,000斤。(年々帳)</p> <p>†日本はオランダ船に金23,358両を輸出。(通航一覧)</p> <p>†唐船117艘に銅39,217.3ピコル、オランダ船 3 艘に銅15,625ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>7 月 8 日 妙正寺に円頂方柱型墓標、8 月 1 日 妙本寺上に「経妙有霊」の銘のある一石五輪塔あり。(月未詳)</p> <p>1 日 妙本寺上に「[] 心信土」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1686年	<p>1686年度の日本銅の輸出量は2,070,000カティ、輸出額は898,380グルデン、単価は1ピコルあたり11.9テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1686年度の小判の輸出量は143両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1687年	<p>1687年度の日本銅の輸出量は1,500,000カティ、輸出額は651,000グルデン、単価は1ピコルあたり11.9テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1687年度の小判の輸出量は10,844両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1684-1687年	
1688年	<p>1688年度の日本銅の輸出量は1,250,000カティ、輸出額は542,500グルデン、単価は1ピコルあたり11.9テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1688年度の小判の輸出量は15,597両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>

西 暦 (年号 : 日本)	国 内	
1689年(元禄 2 年)	<p>† 10月10日 釜山倭館へ銀を積載した飛船 3 艘到着。(宗家文書)</p> <p><仙台領金山>刈田郡小原村の黒森銀山が開発された。この銀山は享保・元文頃まで繁栄したが、その後衰え、宝暦 4 (1745) 年頃休山した。(風土記御用書出)</p> <p>石見銀山山役銀 6 貫252匁 9 分。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高503貫744匁 7 分。(野沢家文書)</p> <p>1 匁当たり米値段 2 升 3 合。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>† 日朝貿易における丁銀輸出高は、1,994貫748匁、純銀量1,595貫798匁(慶長銀品位100分中80)。(宗家記録)</p> <p>† 輸出銅高5,312,568.5斤。中国へ3,352,568.5斤。オランダへ1,960,000斤。(年々帳)</p> <p>† 日本はオランダ船に金10,570両を輸出。(通航一覧)</p> <p>† 唐船70艘に銅35,426.225ピコル、オランダ船 4 艘に銅19,600ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>高野山過去帳に10月27日「昆布山 杉谷小左衛門 父ノ為 生国伊賀古山安場之住」とあり。</p> <p>2 月 6 日 龍源寺間歩上に「□□妙陽尼」の銘のある一石宝篋印塔、4 月 7 日 「□嘗月迎信士」の銘のある一石宝篋印塔、(月未詳) 1 日 龍源寺間歩上に「妙春禪定尼」の銘のある一石宝篋印塔、10 月 妙本寺上に「[] 信士」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>	
1690年(元禄 3 年)	<p>† 10月 9 日 対馬鰐浦より釜山倭館へ銀230貫目を積載した飛船 2 艘到着。(宗家文書)</p> <p>石見銀山山役銀 5 貫724匁4分 2 厘。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高612貫839匁 5 分 2 厘。(野沢家文書)</p> <p>石見銀山灰吹銀判銀打高543貫786匁 8 分 (判賃 8 貫156匁 8 分)。(山中家文書)</p> <p>1 匁当たり米値段 3 升 1 合、1 俵当たり米値段 14匁 2 分。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>† 日朝貿易における丁銀輸出高は、2,231貫139匁、純銀量1,784貫911匁(慶長銀品位100分中80)。(宗家記録)</p> <p>† 日本はオランダ船に金17,723両を輸出。(通航一覧)</p> <p>† 輸出銅高5,216,873.4斤。中国へ3,704,973.4斤。オランダへ1,450,000斤。掛・改め欠61,900斤。(年々帳)</p> <p>† 唐船70艘に銅37,438.73ピコル、オランダ船 2 艘に銅14,500ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>2 月22日 妙本寺上に「キリーク □□禪定門靈位」の銘のある一石五輪塔、(月未詳) 15日 妙本寺上に「浄□欣安人士位」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>	
1691年(元禄 4 年)	<p>2 月 <吉岡銅山>中野村の川筋へ水を導く全長200mの「大切水抜」の普請が完成。水没していた間歩が復活した。この頃の吉岡銅山の山内稼人は974人といわれる。(成羽町史)</p> <p>8 月 1 日 <別子銅山>泉屋より出願されていた別子銅山の開発が許可され、稼行が開始された。この銅山は前年、元吉岡銅山の掘子が発見し、泉屋に報告されたものが、一説には貞享 4 年、宇摩郡三島村の祇太夫が、宇摩郡別子山村に鉱脈を発見したともいう。(別子銅山公用帳一)</p> <p>銀掘の人数は176人になる。(御巡見衆諸事覚)</p> <p>代官由比長兵衛支配の時、山師の願いにより炭20貫目 1 駄につき判銀 4 匁宛、荷数に掛けて炭役を納めるようになる。(山中家文書)</p> <p>石見銀山山役銀 5 貫218匁 2 厘。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高625貫704匁 9 分。(野沢家文書)</p>	

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1689年㊤(康熙28年)	<p>8月 清国康熙帝、日本商船に対する余計な査察をしないように諭す。(清聖祖実録)</p> <p>清国では2年前から私鑄銭が再び流行し、官鑄銭1,000文の値は銀1両にもならない。(関世編)</p> <p>この年、シャムに行く中国の商船は14、5隻で、その内、シャムー清国ー日本貿易を行う商船は多数。(華夷変態)</p> <p>1689年度の日本銅の輸出量は1,960,000カティ、輸出額は850,640グルデン、単価は1ピコルあたり11.9テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1689年度の小判の輸出量は1,823.5両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1690年㊤(康熙29年)	<p>清国では私鑄銭が禁止され、この年、官鑄銭1,000文の値は銀1両2、3分にあたる。(関世編)</p> <p>1690年度の日本銅の輸出量は1,450,000カティ、輸出額は629,300グルデン、単価は1ピコルあたり11.9テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1690年度の小判の輸出量は12,261両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1691年	<p>1691年度の日本銅の輸出量は900,000カティ、輸出額は389,025グルデン、単価は1ピコルあたり11.85テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1691年度の小判の輸出量は22,757.75両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>

西 暦 (年号 : 日本)	国 内
1691年(元禄 4 年)	<p>石見銀山灰吹銀判銀打高539貫599匁 6 分 (判賃 8 貫93匁 9 分 6 厘)。(山中家文書)</p> <p>1 俵当たり米値段 16匁。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>† 日朝貿易における丁銀輸出高は、2,730貫603匁、純銀量2,184貫482匁 (慶長銀品位100分中80)。(宗家記録)</p> <p>† 日本はオランダ船に金27,943両を輸出。(通航一覧)</p> <p>† 輸出銅高3,860,840斤。中国へ2,939,440斤。オランダへ900,000斤。掛・改め欠22,400斤。(年々帳)</p> <p>† 唐船70艘に銅32,209.55ピコル、オランダ船 3 艘に銅9,000ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p>
1692年(元禄 5 年)	<p>後藤覚右衛門が代官となる。(山中家文書)</p> <p>石見銀山山役銀 4 貫642匁。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高271貫140目 5 分 7 厘。(野沢家文書)</p> <p>石見銀山灰吹銀判銀打高270貫265匁 (判賃 4 貫53匁 9 分 2 厘)。(山中家文書)</p> <p>1 匁当たり米値段 2 升 8 合、1 俵当たり米値段 15匁 7 分~14匁 7 分。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>† 日朝貿易における丁銀輸出高は、2,437貫241匁、純銀量1,949貫792匁 (慶長銀品位100分中80)。(宗家記録)</p> <p>† 日本はオランダ船に金13,118両を輸出。(通航一覧)</p> <p>† 輸出銅高4,070,250斤。中国へ2,182,190斤。掛・改め欠6,560斤。オランダへ1,800,000斤。掛・改め欠81,500斤。(年々帳)</p> <p>† 唐船70艘に銅35,463.74ピコル、オランダ船 4 艘に銅18,000ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>高野山過去帳に 8 月27日「銀山 桜内治兵衛子息」とあり。</p> <p>4 月28日 龍源寺間歩上に「経 妙□靈」の銘のある一石五輪塔、4 月 8 日 妙本寺上に「□大本□為幼主茸子也」の銘のある一石五輪、(月日未詳)「[] 春信士」の銘のある宝篋印塔あり。</p>
1693年(元禄 6 年)	<p>6 月 後藤覚右衛門支配中、銀山稼入用として銀200貫を下し置かれ、その内28貫600目58匁 3 分 2 厘で柑子谷元泉山水抜普請を行う。残銀は元禄14年井口治右衛門支配の節に返納する。(銀山開起由来記)</p> <p>7 月29日 <伊豆湯ヶ島金山>湯ヶ島金山の山師金右衛門・伝左衛門・安兵衛の 3 名より岡本弥市右衛門にあてて、72両の吹金の代金として 7 両とビタ 1 貫文を受取った旨の手形が渡される。(大城家文書)</p> <p>8 月 後藤覚兵衛支配中、極印屋で汲鉛役を判銀100目につき 2 匁宛取立てるといふ。(山中家文書)</p> <p>後藤覚兵衛支配中、炭が高値になったため炭正味20貫目 1 駄につき 1 匁 2 歩 5 厘宛を炭役納めるように改められる。(山中家文書)</p> <p>石見銀山灰吹銀高282貫772目 6 分 7 厘。(野沢家文書)</p> <p>石見銀山山役銀 4 貫10匁 5 分。(山中家文書)*</p> <p>1 匁当たり米値段 3 升 2 合、1 俵当たり米値段 13匁 7 分 5 厘。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>† 日朝貿易における丁銀輸出高は、2,274貫246匁、純銀量1,819貫396匁 (慶長銀品位100分中80)。(宗家記録)</p> <p>† 日本はオランダ船に金22,854両を輸出。(通航一覧)</p> <p>† 輸出銅高4,152,317斤。中国へ3,976,630斤。掛・改め欠10,845斤。オランダへ1,250,000斤。掛・改め欠61,250斤。(年々帳)</p> <p>† 唐船70艘に銅33,626.85ピコル、オランダ船 5 艘に銅12,000ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>2 月25日 龍昌寺に「為妙恋禪定尼」の銘のある宝篋印塔、12月 4 日 龍源寺間歩上に「経 妙明靈」の銘のある一石宝篋印塔、(月日未詳) 妙正寺に「[] 月靈位」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1691年	
1692年㊦(肅宗18年)	<p>10月 朝鮮において銀貨を偽造すれば斬刑と定める。(肅宗実録)</p> <p>1692年度の日本銅の輸出量は1,800,000カティ、輸出額は778,050グルデン、単価は1ピコルあたり11.85テール。 (近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1692年度の小判の輸出量は3,753.5両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1693年㊦(康熙32年)	<p>9月 清国康熙帝、広東地方に漂着した日本の船を送還させる。(清聖祖実録)</p> <p>1693年度の日本銅の輸出量は1,200,000カティ、輸出額は518,700グルデン、単価は1ピコルあたり11.85テール。 (近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1693年度の小判の輸出量は17,837.25両、単価6.8はテール。(近世の小判貿易について)</p>

西 暦 (年号 : 日本)	国 内	
1694年(元禄 7 年)	<p>2 月 銀山領土江村御番所、波根船表番所へ統合す。(観聴随筆)</p> <p>石見銀山山役銀5貫995匁 2 分 3 厘。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高310貫42目 6 分 9 厘。(野沢家文書)</p> <p>1 匁当たり米値段 2 升 8 合、1 俵当たり米値段 15 匁 7 分。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>† 日朝貿易における丁銀輸出高は、2,579貫049匁、純銀量2,063貫239匁 (慶長銀品位100分中80)。(宗家記録)</p> <p>† 日本はオランダ船に金15,034両を輸出。(通航一覧)</p> <p>† 輸出銅高5,029,100斤。中国へ3,287,900斤。掛・改め欠10,250斤。オランダへ1,670,000斤。掛・改め欠60,950斤。(年々帳)</p> <p>† 唐船70艘に銅34,407.99ピコル、オランダ船 4 艘に銅16,000ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>8 月 19 日 妙正寺に「釈○○靈」の銘のある円頂方柱型墓標あり。</p>	
1695年(元禄 8 年)	<p>† 8 月 幕府、貨幣を改鑄する旨を布告する。(御触書寛保集成)</p> <p>† 9 月 幕府、慶長金銀貨と元禄金銀貨を等価として通用させることを布達する。(御触書寛保集成)</p> <p>† 10 月 幕府、諸国の金銀銅山の開発を奨励す。(御触書寛保集成)</p> <p>石見銀山山役銀7貫535匁 4 分 1 厘。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高386貫298目 7 分 7 厘。(野沢家文書)</p> <p>† 日朝貿易における丁銀輸出高は、2,449貫373匁、純銀量1,959貫498匁 (慶長銀品位100分中80)。(宗家記録)</p> <p>† 日本はオランダ船に金12,614両を輸出。(通航一覧)</p> <p>† 輸出銅高6,145,262斤。中国へ4,043,987.7斤。掛・改め欠12,585.4斤。オランダへ2,008,638.8斤。掛・改め欠80,050斤。(年々帳)</p> <p>† 唐船60艘に銅41,611.36ピコル、オランダ船 4 艘に銅17,000ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>9 月 7 日 龍源寺間歩上(妙像寺跡)に「経秋月印耀心靈」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>	
1696年(元禄 9 年)	<p>† 3 月 26 日 橋辺判五郎と関野甚兵衛が朝鮮との交易に新銀を用いるための交渉官に命じられ、3 月 26 日出帆し、4 月 6 日倭館に到着するとの記述あり。(宗家記録)*</p> <p>† 4 月 18 日 朝鮮において元禄銀通用交渉が開始され、新銀をもって交易すること、古銀に対する新銀の品位不足分は歩増しして渡すことを橋辺判五郎と関野甚兵衛が朝鮮商人に伝えるとの記述あり。(宗家記録)*</p> <p>4 月 <備中小泉銅山>江戸中橋上榎町泉屋七右衛門(江戸出店支配人)名義で、大坂長堀茂左衛門町泉屋吉左衛門(泉屋当主)が請人となり、代官平岡吉左衛門へあて、小泉銅山 1 年銀30枚で 5 ヶ年稼行することを出願した。これに対して江戸の勘定奉行が、一兩年運上なしで掘り、その後に10分の 1 の運上という仕法によって出願することを勧めた。(住友家文書)</p> <p>† 5 月 4 日 朝鮮、新銀は古銀に対し、2 割 9 分加給が妥当と主張するが、対馬藩は 2 割 5 分加給が妥当とするとの記述あり。(宗家記録)*</p> <p>† 7 月 9 日 幕府、金銀貨の私鑄を禁ず。(徳川実記)</p> <p>† 11 月 19 日 朝鮮の銭鑄造のため銅を多く渡すよう、朝鮮商人より要請されるとの記述あり。(宗家記録)*</p> <p>石見銀山山役銀 6 貫175匁 8 分*。(山中家文書)</p> <p>石見銀山灰吹銀高363貫708目 9 厘。(野沢家文書)</p>	

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1694年◎(康熙33年)	<p>清国商人の外国での造船、禁制品の密輸を禁止。(清朝文献通考)</p> <p>1694年度の日本銅の輸出量は1,600,000カティ、輸出額は691,600グルデン、単価は1ピコルあたり11.85テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1694年度の小判の輸出量は9,783両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1695年	<p>1695年度の日本銅の輸出量は1,700,000カティ、輸出額は734,825グルデン、単価は1ピコルあたり11.85テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1695年度の小判の輸出量は7,277両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1696年	<p>オランダ東インド会社は品質検査により、小判に替わる日本銀再輸出の可能性を検討。銀の品質低下(18%)により再輸出を断念。(Generale Missive)</p> <p>1696年度の日本銅の輸出量は1,650,000カティ、輸出額は591,620グルデン、単価は1ピコルあたり11.85テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1696年度の小判の輸出量は1,326.5両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	内 容
1696年(元禄9年)	<p>1 匁当たり米値段 3 升、1 俵当たり米値段 14匁 7 分。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>† 日朝貿易における丁銀輸出高は、2,439貫997匁、純銀量1,951貫997匁 (慶長銀品位100分中80)。(宗家記録)</p> <p>† 日本はオランダ船に金18,013両を輸出。(通航一覧)</p> <p>† 輸出銅高8,847,502.8斤。中国へ6,927,725.9斤。掛・改め欠18,854斤。オランダへ1,832,962.9斤。掛・改め欠67,950斤。(年々帳)</p> <p>† 唐船70艘に銅70,197.68ピコル、オランダ船 4 艘に銅165,000ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>9 月 9 日 妙正寺に「閑空」の銘のある組合せ宝篋印塔あり。</p>
1697年(元禄10年)	<p>閏 2 月 10 日 銀山領の村方に対し、山御年貢新設の沙汰あり (加藤家文書)</p> <p>6 月 <備中小泉銅山>泉屋理右衛門の名で、山本与惣左衛門代官の手代衆宛、小泉銅山の問掘りを出願し、鉸筋にあたれば注進して運上をも定めたい旨を述べた。8 月に金沢・藤木の 2 間歩の普請に着手したが、藤木間歩は水抜きが困難であるため中止、金沢は鉛鉸の筋はあったが、銅は見込みがなかったため、泉屋は稼行を断念。(住友家文書)</p> <p>この年の諸入用覚書から竹 1 束 = 2 匁 5 分、米 1 石 = 42匁 1 分 3 厘 8 毛、小紙 3 束代 = 3 匁、村送ごぜ遣代 = 1 匁、帳紙 1 束 = 2 匁、醤油 6 合 = 6 分、墨 1 丁 = 5 分、茶半斤 = 7 分 5 厘、胡麻油 2 合 = 1 匁 4 分、太々神楽料 = 14 匁、こんにゃく 2 丁 = 2 分、座頭木銭合力 = 4 分、米 1 升 5 合 = 1 匁 2 分、酒 1 升 5 合 = 2 匁 4 合 (多田家文書)</p> <p>石見銀山山役銀 6 貫861匁 2 分。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高297貫782匁 8 分 6 厘。(野沢家文書)</p> <p>1 匁当たり米値段 2 升、1 俵当たり米値段 22匁。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>† 元禄銀の対朝鮮輸出開始、正式通用は1700年から。品位は慶長銀が100分中80、元禄銀100分中64、大部分が中国へ再輸出。(宗家記録)</p> <p>† 輸出銅高9,003,221斤。中国へ6,406,023斤。掛・改め欠16,210斤。オランダへ2,500,000斤。掛・改め欠80,988斤。(年々帳)</p> <p>† 日本はオランダ船に金883両を輸出。(通航一覧)</p> <p>† 唐船70艘に銅64,081.78ピコル、オランダ船 6 艘に銅25,000ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>高野山過去帳に正月23日「石金本谷 介原半三郎兄」とあり。</p>
1698年(元禄11年)	<p>† 3 月 幕府、当座使い捨ての商品への金銀箔の使用を禁ず。(御触書寛保集成)</p> <p>† 5 月 17 日 朝鮮交易の新銀加給は 2 割 7 分となる。(宗家記録)*</p> <p>† 7 月 18 日 朝鮮が新銀を受取らないため、銀割が遅れ、中国への朝貢使節派遣に支障が出る恐れ有り。このことを倭館の対馬藩年寄らが評議。評議の結果、直ちに銀割を実施することが決定される。(宗家文書)*</p> <p>† 7 月 26 日 阿比留惣兵衛が倭館に着き次第、東萊府・釜山浦へ新銀鑄造を報告する書簡を遣わす。(宗家文書)*</p> <p>† 7 月 東萊・釜山両令公宛に、対馬藩主宗義真の契書を渡すとの記述あり。(宗家記録)*</p> <p>† 7 月 日朝交易に際して、新銀 2 割 7 分加給の内容を記した証文が取交わされるとの記述あり。(宗家記録)*</p> <p>† 8 月 17 日 8 月 1 日に阿比留惣兵衛・服部又右衛門、倭館に到着。東萊府・釜山浦へ新銀鑄造についての書簡を送る。(宗家文書)*</p> <p>9 月 <吉岡銅山>この年 9 月～元禄15年 6 月、和泉屋の休業の後をうけて、大塚理右衛門 (大塚孫市の子孫) と吹屋村庄屋松浦五右衛門 (松浦五郎左衛門の子孫) が吉岡銅山稼行を請負い、和泉屋同様出銅の 1 割を上納した。(成羽町史)</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1696年	
1697年㊥(康熙36年)	<p>11月 清国では小型銭の流通が多く、銭価は低く、物価は高い。(清聖祖実録)</p> <p>清国、湖南・湖北の小銭の使用を禁止するが、以降も小銭の流通は続いている。(清朝文献通考)</p> <p>この年マニラ港に入港した日本発の船舶は1隻。中国人1名、いわゆる航路変更でサンパン船1隻。(Les Philippines et le Pacifique des Ibzriques)</p> <p>1697年度の日本銅の輸出量は2,500,043カティ、輸出額は1,080,526グルデン、単価は1ピコルあたり11.85テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1697年度の小判の輸出量は0両。(近世の小判貿易について)</p>
1698年㊥(康熙37年)	<p>4月 清国では海上貿易振興のため貿易税が減額される。(清聖祖実録)</p> <p>1698年度の日本銅の輸出量は2,500,000カティ。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1698年度の小判の輸出量は7,537.5両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内
1698年(元禄11年)	<p>† 10月12日 新金銀鑄造の件を朝鮮へ報告した阿比留惣兵衛、対馬鞆浦へ帰着。(宗家文書)*</p> <p>† 10月12日 新銀通用許可について、朝鮮政府より東萊府へ書付を以て通達される。(宗家文書)*</p> <p>12月15日 銀山産出の灰吹銀について、従来は京都銀座で100貫目当たり丁銀119貫に吹直し上納のところ、以後新銀146貫400目に吹直す旨勘定所より通達あり。(野沢家文書)</p> <p>石見銀山山役銀 6 貫240匁4分 6 厘。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高277貫444匁 7 厘。(野沢家文書)</p> <p>石見銀山登せ灰吹銀高281貫66匁 5 分 1 厘。内238貫759匁 8 分 1 厘米代等。(野沢家文書)*</p> <p>灰吹銀 1 貫目につき引替丁銀は 1 貫464匁、引替歩合が 4 割 6 歩 4 厘となる。(石見銀山旧記・山中家文書)</p> <p>灰吹銀と丁銀の歩合を、判銀100目に対し、灰吹銀105匁 4 厘、丁銀153匁 7 分 9 毛とする。(野沢家文書)</p> <p>1 匁当たり米値段 2 升 3 合、1 俵当たり米値段 19匁。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p><長登銅山> 萩藩は幕府の求めに応じ、元禄11、12の両年の銅の産出額を報告。これによれば、元禄11年分は長登の銅9,520斤、板銅2,693斤、蔵目喜の銅320斤、計12,533斤。元禄12年分は長登の銅610斤、板銅2,500斤、蔵目喜の銅2,000斤、計5,110斤。(毛利家文庫)</p> <p>† 日朝貿易における丁銀輸出高は、1,400貫000匁、純銀量896貫000匁 (元禄銀品位100分中64)。(宗家記録)</p> <p>† 唐船67艘に銅60,823.95ピコル、オランダ船7艘に銅29,809.88ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>高野山過去帳に (月未詳) 15日「石金 平野四郎 内」とあり。</p> <p>11月 9 日 龍昌寺に「古川□桂信女」の銘のある無縫塔台座あり。</p>
1699年(元禄12年)	<p>† 閏 9 月 9 日 訓導朴僉知・別差崔判事、新銀を吹直し、正銀にして清国へ渡すように漢城より命じられるが、朝鮮商人の反対で吹直しは行われず。その科で兩人、漢城に呼び出される。(宗家文書)*</p> <p>† 閏 9 月23日 訓導朴僉知・別差崔判事、先月29日に都へ連行され、降格されたとの噂があるが、詳細不明。(宗家文書)*</p> <p>† 11月23日 新銀御返輸中の不適切な表現の訂正を対馬藩より朝鮮側へ要求。朝鮮承認に委ねた新銀吹直しの結果、新銀は「式歩七之増」と決定されたことが朝鮮側より倭館へ通達される。(宗家文書)*</p> <p>† 11月24日 日本の国法により銀吹直しは禁じられているので、新銀吹直しの件は朝鮮側に一任する旨、対馬藩より訳官へ通達。(宗家文書)*</p> <p>† 11月28日 新銀「返輸」の書付に対する東萊府の返書の中に不適切な文言あり。文章の訂正を対馬側より要求。(宗家文書)*</p> <p>石見銀山山役銀7貫647匁 5 分。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高238貫759匁 8 分 7 厘。(野沢家文書)</p> <p>石見銀山登せ灰吹銀高415貫162匁 4 分 9 厘。内373貫700目米代等。(野沢家文書)</p> <p>† 日朝貿易における丁銀輸出高は、1,980貫000匁、純銀量1,267貫200匁 (元禄銀品位100分中64)。(宗家記録)</p> <p>† 唐船69艘に銅52,364.35ピコル、オランダ船5艘に銅225,000ピコルを輸出。1 ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>5 月12日 石銀地区に「香□浄薫信士」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1700年(元禄13年)	<p>† 2月21日 古銀通用停止にもかかわらず、倭館内では以前より流通していた古銀が回収されず、未だに通用している。今後、古銀を朝鮮方より受取った際は、代官方へ差出し、新銀と交換することを触れる。(宗家文書)*</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1698年㊦(康熙37年)	
1699年	1699年度の日本銅の輸出量は2,500,000カティ。(近世銅貿易の数量的考察)
1700年㊦(康熙39年) ㊧(肅宗26年)	<p>4月 朝鮮において倭新銀(元禄銀)の可否について論じ、新銀の受取りを拒否することに決する。(肅宗実録)</p> <p>10月 清国康熙帝、福建地方に漂着した外国船の送還を命じる。(清聖祖実録)</p>

西 暦 (年号 : 日本)	国 内	
1700年(元禄13年)	<p>† 2月21日 朝鮮商人、人參代としての新銀に古銀を加えることを要求。対馬藩はこれを受入れられず、朝鮮側と交渉するが、交渉は難航。(宗家文書)*</p> <p>† 2月21日 日頃漢城より対馬からの渡銀不足の為、冬至使の携行する銀の調達に難渋している旨、倭館に伝えられる。(宗家文書)*</p> <p>† 5月15日 先日、対馬藩から朝鮮に新銀の件を申し伝えたが、朝鮮政府内の担当役人の事情で返簡が延引。(宗家文書)*</p> <p>† 7月6日 公儀より古銀通用御停止に付、佐須奈よりの飛船の評銀中に古銀が混ざっていないかを、船頭石川武兵衛に尋ねる。評銀は封印されており、倭館で中身を調べ、また水夫小屋などの探索も行うように武兵衛に命じる。(宗家文書)*</p> <p>† 7月27日 銀1,050貫目、佐須奈より10艘の船にて倭館へ到着。(宗家文書)*</p> <p>† 8月25日 皇曆御銀割について、東萊府へ伺ったところ、合意を得られたので、都(漢城)へ注進するが、都からも承認する見通しを訓導方より加勢藤五郎を介して通達。(宗家文書)*</p> <p>† 9月10日 古銀通用停止にも関わらず、倭館内に残存している古銀が朝鮮人に渡っているとの風聞あり。制札を立て、これを禁じる。(宗家文書)*</p> <p>† 9月11日 「利物之一件」を除くことは許可しない旨、漢城より申し来る。(宗家文書)*</p> <p>† 10月23日 「新銀御返簡」未だ漢城より到来せず。(宗家文書)*</p> <p>† 11月 幕府、金銀錢の御定相場については、金子1両につき銀60貫目、錢4貫文であるので、市中相場においても銀58匁、錢3貫900文より高値にならぬよう布達す。(御触書寛保集成)</p> <p>† 12月8日 「新銀御返簡」の到来延引に付、朝鮮側は文面を書き改め、対馬藩へ渡すように、(対馬が)指示。(宗家文書)*</p> <p><長登銅山>元禄13年の銅産出額として、銅3,050斤・板銅5,670斤・計8,720斤があげられる。販売は、その都度送り状を添えて大坂筑前橋間屋坂田屋伝右衛門へ送り、同人より大坂銅屋中へ入札させ、落札の者に売り渡す。(毛利家文庫)</p> <p>石見銀山山役銀5貫597匁6分1厘。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高373貫700目。(野沢家文書)</p> <p>石見銀山登せ灰吹銀高473貫549匁5分3厘。内419貫465匁8分5厘米代等。(野沢家文書)*</p> <p>1匁当たり米値段 3升8合5匁、1俵当たり米値段 23匁8分。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>† 日朝貿易における丁銀輸出高は、1,565貫000匁、純銀量1,001貫600匁(元禄銀品位100分中64)。(宗家記録)</p> <p>† 唐船53艘に銅36,295.15ピコル、オランダ船5艘に銅14,969ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p>	
17世紀後半		
1701年(元禄14年)	<p><芹ヶ野金山>金銀銅山の開発奨励に関する元禄11年の幕府による触に応じ、鹿児島藩では芹ヶ野金山の再開発を行ってきたが、この年、金2万両の拝借を許され、従来通り藩からの入用も加えて、開発に努めた。また、川辺郡神殿山金山も新たに取立てた。(芹ヶ野金山発起始終覚書)</p> <p>石見銀山山役銀10貫26匁7分7厘。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高490貫465匁8分5厘。(野沢家文書)</p>	

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1700年㊦(康熙39年) ㊧(肅宗26年)	<p>福建、広東の銀、外国の船によるものが多い。福建・広東人、ルソン銀を買って広州に帰る。故に商人は金を商品にして数倍の利益を得る。(広東新語)</p> <p>1700年度の日本銅の輸出量は1,246,900カティ、単価は1ピコルあたり12.34テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p>
17世紀後半	<p>清代前期、雲南は銀の主な産地である。年間銀の産出は17、8万両で、他の地域のと合計して、全国銀の産出は年間20万両あまり。(滇海虞衡志)</p> <p>マカオの近くの十字門という島に港が多く、ここで海外貿易が盛んに行われる。(嶺南雜記)</p> <p>清国、日本間の輸出と輸入品の売り値、いずれも平均にして元値の3.5倍。(十七世紀台湾英国貿易史料)</p>
1701年	<p>1701年度の日本銅の輸出量は1,658,700カティ。(近世銅貿易の数量的考察)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	内 容
1701年(元禄14年)	<p>石見銀山登せ灰吹銀高314貫175匁4分2厘。内264貫316匁米代等。(野沢家文書)*</p> <p>1匁当たり米値段 1升8合、1俵当たり米値段 24匁4分。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>†日朝貿易における丁銀輸出高は、2,730貫000匁、純銀量1,747貫200匁(元禄銀品位100分中64)。(宗家記録)</p> <p>†唐船56艘に銅38,330.51ピコル、オランダ船4艘に銅16,585ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>1月15日 妙正寺に「[]○院[]」の銘のある笠付方形型墓標あり。</p>
1702年(元禄15年)	<p>銀山の人口について、銀山町1,621人(224人減)、大森町686(28人減)と記す。(野沢家文書)</p> <p>石見銀山山役銀3貫378匁5分。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高264貫317匁。(野沢家文書)</p> <p><吉岡銅山>泉屋が、幕府から拝借金を得て、元禄15年6月より再び吉岡銅山を稼行する。この度は、坂本村へ排水路を敷設しようとしたが難航、享保元年に休山。(住友家文書・大塚家文書)</p> <p>†日朝貿易における丁銀輸出高は、1,806貫960匁、純銀量1,156貫454匁(元禄銀品位100分中64)。(宗家記録)</p> <p>†唐船80艘に銅38,113.72ピコル、オランダ船4艘に銅14,650ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>9月24日 龍源寺間歩上(妙像寺墓地)に「経耀秋院妙心」の銘のある一石宝篋印塔、「経 耀秋院妙心霊」の銘のある一石宝篋印塔、(月未詳)24日「耀□院妙心□」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1703年(元禄16年)	<p>8月1日 8月大風水につき、この年銀1匁に米9合の凶作年となる。(光永寺文書)</p> <p>石見銀山山役銀4貫320目7厘。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高338貫653匁。(野沢家文書)</p> <p>石見銀山登せ灰吹銀高351貫440匁1分5厘。内321貫771匁5分6厘米代等。(野沢家文書)*</p> <p>1匁当たり米値段 1升9合、1俵当たり米値段 23匁。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>†日朝貿易における丁銀輸出高は、730貫000匁、純銀量467貫200匁(元禄銀品位100分中64)。(宗家記録)</p> <p>†唐船80艘に銅39,430.32ピコル、オランダ船4艘に銅16,300ピコルを輸出。1ピコル=100斤。(通航一覧)</p> <p>10月27日 龍昌寺に「○○○○信士」の銘のある位牌型墓標あり。</p>
1688-1704年 (元禄年間)	<p>元禄初期、灰吹銀1貫目につき引替丁銀は1貫487匁5分(4割8分7厘5毛)。(石見銀山旧記)</p> <p><越中虎谷金山>万治期頃に、鉢村より金掘屋敷、鉦石捨場の分として63石6斗6升9合分の土地を割譲され、その分の年貢を山師などより「山役銀」として1ヶ年銀150匁上納することになっていたが、寛文以後の金山衰退のため、元禄年間にこの分を前年の家数40軒に割付け「棟役銀」と呼ぶようになった。軒数の減少に従い、この棟役銀の額も減少していった。(越中鉦山雑誌)</p> <p><薩摩蒲生郷砂金山>元禄期頃、蒲生郷漆村、赤仁田の大良から赤仁田川に砂金が流れていたと伝えられている。(蒲生郷土史)</p> <p>1月12日 龍源寺間歩上に「経 □□霊」の銘のある一石宝篋印塔、(月未詳)22日 妙本寺上に「本誉宗林信士」の銘のある一石宝篋印塔あり。</p>
1704年(宝永元年)	<p>石見銀山山役銀5貫220目7分3厘。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高321貫771匁5分。(野沢家文書)</p> <p>石見銀山登せ灰吹銀高305貫328匁6分8厘。内273貫128匁6分7厘米代等。(野沢家文書)*</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1701年	
1702年㊦(康熙41年)	<p>清国、銅銭の重さを1銭4分に改定する。(清朝文献通考)</p> <p>1702年度の日本銅の輸出量は1,544,300カティ、輸出額は724,430グルデン、単価は1ピコルあたり12.84テール。 (近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1702年度の小判の輸出量は21,111.5両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1703年	<p>1703年度の日本銅の輸出量は1,629,953カティ、輸出額は761,025グルデン、単価は1ピコルあたり12.84テール。 (近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1703年度の小判の輸出量は19,245.5両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1688-1704年	
1704年	<p>1704年度の日本銅の輸出量は1,829,422カティ、輸出額は854,158グルデン、単価は1ピコルあたり12.84テール。 (近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1704年度の小判の輸出量は2,427両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>

西 曆 (年号：日本)	国 内
1704年(宝永元年)	<p>1 匁当たり米値段 2 升 5 匁、1 俵当たり米値段 20 目。(三祖慶忠年々勘定帳)。</p> <p>† 日朝貿易における丁銀輸出高は、1,350 貫 000 匁、純銀量 864 貫 000 匁 (元禄銀品位 100 分中 64)。(宗家記録)</p>
1705年(宝永 2 年)	<p>3 月 銀、米相場、上米 1 石、浜田 銀 59 匁 5 分、松江 銀 55 匁 3 分、田儀 丁銀 57 匁 5 分 中米 1 石、浜田 銀 58 匁 5 分、松江 銀 55 匁 3 分、田儀 丁銀 55 匁、下米 1 石、浜田 銀 57 匁 5 分、松江 銀 47 匁 2 分、田儀 丁銀 52 匁。(野沢家文書)</p> <p>5 月 代官井口次右衛門、無名異の産出絶無のため、当年物成より入用銀を支出し、新規鉉筋の試掘を願い出、幕府より許可される。(野沢家文書)</p> <p>8 月 19 日 幕府、石見国浜田藩主松平周防守に対し、非常時の警護方を命ず。(石見国銀山古書類控)</p> <p>この年の入用覚書によれば、蠟燭 2 丁代 6 分 5 厘、小紙 3 束代 3 匁 6 分、帳紙 1 束代 2 匁 5 分、蠟燭 1 帳 3 分、茶半斤 7 分、煙草半斤 5 分、味噌 1 升 1 匁、酒 2 升 2 匁、醤油 4 合 4 分、胡麻油 1 合 1 匁、鯨油 2 合 6 分、豆腐 4 丁 5 合、こんにゃく 2 丁 5 分、奈良漬 1 つ 8 分。(温泉津村諸入用覚書)</p> <p>石見銀山山役銀 6 貫 336 匁 7 分 3 厘。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高 273 貫 186 匁 6 分 7 厘。(野沢家文書)</p> <p>1 匁当たり米値段 1 升 2 合 7 匁、1 俵当たり米値段 26 匁 7 分。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>† 日朝貿易における丁銀輸出高は、1,077 貫 500 匁、純銀量 689 貫 600 匁 (元禄銀品位 100 分中 64)。(宗家記録)</p> <p>(月末詳) 4 日 石銀地区に「一嘗欣信土」の銘のある宝篋印塔基礎あり。</p>
1706年(宝永 3 年)	<p>3 月 米相場、上米 1 石、浜田 銀 68 匁、松江 61 匁 6 分、田儀 丁銀 59 匁 5 分、中米 1 石、浜田 銀 67 匁、松江 60 目 6 匁、田儀 丁銀 57 匁 5 分、下米 1 石、浜田 66 匁、松江 59 匁、田儀 丁銀 56 匁。(野沢家文書)</p> <p>9 月 前年度分の登せ銀を登す。内、2 年度灰吹銀高 303 貫 408 匁 7 分 7 厘 7 毛。石州、陰州登せ高合計、灰吹銀 100 貫 404 匁 7 分 3 厘、丁銀 769 貫 205 匁 5 分、金 190 両を 106 箱に納めて発送。(野沢家文書)</p> <p>10 月 無名異山普請のため拝借銀 1 貫 479 匁 5 分 1 厘 仰にて採掘し鉉脈にあたり、宝永 2 年の御勘定に組入れるよう代官井口治右衛門より勘定所に許可を請う。(野沢家文書)</p> <p>石見銀山山役銀 7 貫 352 匁 9 分 9 厘。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高 303 貫 408 匁 7 分 8 厘。(野沢家文書)</p> <p>1 匁当たり米値段 1 升 5 合、1 俵当たり米値段 28 匁。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>† 日朝貿易における丁銀輸出高は、1,300 貫 000 匁、純銀量 832 貫 000 匁 (元禄銀品位 100 分中 64)。(宗家記録)</p>
1707年(宝永 4 年)	<p>† 8 月 13 日 対馬藩御目付役服部勘兵衛、東萊府・釜山浦へ新銀吹替の儀を申し伝える。(宗家文書)*</p> <p>都築小三郎が代官となる。(山中家文書)</p> <p>石見銀山山役銀 2 貫 370 目 8 分 5 厘。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高 342 貫 240 匁 6 分 7 厘。(野沢家文書)</p> <p>1 匁当たり米値段 2 升、1 俵当たり米値段 21 匁。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>† 日朝貿易における丁銀輸出高は、971 貫 900 匁、純銀量 622 貫 016 匁 (元禄銀品位 100 分中 64)。(宗家記録)</p> <p>8 月 17 日 妙正寺に円頂方形型墓標あり。</p>

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1704年	
1705年	<p>1月31日 長崎の商館長タントがバタヴィアに持ち帰った銀の品質検査で、金に比べ5と3分の1$\frac{1}{3}$%利益薄と結論。(Generale Missive)</p> <p>1705年度の日本銅の輸出量は1,830,000カティ、輸出額は851,865グルデン、単価は1ピコルあたり12.8テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1705年度の小判の輸出量は9,290.25両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1706年	<p>1月25日 小判に替わる銀の輸出の可能性に関する長崎のオランダ商館長タントからインド参事会への報告は、利益薄との結論。(Generale Missive)</p> <p>1706年度の日本銅の輸出量は1,500,000カティ、輸出額は698,250グルデン、単価は1ピコルあたり12.8テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1706年度の小判の輸出量は4,978.25両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1707年	<p>1707年度の日本銅の輸出量は1,500,000カティ、輸出額は698,250グルデン、単価は1ピコルあたり12.8テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1707年度の小判の輸出量は19,626.75両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>

西 曆 (年号 : 日本)	国 内	
1708年(宝永 5 年)	<p>石見銀山山役銀 8 貫370目 8 分 4 厘。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高340貫370目。(野沢家文書)</p> <p>1 匁当たり米値段 1 升 7 合、1 俵当たりの米値段 23匁 3 分。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>† 日朝貿易における丁銀輸出高は、980貫000匁、純銀量627貫200匁 (元禄銀品位100分中64)。(宗家記録)</p> <p>10月18日 石銀地区に「臨徴道風」の銘のある五輪塔地輪あり。</p>	
1709年(宝永 6 年)	<p>石見銀山山役銀 4 貫338目 6 分。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高260貫140目。(野沢家文書)</p> <p>1 俵当たりの米値段 19匁 6 分。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>† 日朝貿易における丁銀輸出高は、940貫000匁、純銀量601貫600匁 (元禄銀品位100分中64)。(宗家記録)</p> <p>6 月20日 石銀地区に「即蓮信士霊」の銘のある角塔あり。</p>	
1710年(宝永 7 年)	<p>1 月 代官都築小三郎、幕府勘定所に対し、銀山困窮につき、去丑年御成ヶ銀の内、丁銀50貫目を稼人救済のために拝借したき旨を伺う。(石見国銀山古書類控)</p> <p>9 月 銀座年寄が宝永 7 年から正徳 4 年までに対馬に渡した人参代往古銀の高を報告。この年石州灰吹銀227貫250目を以て人参代に吹立て、往古銀 (慶長銀) 277貫245匁を渡す。(銀座書留)</p> <p>石見銀山山役銀 4 貫478目 9 分。(山中家文書)*</p> <p>石見銀山灰吹銀高250貫500目。(野沢家文書)</p> <p>1 匁当たり米値段 1 升 8 合 5 合、1 俵当たりの米値段 22匁 7 分。(三祖慶忠年々勘定帳)</p> <p>† 日朝貿易における丁銀輸出高は、620貫000匁、純銀量396貫800匁 (元禄銀品位100分中64)。(宗家記録)</p>	
1704-1711年 (宝永年間)	宝永初期、灰吹銀 1 貫目につき引替丁銀は 1 貫837匁 7 分 (8 割 3 分 7 厘 7 毛)。(石見銀山旧記)	
1662-1722年 (寛文 2 - 享保 7 年)		

西暦(年号：中国・朝鮮)	海 外
1708年	<p>1708年度の日本銅の輸出量は827,200カティ、輸出額は385,061グルデン、単価は1ピコルあたり12.8テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1708年度の小判の輸出量は30,468.75両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1709年	<p>1709年度の日本銅の輸出量は1,500,000カティ、輸出額は698,250グルデン、単価は1ピコルあたり12.8テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1709年度の小判の輸出量は20,228両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1710年	<p>1710年度の日本銅の輸出量は1,500,000カティ、輸出額は698,250グルデン、単価は1ピコルあたり12.8テール。(近世銅貿易の数量的考察)</p> <p>1710年度の小判の輸出量は20,096両、単価は6.8テール。(近世の小判貿易について)</p>
1704-1711年	
1662-1722年 ⊕(康熙年間)	<p>この時、福建では、輸入外国銀貨が通用する。(漫遊記略)</p> <p>この時、米の価格は1石につき銀5、6銭以内に下り、以降安定を保っている。(皇朝經世文編)</p>

参考文献

国内

- 和泉清司編 『江戸幕府代官頭文書集成』 文献出版 1999年
- 黒川春村編 『歴代残闕日記』 臨川書店 1990年
- 国書刊行会 『通航一覽』第4 国書刊行会 1913年
- 駒井重勝著・藤田恒春校訂 『駒井日記』 文献出版 1992年
- 佐渡郡教育会編 『佐渡年代記』 1938年
- 島根県 『新修島根県史』 史料篇1～3 1965～1966年
- 東京大学史料編纂所 『大日本史料』第12編之5 東京大学出版会 1938年
- 東京大学史料編纂所 『大日本古文書』家分け第5 相良家文書 東京大学出版会 1917年
- 東京大学史料編纂所 『大日本古文書』家分け第8 毛利家文書 東京大学出版会 1920年
- 東京大学史料編纂所 『大日本古文書』家分け第9 吉川家文書 東京大学出版会 1925年
- 東京大学史料編纂所 『大日本古文書』家分け第9 吉川家文書別集 東京大学出版会 1930年
- 東京大学史料編纂所 『大日本古文書』家分け第11 小早川家文書之2 附録浦家文書 東京大学出版会 1927年
- 東京大学資料編纂所編 『大日本古記録』梅津政景日記 岩波書店 1953年
- 新潟県 『新潟県史』資料編9 1981年
- 日本鉱業史料集刊行委員会編 『日本鉱業史料集』第6期近世編 白亜書房 1981年
- 林屋辰三郎他 「石見久利文書の研究」『立命館大学人文科学研究紀要』16号 1967年
- 広島県 『広島県史』古代中世史料編I～V 1974～1980年
- 福岡県 『福岡県史資料』第5輯 1986年
- 法制史学会編 『徳川禁令考』 1959～1961年
- 牧田諦亮 『策彦入明記の研究』策彦入明記初渡集 法蔵館 1955年
- 山口県文書館編集・校訂 『萩藩閥閥録』第1巻 山口県文書館 1967年
- 山口県文書館編集・校訂 『萩藩閥閥録』第2巻 山口県文書館 1968年
- 山口県文書館編集・校訂 『萩藩閥閥録』第3巻 山口県文書館 1970年
- 山口県文書館編集・校訂 『萩藩閥閥録』第4巻 山口県文書館 1971年
- 山口県文書館編集・校訂 『萩藩閥閥録』遺漏 山口県文書館 1971年
- 山口県文書館編集・校訂 『萩藩閥閥録』別巻 山口県文書館 1989年
- 『群書類従』合戦部21 大内義隆記 続群書類従完成会 1925年
- 『群書類従』巻第326日記の部7 宗長手記 続群書類従完成会 1928年
- 『群書類従』紀行部 九州道の記 続群書類従完成会 1928年
- 『続群書類従』補遺 御湯殿上日記 続群書類従完成会 1928年
- 『当代記・駿府記』 続群書類従完成会 1995年

研究書・研究論文

- 相川町史編纂委員会 『佐渡相川の歴史』資料集3 佐渡金山史料 相川町 1973年
- 石川卓美 「山口一の坂銀山遺跡の現地調査に関連して」『山口県地方史研究』43 山口県地方史学会 1980年
- 井上寛司 「中世山陰における水運と都市の発達－戦国期の出雲・石見地域を中心として－」『戦国期権力と地域社会』吉川弘文館 1986年
- 井上寛司 「中世温泉津地域における領主権力の歴史的展開過程」『温泉津町誌研究』第3号 1992年

- 江面龍雄 「石見銀山と周辺農村」『山陰－地域の歴史的な性格－』 雄山閣出版 1979年
- 大分県総務課編 『大分県史』近世編Ⅳ（鉱山） 大分県 1990年
- 大分県日出町役場編 『日出町誌』本編（黄金はな咲く鶴成・馬上）日出町 1986年
- 大野瑞男 「大久保長安の新史料－『戸田藤左衛門所蔵文書写』について－」『東洋大学文学部紀要』41集・史学科篇Ⅲ
東洋大学 1988年
- 荻 慎一郎 『近世鉱山社会史の研究』 思文閣出版 1996年
- 加計町役場 『加計町史』上巻 加計町役場 1961年
- 蒲生町教育委員会編 『蒲生郷土誌』（金山） 蒲生町教育委員会 1991年
- 川辺村教育委員会編 『川辺村郷土史』（鉱業） 川辺村教育委員会 1917年
- 吉舎町史編纂委員会 『吉舎町史 上巻』（三玉古銀山） 吉舎町教育委員会 1988年
- 黒川金山遺跡研究会・塩山市教育委員会編 『黒川金山史料』 塩山市教育委員会 1991年
- 小葉田淳 『日本鉱山史の研究』 岩波書店 1968年
- 小葉田淳 『金銀貿易史の研究』 法政大学出版局 1976年
- 小葉田淳 『続・日本鉱山史の研究』 岩波書店 1986年
- 小葉田淳 『日本銅鉱業史の研究』 思文閣出版 1993年
- 静岡県史編纂委員会編 『静岡県史』通史編3、近世1 静岡県 1989年
- 柴田藤蔵編 『阿仁発達史 下巻』 阿仁合町 1931年
- 柴田 一 「吹屋銅山の起源」、「江戸前期の吉岡銅山」『成羽町史』通史編 成羽町 1996年
- 庄司吉之助 『半田銀山史』 吉川弘文館 1982年
- 田中圭一 「相川金山繁栄期における鉱山人口について」『相川郷土博物館報』第2号 相川郷土博物館 1961年
- 田中圭一 「銀山初期の集落について」『相川郷土博物館報』第3号 相川郷土博物館 1964年
- 田中圭一 「佐渡銀山の考察」 児玉幸多編『地方史研究叢書7 近世越後・佐渡史の研究』 名著出版 1976年
- 田中圭一 『佐渡金銀山の史的研究』 刀水書房 1986年
- 田谷博吉 『近世銀座の研究』 吉川弘文館 1963年
- 原龍雄 「石見銀山領成立期の支配体制」『郷土石見』第7号 石見郷土研究懇話会 1979年
- 前田家編輯部編 『加賀藩史料』第1編 清文堂 1970年
- 美東町教育委員会 『美東町史』（鉱業） 美東町 1974年
- 村上 直 「近世初期における石見銀山の支配－大久保長安を中心に－」『駒沢女子短期大学研究紀要』第2号 1968年
- 村上 直 「近世初期石見銀山の支配と経営－大久保石見守長安時代を中心に－」『徳川林政史研究所研究紀要』（昭和53年度） 1979年
- 村上 直 「石見国における幕府直轄領と奉行・代官制」『山陰－地域の歴史的な性格－』 雄山閣出版 1979年
- 村上 直 『江戸幕府の代官群像』 同成社 1997年
- 村上 直・田中圭一・江面龍雄 『江戸幕府石見銀山史料』 雄山閣 1978年
- 森 杉夫 「代官所機構の改革をめぐって」『大阪府立大学研究紀要』第13号 1965年
- 山口啓二 「近世初期秋田藩における鉱山町－院内銀山を中心に－」『国民生活史研究』2 吉川弘文館 1959年
- 山根俊久 『石見銀山に関する研究』 石東文化研究会（臨川書店） 1932年
- 『温泉津町誌』 温泉津町 1996年
- 脇田晴子 「物価より見た日明貿易の性格」 宮川秀一編『日本史における国家と社会』 思文閣出版 1992年

海外

南欧関係

- ヴァリニャーノ著・松田毅一他訳 『日本巡察記』 平凡社 1973年

- 土井忠生他 『ジョアン・ロドリゲス日本教会史』上 岩波書店 1967年
 土井忠生他 『ジョアン・ロドリゲス日本教会史』下 岩波書店 1970年
 松田毅一 『16・17世紀イエズス会日本報告集』3の2 同朋舎 1998年
 松田毅一 『16・17世紀イエズス会日本報告集』3の3 同朋舎 1998年
 松田毅一 『16・17世紀イエズス会日本報告集』3の5 同朋舎 1992年
 村上直次郎 『イエズス会日本通信』上 雄松堂 1968年
 村上直次郎 『イエズス会日本通信』下 雄松堂 1969年
 村上直次郎 『イエズス会日本年報』上 雄松堂 1969年
 村上直次郎 『イエズス会日本年報』下 雄松堂 1969年
 村上直次郎 『ドン・ロドリゴ日本見聞録・ビスカイノ金銀島探検報告』 雄松堂 1966年
 ルイス・フロイス著 川崎桃太・松田毅一訳 『日本史』第2巻 中央公論社 1977年
 Boxer, C. R. *The Great Ship from Amacon*, Oxford U.P., 1960.
 Caminha, António Lourenço de. *Ordenações da Índia do Senhor Rei D. Manuel*, Lisboa, 1807.
 Couros, Mateus de. *Tre Lettera Annue del Giappone de Gil Anni 1603, 1604, 1605 e perte de 1605*, Milano, 1609.
 Frois, Luis. *História de Iapam*, vol.5, Lisboa, 1983.
 Guerreiro, Fernão. *Relação Annual de Fernão Guerreiro*, Lisboa, 1609.
Cartas que os Padres e Irmaos da Companhia de Iesus escreveram dos Reinos de Iapão e China aos da Mesma Companhia da India e Europa, I (1549-1580), Évora, 1598.
Cartas que os Padres e Irmaos da Companhia de Iesus escreveram dos Reinos de Iapão e China aos da Mesma Companhia da India e Europa, II (1581-1589), Évora, 1598.

オランダ関係

- 呉秀三訳 『シーボルト交通貿易史』 雄松堂書店 1966年
 東京大学史料編纂所編 『オランダ商館長日記』訳文編2 (下) 東京大学出版会 1975年
 東京大学史料編纂所編 『オランダ商館長日記』訳文編4 (下) 東京大学出版会 1984年
 東京大学史料編纂所編 『オランダ商館長日記』訳文編5 東京大学出版会 1985年
 東京大学史料編纂所編 『オランダ商館長日記』訳文編6 東京大学出版会 1987年
 東京大学史料編纂所編 『オランダ商館長日記』訳文編8 東京大学出版会 1995年
 永積洋子訳 『平戸オランダ商館の日記』第1輯 岩波書店 1969年
 永積洋子訳 『平戸オランダ商館の日記』第2輯 岩波書店 1969年
 永積洋子訳 『平戸オランダ商館の日記』第3輯 岩波書店 1969年
 永積洋子訳 『平戸オランダ商館の日記』第4輯 岩波書店 1970年
 村上直次郎訳 『長崎オランダ商館の日記』第1輯 岩波書店 1956年
 村上直次郎訳 『長崎オランダ商館の日記』第2輯 岩波書店 1957年
 村上直次郎訳 『長崎オランダ商館の日記』第3輯 岩波書店 1958年
 村上直次郎訳注・中村孝志校注 『バタヴィア城日誌』第1巻 平凡社 1970年
 村上直次郎訳注・中村孝志校注 『バタヴィア城日誌』第2巻 平凡社 1972年
 村上直次郎訳注・中村孝志校注 『バタヴィア城日誌』第3巻 平凡社 1975年
 山田珠樹 『ツンベルグ日本紀行』 雄松堂書店 1966年
 Chijs, J.A. van der. *Nederlandsch-Indisch plakaatboek*, 1602-1811, Vol. I: 1602-1642, Batavia: Landsdrukkerij; 's Gravenhage: Martinus Nijhoff, het Bataviaansch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen, 1885.
 Colenbrander, H. T., Coolhaas, W.Ph. ed., *Uitgege ven door het Koninklijk Inst. voor de Taal-, Land- en Volkenkunde van*

Nederlandsch-Indie, 's-Gravenhage: Martinus Nijhof, 1919-52.

Coolhaas, W.Ph. ed., *Generale Missiven van Gouverneurs-Generaal en Raden aan Heeren XVII der Vereenigde Oostindische Compagnie*. Vol.1-11, 's-Gravenhage: Martinus: Nijhof, 1960-1997.

The Historiographical Institute, The University of Tokyo ed., *Dagregisters Gehouden bij de Opperhoofden van de Nederlandse Factorij in Japan*, Vol.1-8, Tokyo UP, 1974-1995.

イギリス関係

岩生成一訳 『慶元イギリス書翰』 雄松堂書店 1966年

東京大学史料編纂所編 『イギリス商館長日記』 訳文編之下 東京大学出版会 1980年

村川堅固訳 『セーリス日本渡航記』 雄松堂書店 1970年

朝鮮半島関係

国史編纂委員会編 『朝鮮王朝実録』 卷7～25、卷33～39 1956～1957年

国史編纂委員会編 『朝鮮王朝実録』 光海君日記 太白山中草本 卷1、3 1991年

韓国学文献研究所編 『経国大典』 卷4 亜細亜文化社 1983年

韓国学文献研究所編 『増正交隣志』 亜細亜文化社 1974年

韓国学文献研究所編 『大典続録』 卷5 亜細亜文化社 1983年

韓国学文献研究所編 『大典後続録』 卷5 亜細亜文化社 1983年

中国関係

『安海志』 上海書店 1992年

王在晋 『越鑄』 卷21 福建人民出版社 1981年

『閩世編』 上海古籍出版社 1981年

王臨亨 『粵劍編』 卷之3 中華書局 1987年

林春勝・林信篤編 『華夷変態』 上、下巻 東洋文庫 1958～1959年

『花村談往』 芸文印書館 1970年 (『適園叢書』 所収)

『海紀輯要』 福建人民出版社 1982年

『海国見聞録』 中華書局 1991年

『嘉靖東南平倭通録』 神州国光社 1951年

『客座贅語』 中華書局 1991年

『玉堂薈記』 偉文図書出版社 1977年

『金瓶梅』 中華書局 1998年

憑桂芬 『顯志堂稿』 卷12 文海出版社 1983年

謝杰 『虔台倭纂』 (影印本) 正中書局 1985年

許孚遠 『敬和堂集』 卷7 (景照本) 1966年

周元暉 『涇林統記』 商務印書館 1936年

『見只編』 商務印書館 1936年

『憲章外史統編』 中華全国図書館縮微複製中心 1994年

『賢博編』 中華書局 1987年

『乾隆海澄県志』 成文出版社 1968年

『乾隆普寧県志』 成文出版社 1974年

『乾隆龍溪県志』 成文出版社 1967年

- 『康熙起居注』 中華書局 1984年
- 『広志繹』 中華書局 1981年
- 賀長齡 『皇朝經世文編』卷26 中華書局 1992年
- 『皇朝掌故彙編』 文海出版社 1964年
- 『皇朝政典類纂』 文海出版社 1969年
- 屈大均 『廣東新語』卷2 中華書局 1985年
- 『洪芳洲先生摘稿』
- 茅瑞澂 『皇明象胥錄』卷2 商務印書館 1981年
- 『古今圖書集成』 中華書局 1934年
- 謝肇淛 『五雜俎』 中華書局 1958年
- 謝肇淛著・岩城秀夫訳注 『五雜俎』卷1～8 平凡社 1996～1998年
- 『国權』 古籍出版社 1958年
- 『今言』 中華書局 1984年
- 『山書』 浙江古籍出版社 1989年
- 諸葛元声 『三朝平壤錄』卷5 (影印本) 偉文圖書出版社 1976年
- 『賜姓始末』 台灣銀行 1958年
- 『殊域周諮錄』 中華書局 1993年
- 孫承沢 『春明夢余錄』卷47 北京古籍出版社 1992年
- 『松窓夢語』 中華書局 1959年
- 『小腆紀台湾英国貿易史料』 台灣銀行 1959年
- 『菽園雜記』 中華書局 1985年
- 『徐光啓集』 中華書局 1963年
- 『清史稿』 中華書局 1977年
- 『清實錄』 中華書局 1985年
- 『清代檔案史料叢編』 故宮博物院明清檔案部 1978年
- 『清朝文獻通考』 商務印書館 1936年
- 『崇相集』 大通書店 1987年
- 『崇禎長編』 台灣銀行 1969年
- 丁元荐 『西山日記』卷上 福建人民出版社 1981年
- 『潜書』 新華書店 1955年
- 『棗林雜俎』 大連圖書供應社 1935年
- 嵇橫 『統文獻通考』卷10、11 台灣商務印書館 1936年
- 『台湾外記』 上海古籍出版社 1992年
- 鄭若曾 『籌海圖編』卷2、12 (影写本) 遼沈書社 1990年
- 『樗全集』 京都大学人文科学研究所 1967年
- 鄭若曾 『鄭開陽雜著』卷4 (陶鳳桜印本) 1932年
- 『鄭成功收復台湾史料選編』 福建人民出版社 1982年
- 『鄭成功史料選編』 福建教育出版社 1982年
- 『滇雲歷年伝』 雲南大学出版社 1992年
- 『滇海虞衡志』 商務印書館 1936年
- 『天下郡国利病書』(四部叢刊本) 上海商務印書館 1966年
- 『滇考』 成文出版社 1967年

- 宋応星 『天工開物』卷下 台湾商務印書館 1968年
『典故紀聞』 中華書局 1981年
『道光南海県志』 成文出版社 1967年
『道光福建通志』 華文書局 1968年
『東西洋考』 中華書局 1981年
『日知録』 台湾商務印書館 1968年
鄭舜功 『日本一鑑』卷2 (京史本・富岡本写本) 中華書局 1937年
李言恭 『日本考』卷之1、2 (中外交通史籍叢刊) 中華書局 1983年
『菲島史料彙編』
『閩書』 福建人民出版社 1994年
『閩小記』 上海古籍出版社 1985年
王澐 『閩遊紀略』 台湾學生書局 1975年
茅元儀 『武備志』卷214 華世出版社 1984年
『漫遊記略』 新興書局 1973年 (筆記小説大觀統編所収)
『万曆大明會典』 文海出版社 1964年
『万曆野獲編』 中華書局 1980年
陳子龍 『明經世文編』卷78、312 (影写本) 中華書局 1962年
張廷玉 『明史』卷81 中華書局 1974年
『明史記事本末』 台湾商務印書館 1956年
和田清編 『明史食貨志訳注』 東洋文庫 1957年
『明書』 商務印書館 1936年
『明清史料』乙編 上海商務印書館 1935年
『明清史料』丁編 上海商務印書館 1949年
『明清史料』己編 中華書局 1985年
『明清史料』戊編 中華書局 1985年
中央研究院歷史語言研究所編 『明神宗實録』卷493、421、488 (影印本) 中央研究院歷史語言研究所 1967年
『明清檔案』 台湾中央研究院歷史語言研究所 1986年
『明代社会経済史料選編』 福建人民出版社 1981年
『明武宗実録』 台湾中央研究院歷史語言研究所 1967年
『涌幢小品』 中華書局 1959年
『履園叢話』 文海出版社 1981年
『嶺南雜記』 商務印書館 1936年
『嶺南叢述』
『倭志』 台湾正中書局 1985年

研究書・研究論文

- 太田勝也 『鎖国時代長崎貿易史の研究』 思文閣出版 1992年
岡本良和 『十六世紀日欧交通史の研究』 原書房 1980年
幸田成友 『日欧通交史』 岩波書店 1942年
古賀十二郎 『長崎開港史』 古賀十二郎翁遺稿刊行会 1957年
小葉田淳 『金銀貿易史の研究』 法政大学出版局 1976年
小葉田淳 『中世南島通交貿易史の研究』 日本評論社 1939年

- 小葉田淳 『日本銅鋳業史の研究』 思文閣出版 1993年
- 鈴木康子 「近世銅貿易の数量的考察—オランダ東インド会社の日本銅輸出」『中央大学大学院研究年報』第15号IV 1986年
- 鈴木康子 「平戸貿易と銅」 箭内健次編『鎖国日本と国際交流』上巻 吉川弘文館 1988年
- 鈴木康子 「近世の小判貿易について」『花園史学』第16号 1995年
- 高瀬 弘一郎 『キリシタン時代の研究』 岩波書店 1977年
- 武田万里子 「平戸イギリス商館日記」 永積洋子・武田万里子『平戸オランダ商館 イギリス商館日記 碧眼のみた近世の日本と鎖国への道』そしえて 1981年
- 武野容子 『藩貿易史の研究』 ミネルヴァ書房 1979年
- 田代和生 『近世日朝通交貿易史の研究』 創文社 1981年
- 長崎県史編集委員会 『長崎県史』(対外交渉編) 吉川弘文館 1986年
- 永積洋子 「平戸オランダ商館日記」 永積洋子・武田万里子『平戸オランダ商館 イギリス商館日記 碧眼のみた近世の日本と鎖国への道』そしえて 1981年
- 永積洋子 『唐船輸出入品数量一欄1637~1833』 創文社 1987年
- 永積洋子 「17世紀中期の日本・トンキン貿易について」『城西大学大学院年報』第8号 城西大学大学院経済学研究科 1992年
- 永積洋子 「オランダ史料から見た輸出銀」『石見銀山遺跡総合調査報告書 第4冊 歴史文献研究会編』 島根県教育委員会 1999年
- 中村 質 『近世長崎貿易史の研究』 吉川弘文館 1988年
- オスカー・ナホッド著・富永牧太訳 『十七世紀日蘭交渉史』 天理大学出版部 1956年
- 藤田加代子 「オランダ東インド会社史料による日本銀輸出の数量的考察」『石見銀山遺跡総合調査報告書 第4冊 歴史文献研究会編』 島根県教育委員会 1999年
- 山脇 梯二郎 『長崎の唐人貿易』 吉川弘文館 1964年
- Blair, E. H. and Robertson, J. A. *The Philippine Islands 1493-1898*, Cleveland, 1903-1909.
- Boxer, C.R. *The Dutch Seaborne Empire 1600-1800*, Hutchinson, 1965.
- Brennig, Joseph J. *Silver in Seventeenth-Century Surat: Monetary Circulation and the Price Revolution in Mughal India*, Durham, N.C.:Carolina Academic Press, 1983.
- Chaunu, Pierre. *Les Philippines et le Pacifique des Ibriques*, Plon, 1959.
- Fischer, Wolfram. et al. eds., *The Emergence of a World Economy, 1500-1914*, Wiesbaden Franz Steiner, 1986.
- Richards, J.F. ed., *Precious Metals in the Later Medieval and Early Modern Worlds*, Durham, N.C.: Carolina Academic Press, 1983.
- Pastells, Pablo. *Historia General de Filipinas*, Barcelona, 1928.
- Prakash, Om. *Precious Metals and Commerce*, Aldershot, Hampshire, Great Britain; Brookfield, Vt., USA: Variorum, 1994.
- Prakash, Om. ed., *European Commercial Expansion in Early Modern Asia*, Aldershot, Hampshire, Great Britain; Brookfield, Vt., USA: Variorum, 1997.
- Santos, Isau. *Macau e Oriente nos Arquivos nacionais da Torre do Tombo*, Lisbon: Instituto Cultural de Macau, 1995.
- 王裕巽 「明代白銀国内開採与国外流入数額試考」 『中国錢幣』 1998年第3期
- 魏能涛 「明清時期中日長崎商船貿易」『中国人民大学書報資料中心、報刊資料選匯、k24明清史』 1986年8月 (中国史研究、1986年第2期 初出)
- 黄啓臣 「清代前期海外貿易的發展」『中国人民大学書報資料中心 報刊資料選匯、F7、經濟史』 1986年12月 (歴史研究、1986年第4期 初出)
- 黄啓臣・鄧開頌 「明嘉靖至崇禎年間澳門對外貿易的發展」『明清廣東社会經濟研究』 廣東人民出版社 1987年

- 沙拉信・維拉福爾 「清初の中暹日三角貿易」『南洋資料叢』 1991年第2期 厦門大学南洋研究所
- 謝国楨 『明代社会經濟史料選編』卷中 福建人民出版社 1980年
- 蕭清 『中国古代貨幣史』 人民出版社 1984年
- 蕭放 「白銀貨幣の周流与明帝国の命運」『中国人民大学書報資料中心、複印報刊資料、F7經濟史』 1990年3月
(史学月刊、1989年第6期 初出)
- 聶德寧 「試論明代中日官方貿易向民間貿易の演變」『中国社会經濟史研究』、1987年第2期
- 全漢昇 「明季中国与菲律賓間的貿易」『中国經濟史論叢』第1冊 新亞研究所 1972年
(中国文化研究所學報第1卷、1968年、香港初出)
- 全漢昇 「宋明間白銀購買力の變動及其原因」『中国經濟史研究』中冊 新亞研究所 1976年
(新亞學報、第8卷第1期、1967、香港 初出)
- 全漢昇 「明代的銀課与銀產額」『明代的銀課与銀產額』 新亞研究所 1976年
- 全漢昇 「明中葉後中国黄金的輸出貿易」『中央研究院歷史語言研究所集刊』第53本第2分 1982年
- 全漢昇 「明中葉後中日間的絲銀貿易」『中央研究院歷史語言研究所集刊』第55本第4分 1984年
- 全漢昇 「明代中葉後澳門の海外貿易」『明代中葉後澳門の海外貿易』 稻禾出版社 1996年
- 錢江 「十六—十八世紀國際間白銀流動及其輸入中国之考察」『中国人民大学書報資料中心複印報刊資料、F7經濟史』
1988年12月 (南洋問題研究、1988年第2期 初出)
- 戴裔暄 『明代嘉隆間的倭寇海賊与中国資本主義の萌芽』 中国社会科学出版社 1982年
- 晁中辰 「明後期白銀の大量内流及其影響」『中国人民大学書報資料中心複印報刊資料、k 24明清史』 1993年4月
(史学月刊、1993年第1期 初出)
- 陳春声 「清代広東の銀元流通」『明清広東社会經濟研究』 広東人民出版社 1987年
- 陳柏堅・黄啓臣 『広州外貿史(上)』 広州出版社 1995年
- 鄭永昌 「明末清初の銀貴錢現象与相關的政治經濟思想」『国立台湾師範大学歷史研究所專刊』(24) 1994年
- 董郁奎 「試論明代的白銀及其流通」『浙江學刊』 1988年第3期
- 範金民 「明清時期中国対日絲綢貿易」『中国社会經濟史研究』 1992年第1期
- 彭信威 『中国貨幣史』 上海人民出版社 1958年
- 楊翰球 「十六世紀中国東南沿海國際走私与海盜活動」『十五十六世紀東西方歴史初學集三編』 湖南人民出版社 1993年
- 楊端六 「關於清朝銀錢比價變動的問題(上)」『武漢大学人文科学學報』 1956年第1期
- 余思偉 「論澳門國際貿易港の興起、早期發展及明王朝の管轄」『明清広東社会經濟研究』 広東人民出版社 1987年
- 李金明 『明代海外貿易史』 中国社会科学出版社 1990年
- 李剛・徐文華 「十六世紀以来中外貿易通商与中国資本主義萌芽」『中国社会經濟史研究』 1987年第4期
- 梁方仲 「明代國際貿易与銀の輸出入」『中国社会經濟史集刊』第6卷第2期 1939年
- 梁方仲 「明代銀鉞考」『梁方仲經濟史論文集』 中華書局 1989年 (中国社会經濟史集刊、第六卷第一期、1939年 初出)
- 林仁川 『明末清初私人海上貿易』 華東師範大学 1987年

* 史料名は文中に付した。この年表を作成するにあたり、多くの方々・機関に、史料・文献の閲覧等の便宜をはかっていただいた。感謝を申しあげる。

平成14年(2002)3月発行

石見銀山遺跡総合調査報告書

第5冊

【(改訂版) 石見銀山関係歴史年表】

編 集 石見銀山歴史文献調査団

発 行 島根県教育委員会(文化財課)
〒690-8502 島根県松江市殿町1番地
phone 0852-22-5649

印 刷 有限会社 松陽印刷所
〒690-0826 島根県学園南二丁目3番11号
phone 0852-22-3418